

---

# 流星のロックマン エンシェントハーツ

Lyra

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

流星のロックマン エンシェントハーツ

### 【Nコード】

N7867R

### 【作者名】

L y r a

### 【あらすじ】

幾多の危機を救った青い流星“ロックマン”といえは知らぬ者はいないヒーロー。

赤い流星を止めたあの時からさらに二年後、平和になったはずの地球に新たなる危機が襲う！

数千年の過去より蘇ったムー大陸の後継者たち！  
暗躍する新たなる組織！

そして二百年前の英雄たちも参戦？

そしてスバルに目覚める新しい力とは……

再び目覚める青い流星！

再び戦いがここに始まる！

次回の更新は12月1日0時予定です。作者都合により上下する  
かもしれません。ご容赦下さい。

## プロローグ(前書き)

二次小説は初投稿です。

駄文のつえ当分は更新は遅いですがよろしくお願いします。

## プロローグ

ピチヨン……

ピチヨン……

光のささない真っ暗な空間に天井からしたたり落ちる水音だけが静かに響き渡る。

辺りは崩壊した石柱や壁が縦横無尽に転がっていた。転がる石は器用に彫られた模様が描かれている。

まるで何かの回路かのような模様だが確かめたくとも無理があった。

そんな崩れ落ちた遺跡の中にはもちろん誰もいるはずがなかった。

既にこの場所は二百年前の事件とともに忘れ去られたのだから。

『……ろす……ぜつたいに……ロック……め……』

そして忘れ去られた原因であるもう一つの要因。

どこからともなくかすかに聞こえる程度ではあるが恨みのこもった声の水音に混じってこだました。

『おぼえて………かならず………』

その声を拾うものはあれからずっと存在しない。ただ虚しく廃墟に響くだけ。

しかしこの日だけは違った。

「“遺跡の亡霊”の怪談は本物だったか。」

ピチャピチャと水溜まりを踏む音が辺りに響き渡る。この暗がりでは姿までは見えないが、男の声が遺跡の中に響いた。

『何者だ？』

姿なき声は男に問い掛けた。その声は珍しく来た来客に興味を示したようだ。

「そうだね。“古代の遺産”を探す者と言っておこつか」

男は倒れている柱に座り込んだ。彼の視線はずっと一つの方に定まっている。

どうやら彼には亡霊が見えているらしい。

『懐かしいな、あれのことか。二百年前に吹っ飛ばされたのは………』

「もちろん知ってるぞ」

男は別に怖がりもせず、軽口を交えながら幽霊と会話していた。

が、やがて幽霊の方から本題へと切り出された。

『今となつてはアレはもう存在しない。それでもこの俺様に何を望む？』

幽霊は俺様口調で男に問いかけた。

「君の力を貸してほしい。もちろん君にもメリットはある。あの口ツクマンに復讐したいのだろう？」

『ほづ？』

もし幽霊が見えていたなら間違いなくニヤリと笑っていただろう。

目的の物がなくても力を求める男に興味を持ったのと……あまりに懐かしい敵の名前を聞いたのだから。

「なくなったという“アレ”なら復元は可能さ。そして君の力さえあれば俺の望みも叶う。どうだい、面白いとは思わないか？」

亡霊は少し考えて、そして……

『ギャハハハ！おもしれえ！おもしれえじゃねえか！小僧、てめえの名前はなんだ？』

「俺の名前はRR。<sup>ダブルアール</sup> アルと呼んでくれ、“神の化身”よ」

アルと亡霊は互いに手を取り合った。

暗く冷たい中で交わされた一つの同盟。これは再び世界を震撼させる出来事の始まりとなった。

またとある場所、同時刻……

「ロックオンソード！」

ガキン！ガキン！

WAXA日本支部上空のウェーブロードにて剣が交差した。

一人は銀色のボディの電波体はプラスターを構える。胸には誇り



高きWAXAのマークがあった。

そしてもう一人は白いマントに褐色の肌を見せた女性の電波体。

顔は鉄仮面をつけていたため分からないが、黄緑色に光る薙刀を構えて打ちあっていた。

銀色の電波人間が一度距離を取り、プラスターを数発発射するがあっさりとそれはいなされてしまった。

「私は無駄な殺生は好まぬ。貴殿が“クロックPGM”を渡してくればこの場を即座に引き上げよう」

そう言つて女性の電波体は左手を出した。

「アホなことぬかすな！WAXAをナメるなよ、侵入者！ウィングブレード……」

銀色の電波人間は問題外だといわんばかりに自らの持つ大技を繰り出した。

超スピードの体当たりで女性の電波体はすぐさま周波数を変え、姿を消す。

そして別のウェーブロードに移った。

「いきなり出でて不躰だとは思つたが……やはり私の願いは叶わぬか」

ただ口からこぼれるのは怒りや悲しみではない。むしろ焦りや絶望

の方が近いだろう。

女性の電波体はこれ以上戦わずそのままWAXAから姿を消した。

「っ！待て！」

銀色の電波体はその者を追いかけてよつとする。しかし彼のウィザードにそれを止められた。

「無駄です、シドウ。もうこのWAXA圏内に侵入者の反応はありません。」

「……っ。逃がしたか。」

シドウと呼ばれた彼は苦々しく空を見上げた。まるでこれから何かが起こるのではないかと勘ぐるように……

## 第一話 戦いの終わり（前書き）

私の文章をお読みになっっている皆様“流星のロックマン”シリーズを知っている前提で書いております。

なるべく……原作に沿っていく形にするつもりですが、もしかしたら脱線あるかもです。

## 第一話 戦いの終わり

キンコーンカーンコーン

無情にも戦いの終末を告げる鐘が校内に鳴り響いた。

ある者は「だああ〜」なんて終末の悲鳴をあげて崩れ込み、またある者はフウーと大きく息をつく。

反応こそ様々だったが一様に戦いが終わったという安堵あんどに室内は包まれていた。

「テストを後ろから集めて」

一番前で監督をしていた女性は半分義務的といった口調でそう言った。

それを合図に用紙が後ろから回され、女性の元を集められる。彼女は静かに枚数を確認するとそのまま教室を出ていった。

「くそっ！姉ちゃんあの問題はないだろ！」

ツンツン頭の派手目な一人の少年が悪態をつきながらとある机の方へ向かった。

行き先の机の主のところには既にもう一人来ている。

「うん、あれはない。僕もクインティア先生が鬼に見えた」

机の主である変わったサングラスをかけた同じツンツン頭の少年も彼の意見に同意した。

「どうやらみんな同じみたいだよ、ほら」

二人は緑色の髪の毛、ぱっと見女性にも見えそうな中性的な少年の指差した先、つまり教室内を見回した。

確かに頭を抱えて終わったような顔をしているような人もいれば、心配そうに相談している人までいる。

中には問題と教科書を見比べて答えあわせをする熱心な生徒までいた。

ただ一つ、共通しているのは全員結果が芳かんばしくないと考えていることであろう。

「……みたいだね」

あの問題は異常に難しすぎた。顔を見合わせ三人はそう結論づけることにした。

「ツカサくんにジャック、他の教科はどうだった？」

「僕は全部まあまあかな？」

「俺は国語が……微妙だな。スバルは？」

「アメリッパ語が……」

その後、三人は教室でお互いの結果について語り合う。ちなみに今までの成績は三人でクラス上位1・2・3を占める。

さて、ここで話す学ラン三人組、こうやってみるとコダマ中学校1ーBの一般生徒のように見えるが……実はちょっとした有名人である。

三人の中で一番派手な黒髪釣り目の彼はジャック。

クラス一位の頭脳を誇る彼はここの数学教師、クインティアを姉にもつ。

今はない某王国の王子様であり、私服のセンスはその王国発ではないのか、ともっぱらの噂である。

続いて緑髪のぱつと見、女子にも見えるほど中性的な美少年は双葉ツカサ。

甘いマスクで同級生から先輩まで全ての女性を魅了する校内人気ナンバーワン。

そんな人気な彼であるが、その裏の“人格”まで知っている人は校内でも非常に少ない。

最後に茶髪のツンツン頭にちょっと変わったサングラスを載せた彼は星河スバル。

天文部所属の生粋の宇宙マニアであり、理科（天体）の知識だけであればそこらの大学生をはるかに凌駕する。りょうが

もともと彼は前の二人より有名人であり、さらに“とある時”から男らしくなりはじめたため、女子の間で超優良物件として噂されているのは本人は知らない。

そんなコダマ中学校の有名人な三人であるが共通する点がさらに一つ。

『おい、スバル！テスト終わったんなら早く帰ろつぜ。……ったく、ヒマでヒマでしゃあなかつたぜ』

スバルのハンターV.Gの中から声が聞こえる。どうやら彼のウィザードの声のようだ。

「ちょっと、ロック！まだHRホームルーム終わってないから帰るわけにはいかないよ！」

『けっ！だったらよー、早く終わらせろつての！』

「そついうわけにいかないの！」

『あー！もうヒマだ、ヒマだ！ヒマだあー！！』

ついにはハンター内で駄々をこねはじめたウォーロックにツカサとジャックはどつと笑いだした。

「変わらないね、スバル君」

「全くだ」

「ちょっと！二人とも笑ってないで手伝ってよ！」

こうなってしまった以上、なかなかウォーロックは動いてくれないのである。

必死の形相であるスバルにジャックはやれやれといった感じで自らのウィザードを出現させた。

「コーヴアス、いつもの頼む」

『分かったぜ、ジャック。ったくよお、いつまでたっても“ウォーロックちゃん”だな』

彼のウィザード、コーヴアスはため息を一つついてスバルのハンター内へ入り込んでいった。

スバルはハンターをサイレントモードに設定し、かばんの奥深くへとしまっ。

そうすればわずかに聞こえる振動音も全く聞こえなくなるのだ。

「ジャック、助かったよ」

「いつものことじゃねーか。もう慣れっちまったぜ」

げんなりした様子スバルにジャックは返事した。ツカサはクスクスと笑いながらその様子を見守る。

三人の仲の良さは小学校の頃から相変わらずだった。



その後担任の先生が教室に入ってきたため、スバルの机に集まっていた二人が席に戻る。

先生からは今後の日程と諸連絡だけが通達されてそのまま解散となった。

テストだけなので今日は午前中だけで終わりなのである。

「じゃあねー！」

「おう！」

「また明日」

これからスバルは部活へ、ツカサは帰宅、ジャックはWAXAで手伝いの予定。

三人はそのまま教室で別れて、それぞれの行き先へと向かった。

## 天文部部屋

スバルはハンターのサイレントモードをオフにする。するとウォーロックがスバルの真ん前に出現した。

『えーい！またお前はコーヴァスを送りこみやがって！』

「あれ、ジエミニの方がよかった？」

『そういう問題じゃねー！』

どこかずれているスバルの答えにウォーロックはガオー！と言わんばかりに吠えた。

最近ウォーロックがこうなるとスバルはストレス解消相手を自分のハンター内に送り込んでもらっていたのである。

もっぱらその相手はジャックやツカサのウィザードが多いのだが。

無論そんなこととして暴れたら、ハンター内部のデータは全てパーになるはずである。

しかしそこはぬかりのないスバル。天地研究所で知り合いの天地さんにハンター内のガードを強化してもらっていた。

『ったく……アイツのおかげで俺の髪が焦げちまつたしよお……』

「ゴメンって」

ギャーギャーとわめき散らすウォーロックをスバルはガチャガチャと何かを探しながら謝っていた。

ちなみにウォーロックの髪がどこなのかは……ツッコむべきではない。スバルもしっかりスルーしていた。

今日はスバルが望遠鏡の整備係であるらしい。その後、機嫌を直したウォーロックと会話しながらスバルは電子望遠鏡の整備を始めた。

「…………あれ？調子悪いや」

『ウイルスか？』

「かもね」

電波ウイルスとは数年前から現れた電波生命体である。

ある種は遠く離れた宇宙から、ある種は古代文明の復活から、またとある種は赤い流星の影響からと様々なところから発生している。

知能はそこまで高くないが数多く集まれば電気機器や建物などを破壊しかねない。

スバルたちの持つハンターV.Gはそういった電波ウイルスをたやすく消去<sup>デリート</sup>するために改良されたものであった。

スバルはハンターからバトルカード“ソード”を出した。大方の低級ウイルスならそれだけで十分である。

『スバル、たまには暴れようぜ』

「えっ？」

ウォーロックの言葉にソードのカードを差し込もうとしたスバルは

手を止めた。

『電波変換だよ。ほら、近頃全然なっていないだろ?』

「そついえばそうだね。じゃあ……」

少し考えたスバルは納得し、ハンターを掲げた。

「トランスコード003 シューティングスターロックマン!」

スバルはウォーロックと電波変換し青い戦士へと姿を変え、望遠鏡の電脳へと入っていった。

スバルだけではない。ツカサやジャックを含めた三人の秘密、それは自らのウィザードと電波変換することにより電波人間へとなれることである。

WAXAから認められた電波変換可能な人間は現在三十名弱。そのうちこのコダマ中学校にはなんと五人もいるのだった。星河スバルとウォーロックはそのうちの一人。

二年前には幾つもの危機を救った英雄として二人は世界的に有名であったのだが、今ではそんなことも滅多に騒がれなくなった。

スバルもようやく普通の学生生活をおくれている。それ程世界は平和になったのだ。

しかし、これから二人に新しい危機が迫っていることなど知る余地もなかった。

世界はまた一つ、新しい方向へと進んでいく。

## 第一話 戦いの終わり（後書き）

えー、ウェーブバトルじゃなかったですね。

学生の戦場っていったら不本意ながらこれかと。

いきなり騙してすみません！

基本はアニメでなく、ゲームの方を優先に小説のあらすじを進めていきます。

何かご希望、ご意見、ご感想、ありましたらどうぞよろしく願います。

駄文にて申し訳ありませんでした！

## 第二話 ニガテなヒト（前書き）

今更ながらだいぶ設定は想像で書いてますね。私の勝手な解釈です。

今回はいきなりのオリキャラ登場。ポジション的には……秘密です！

それではどうぞ！

## 第二話 ニガテなヒト

「うわぁ……………」

『こりゃー…ひでえな。』

スバルもウォーロックも電腦の中でア然としてる。

電腦内ではメットリオ・クロツカー・バルカナの巨大なウイルスがプログラムとプログラムの間に多数挟まっていた。

もはやおしくらまんじゅうと言った方がわかりやすいだろう。それにしても…よく壊れなかったものだ。

「あれほどメンテナンスしっかりしてって言ったのに……………」

『真面目に活動してるのは部長とスバルと……二人だけだからな。しゃあねえよ』

こんな状況に頭を抱えるロックマン。天文部の活動もこれでは進まない。スバルの頭がさらに痛くなってくる。

『まあいい。さっさと片付けちまおっせ。』

「うん。ウェーブバトル・ライドオン！」

ロックマンは“エアスプレッド”と“アタック+10”をプレテーションさせる。



おしくらまんじゅう状態なので相手も身動きが取れていない。ロツクマンはしっかりと狙いを定めてエアスプレッドを発射した。

バシン！

エアスプレッドはウイルスたちに当たり、内部で拡散する。

しかしもともと威力の低い攻撃。強化したとはいえ一体も倒すことはできていなかった。

「次はこれだ！ “ブラックホール”！」

ズズツ……

間に挟まれていたウイルスたちが出現させたブラックホールに飲み込まれていく。

ブラックホールは指定の体力以下の敵を一掃する。まとめて倒すために動けない内に体力を削っておいたのだ。

『だいぶ減ったな。』

「うん。あとちょっと！」

挟まっていたウィルスが減ったことでようやく動きだす。

相手はクロツカーGが数体。ロツクマンは左手を“ロングソード”に変え、残りの敵にむかっていった。

「ハアアアッ！」

ロングソードでロックマンはウイルス達を真つ二つに切り裂いていく。殲滅するのにはそう時間はかからなかった。

「ふう。終わったー。」

『いや、まだまだ。あそこをよく見てみる。』

ウォーロックに指摘されて見てみると、ウイルスが固まっていたあたりにノイズの塊が出現していた。

まだクリムゾンまでいっていないが、このままではまたウイルスは増えるであろう。

「……………これかあ。」

『ほら、さつさと破壊しようぜ。』

昔にもこれと同じことがあったらしい。昔懐かしむロックマンであったがウォーロックは急かすばかり。

「うん。ロックバスター！」

ロックマンはフルパワーのバスターでノイズの塊を撃ち抜いた。

ジジジ……………

少々耳障りな音をたててノイズの塊は消滅していく。

「これで動くかな。」

「あー、久々に動いた。だいぶ鈍ってたな。」

「そう?」

「そんなもんだ。」

ガッツなウォーロックにもある程度戦いにこだわりはあるらしい。スバルにそんなものはないようだが……

二人は電腦からサイバーアウトした。

「ん、ロックマン?……ってことはスバル君来てたの?」

「あ、二宮部長、お疲れ様です。」

スバルはウェーブアウトしながらいつの間にか部室にいた部長に挨拶した。

彼女は二宮ソラ。スバルの所属する天文部の元部長（女性）である。彼はスバルの二つ上の三年生。

高校受験前で忙しいはず……なのだがよくこの部室にまだ顔を出していた。

余談ではあるがスバルが単に“部長”と呼ばないのは現科学部部长、木野マナブと混同してしまうからである。

「もう部長はスバル君でしょ?その部長ってのはやめなよ。」

「いえ！僕の中ではいつでも二宮部長は二宮部長ですの。」

「おっ！嬉しいこと言ってくれんな、部長！」

ソラは背伸びしてスバルの髪をわしゃわしゃ掻き乱し始めた。

恥ずかしそうながらもそれを受けるスバル。実はスバルのマニアなトークについてこれた同年代はソラだけであったのである。

そのためスバルは内心憧れの人物の一人としてソラを見ていたのだ。そりゃ憧れの人に認められたのだから嬉しくないはずはない。

「二宮部長はどうして部室に？」

「あー、たまに……はね？」

話をはぐらかすソラ。おおかた…テストを失敗したということころだろう。

スバルはその点には触れなかった。

「それよりスバルは、彼女とどうなってる？」

いきなり振られた話題にスバルは顔を真っ赤にした。

「べ、別にミソラちゃんとそういう……」

「ん？私は別に“響ミソラ”って名前なんかだしてないが。」

スバルの様子を見てニヤついているソラ。それを見てスバルは（は

められた！）なんて思ったに違いない。

今では海外デビューも果たした大人気シンガーソングライター、響ミソラ。

スバルは一年以上前に起こった時空をこえた誘拐事件より彼女を意識している。

うっかり言ってしまった“大切な人”発言。後日その意味を考えた時、鈍感ながらもスバルは自分の気持ちを理解したようだ。

しかしながら思春期のお年頃。未だ思いは告げられず、友達以上恋人未満な関係である。

「ほー、 “まだ” のようだね、少年。」

ちなみに母親であるあかねとソラにはこの恋心はばれている。まあ他にも“知っている人”はいるかもしれないが。

「部長！」

「あー、ゴメンゴメン。からかいすぎた。」

ソラはケラケラ笑いながら手元にあったパックジュース（フルーツオレ）を飲む。

「僕は整備だけなんで今日は帰りますけど？」

まだ顔が赤いスバル。

「おー、お疲れ。ちょっと調べものして帰るから鍵はおいといて。」

「はい。お疲れ様です。」

スバルは若干小走りで部室を出た。

『撒いたか。』

部室を出た途端、ウォーロックがウィザードオンで現れた。何故か逃走中の犯人のようなセリフであるが気にするまい。

「撒いたって……」

『あの女苦手なんだよ。』

「ハープとタイプちがわない？」

『いや、もっと……苦手な奴に似てるんだ。』

ウォーロック曰く、ハープよりも苦手な女が一人だけいるらしい。しかもそれがハープを苦手とする原因になったそうだ。

「ふん、まあいいや。早く帰ろう。」

スバルはまだ昼ご飯を食べていない。時間的にもいいくらいである。

『そっぴゃオフクロ、今日はなんか張り切ってたぜ。』

「今日何かあったっけなあ？」

スバルは思い浮かぶ記念日を洗い出してみる。誕生日、父さんとお母さんの結婚記念日、父さんが帰ってきた日……いずれも違う。

考えながら歩いているとまたまた知り合いに遭遇した。

「あら！スバル君。」

「あっ！委員長、ゴンタ、キザマロ！」

現在ではコダマ中学生徒会“副”委員長である白金ルナと学校のお心棒までランクアップした牛島ゴンタ、同じく生徒会の庶務を務める最小院キザマロの三人と出会った。

## 第二話 ニガテなヒト（後書き）

委員長たちよりソラを先に出してしまった……。

ちなみにソラという字は“宇宙”とかいて“ソラ”と読みます。三  
ソラと近いものがありますがご勘弁を。

そしていつものパターンに突入。しかしよくある居候構成には持ち  
込まないつもりです。期待してた方はすみません！

よろしければご意見ご感想ご指摘よろしく願います。



### 第三話 突撃！隣の……

「三人ともどうしたの？」

「どうしたもこうしたもないわよ。これから生徒会会議。」

スバルの質問に対し、ルナが呆れたような声で答えた。ちなみに会議に出るのがいやなわけではない。

スバルとの付き合いは長いのに“理由がわからないのか”というのに呆れているのだ。

生徒会役員として選ばれているルナとキザマロはともかく、何故ゴンタまでが会議に出るのかも疑問ではある。

「そうなんだ。」

「ええ、冬休み前の全体研修会準備で忙しいんです。」

「今年はどっか美味しいものができるところにするからな！」

「そんなわけないでしょ！このおバカ！」

何か絡めばすぐ食べ物に繋げるゴンタにルナは一喝した。この関係はあまり小学生の頃と変わりはない。

「ふーん。じゃあ今候補はあるの？」

全体研修会は各部の代表がリーダーに相応しくなるために毎年行わ

れるイベントらしい。

もちろん天文部部长になったスバルにも関係大有りである。

「そうですね。日帰りっていう条件があるので結構……絞るのは難しいです。」

「ふん！それくらい今日中に決めてやるわ。じゃあね。スバル君。」  
ルナはゴンタとキザマロの二人を連れ、そのまま会議に向かった。

『あの女も物好きだよな。』

「そんなこと言わないの。それが委員長がいいところなんだから。帰ろう。」

ウォーロックを諷め、スバルは帰宅することにした。

スバルが外に出ると雪がちらついていた。二人は一緒に空を見上げる。

「雪……かな。」

『へえ？ここでも雪って降るもんなんだな。』

ウォーロックはヤエバリゾートでしか本物の雪を体験したことはない。心なしが関心を持っているようである。

「うん。久々に見たね。ここで最後に見たの……いつだったかな？」

どうやらスバルも覚えてないようだ。

『っことは相当冷えるぜ。早めに帰るぞ。』

「そうだね。」

スバルは家までの道を歩いて帰る。至ってコダマタウンは平和である。

「ただいま。」

「おかえり。」

スバルが帰宅するとあかねはせっせと掃除に励んでいた。

家の中で動いているマテリアルウェーブの掃除機は三台。相当マジな様子である。

「母さんどうしたの？大掃除にしては早くない？」

あかねはかなりきれい好きとして近所で評判の奥様である。

そりゃ常日頃掃除だけでなく、花壇の手入れまでも欠かさない人であるから緊急でない限り、そんな急いでやるものでもない。

しかしまさかの本日は“緊急”なのであった。

「スバルに言ってなかったかしら？今日テレビ局の取材の人がくるの。」

「ふーん、取材が……つてええええつつ！!?」

学生かばんを何気ない様子で椅子の上に置こうとしていたスバルは大絶叫であかねの方に振り向いた。

「いつ???どこに???誰が??」

『おい、スバル!落ち着けよ!』

パニック状態になっているスバルを今度はウォーロックが押さえにかかった。

「これが落ち着いてられる!?!またテレビにでなきゃいけないだよ!?!」

ウォーロックは“テレビに出る”っていう言葉に対してのスバルの過剰反応にあることを思い出した。

- - - - -  
それはウォーロックとスバルの父である大吾が宇宙から帰ってきてからのこと。

宇宙ステーション、きずなからの生還者ということではもう大きなニュースになっていた。

それに対してWAXAが緊急会見を行ったのが運命の分かれ目である。

その会見前までロックマンの正体はぼんやりと判明しながらもなんとかWAXAによって秘匿されていた。

なぜならあの電波信号の主は分かる人にしか分からず身元不明。そしてスバルの降り立った場所はWAXA日本支部。そして本人からの希望でもあったからである。

もちろん大吾もスバルからの希望により伏せるようにはしようとした。

が、あの場におらず、しかもちょっと天然が入っていた某S・A氏がうっかりと全てをばらしてしまったのだ。

その結果、“親子二代で地球を守った英雄”なんてマスコミの100パーセント食いつくネタが挙がってしまったわけであり……

内容は伏せるが、いろいろとスバルは大変な目にあっただけである。

今ではそれも落ち着いたわけであるが、それ以来スバルはマスコミに対し、非常に大きなトラウマを抱えてる訳である。

- - - - -

「いやだよ！しかもそれが今日？」

ものすごい拒否反応を示すスバル。

「ええ。だってあの……」

「ダメ！絶対！終わったら連絡して！」

スバルはかばんを引っつかみ、目にも留まらぬ速さで自分の部屋に入ってしまった。

その場に取り残されたあかねとウォーロック。ガーっとなっている掃除機の音だけが虚しく響く。

「スバルったらまだ何も聞かないで……」

『オフクロ。一体どんな番組だ？』

「“突撃！隣の電波体”って番組よ。」

ウォーロックはその番組名を聞いて「ああ。」と納得する。

この番組は星河家のフェイバリットなテレビ番組の一つ。

最近活躍しているウィザードや人間を取材するといった番組である。ゲストがお宅を訪問し、インタビューするという至極普通なテレビである。

近々大吾がまた宇宙に行くというので恐らくその取材なのだろう。

『で、何時からなんだ？』

「えっと……大吾さんが3時に帰ってきて、それから2時間くらいだ

って。で、そのゲストが……」

あかねはウォーロックに驚きの人物名を告げる。

ウォーロックは一瞬微妙な顔を浮かべたが、少し考えると何か思いついたかのようだ。

『そういうことか!』

「そうなの。ロック君。だからスバルをちゃんと引き止めてね。」

『まかせとけ、オフクロ!』

あかねに頼み事をされたウォーロックはスバルの部屋へいつもの二倍速で向かった。

### 第三話 突撃！隣の……（後書き）

まさかの展開。

恐らく人物は皆さんが思い浮かべるあの人です。

ですが王道過ぎてもあれですので……

それにしても某S・A氏ひど過ぎでしょ……。自分で書いててそう  
思いました。

ご意見ご感想ご指摘よろしくお願いします！



## 第四話 逃亡者スバル（前書き）

題名はアニメの第一話を参考につけてみました。

なんとなくそれが一番あうと思いましたが。（FM星人に追いか  
けられはしません）

それでは第四話どうぞ！

## 第四話 逃亡者スバル

『おい、スバル！実は……って何してんだ？』

勢いよくドアを開けて入ってきたウォーロックの前に見えたのは、夜逃げ（？）するかの如く物を片付けているスバル。

必要な物をリュックに詰め込み……

「僕はしばらく帰らないからよろしく！」

スバルはシュピットとどこかのヒーローよろしくポーズを決めて、ガラッとベランダにでようとした。

焦っているのかまだ学ラン姿で逃げ出そうとするスバル。

『こら！はやまるな！』

「離してよ！もう僕はあれだけは死んでもいやだ！」

『だからって飛び降りるやつがあるかあ！』

ウォーロックはじたばたするスバルを羽交い締めにして格闘を始める。両者一步も譲る気はない。

そんな不毛なやり取りが5分くらい続いた頃、いきなりスバルが抵抗を止めた。

『おっ！やっと諦めたか。』

「なんの……これしき。」

さすがに疲れたのか二人とも肩で息をしている。  
が、スバルはハンターから一枚のカードを取り出した。

『おい、まさか……』

スバルはにやりと笑って叫んだ。

「トランスコード！ シューティングスターロックマン！」

そのまま二人は電波変換してウェーブロードへと場所を移動した。

.....

『……まさかそつくとはな。』

「ここならゆつくり話できるよね？」

苦しい顔をするウォーロックに対し、逃げられたことがうれしいのか満面の笑みのスバル。

スバルとウォーロックはさらに場所を変え、なんとロッポンドーヒルズまで来てしまった。

本来電波変換は電波体の意思で制御される……はずなのだが、今回はスバル主導で行われてしまったのだ。

その後電波変換を解き、オシャレな喫茶店でティータイムと洒落込んでいる。

相手が相手なのは……気にしない方がいいだろう。

スバルはなんだかんだあつて食べそびれたランチをテーブルの上に置いていた。

『最後まで話を聞かずに逃げる奴がいるか!』

「嫌なものは嫌なの!ウォーロックだって知ってるでしょ!あの時何があつたか!」

『つつ、確かにそうだが……今度は……』

「いいの!いただきます!」

ウォーロックの言葉には耳を貸さず、スバルは目のご飯を食べだし始めた。

『おい』とウォーロックが声をかけても一心不乱に食べつつけるスバル。

どうしようもなさそうだと判断したウォーロックは近くにある電波時計をちらつと見た。

ただいまの時刻2時50分。どうあがいても帰れるはずがない。

(あーあ、こりゃどうなつてもしらねーぜ。)

ウォーロックはあかねから言われていた“あの人”の怒る様子を思い浮かべ、スバルに心の中で合掌した。

黙々と食べるスバル。刻々と過ぎる時間。

スバルがお代わりまでして、昼ご飯を食べ終わる頃には3時をさらに30分程過ぎていた。

「ごちそうさま。」

『で、これからどうするんだ？5時まではテレビ取材やってるぜ。』  
ウォーロックも諦めたらしい。ここまで来たらすすがに付き合っことにしたようだ。

「んー、なんかイベントでも探してみる？」

『あー、今なら“古代アフリック文明展”てのがTKタワーでやってるらしいぜ。』

TKタワー。前に幽霊騒ぎのあった電波塔でいる。

「時間もあるしそうしょつか。」

『分かった。』

代金を払って店を出る二人。店から出てまもなくスバルの右肩がちょんちょんと叩かれる。

「もしかしてスバル君？」

「そうだけど……君は……？」

スバルの目の前に現れた人物は茶髪の長髪に白い帽子。そして眼鏡をかけた女の子。

なんとか記憶から引つ張りだそうとするがどうも思い出せない。

「あー、変装してるからね。これなら分かる？」

彼女はスバルの目の前にウィザードを出した。そのウィザードを見た瞬間、スバルは彼女が誰か分かったらしい。

「もしかして…スズカちゃん？」

「あたりー。お久しぶりです、スバル君。」

『どうもご無沙汰してます。』

スズカとそのウィザード、アイスはスバルに二人揃って一礼した。

スズカはミソラの同期であり、仲の良い親友でもある。ただし、ミソラは歌手を専門にしているが、スズカは女優業一本。

二年程前のメテオGの事件以来注目され、彼女もミソラに負けず劣らず有名な女優になっていた。

そしてミソラから聞いていたり、アイスの暴走もあつたりして二人は顔なじみなのである。

「ホントに久しぶりだね。って今……」

「うん。久々のオフだから買い物しにきたんだけど、そうしたらスバル君を見つけたんだ。」

スズカはスバルにニコツと笑顔を見せる。その笑顔にスバルは僅かに顔を赤らめた。

なんていったって今を時めく女優の一人である。ミソラに片思い中であるが、さすがにぐらつくなという方が難しい。

「へえ。偶然だね。」

「うん。それで今度のTKタワーで撮影があつて、仕事の下見も兼ねてるんだけどよかつたら付き合ってくれない？」

「えっとね……それは……ちょっと……」

ミソラへの浮気（付き合っていないのだが）が嫌なので答えを渋るスバル。

笑顔にぐらついたとしても女の子と二人で買い物にいくなんてボーダーラインを越えようものなら未来はもはや決まっている。

しかし答えをだす間もなく、周りの悲鳴で二人の会話は終わりを告げた。

「キヤー!!!」

「なんなんだ、あれは!」

ロツポンドーヒルズ全体がパニックに陥る。

なんとロツポンドーヒルズのあちこちにあの時と同じ、幽霊のような電波ウィルス、オロロンが大量に出現していたのだ。

『おい、スバル!』

「分かってる。多分あいつの仕業だ。」

そしてスバルの読み通りもう一人、あの時と同じ人物がウェーブロードに立っていた。

「ンフフフフ……また会えてうれしいぞ。星河スバル、いや、ロツクマン!」

ロツクマンの前に何度も立ち塞がった第一級犯罪者、ファントム・ブラックが再び現れたのである。



## 第四話 逃亡者スバル（後書き）

一番最初の敵はもはや愛すべきやられ役。

しかも脚本は使いまわし。ネタないんですかね、ハイドは？

さてさて、結末は……分かるとは思います但し単純にバトるわけにはいきません。

そしてまさかのスズカ登場。

私としてもスバミソ路線は好きな方なのですが……お楽しみはまた後ほど。

ここからエンシエントハーツの物語が幕を開けます。

よろしければこれからも応援お願いします！

ご意見感想ご指摘どしどしお待ちしております！

**第五話 再び怪人は幽霊とともに（前書き）**

初のウェーブバトル描写。

非常に稚拙で申し訳ありません！！

## 第五話 再び怪人は幽霊とともに

ファントム・ブラック

今までムー大陸復活事件、WAXA侵入立て籠もりといった数々の犯罪を犯した第一級犯罪者である。

黒のシルクハットにマント、ステッキと何もなければ英国紳士を思い浮かばせるような出で立ちである。

しかしやることは人質をとる、自ら戦わないなどと卑劣極まりなく、見かけとはまさに真逆の人間であった。

「ファントム・ブラック！」

『やっぱりテメーの仕業か！』

「ンフッフ、そうだとも！今日こそはお前に屈辱を与えにきたのだ！」

まあ、なんともこりない男である。WAXA襲撃後もたびたびスバルたちの前に立ち塞がってきた。

そのたびに撃退されていたのだが……その執念はもはやあの“黒光りするG”より凄まじい。

『テメーはまたこてんぱんに叩きのめしてやる！スバル！』

「うん！トランスコード！シューティングスターロックマン！」

スバル達元遊撃隊にはウェーブステーションを仲介しなくても電波空間に入れるという特権がある。

スバルは電波変換するとすぐにウェーブロードに上がった。

「来たか。」

「早くあのウイルス達を消すんだ！」

「そういつて“はいそうですか”とする主人公がどこにいるのかね？」

『それは主人公じゃなくて悪党のセリフだろうが！この脚本ヤロー！』

「っ！うるさい！君たちは私の脚本通りに動けばよいのだ！町全体を人質にとられ、私に敗北するという脚本通りに！！」

ウォーロックに妥当なところをツッコまれたファントム・ブラックはさらにオロロンを召喚する。

召喚されたオロロン達は10体。それらは一斉にロックマンへと襲いかかった。

「くっ！バトルカード！ワイドソード！」

ロックマンは向かってくるオロロン達を一体ずつ切り伏せていく。しかし数が多い。

「ンフフハハハッ！まだまだ数はいるぞ！」

さらに面倒なことにファントム・ブラックはどんどんとオロロンの数を増やしていく。

芸がないといえはない。しかし倒しても倒してもキリがないのは精神的にもキツイものがある。

「くっ！マシンフレーム！」

ロックマンは一度距離を取り、火炎放射でウェーブロードごとウイルス達を焼き尽くした。

ゴオオオオー……

『やったか？』

焼き尽くしたウイルス達を見てウォーロックはつぶやく。ロックマンはやや息が上がっていた。

「ンフフ…やっと思隙を出したか。ステッキソード！」

が、完全ながら空きだった背後から一撃、喰らってしまふ。

「ぐっつー！」

痛みに堪えて再びロックマンは体勢をたてなおした。

「どうだね？さすがに町自体を人質に取られては手も足も出まい。」

『くそっ！あのうっとうしい連中をどうにかできれば……』

ウォーロックは苦々しげな様子で呟いた。召喚されたオロロンは100を既に越える。

一体を倒しにければファントム・ブラックの合図で一斉に他の人に襲い掛かるはず。そうしないためにも全部を一撃で倒す必要があった。

「あのウイルスをどうにか……できる！」

ロックマンはウェーブロードから一番近いオロロンへと向かっていった。

「何をやる気かしらんが一体ずつ倒そうとしても無駄だ！」

「バトルカード！シンクロフック！」

ロックマンの左手は赤いボクシンググローブに変わる。そしてそのまま一体のオロロンを殴りつけた。

シンクロフックは同じウイルスにダメージが行き渡るカード。

殴りつけたオロロンが倒せれば……瞬時に同じウイルスは全滅するのである。

「バ、バカな……。こんなはずでは……」

『よっしゃ！邪魔は消えた！一気にたたみかけろ、スバル！』

「うん！バトルカード！ジェットアタック！エドギリブレード！」

面食らつて逆に隙を出したファントム・ブラックに音速の一撃をお見舞いした。

ズバン！

「グッ……………」

ファントム・ブラックはそれを避けきることができず、もろに一撃を喰らつて膝をついた。

『勝負ありだ。諦めてさっさとお縄につきな。』

ロックマンは剣を突き付ける。もはや勝負は決した。

……………が例の“黒光りするG”よりもしぶといファントム・ブラックは周波数を変えて姿を消したのである。

「！！どこいった！」

『スバル！下だ！』

ファントム・ブラックが姿を現したのは…………

「えっ！」

『スズカ！危ない！』

「ええい！邪魔をするな！」

ドスっ！

スズカとアイスの二人を強引に気絶させたファントム・ブラックは二人を抱える。

そのまま周波数変換して三人は視界から消えてしまった。

「っ！あいつスズカちゃんを！」

『ヤツはTKタワーの頂上へ向かいやがった！追っぞ、スバル！』

「うん！」

ロックマンも急いで三人を追いかけた。

……TKタワー

「追いついたぞーファントム・ブラック！」

『ちっちとそいつらを離しな！』

「くっ……」



ロックマンはじりじりとファントム・ブラックを追い詰める。人質は取られているが苦しきまぎれの一手にすぎない。

ファントム・ブラックにとってはもう詰んでいた……はずであった。

イレギュラーな人間さえそこに現れなければ。

「美しくないな。」

電波体にしか立ち入れないはずの場所に人間の声。二人とも声の主の方に視線を移した。

そこには黒いローブの男。金髪に物事を忌むような冷たい目。そして右頬には十字架。そして何より……

『あのヤロー、ウェーブロードに立っていやがる!』

そう、ウォーロックのいう通り、生身の肉体でウェーブロードに立っていたのだった。

「何者かね？私の脚本にケチをつける気か？」

「……別に。ただか弱い女性を人質を取るといのは美しくないと思うだけさ。電波の風上にもおけないね。」

男は名乗りもせず、一枚のカードを取り出す。そしてそれをスズカに向かって投げつけた。

「まさかあれはノイズドカード!」

ノイズドカード、かつてディーラーがウィザードを暴走させるために使った電波兵器である。

それをロックマンが理解した時にはもう遅かった。

「……電波変換。スズカ、オンエア。」

感情のカケラもない声で禁断の言葉をスズカは発してしまう。同じく共にいたアイスと青い光に飲み込まれてしまった。

「人質をとるよりは寧ろそいつを利用して共に戦う。それこそが策士の取る手段さ。」

今、ロックマンに敵対してファントム・ブラックだけでない。電波変換したダイヤ・アイスバーンが再び立ち塞がったのである。

## 第五話 再び怪人は幽霊とともに（後書き）

ブラックなだけに……G。

気にしないでくださいまし。

さてさて、なんだか敵増えましたね。

ダイヤ・アイスバーンの出演はなんとなく私が好きなボスだったからです。

どうやって出そうか悩みましたがまさかこんな早く出てくるとは……

ちなみに名前は一緒ですが姿は若干違います。青いバイザーが現れ、表示がスズカに似ています。

そして謎の人物登場。名前は次に出します！

読んでいただきホントに感謝です！

よろしければご意見ご感想ご指摘よろしくお願いします！

## 第六話 ヒーローは遅れて現れる

「なっ！」

『電波変換だと！？』

ロックマン達は驚きを隠せなかった。確かにダイヤ・アイスバーンとは戦闘経験はある。

しかしそれはあくまで暴走した“ウィザード”でありスズカと電波変換したものではない。

そもそも元が特殊な電波体でなければ電波変換など不可能であるはずなのだ。

しかしその“不可能”が二人の目の前に敵対していたのだった。

「……いつたい君は何者かね？」

「俺は、そうだな……ダブルアルRRと名乗っておこう。長いので“アル”でも呼んでくれ。何者かっていつたら……ロックマンに恨みを持つ者だ。」

ファントム・ブラックの問いに次は応えたアル。

それに対し、ロックマンは困惑している。

「僕に……恨みを？」

「そうだとも。俺の親父を殺した張本人だからね。」

アルは指をパチンと鳴らした。

それを合図にダイヤ・アイスバーンが周りに二つの氷塊を作りだす。

「待って！君と僕は会ったことないよ！」

「そりゃそうだ。初対面だからな。行け！ダイヤ・アイスバーン！」

『ローリングアイス！！』

ダイヤ・アイスバーンは片足でぐるぐると回りだす。それに合わせ  
て氷塊も回転し、ロックマンに襲い掛かってきた。

「くっ！」

右に跳んでロックマンはなんとか二つとも攻撃を回避した。

「やるねえ。さすが英雄。」

アルは口笛を吹いて、まるで冷やかすかのような雰囲気である。

「まちたまえ。」

「ん？」

ファントム・ブラックはステッキをアルにつきつけた。

「キサマは私の邪魔をしようというのかね？」

「いやいや。ただロックマンが“負けて”くれればそれでいいだけさ。君の邪魔する気は毛頭ない。」

アルは脅されても余裕な様子である。

「なんなら…この場からいなくなろうか？」

「いや。それなら結構。」

ファントム・ブラックは再びロックマンの背後に現れた。

「ファントムクロー！」

「くっ！バリア！」

ガキン！

咄嗟に張ったバリアの影響でロックマンはダメージをつけることはなかった。

しかし大きく衝撃で吹き飛ばされる。

『……ダイヤモンドダスト！』

「しまった！ぐああっ！」

体勢が立て直せてない間に猛烈な吹雪がロックマンを襲う。

ロッキーマンは吹雪をまともにくらったうえ、氷の中に閉じ込められてしまった。

『スバル！！』

ウォーロックが話しかけるが氷に阻まれ、聞こえていない。

その前に氷の中で気絶してしまっているようであった。

『おい！返事をしやがれ！スバル！』

「ンフフフ……ついに！ついにだ！ようやく私の脚本はフィナーレを迎える！」

ファントム・ブラックは歪んだ笑顔を見せ、氷づけのロッキーマンに近づいた。

ステッキを手に今か今かと最後の一撃を下そうとした。

『スバルには手を出させねー！！ビーストスイング！』

ウォーロックはスバルを守ろうとファントム・ブラックに飛び掛かった。

が、そこはウィザードと電波人間の違い。力の差は歴然としている。

「邪魔だ！ファントムスラッシュ！」

『どあっ！』

マントから繰り出される風圧に押し返され、ウォーロックもウェー  
ブロードに倒れこんでしまった。

『ちくしょう………』

ウォーロックは悔しそうにファントム・ブラックを睨みつけた。  
戦える人間が動けない状態であれば、もはや……チエックメイト。

「さらばだ！ロックマン！」

無慈悲にもステッキの一撃が氷づけのロックマンに下されよつとし  
ていた。

『スバル………!!』

ここで彼の脚本であったら無情にも流星ははかなく散りゆく……は  
ずだった。

だがそんなに現実は甘くない。



「ショックノート！」

キューーン！！

耳慣れた攻撃音がタワーの上空にこだまする。

その攻撃は二つ、ファントム・ブラックとダイヤ・アイスバーンに向かっていった。

「ぐおっ！」

『っ！』

その攻撃は二人に直撃する。ファントム・ブラックは腹に当たり、後ろへ吹き飛ぶ。ダイヤ・アイスバーンには頭に当たり、当たり所が悪かったのか気絶してしまっていた。

「ぐっ！お前は……」

ファントム・ブラックはステッキを使って起き上がる。

彼の目の前にいたのはピンク色を基調とし、青いギターを持った電波体。

『……タイミング良すぎだろ。』

『何言ってるの、ウォーロック!』

「そっ! ヒーローは遅れて現れるの!」

ハーブ・ノートが颯爽と登場したのだった。

## 第六話 ヒーローは遅れて現れる（後書き）

はい。

ハーブ・ノートに一度は言わせてみたい名セリフやってみました。

ただそれがやりたかっただけです。

それに対し、ロックマンはあっさりとやられていました。

正直、ファントム・ブラックはやられ役な存在ですが実力はハーブ・ノートより数段上です。

それにプラス実力の格段に上がったダイヤ・アイスバーン。しかもロックマンはスズカを傷つけられません。

その二人が来たのですから……ねえ。

でも原作ではエースとジョーカー連続で相手してたような……

……気にしないでください!!

よろしければご意見ご感想ご指摘よろしくお願いします！

## 第七話 少女の決意（前書き）

今更ながら……スバルがウォーロックを呼ぶ時は“ロック”でした。

後々直します……！ すみません……！

それでは第一部終了の七話をどうぞ……！

## 第七話 少女の決意

「スバルくんがこんなに苦戦するなんて……」

ハープ・ノートはウエーブロードに置かれた氷の塊を見つめた。

『それよりも早く彼を助けないと命に関わるわよ!』

「うん!バトルカード!ダバフレ……」

「させるか!ファントムスラッシュユ!」

ハープ・ノートが氷を溶かそうとした瞬間、まだ体力があったらしいファントム・ブラックは技を繰り出した。

ハープ・ノートはなんとか攻撃を踏み止まってこらえた。しかし風圧でカードが宙を舞ってしまう。

「ああっ!」

『ちっ!』

ウォーロックは身体を起こし、ハープ・ノートの使おうとしていたダバフレイムのカードをキャッチした。

『ハープに借りをつくるのはシャクだが、あの脚本ヤローは任せる。頼む!』

『まあ!頼むならもつと頼み方が……』

「いいじゃないの！ロックくんの言う通り、あのヘンタイ倒しちゃいましょー！」

ハーブ・ノートはギターを構え、ウォーロックはカードを転送し、ロックマン救出にかかる。

ファントム・ブラックはもう息があがっている。もともとロックマンにあれだけやられていたのだ。

「くっ！私の脚本では……アル！」

手伝えと言わんばかりにファントム・ブラックは“先程”までいたアルに向かって叫んだ。

が、しかしもう彼の姿はそこにはいなかった。

ダイヤ・アイスバーンも先程の攻撃で倒され、電波変換も解けている。

しかもアイスと二人仲良く、近くのビルの屋上に寝かされていた。

アルがやったのだろうか、変なところで紳士であった。

「くっ！クソツ！クソオオツ！」

助けがないことに今更気づき、焦りを隠せなかったファントム・ブラックは最後の悪あがきに残っていた手持ちのオロロンを全て召喚した。



夫だといつてもやはり傷は深かったらしい。

ハープ・ノートはロックマンを肩に担いで、スズカ達が倒れている場所まで移動した。

「スバルくんは……」

『命に別状はなさそうよ。スズカの方も同じ。』

「よかったあ〜。」

ハープ・ノート改め、響ミソラは緊張がとけたかのようにその場に座り込んだ。

二人ともまだ目覚めない。命に別状はないといつても戦いのダメージは大きい。

「まずは暁さんに連絡をいれましょ。」

『その必要はなさそうね。』

「えっ？」

ミソラが連絡をいれようとしていたら一人、電波人間が二人の前に現れた。

「終わったようだな。」

「うん。でもスバルくん達が……」



『けっ！暴れそこねたじゃねーか！』

そこに現れたのはジャックの電波変換した姿のジャック・コーヴァスだった。

そして暴れそこねた発言をしたのは彼のウィザードの元鳥座の宇宙人、コーヴァスである。

「暁が手離せなくて代理できたが……スバルがやられるとはな。」

「うん。相手はファントム・ブラックと……」

ミソラはちらつと倒れてる親友を見る。

「ああ。知ってる。認証コードが久しぶりに発行されたらしいからな。ひとまず……二人をWAXAに運ぶから手伝え。」

ジャック・コーヴァスはスバルを肩に担いだ。そしてミソラを置いて先に行ってしまった。

「うん。トランスコード 004、ハープ・ノート。」

ハープ・ノートもスズカを担いで、WAXAへと向かう。

「ねえ、ハープ。」

『何かしら？』

「また……始まっちゃうのかな？」

激動の一年を終えて長く続いた平和な時、それがまた崩壊しようとしている。

その足音をミソラはもう既に感じていた。

『かもしれないわね。』

ハーブもそれは否定しない。いや、否定したくてもできないのだ。

できないはずの電波変換。倒されたスバル。

そしてファントム・ブラックの叫んだ“アル”という存在。

全てが嫌な方に線で繋がりにかけている。

「私、決めたの。もうスバルくんの足手まといにはならないって。ずっと隣にいられる存在になるって……あの時。」

『うん。』

「だから……」

ミソラは一つの決意を秘め、打ち明けた。それはハーブと、断末魔がごとき朱い夕焼け空だけがその言葉を聞いていたのだった。

## 第七話 少女の決意（後書き）

今更ながらスバル……目立ってない。

携帯では章をつくることは出来ませんが第一章はこれで終わりです。完璧導入部分。さわりだけでした。

次章、学校研修編から本格的に入っていきます。

まあ伏線はだいぶ出しました。まだまだ登場してない電波体もいますが……後々で。

二次小説ではやはり恋愛って大きなウエイトを占めてますよね？まあ希望があればそれも後々。

って後回しにしかしてませんね（笑）

こんな作者ですが今後ともよろしくお願いします！

## 第八話 未完の英雄（前書き）

第二章開始なのにいきなり暗い雰囲気になってしまいました……

それでも続きます。第八話、どうぞ！

## 第八話 未完の英雄

「……ここは？」

スバルが気づいた場所は真っ白なベッド、つまり病室だった。

そして隣にいたウォーロックが顔を覗きこむ。

『WAXAだ。お前三日も寝てたんだぜ。』

「ロック……。そうだ！スズカちゃんは？」

スバルはガバッと布団から飛び起きた。

『落ち着け！あの女ならもう退院した。スバルに「ありがとう」って伝えてくれ、だよ。』

「……そう。」

スバルは安堵したようだったが、すぐに暗い表情に戻る。

「僕は……また守れなかった。」

『結果的に無事だったからよかったじゃねーか。』

「よくない！！僕が……弱いから……、誰も……」

スバルはくやし涙を浮かべ、バンとベッドを叩く。ウォーロックは

何も言うことが出来なかった。

スバルは二度、友達を消させるといふ目にあっている。それがあつたからこそ誰も守れるよう強くなりたいと思つたのだ。

だがまた……守れなかった。その自責の念は、とても深い。

「おう、スバル！目覚めたか！」

「……暁さん。」

そこに入ってきたのはサテラポリスのエース、暁シドウだった。

手には相変わらずうまい棒を持っている。今はめんたい味。

ちなみに……WAXAの病室はお菓子厳禁である。

サクサク……サクサク……

うまい棒をリズムよくかじる音が病室内に響く。

「話はウォーロックから聞いた。また新しい敵……だそうだな。」

「……はい。」

「……そんな顔すんな。俺が見込んだヒーロー、だろ？」

シドウは元気だせよと言わんばかりに、パンパンとスバルの背中を二回叩く。

「暁さん、僕はホントにヒーローでしょうか？」

「ん？」

「ヒーローは負けちゃいけない。世界を守る最強の存在、ですよね？」

スバルの表情は浮かない。シドウの表情も真面目なものになっていった。

「確かに……“世間一般”ではそうだ。」

「だけど僕は……「守れなかった、だろ？」」

スバルはシドウの方をはっと見た。シドウは側にあつた椅子に座り込む。

「俺も“ヒーロー”って言うてるけど守れなかったことだってある。ティアやジャックのことだってそうさ。」

シドウは昔、ディーラーの幹部としてクインティアやジャックと一緒ににいた。

しかし、彼は二人を置いて、組織を抜け出した。二人を助け出す為に。

彼が力を手に入れた時にはもう遅く……彼らの夢は叶いかけていたのだった。

今は無事助け出すことが出来て、WAXAの監視つきではあるが普

通の生活を送れている。

しかしあの時、二人を助けていれば……未来はどうだったのか、シドウは時々後悔に悩まさせることがあったのだ。

「でもな、あの時弱かったからこそ今の俺があるんだ。愛する者の為に強くなるうとした自分が。今弱いならそれをバネにもっと強くなればいい。今負けたのなら二度と負けなければいい。」

シドウは「分かるか？」と言ってスバルの方を見た。

「でも……」

「次はない……かもだろ？スバル、お前はまだ“未完の英雄”だ。まだ無限の可能性が秘められている。俺と違ってな。だから自分が“完成した英雄”だなんて思うな。未完だから失敗もする。だから強くなるんだ！」

シドウは「俺のようにな！」とぐっと親指を立てて胸に当てる。

スバルにはなんだかそれが滑稽に見えてしょうがなかった。クスクスと笑いながら、「うん」と頷く。

シドウもそれを見て、安心した笑みを浮かべた。

「それに……お前には仲間もいるだろ？」

シドウは近くにあったリモコンを手にとり、テレビをつける。

やっていたのはニュース番組。しかしその内容はスバルの驚くものであった。



“響ミソラ活動休止”

「暁さん！これ！」

「おー、昨日やってたやつか。」

「ロック知ってたの？」

「昨日からこの話題ばかりだったぜ。ほら、会見が流れるから見てみるよ。」

スバルは画面上のミソラを眺める。カメラのフラッシュが眩しい中で彼女は何かの決意を秘めた顔であった。

「私、響ミソラは大事な人を守るため、申し訳ありませんが活動を休止させて頂きます。」

その声にがやがやと場はうるさくなり、次々と質問が飛び交う。

ミソラはその一つ一つにしっかりと質問に答えた。

活動休止はいつまでか分からないこと。

数日前に決めていたこと。

最後のライブはチヨイナで行うこと。

ただ一つだけ答えなかったのは“大事な人”は誰かと言う質問だけであった。

「まさか……これ。」

「そういうわけだ。もちろんミソラだけでなく俺だって戦う。お前は一人じゃないからな。」

『けっ！お前はいつも一人でなんでも背負い込みやがるから。俺はお前の相棒だろ？』

シドウもウオーロックも頷いた。

「ロック……、暁さん……。」

「まあ湿っぱいのは嫌いだからな。後は“本人”に聞いてくれ。」

シドウは「餞別だ」と言っとうまい棒（チーズ味）を一本机の上に置いていった。

そして彼と入れ違いに入ってきたのは……。

「スバル君！」

赤い髪にエメラルドのような緑色の瞳。誰もが知っている……とい  
うかさつきまで画面に映っていた帳本人。

「ミソラちゃん!？」

大人気アイドル、響ミソラとそのウィザード、ハーブが現れたのだ

つ  
た。

## 第八話 未完の英雄（後書き）

チャンスは一度きり。

この世は結果が全て。

私はそうは思いません。一度失敗してもまた次の可能性がある、そんな思いをぶつけてみました。

その私なりの解釈がこの題名です。何か伝わるものがあれば幸いです。

私も部活の新生勧誘準備で毎日が忙しいです。目指せ、大台の10名！

うちの部活はマイナーですので（笑）

最後は私事になりましたが今後ともよろしくお願いします！

## 第九話 決意と陰謀

「スバル君！もう怪我は大丈夫？」

ミソラはまずスバルの額に自分の額を当てて、熱を確かめる。

が、そこはお年頃の男子。片思い中のミソラが接近してきたのでスバルの顔はトマトのように真っ赤になった。

「熱は……、スバル君顔真っ赤！やっぱりすごい熱だよ！」

慌ててミソラは手に持っていたかばんの中から体温計、包帯、冷えタなどを次々と机の上に置いていく。

その量は某青の猫型ロボットも真っ青な程である。

「ちょっと、ミソラ！落ち着きなさい！」

「おい、スバル！戻ってこい！」

オーバーヒートしていた二人をそれぞれのウィザードは落ちつかせる。

スバルはシュー…なんて湯気が出ながら、ミソラは山の様に積んでいた看病グッズを崩してやっと覚醒した。

「……なんて世話がやけんだよ。……つてーなー！」

ウォーロックがぼやくとこっちはこっちでハーブに小突かれていた。

「ミソラちゃん、どうしてここに？」

「えっ？あ、うん、スバル君のお見舞い。そうしたらアシッドがたつた今日覚めたって教えてくれて……。」「

まだ顔の赤い二人。会話もどこかたどたどしい。

『コイツ毎日見舞いに来てたぜ。しかも……、どあっ！ハープ、てめえ何しや……。』

『このおバカは私が面倒みておくから二人ともごゆっくり。』

空気が読めずに会話に入り込むウォーロックをしっかりと連行していったハープ。

ハープが最後に残っていたお見合いの定番ワードは意図的なのか、そうでないのかはつつこまない方がいいだろう。

ウィザード二人が去った後、病室にはしばらく沈黙が走る。

その沈黙に耐えられなかったのか慌ててミソラが話題を探し始めた。

「あ、あのね、スバル君。」

「ミソラちゃん、ありがとう。」

「えっ？」

「あの時僕を助けてくれたのミソラちゃんでしょ？」

ミソラは一瞬面食らった表情を見せる。しかしそこは女優。すぐに表情を建て直して分からないふりをした。

「な、なんのことかなー？私は何も……」

「氷の中で声が聞こえたから。心配してくれるミソラちゃんの声が。」

「……そっか。」

ミソラはそこまで分かっているなら、と否定するのは辞めた。

実はあらかじめウォーロックから「スバルがお前に助けられたと知ったら傷つく。頼むから内緒にしてくれ。」と、止められていたのである。

もちろんハープはブーイング。しかしウォーロックは頭を下げたまま二人にお願いした。

ウォーロックは二人を傷つけたかった訳ではない。しかし好きな人の前ではカッコイイ姿を見せたいという男の気持ち<sup>スバル</sup>を分かっていたのである。

もちろん二人にそんなこと言えるはずもない。ただひたすらウォーロックは頭を下げつづけた。

そんなウォーロックを見てミソラは何か感じたのか、承諾したのである。

「僕はホントに無力だっと思って思い知らされた。どこかヒーローだっ  
て驕ってたところがあつたのかもしれない。」

「……………」

「だから今度はもつと強くなる。父さんのように、暁さんのように、  
大事な人を守るように。」

スバルは何かスッキリとした笑顔をミソラに見せた。ミソラは少し  
の間黙っていたが、ゆっくりとさつきシドウが座っていた椅子に腰  
掛けた。

「私ね、仕事を休むことにしたの。新しい目標ができたんだ。」

「……………」

「そのためにもスバル君と頑張る！私たちブラザーだもん！つらい  
時でも一緒。二人でお互いを補っていきこ！」

「うん！」

スバルとミソラは互いに両手を握りあう。お互い決意を語りあつ  
た者通し、また絆は深まったに違いない。

窓から入る夕焼けがやけに眩しく輝いていた。



-  
-  
-  
-  
-

同時刻、某場所にて……

「流石は守護者<sup>ガーディアン</sup>の能力。協力感謝しますよ、  
戦乙女<sup>バルキュリア</sup>様。」

「……勘違いするな、アル。私はただお前たちと目的が同じだから  
協力しているに過ぎん。」

「……でしょうね。本名も教えてくれないのですから。でもそれで  
結構。」

アルは“バルキュリア”に一枚のカードを手渡す。

「これは？」

「次の依頼です。貴女にはそのまま“ある場所”で“あの情報”を仕入れてきて欲しいのです。」

“バルキュリア”は中身を見ると無言で立ち上がり、部屋を出ていった。

『あの女、気に入らねーな。』

「そう言っつな。あれも重要な同士なのだから。」

アルはハンター内の自らのウィザードを諫める。

『けっ！澄ましやがって。おい！そろそろ………』

「暴れさせるでしょ？もう少しさ。“歌姫”が“あれ”を手に入るまで我慢さ。」

『あいつか？信用できんのか？』

「もちろん、使えるものは使っつよ。」

ウィザードの方は興味を失ったらしい。

アルはハンターを机の上に置き、世界地図を広げる。

「次はここ………か。」

アルの視点はただ一つ、アフリックの方にあった。

一つ一つと気づかぬ内に闇は迫ってくる。

だんだんと……

だんだんと……

それはスバルの下へ近づいているのだった。

## 第九話 決意と陰謀（後書き）

はい。なんかいいムードになってきたり、敵の姿が見えはじめた第九話。

なお敵は全てその人の特徴を表すコードで呼ばれます。

今のところ敵は三人。

“アル”

“バルキュリア”

“歌姫”

他にも何人が増やしていくつもりです。

「ん？」と思っただ方も多いのではないのでしょうか？

ご意見ご感想ご指摘よろしくお願いします！

**第十話 “一つ目” (前書き)**

**注意！ 激甘です！**

**糖度に取り扱いご注意ください！**

## 第十話 “一つ目”

夕焼けも暮れて辺りは闇に包まれる。

が、WAXAのとある一角はもはや公害といえる熱さを保っていた。

「はい、スバル君！」

満面の笑顔のミソラからスバルに出されたのはスプーン。そして机の上にはスバルの夕食（病院食）。

本来なら付き合い始めのカップルや新婚しか出会わないだろうこのシチュエーション。

しかしベタベタなシチュエーションに、スバルは遭遇してしまったのである。

「ミ、ミソラちゃん。僕普通に食べられるんですけども……」

「あれ？スバル君“さっきのお願い”忘れちゃった？」

それを言われてスバルは反論できなくなる。

小悪魔ミソラと悪魔の契約を既に交わしてしまったスバル。しかもストッパー役のウォーロックとハープはまだ帰ってない。

つまりスバルに味方はいない。ハープは間違いなくミソラの味方をするだろうがそこは気にしないでおこう。

さて、なぜスバルがこんな状況に追い込まれてしまったのか。それは数十分前に遡る。

- - -

「そういえば、なんでミソラちゃん僕の場所が分かったの？」

助けてくれたことよりもそれが気になったスバルはミソラに聞いてみる。

しかしそれがスバルの運命を決めることになってしまった。

「あー、そのこと。スバル君のうちで“突撃！隣の電波体”テレビ取材があつたらしいの。」

「うんうん。」

「それで“ゲストの希望”で家族全員で受けてもらう予定だったそ  
うよ。」

「……うんうん。」

「しかし、“そのゲスト”が来たら一名不在で“そのゲスト”がカ

ンカンに怒っちゃったらしいのね。」

「……………はい。」

「それで“そのゲスト”の要望でその逃亡者を……………」

「ごめんなさい！！！」

ミソラが全てを言い終える前にスバルはものすごい勢いで彼女に謝った。

話の途中から冷や汗がすごくなっていたスバル。

ちなみにミソラはハーブの力を借りてスバルの探索に至ったらしい。

そして更に衝撃の事実をミソラはスバルに告げた。

「……………しかも誰かさんのせいで一部取材中止になっちゃったんだよねー。」

もはやスバルは謝る以外に何もできない。ミソラのスケジュールはコンサート、ドラマ、CM撮影と非常に忙しい。そんな中、別日程をとることは不可能である。

そんな理由によりミソラに頭が上がらなくなったスバル。

ミソラに機嫌を直してもらったために、スバルは慌てて「なんでもするから！」なんて安易なことを言ってしまった。

そして二人のあいだに契約“三つお願いを聞く”が交わされてしま



ったのである。

ただし、お願いごとを増やす、無理矢理何かをする、といった条件はなしである。

契約が交わされてすぐさま一つ目のお願い、“一日スバルの看病”  
がたった今、ミソラの手によって施行されたのだった。

- - - - -

「はい、あ〜ん。」

ミソラから再度スプーンがスバルの前に出される。

スバルにもそれなりのプライドはある。しかしミソラの前では……

「あ、あ〜ん……」

パクリ

脆くも崩れさつてしまつたのだった。

「おいしい？」

「う、うん。」

恥ずかしさから更に顔を真っ赤にするスバル。（頼むからロツク！  
早く帰ってきて！）なんて願をかけるがそれは届きそうではない。

神様は非常に無情なものだと改めて知ることになるスバル。

二人についているのは愛の女神ではないだろうか？そうであれば、これも無情ではなくむしろ加護であろう。

ミソラはスバルの顔を見て、また満面の笑みでスプーンを出す。もうスバルは諦めたらしい。むしろ開き直るようにしたようだ。

こうして二人は公害クラスの熱を発しながら夕食を過ごしたのである。

その頃外では……

「……ミソラちゃん、何してるのかしら？」

ノイズ率が200パーセントを超えそうな程、廊下の雰囲気に変化しつつある。

クリムゾンが形成されてもおかしくない。暴走したウィザードよりも馬鹿でかい量が取れること請け合いである。

さて、その主は誰なのか。

「「い、委員長……」」

コダマ中学校副委員長、兼“ロックマンを愛でる会”会員の白金ルナである。

そして彼女について来たゴンタとキザマロは後ろで震えている。

お見舞いに来ていた三人はさっきまでのスバルとミソラのやり取り

を見てしまったのだ。

もちろん二人もミソラのファンであるからしてスバルに対する怒りもある。しかしそれ以上に委員長の怒りに触れているほうが数万倍怖いのであった。

ルナの時限爆弾のタイムは刻一刻と迫っていく。

「ゴンタ君！用意は？」

「もちろんだ！キザマロ！」

二人はヒソヒソとルナに気づかれないように逃走の準備を謀る。

間違っても真っ白で床に転がるウォーロックのようにはなりたくない。

彼は見てしまった三人からスバルの命を守ろうとしたのであるが、ルナのウィザード、モードのジャイアントアックス一撃で敗れていたのだ。

タイムは一秒を切り、バスターイングレベルS。怒りは実力を超える。

ウォーロックがやられたのを見てゴンタとキザマロは方針を変更したのである。

そして今がその時！！

二人はダッと一步を踏み出した。

が、それでは遅かった。

「貴方たち!!!なにやってるの!!!」

ファイナライズ。

強大な攻撃力を前に男たちは硬直する。

その後、病室にお供たちも含め、三人の断末魔の悲鳴が響き渡ったのであった。

余談ではあるが、その後、死人達を放置し、ロックマン争奪戦が別の部屋で行われたとか行われてないとか。

『骨は拾ってあげるわ。』

燃え尽きたウォーロックはハープの手によりなんとか回収されたりしい。

## 第十話 “一つ目”（後書き）

まさかのスバミソ路線超特急……

そしてウォーロック、ご愁傷様（合掌）

やや無茶苦茶な展開ですが、楽しめましたでしょうか？

ゲーム内ではノーマルウィザードもギャラクシーアドバイス使えたみたいですのでモードに使わせてみました。

今回は遂にバトル入ります。スバルは戦闘不能（？）ですので、主役はあの人！

そして新キャラ登場です。

よろしければご意見ご感想ご指摘お願いします。

## 第十一話 こともち (前書き)

今回スバルは登場しません。この時間は昇天しておりました。

そして新キャラクター登場！

説明はあとがきにて。

## 第十一話 こともたち

病室で惨劇が繰り広げ……られたかもしれない頃、WAXA内、サテラポリス本部では……

「……………」

「どうしたの？」

「なんでもねえよ、姉ちゃん。ちょっと……寒気がしただけだ。」

ジャックの答えにクインティアは不思議そうな顔をしたが、そのまま目の前の画面に視線を戻した。

「（スバルのやつ、何かやったな。おそらくドリル女の逆鱗に触れたんだろうが。）」

ジャックはそう考えた。見事大正解である。

ルナ達がお見舞いに来た時にジャックも参加するように言われていたが、会議に出席せなければならず、泣く泣く断念したのである。

しかし一緒に行っていたらそれはそれで……痛い目を見ていただろう。

若干複雑な気持ちであったジャックである。

「で、あるからして、この前の“クロックプログラム”強奪未遂と今回の事件は無関係ではないかと。」

前で調査報告をすませたサテラポリスの女性隊員はそう締めくくっていた。

「ふむ。」

「ですが……また電波体が動きはじめたのは確かです。再びサテラポリス遊撃隊の結成もやむを得ないですね。」

シドウは長官にそう告げた。

ディーラーの壊滅後、大規模な組織犯罪が少なくなり、サテラポリスだけで間に合うようになったため一度遊撃隊は解散している。

ただしスバルは自ら進んで、ジャックとクインティアは司法取引（シドウと長官との）により、その後もサテラポリスに所属していたが。

しかし今回の事態では世界を救った部隊の再結成が迫られる状態であった。

「……それもやむを得ないだろう。シドウ君は再結成の準備を頼む。その他は……」

ウー！ウー！

その時、危険を知らせるハザードランプと警告音がWAXA全域に鳴り響いた。

「何事だ！」



「WAXA領域に未確認の電波体が二体侵入！警備ウィザードが次々とやられています！」

「この前の電波体か？」

「いえ！また別の反応です！」

長官が指示を出す前にシドウとジャックが席を立った。

「行くか、義弟よ。」

「……まだ違うだろ。」

「近いうちになるんだからいいだろうが。」

緊張感のカケラもなさそうなシドウにジャックはちゃんとツッコんだ。その隣でクインティアは黙っていながらも顔を赤くしている。

「待ちたまえ！ここは……」

「シドウちゃん。」

早速行動しようとする二人を長官は制止させる。しかし一番前にいたヨイリー博士も席を立った。

「博士、サポートお願いします。」

「はいはい。こっちは任せなさい。ティアちゃんも……」

「はい、博士。」

クインティアも席を立ち、シドウ達に加わる。

「トランスコード!!」

三人は電波変換し、侵入者を出迎えにいった。

「……博士。」

「残念だけど今戦えるのはあの子たちだけ。二年前のように後悔しないためにも今行動しなきゃダメなのよ。」

「しかし、敵の情報もわからないままうちの“最高戦力”を行かせるのは……」

「……“他の子たち”はどうなってもいいの?」

ヨイリー博士の一睨みに長官は一步引き下がる。普段非常に温厚なヨイリー博士である。そんな博士の静かな怒りは長官を威圧させるのに充分過ぎた。

他の研究員や隊員もオロオロとしていたが、やがてヨイリー博士の指示で動きはじめた。

「（もうこれ以上悲しい子はだしたくないの。ねえ、ジョーカーちゃん。）」

博士の思いは一つ、これ以上犠牲を創らないことであった。

.....

「あつけない。ホントにこれ、WAXA？」

警備ウイザードの頭を黄色いかぎづめが砕く。そのスピードは一瞬かぎづめの主はつまらさそうに爆発を見つめた。

後ろからついて来た電波人間はスケッチブックに何かを書き込んでいる。

「場所は間違いない。とはいっても“お姉様”だけで落とされかけたような場所だ。二人いれば充分間に合う。」

「うん。さっさと終わらせる。」

かぎづめの黄色い電波人間はそう言った刹那に姿を消す。その一秒後には前に対峙していたウイザード、数十体が寸断され、デリートさせられていた。

「この分だとあと30分もあればミッションコンプリート……できそうだね。」

二体の電波人間はWAXAすぐ目の前に迫っていた。

「ミッションが何かは知らないが、誰がここを通すって？」

シドウの電波変換した姿である、アシッド・エースが二体の電波人間の前に現れる。

アシッド・エースは侵入者の様子を伺った。一人は黄土色の斑目の付いた猫のような電波人間。おそらく……女性。

もう一人は濃緑のベレー帽とお揃いの色のマントの電波人間。おそらく……男性。脇にはスケッチブックのような物を持っている。

「……アシッド・エース、ということは僕たちの相手は“暁兄さん”だね。」

ベレー帽の電波人間はアシッド・エースにそう問い掛けた。

「何!？」

「それと“クインティア姉さん”とジャックもそこにいるんでしょ?出てきて下さいよ。」

ベレー帽子の電波人間の呼びかけにジャック・コーヴァスとクイン・ヴァルゴの二人が周波数を変化させ、姿を現す。

二人はシドウの作戦により待機していたのだったが、こつも早く見破られては仕方がなく姿を現したのだった。

「俺とティアのことをそう呼ぶのは……“チルドレン”か。」

「お久しぶりです。兄さん。」

二人の電波人間は三人に向かってお辞儀した。敵であるにも関わらず、それは親しい人に送る礼とまるで同じだった。

「アルが出てきたから薄々感じてたが……まずお前らは一体“誰”だ？」

ジャック・コーヴアスは二人に向かってそう質問した。

「名前、名乗れない。」

「うん。申し訳ないんですが。」

二人は顔を見合わせ、頷いてからそう答えた。

「だけどこの名前、言える。“リンクス・アマゾネス”。」

「リンクスに習い、僕も。この姿は“ピクター・キャンパス”。申し訳ありませんけども兄さんたち、そこをどいて貰います！」

リンクス・アマゾネスは爪をたて、ピクター・キャンパスは等身大の筆を召喚し、構える。

「しょうがないか。ティア、ジャック！」

「ええ。」

「やってやるぜ！」

五人はそれぞれの戦いへと入っていった。

## 第十一話 こどもたち（後書き）

さて、今回二体の電波人間が登場しました。簡単に外見と特徴、そして物語に支障がないので電波体も説明します。

リンクス・アマゾネス

身体は黄色をベースに黄土色の斑点がついています。両手両足にはかぎづめ、頭はキグナス・ウイングみたいに猫の顔が乗っかっています。ネコミミと尻尾つきの女性が簡単な鎧身につけている姿を思い浮かべていただければわかりやすいかと。

電波体はやまねこ座のFM星人、リンクス（女性）次回登場予定！

ピクター・キャンパス

濃緑のベレー帽とマント、そして装備は等身大の筆とキャンパスです。

髪の色は黒、服は白い服にエプロン姿です。要するに画家です。

電波体はがか座のFM星人のピクター（男性）やっぱり次回登場します。

おまけですが、“がか座”の漢字は“画家”ではありませんのでお間違えのないよう。

よろしければご意見ご感想ご指摘よろしくお願いします！





第十二話 WAXA攻防戦 前編（前書き）

集団戦難しいです。

なかなか……書けないですね。

## 第十二話 WAXA攻防戦 前編

キーン！キーン！

爪と鎌が刃音を奏で、ぶつかり合う。

「くらえ！フェザーシックル！」

「クイツクスラッシュ！」

ジャック・コーヴァスとリンクス・アマゾネスの斬撃の速さと威力は今は互角。

押しも押されぬ攻防がウェーブロード上で続く。

「ゴッドレイン！」

クイン・ヴァルゴは杖を掲げ、二人の上に雨を降らせた。

もちろんただの雨ではない。一発一発に威力を持たせた攻撃である。

ジャック・コーヴァスは姉が技名を唱えると共に身体を後退させた。

リンクス・アマゾネスは攻撃を突如やめたジャック・コーヴァスを追撃しきれずに体勢を崩した。

ドドドドド……

そこを容赦なく滝のような雨がリンクス・アマゾネスを襲う。

「相変わらず荒っぱいやり方するな、姉ちゃん。」

「ジャックなら避けられるでしょ？」

「当たり前だ。」

二人は幼き頃より二人でいつも生きてきた。悲しい時もつらい時もいつも一緒だった。

そんな二人の絆は決して半端なものではない。

「仲間がやられたけどいいのか？」

アシッド・エースは未だその場を動かないピクチャー・キャンパスにそう問い掛けた。

「リンクスはそんなに簡単にやられはしませんよ。」

ピクチャー・キャンパスは筆をサラサラと動かして、何かを描いている。

アシッド・エースはそんな大胆不敵な様子を目の当たりにし、何かを感じたようだ。

「ワイドショット！」

ブラスターから横一閃に水撃がピクチャー・キャンパスの下へ放たれる。

それでも彼は筆を止めない。

バアアーン！

ワイドショットはいきなり現れた木目状の壁に阻まれた。

『芸術とは至高の産物。何人たりとも邪魔はさせない。』

ピクター・キャンパスの隣に現れた濃緑のベレー帽とマントのつけた電波体が壁を出現させたらしい。

壁は後ろからさらに枚数が増え、四枚となった。

「サンキュー、ピクター。これでこちらの準備も整った。」

ピクターと呼ばれた電波体は姿を消し、ピクター・キャンパスは筆を構える。

アシッド・エースもブラスターを構えた。

「僕達もそろそろ……本気でいきます。覚悟してください、兄さん。」

「はっ！分かったよ、“マツリ”！」

「……………ペイントランス！」

ピクター・キャンパスは赤、青、黄色、緑の槍を作りだし、アシッド・エースに向けた。

……………

一方、ジャック・クインティア側では……

「速いわね。」

「ちっ！一撃目は手抜いてたってところか。」

ジャック・コーヴァスとクイン・ヴァルゴは防戦一方に追い込まれてきた。

クイン・ヴァルゴのゴッドレインはリンクス・アマゾネスに一発も当たらず、それどころか二人とも後ろを取られてしまっていたのだった。

なんとか二人は防御しきれているものの、攻撃に転じれる時間がなく今に至っていた。

リンクス・アマゾネスの隣に黄色の猫のような電波体が現れた。

『FM星最悪の犯罪者も形無しね。私と“ハル”の手にかかれば……』

「リンクス。喋りすぎ。」

『おおっ、それは失礼。』

リンクスはそのままだウィザードオフして姿を消す。

『ジャーック！！あの化け猫叩きのめすぞ！本気だしやがれ！』

『ちょっと！あいつムカつく！アタシらを誰だと思ってるわけ！？』

改心したとはいえ、やはり元最悪の犯罪者。喧嘩っばいのは変わらない。

コーヴァスとヴァルゴは怒りマークを幾つもつけながらリンクスにブーイングをした。

「わかってる。さっさと決める！」

ジャック・コーヴァスはふわりと浮き上がり、両手に紫色の炎を集めだす。

ジャック・コーヴァス、一番の大技を発動させる準備に入ったのだ。

「……まずい。ステルスダッシュ。」

リンクス・アマゾネスもジャックの発動の構えをみて何かを感じたらしい。

瞬時にリンクス・アマゾネスの姿は消えて、判別できなくなった。

「ジャックには手を出させない。ハイドロドラゴン！」

クイン・ヴァルゴは杖を回転させ、先端を一気にウェーブロードに叩きつける。

すると、その場から大量の水がほとばしり、龍の姿を模った。そしてそれは“ジャック・コーヴァス”の方へと向かっていった。

「これで終わり。フィニートハンター！」



「ペイントランス！」

「ギザホイール！」

アシッド・エースに向けられる色とりどりの槍を車輪は全て壊していく。

落とされた槍はその場で爆発したり、放電したりとさらなる効果をもたらした。

「（なるほど、色がそれぞれの属性を含んでいるのか。）」

アシッド・エースはブラスターにエネルギーを集中させる。

敵の槍はまだまだ形成できる、それなら近距離に詰めて、本体を狙う。そうした方が良いと判断したのだった。

「ロックオンソード！」

「キャンパスシールド！」

アシッド・エースの斬撃は木目の盾に遮られ、ピクチャー・キャンパスには届かない。

「堅いな。」

『シドウ、データ解析完了しました。』

「早かったな、じゃあ……決めにかけられますか。」



アシッドからの報告を得て、アシッド・エースは一撃で決めにかか  
る。

アシッド・エースの翼からエネルギーが充填されていた。が、キ  
ャンパスの盾があるのでピクター・キャンパスからは見えていない。

「兄さん、一体どうしたのです？こないなら……………」

「これで終わりだ！！ウイングブレード！！」

「！！！！」

キューーン！

ドサツ…………

超スピードのアシッド・エースの攻撃はピクター・キャンパスに声  
を出す間も与えず、彼に膝をつけさせたのだった。

「…………まさか僕たちが“本気”でないとはいえ、こつも簡単に負け  
るだなんて…………」

ピクター・キャンパスは今にも倒れそうな様子でアシッド・エース  
の方を見る。

「負け惜しみはいい。さっさとお縄についてもらおうか。」

その瞬間、WAXAから電波体拘束用の電波が発せられる。

倒れているリンクス・アマゾネス、そしてピクター・キャンパスは  
簡単に拘束されてしまった。

「……僕たちの目的は“ロックマン”とWAXAの抹殺。」

ピクター・キャンパスは縛られていながらポツリポツリと話し始める。

「どうした？さっきまで話そうともしなかったのに？」

「シドウ、遮らないで。」

クイーン・ヴァルゴがアシッド・エースを諷める。それに構わずピクター・キャンパスは話し続けた。

「別にいいですよ、姉さん。所詮“置き土産”ですから。」

「姉ちゃん!」

ジャック・コーヴァスが気づいた時には遅かった。

ピクター・キャンパスの真後ろ、しかも地下から巨大な鉄球が現れ、その本人もろともクイーン・ヴァルゴを襲った。

「うっ!」

鉄球をもろにくらったクイーン・ヴァルゴは地面に倒れこむ。そのまま電波変換も解けてしまった。

「ティアーツ!」

敷地内にアシッド・エースの声がこだましましたが、虚しくもクイーンテ

イアは反応しなかった。

## 第十二話 WAXA攻防戦 前編（後書き）

新しく登場しといて、なんと呆気ない……って思う方いるかもしれません。

ですが、まだ前編。まだまだ続きます。

そして次回は200年前の強者が登場！

一応二人だす予定です。

一人は……断片的に出してますが、もう一人はどうしましょう？

希望あれば是非どうぞ！

第十三話 WAXA攻防戦 中編（前書き）

まさかの三部構成に……

相変わらず文は駄文ですがよろしければどうぞ！

### 第十三話 WAXA攻防戦 中編

「ティアアアッ!！」

「姉ちゃん!！」

二人の悲痛な叫びが辺りにこだまする。縛られたピクター・キャンパスごと“貫いた”鉄球は空中で旋回し、地中へとおさまる。

貫かれたピクター・キャンパスはニヤリと笑ったまま緑色に光輝き、やがて霧散した。

ジャックは電波変換を解除し、クインティアの方へと駆け寄る。

「姉ちゃん!目え覚ましてくれよお、姉ちゃん!！」

ジャックはクインティアを何度も何度も揺するが、彼女は反応を返さない。

「申し訳ありません。クインティア姉さん。」

「……すみません。」

アシッド・エースとジャックは別の方角からくる“二人”の声に驚いて反応した。

そこには深々と土下座している“拘束されているはず”のリンクス・アマゾネスと“霧散したはず”のピクター・キャンパスの姿があった。

アシッド・エースは嫌な予感を感じ、先程拘束した方のリンクス・アマゾネスの方を確認する。

「……………そういうことか。」

『分身とは……………』

拘束した方のリンクス・アマゾネスもやはり黄色の光となり、やがて霧散した。

「お前らが“本体”だな？」

アシッド・エースは確認のためにそう二人に聞いた。

「その通りです。暁兄さん。ピクター・キャンパスの能力の一つが“デュッサン模写”。力はだいぶ劣りますが正確な分身を造ることが可能です。

「ピクター・キャンパスは土下座の体勢のまま顔だけ上げてそう答えました。」

「てめーら俺を、姉ちゃんを侮辱してんのか？」

ジャックは涙に滲んだ顔で二人の方を睨みつけた。その言葉には怒りの色がどんどんと表だつていく。

「……………全然。むしろ尊敬。」

「尊敬しているからこそ、謝ってるのです。」

「そういった態度を侮辱っていうんだよおお！！トランスコード  
！！」

ジャックは怒りのまま立ち上がり、再びカードを挿入する。

その瞬間、キラッと遠くの方で何かが光った。

「ジャック！」

ババババツ！

電波変換時は一瞬ながら無防備になる。その隙を狙って、無慈悲にも弾丸が五発ジャックに向かっていった。

「……暁さん、“聞こえていれば”聞いて下さい。今日は帰りません。その二体はお土産ですので御自由に。」

「さよなら。」

リンクス・アマゾネスとピクター・キャンパスはその場でウェーブアウトして消え去った。

その言葉はアシッド・エースに聞こえたか定かではない。なぜなら彼はジャックを庇って凶弾に倒れていたのだから。

「……もう一人いたとはな。」

アシッド・エースの電波変換は解除され、シドウもクインティアと同じように倒れる。



シドウの顔は十分満足げであった。

「なんでだよ！なんで俺なんか助けたんだよ！」

ジャック・コーヴァスとなったジャックはシドウを抱きかかえる。

「大切な義弟を見捨てるわけにいかんだろ。」

「シドウ……」

「WAXAはお前に一時預けた。頼むぜ、……………ヒーロー。」

「おい！馬鹿シドウ！」

シドウはばたきと倒れ込む。ジャックは慌てて脈を確認するが、ただ気絶してるだけらしい。

ジャック・コーヴァスはほっと安堵すると、シドウをクインティアの隣に移動させ、敵の方を睨みつけた。

敵も地中から、そしてもう一人空中から姿を現す。

一人は迷彩色の軍隊の人間のような“者”。左手がスコープ付きのマシンガンになっている。

もう一人は西洋甲冑を思わせる同じく人間のような“者”。左手は巨大な鉄球となっていた。

「コイツらが姉ちゃんとシドウを……」

『おい、ジャック！アイツら電波人間じゃねえぞ！』

「……関係ねえよ、コーヴァス。ぶちのめす相手なんかよ！」

ジャック・コーヴァスは憎しみを込めて再び紫色の炎をいくつも灯しだす。

それは更に重なりあい、だんだんと巨大な塊となっていく。

「くらいやがれ！グレイブクローー！！」

通常の数倍の大きさとなった炎の手は謎の二人を握りつぶさんが如くの勢いで向かっていった。

「……………スコープガン！」

「……………キングダムスラッシャー！」

ジャック・コーヴァスの怒りの一撃は右側、左側と避けられ、すぐに巨大な鉄球と銃弾が繰り出される。

「ぐああっ！！」

シドウとクインティアを沈めた一撃はジャック・コーヴァスに大きなダメージを与える。

ジャック・コーヴァスは大きく吹き飛ばされ、WAXAのディフェンスウエーブに叩きつけられた。

『あのヤロー、やりやがる。動きが違い過ぎる。やり慣れてんな。』  
先程の二体の動きをコーヴァスはそう評した。

見たこともない電波体であるが、戦闘経験量はジャックの比ではないとみたのだ。

「アイツらすごい強え。だけど……俺だって負けられねえんだよ！」

ジャック・コーヴァスはあちこち痛む体に鞭打ち、再び起き上がる。

そしてそんな決意が届いたのか、WAXAの方から一つの青い光がやってきた。

「遅れてゴメン！ジャック！」

「病み上がりは何言ってるんだ？」

ロックマンはジャック・コーヴァスの隣に着地する。

そしてそれに続き、ピンク色、赤色の光もジャックの下に駆け付けた。

「全くルナちゃんったら！スバル君の意思を……」

「うおおおー！！やっと戦えるぜー！！」

一体何があったのか、今だぶつぶつ呟くハープ・ノートと闘争本能剥き出しのオックス・ファイアがジャックの前に現れ、戦闘の構えをとった。

「てめーら……」

「今度は僕たちが相手だ！行くよ！ミソラちゃん！ゴンタ！」

「オツケー！」

「任せとけ！」

WAXAでの戦いもついに終盤に差し掛かる。

### 第十三話 WAXA攻防戦 中編（後書き）

遂に2000年前のナビ登場！

相手はお分かりの通り、サーチマンとナイトマンです。

なぜ時を越えて登場するのはまた後の話で説明します。

ただ、もちろんこの二体はオリジナルではありません。

次はどのナビ出そうかな……

そしてお待ちかね、ロックマン登場！

当初はこの戦闘には出さなかつもりでしたが……スバル君、暴走。

病み上がりだから無茶しないようにと言いたいです。

よろしければご意見感想ご指摘お願いします！

初めて評価いただけました！

感謝感激雨霞なのです！遅ればせながらありがとうございます！

！ Lyra

## 第十四話 WAXA攻防戦 後編

「ロックバスター！」

「シヨックノート！」

ロックマンとハーブ・ノートが一斉に攻撃を撃ち始める。

するとまず鎧の方が前に出て、攻撃を受け止めはじめた。

『なっ！？アイツ自ら攻撃を受けにいきやがった！』

ウォーロックは驚きの声を上げる。今まで戦ってきた電波体の中でそんな敵は誰一人いなかったからだ。

キュン、キュン……

鈍い音を立てて、二人の攻撃は弾かれていた。敵には傷一つない。

「見た目以上にすっごい硬いみたいね。」

『あれは厄介よ。』

ハーブ・ノートは音符を打ち止め、さらに距離を取る。

すると、鎧の影から何かが五つほど投げ込まれる。

「スバル！ミソラちゃん！避けてくれ、オックスフレーム！」

オックス・ファイアは二人にそう指示すると口から放射状に炎を吐

き出した。

ロックマンとハーブ・ノートは指示を聞き、瞬時に後ろへと下がる。

ゴオオオオオ……

炎に包まれ、緑の何かは後もなく消え去る。すると炎に包まれた何かは爆発をおこした。

「くっ！」

ロックマンたちは突如上がった灰色の煙に視界を塞がれる。

「スコープガン！」

「スーパーバリア！」

銃弾は咄嗟にロックマンが張っていたバリアに阻まれ、三人に届かない。

しかしバリアを張っていないければ間違いなく誰かひとりには凶弾に倒れていただろう。

それほどの正確性を誇っていたのである。

やがて煙ははれ、敵の姿がはっきりしてきた。

《みんな聞こえるかしら？》

それぞれのハンターにヨイリー博士から連絡が入った。

「博士？」

《その声はスバルちゃんね？よかった。》

ヨイリー博士の声は何か安堵したような風である。

「ばあちゃん、どうしたんだ？」

「博士！それより暁さんたちが！」

オックス・ファイアは戦いにも関わらず能天気にも、逆に慌てたようにハープ・ノートはヨイリー博士の応答に答えた。

《慌てないで。まず敵が分かったから報告するわ。》

もちろんヨイリー博士の攻撃中にも攻撃は容赦なく続く。

ロックマンは敵の攻撃を手持ちのバトルカードを使い、なんとか避けた。

そのうちに残りの二人が報告を聞いた。

《相手は二百年前の英雄の二人、チームオブカーネルの一人、鉄壁の守備を誇るナイトマンとチームオブブルースの一人、正確無比の射撃が武器のサーチマンよ。》

「ち、チームオブ？カーネル？フライドチキンか？」

「と、とにかく強いってことですね。」



ハープ・ノートとオックス・ファイアはそれが何のことかわからなかったらしい。

《ええ。とつても強い。だからスバルちゃんはサーチマンの方を。ゴンタちゃんはナイトマンと“分けて”戦ってちょうだい。ミソラちゃんは……》

「はい、二人のサポートですよね？」

悔しそうにハープ・ノートはそう言った。

残念ながらハープは戦闘向きな能力ではない。それを本人たちも理解している。

こんな状況だからこそ、むやみやたらにでしゃばる訳にいかないのだ。

《そうね。お願いするわ。いい？決して相手をくつつけないように戦うのよ。》

「おう！任せとけ、ばあちゃん！」

オックス・ファイアは雄叫びを上げてナイトマンの方へと突っ込んでいった。

「聞こえた、スバルくん？」

「もちろん！」

ロックマンは防御から一転、強めのバトルカード、ブレイクサーベ

ルを読み込み、サーチマンへと向かっていく。

サーチマンも冷静に近づいてくるロックマンに狙いを定める。

バババババ！！

再びロックマンに向かって銃弾が迫っていた。

「バトルカード！ダブルストーン！」

ハーブ・ノートはバトルカードを転送し、サーチマンの目の前に巨大な岩を二つ出現させる。

「！！！」

弾丸は岩にめり込むだけでロックマンに一発も当たらなかった。

「ありがとう、ミソラちゃん！バトルカード！ドリルアーム！」

ブレイクサーベルを左手に、ドリルアームを右手に変化させるロックマン。

まずはドリルアームで岩もろともサーチマンを砕いた。

ギューイーン！！

「ガッ………」

ドリルに押し碎かれ、サーチマンは怯んだらしい。

そして最後の一撃、ブレイクサーベルを瞬時に構える。

一方、オックス・ファイアと組み合っていたナイトマン。

力は全くの互角。一步も動かず足止めされていた。

が、サーチマンのピンチに気がついたらしい。オックス・ファイアの手を離し、サーチマンの方へ方向を変えた。

「うおっ……」

オックス・ファイアは勢いあまって前のめりに倒れてしまう。その隙にナイトマンは走り始めていた。

が、その場でナイトマンの右足だけは動かない。

「へへっ！姉ちゃんの敵を俺が逃がすわけないだろ？」

そこにはボロボロながらも紫色の炎を構えるジャック・コーヴァスがいた。

ジャック・コーヴァスはグレイブクローをいつの間にかナイトマンの気づかぬうちに当てていたらしい。

「ジャック！それは俺の……」

まだ倒れたままというカッコ悪い姿のままオックス・ファイアは吠えた。

「姉ちゃんの敵だ。最後まで俺に決めさせてもらっぜ。」

そんなことはお構いなしにジャックはさらに火力をあげていく。

「これで終わりだ！」

ロックマンはサーチマンにブレイクサーベルを振り下ろし、ジャック・コーヴァスはペインヘルフレ임을ナイトマンに余すことなく打ち込む。

「グオオオオ……」

二体の敵はそれぞれ唸り声を上げ、光の粒子となり、消えていった。

第十四話 WAXA攻防戦 後編（後書き）

遂に戦い終了！

ジャック、最後良いところ取り（笑）  
ちゃっかりしてます。

さてさて、襲撃が終わったのであと一、二話後始末を終えて、また学校生活に戻ります。

次は初めて出てきたあの人も登場！ウィザードも出します。

ちなみに現在ロックマンはスターブレイクもトライブオンもノイズチェンジ、ファイナライズも使えない状態です。

入れると……また話がややこしくなるので。

よろしければご意見ご感想ご指摘よろしくお願いします！

## 第十五話 憐れなる彼に愛の手を

「あなた たち〜!」

戦闘にてポロポロのジャックと病み上がりで無茶をしたため、またベッド送りのスバルを出迎えたのは、今にも縦ロールな髪が回転しそうな閻魔様である。

怒髪天をつく。まさにこのことであつた。

さて、そんな閻魔に睨まれた哀れなる罪人はというと……

「ごめんなさい……」

『悪かつたな。』

『ちくしょう、何で俺様まで……』

「ドリル女め……」

ウィザード含め、サテラポリス会議室の床に正座させられていた。

スバルとウォーロックに関してはルナとミソラ、そしてヨイリー博士の三人に止められていたのを無理言つて戦闘に参加したのである。

自業自得。二人はそれなりに反省しているようだった。

ジャックとコーヴァスに関しては何故正座させられているのかも分からない。

クインティア（とシドウ）の敵討ちの為に無茶したのであるが、ルナがそんなことを知るはずもない。

理由は違えど同じくポロポロになった二人を見つけて、心配かけたからそんなことをしないようにというたためのお説教である。

……つまりジャックとコーヴァスにとっては完全なるとばっちりであった。

閻魔様、もといルナの説教はこのままだと一時間コースである。

固い床の上に正座一時間。地獄以外の何物でもない。

スバルとジャックはちらつと助けってくれそうな他の面々に視線を送る。

「（助けて！）」「」

しかしながらゴンタとキザマロはとばっちりを喰いたくないらしく、わざとらしく二人と視線を外した。

シドウとクインティアは別室にて療養中。

ツカサは……この場にはいない。

それに残っているのは……ミソラだけである。

二人に道は残されていなかった。ルナの説教は現在五分経過。だんだんと足の感覚がなくなってくる。そろそろ足の限界も近い。

「（ミソラちゃんお願い！）」

スバルはミソラに熱い視線を送る。ミソラはスバルの視線にすぐに気づいたらしく小さくウィンクした。

「（まかせといて！）」

さすがは幾多の危機を乗り越えたペアである。意思の疎通は完璧であった。

この時スバルにはミソラが女神様に見えてたに違いない。

「ルナちゃん、スバルくんも反省してるしもう許してあげたら？みんなを守るためにスバルくんは立ち上がってくれたんだよ？」

ミソラのフォローは完璧だったはず。スバルとジャックは地獄から解放される予定だった。

が、ここで予想外の方向へ進み出してしまふ。

「それはそうだけどスバルくんはまた命を削ろうとしたのよ？それは改めさせるべきよ！」

「だからそれは反省してるってば。それに私もちゃんと付き添ってたから……」

「まあ！貴方がいたからロックマン様は大丈夫だったって言いたいわけ？私は足手まといっということが言いたいの？」



「そんなこと言っていない！だいたい……」

まさかのまさか。第二次ロックマン争奪戦勃発。

歯止めが聞かなくなった二人はまたまた言い争いを始める。普段は中の良い二人。しかしスバルが絡むと……最近はこうなってしまうのである。

そして正座組は泣きたくなる。

『スバル……俺たちいつまでこうしてりゃいいんだ？』

「ロック、それは言っちゃダメだよ。」

不毛な争いは始まったばかり。スバルはある意味悟りを拓いたようだ。

その後、経過報告に来たヨイリー博士により二人は救出され、争いも収まったという。

さすがは年の功。菩薩様はしわしわのおばあちゃんだった。

-----

ヨイリー博士によるとシドウとクインティアは命に別状なし。数日経てば復活できそうらしい。

そして話題は先程の戦いへと移っていく。

「戦った相手は二百年前のナビだったということですよね？」

「ええ。そうよ、スバルちゃん。」

「じゃあなんで二百年前のナビが電波化してここにいたんだろ？」

ミソラが最大の質問を投げかける。

『あの電波体は“半分”ピクチャーの電波が入ってた。ヤツの能力による電波化に間違いはないだろうな。』

「コーヴァスちゃんの言う通り、半分がナビの基本データ、そしてもう半分はピクチャーという電波体のデータで作られていたわ。」

「でもマロ辞典によりますと二百年前ってインターネットです。その時代のデータが今も残ってるだなんてありえるんですか？」

キザマロの言う通り、今は電波技術が発達した世界である。当然電子情報は書き換えられ、日々新しいものとなる。

古きは消え、新しい情報が生き残る時代なのだ。ナビとはいえ、電子情報。二百年前のデータが残っているかといえば極めてゼロに等しいのだ。

「そうね。WAXAにだってそんなものは残ってないわ。だけど仮に“二百年前のデータを全て持つ”者がいたら……」

「それが可能になるわけですね？」

「ええ。」

スバルの言葉をヨイリー博士は肯定した。

見知らぬ力を持つ敵。その存在が明らかになったこの瞬間、全員の意味は一つとなる。

「これ以上は分からないから追って連絡するわ。スバルちゃんとジャックちゃんは……分かってるわね？」

「……はい。」

「……分かってるぜ。」

言うまでもない退院延期である。

「それじゃあ私たちは帰るわ。いい、二人とも！これ以上怪我をひどくしたら……」

「大丈夫です！」

ルナの忠告にスバルとジャックは息を合わせて敬礼した。

余談ではあるがウォーロックは敬礼しかけたらしい。クスクスとハ

ープに笑われ、青い体をやや赤くしていた。

「早く元気になれよ！」

「お大事にです！」

ゴンタとキザマロもルナに従い、帰り仕度始める。

が、まだ騒ぎはこれで終わりそうにない。

「私は今日は泊まりまーす。」

ミソラの発言にヨイリー博士以外の全員がピシリと固まった。

「ななな……」

「何ですってえ!!!??」

スバルがうるたえだすより早くルナがミソラに詰め寄る。

「だって今日私はスバルくんの一泊看病しなきゃいけない約束だしねー、ハープ。」

『その通りよ。スバルくんも納得してくれたわ。』

ミソラとハープの発言にルナの身体がわなわなと震え出す。

再びファイナライズせんばかりに周りにノイズらしきものが出現しだした。

そんな雰囲気を感じたゴンタとキザマロ、そしてウォーロックまでもが早くも退散する。

「（ミソラちゃん、今なんでそれを言っちゃうの……）」

スバルはまずいとばかりにジャックの方を見た。

「……今日俺は個室で。」

「そうね、手配してみるわ。」

ジャックとヨイリー博士はもう外に出ていた。

「（頼むからこの場に僕を置いてかないでー！）」

ガーという扉の閉じる音が虚しく響く。これでスバルの運命は決まった。

スバルの症状は全治三週間。

症状は打撲、切り傷。

しかし精神的ストレスから復帰できるかは疑わしいという……

## 第十五話 憐れなる彼に愛の手を（後書き）

やっと襲撃編全て終了！。

次の時期はもうすぐ冬休みというくらいです。バトル描写はちょっと減るかもしれませんが。

その前に一つ大きなイベントださなきゃいけないですが。

それにしても……あの娘を誰か止めてください。

ご意見感想ご指摘はどしどしお待ちしております。

## 第十六話 可愛いもの同盟(前書き)

最近スバルとウォーロックに不憫な役回りしか回してないような気がする……。

## 第十六話 可愛いもの同盟

始まりは一本の電話からだった。

>スバルくん、明日もちろん暇よね？明日、十時にロツポンドーヒルズまでくること！遅れたら……分かってるわよね？<

エアデイスプレイまでルナにズイツと迫られたスバルに反論できるはずもない。

あと三日で冬休みだというのにスバルはいつもの如くルナに駆り出されていた。

ルナが今回集合をかけたメンバーはいつもの三人。ちなみにジャックはまだ入院中、ツカサは児童福祉施設の手伝いでこれなかった。

さて、今回彼女が召集をかけた理由は……

「さっさと下見終わらせるわよ！」

「「おー！……」」

「……僕来る意味あったの？」

『完璧ネタバレだな。』

スバルだけちょっとげんなりとしている通り、冬休み明けにある全体研修会の下見である。



今回選ばれたのはTKタワーで開かれている古代アフリック展。

もちろん天文部部長のスバルも参加しなければならないが、スバルは生徒会とは関係ない。

ウォーロックの言とおおり……すつごくネタバレである。

だがルナ曰く、「ルナルナ団として活動するのは当然でしょ？」とバツサリと切り捨てられた。

生徒会選挙のために結成されたあの団体はどうやら今後とも続いていきそうである。半ばルナとパシリの集まりである感じが否めないのは気のせいであろうか？

そんなスバルを尻目にルナは今日の予定を三人に述べていく。

「今日は前会長と前副会長がいらっしやるらしいから先輩方に進め方や決まりをレクチャーしてもらおうわ。そして私たちがそれを本番でしっかりとこなすこと。わかった？」

「はい！委員長！」

「……俺、すつげー自信ねえ。」

ゴンタに知的な説明を求める方が無理である。それはルナも分かっているらしくそのコメントには反応しなかった。

「僕も運営側に……」

「わかった？」

「は、はい。」

みなまで言わなくてもスバルの道連れが確定した瞬間である。

『スバル、諦めな。第一、委員長は言い出したら聞かぬの……』

「うん、分かってるよ、ロック。」

スバルの味方はウォーロックだけである。ウォーロックにポンポンと肩を叩かれるスバルはハア、と大きくため息をついた。

「それにしても先輩方きませんね？」

「二人とも飯食ってんじゃねえか？」

TKタワー前で四人は集合しているが、肝心の先輩が来ないらしい。

「二宮部長にかぎってそんなことはないはずなんだけど……」

スバルは前副会長のことをよく知っているからそう答える。

スバルの知っている前副会長、兼天文部前部長の二宮ソラの性格は“姐御肌”である。

行動は非常に大雑把で大胆であるが、面倒見はよく、何より下手な男子より“漢”らしい。

背中を預けるに相応しい女性、知識的な意味以外でもスバルにとってはお手本にしている一人であった。

そんな彼女は時間を守れなかったことなどスバルの知る限り一度もない。

「そうね、二宮先輩に限ってそれはないわ。むしろ……」

ルナが言いかけた途端、「おーい、スバル！手伝ってー！」という声が聞こえる。

そこには何かを引きずりながら手を振るソラの姿があった。

「二宮部長！」

スバルは彼女の下へと走って駆け寄る。ルナたちもスバルを追った。

「おはようございます。二宮部長！」

「おー。いやー、ごめんな。遅れてしまって。このボンクラのせいでまた……な。」

ソラは引きずってる“それ”をちよいちよいと指さした。

「……………」

スバルたち四人は驚きを越えて呆れたようで、口をポカンと開けている。

ソラが引きずってきたのは学ランの男子。透き通るような白に近い銀髪が無惨にも汚されている。

まるで漫画のような光景が目の前に再現されていた。

「それ……あ、秋月前会長あきつきですよね？」

「ええ、そうよ。」

ルナの質問にあっさりそう答えるソラ。ソラが荷物のように引きずってきたのは来るはずだったもう一人、秋月イツキ前会長であった。その引きずられてきたイツキ張本人は心なしに幸せそうな顔で気絶してる。

（何があったのかは聞くまい）

スバルたち四人はところは違えど前会長、副会長の関係について聞いたことがあった。

噂に聞いていた通りの光景である。今日は何があった、それについて聞くのは野暮であるので四人は聞くのはやめた。

「まさか一人で前会長を持ってきて……」

「こええ！いいん……何でもないです。」

ソラが何をしたのか想像したらしいキザマロとゴンタが大騒ぎしかける。しかしルナが一睨みすると二人はシュルシュルと小さくなっていく。

「違う違う！さすがに一人は無理！ウィザードに手伝ってもらったの！」

「あれ？二宮部長ウィザード持っていました？」

「最近パパが創ってくれたの。」

ソラは自らのハンターを取り出し、ウィザードオンさせる。

そこに現れたのは……

「『（クリムゾンドラゴン！？）』」

スバルとソラが苦手で姿を見せていないウォーロックは同時に思った。

ソラのウィザードはクリムゾンドラゴンを思わせる真っ赤なドラゴンの幼性であったからである。

つばらな瞳に木星のわっかのようにウィザードの周りを回る二つのリング。

そしてプラネタリウムもびっくりの宇宙の羽衣を纏っていた。

そのドラゴンは心なしに眠そうに欠伸をして目をつぶった。

「寝て……る？」

「あはは、さっき力仕事手伝わせたからね。コイツは“コスモ”。天体学者の父がビビツてきて創ったらしいんだけど……何でドラゴンなんだろ？」

ソラからもドラゴン状のウィザードは謎らしい。

『(間違いなくクリムゾンドラゴンのデータだろ?)』

クリムゾンドラゴンの姿を知るのはキングとロックマン、そして大吾だけのはずであるのだが……インスピレーションとは恐ろしいものである。

「でもモードと一緒にかわいいじゃないですか?」

『ルナちゃん……』

モードは涙を浮かべ、ルナを見つめた。

「そうよね? やっぱり可愛いよね? スバルさんのウォーロックより何百倍もセンスいいよね?」

『ちょっとまって、こらあ!』

ウォーロックなど気にも留めず、ルナとソラは何度も頷いてがっしりと手を組んだ。

可愛いもの同盟成立。おそらくその場にいればミソラも加入しそうである。

「大丈夫! 僕はロックのこと大好きだから!」

『スバル……』

この時、久しく地球で涙を流しかけたと後に本人は語る。

「……ついた？」

一つの同盟が熱く結ばれた一方、荷物扱いだったイツキが目を覚ました。

「おはようございます。秋月先輩。」

「その声は……最小院だな？となると……ついたようだな。」

ひよいとイツキは起き上がると学ランについた汚れをパンパンと払う。

「牛島？手伝ってくれ。」

「お、おう。」

背中の汚れはゴンタに任せるとイツキは人数を数え出した。

「ひー、ふー、みー……つと。全員揃ってるな。じゃあ下見いくぞー。」

「お、おい。委員長たちを置いてって……」

「大丈夫でしょ。ソラいるし。」

イツキはもう一つ欠伸をして先にタワーへと入ってしまった。

「委員長ー！スバルー！先行くぞー！！」

「すぐ行くー！！」

ゴンタの知らせによりスバルたちもタワーの中へと入っていった。



## 第十六話 可愛いもの同盟（後書き）

ソラのウィザード登場。

姿は記述通り、クリムゾンドラゴンの子供にちょっとオプションをつけたくらいです。

一応可愛い系の役回りなんですけど……実際どうなんでしょう？絵を描いてみたくても下手くそなんで無理なんです。

さて、次回は説明ばかりの話になります。

しかしこの話のキーがいくつも出てくるのでとても重要なところですよ。

原作を壊さずあまり複雑にしないようにするつもりですが……頑張ります。

よろしければご意見ご感想ご指摘をお願いします。

第十七話 古代アフリック文明（前書き）

予告通り今回は説明が主となっております。

なるべく理解してもらえようつুক্তたつもりですが、わかりづらければ申し訳ありません！

## 第十七話 古代アフリック文明

“古代アフリック文明展”

- - - - -

古代アフリック文明とは約6500年前に発展した古代文明の一つである。

この文明は1万年以上に発達したムー大陸の生き残りがたてたと考えられており、同じ時代に発達した“古代チヨイナ”“古代アトランピア”“古代バビロン”と合わせ、四大文明といわれています。

- - - - -

「へー、オーパーツはなかったけどこんな文明だったんだ。」

『あん時は特に妙な電波は感じなかったんだがなあ……』

スバルとウォーロックは目の前の説明書に見いつていた。

スバルたちは一度、オーパーツ“ベルセルクソード”を手に入れた後、敵にオーパーツを渡してはならないと考え、各地に残るオーパーツを探しに出ていたのだった。

その一つの間所がアフリックの三大ピラミッドだったのだ。

結局何も見つからず、しかも呪いだの幽霊だのいろいろあったため、スバルにとっては苦い思い出の一つになっている。

スバル曰く、「あの時ミソラちゃんが一緒にいなくてよかった。」  
とのこと。

幽霊嫌いなスバルは相当現地で取り乱していたに違いない。

「四大文明って習ったけどムーの血を引いていたってのは知らなかったな。」

「嘘くせーけどな。なんならソロのやつに本当か聞いてみればいいんじゃないか？」

「……ゴンタみたいに勘違いでも殴られるからいいよ。」

「ちげーねーな。」

ウォーロックの提案をスバルはバツサリと切った。

ロックマンの永遠の好敵手といえばブライことソロである。

絆を何より忌むべきものとし、ロックマンとは対極にある存在、そんな本人が固執するのがムーの文明についてであった。

何よりムーの名前や技術が悪用されることを嫌い、侵したものについては徹底的に攻撃する。

その対象は今までスバルだけでなく、成り行き的になってしまったゴンターガ様やら組織であるディーラーまで誰であってもである。

そんなソロにこの話題を持ち出せば……殴り倒されること請け合い

であろう。

ふとゴンターガ様について思い出したスバルは前にいるゴンタの方に視線をやった。

そのゴンタはルナとキザマロと一緒にイツキの説明を聞いていた。

もっとも本人は眠たそうなのを隠しきれずにうとうとしはじめている。

起きて聞いても確実にゴンタのキャパではオーバーヒートであるが、横で小突いて起こそうとするキザマロの些細な思いやりがちょっと虚しく見えた。

その一方でさすがは副会長のルナ。イツキのアドバイスをしっかりと聞いてメモまで取っている。

おそらく彼女にはビジョンが見えつつあるのだろう。イツキに幾つもの質問をしていた。

それに対し、ルナの質問に対して全てに答えるイツキ。最初に「去年行った場所と違うけど…」なんて前おきを入れていたが、それを感じさせない堂々たる様子である。

伊達に昨年の会長を務めていない。先程までのぐーたらな様子が嘘のようなキレ者である。

「ロック。」

「ん？」

「やっぱり僕いらなかったよね？」

『だな。』

もはやスバルはルナたちとはぐれて、ウォーロックと見て回っている。若干今日来たことを後悔しはじめていたスバルであった。

「一人かい？よければお姉さんが遊んであげようか？」

「二宮部長？」

一歩間違えたら怪しく聞こえるセリフでソラはスバルに近寄ってきた。

「二宮部長は仕事いいんですか？」

「ああ。イツキはああなればしつかりと仕事するから必要ないよ。」  
ソラは手をヒラヒラさせ、イツキの方を眺める。そんなソラの姿をじっとスバルは見つめていた。

「二宮部長って……」

「ん？」

「秋月先輩のこと好きですよね？」

「!?!」

スバルがちよつとした拍子に投下した爆弾。これはソラには効果抜群であった。

「スバル！別に私とイツキはどうにもこうにもただの幼なじみであつて……」

顔を赤らめて否定するソラだが、その態度ではもはや肯定も同然である。

「ふーん、そうなんですね。」

「何をだからイツキとは……」

「そうなんですね？」

スバルは昨日の電話での委員長ばりに詰め寄ってみた。

「う、だから……」

「そうなんですね？」

「……はい。」

二宮ソラ陥落。ついに白状してしまった。先程の姐御の勢いはまるで感じず、一人の乙女としての姿しかなかった。

「やっぱり。」

「まさか鈍感スバルにバレるとは……」

ソラはやってしまったといわんばかりに頭を抱える。

「それにしてもどうして分かったんだ？」

「……勘です。」

スバルはそこで話をはぐらかす。本当はあかねに指摘された自分がミソラを見つめる視線と似ていたから……なんてことは言わない。

それを言ったらまたソラがスバルを弄るネタになりそうであったからだ。

「そ、そうか。あつ！スバル、あれ見てよ！」

これ以上追求されたくないらしいソラも話題を変えようと一つのパネルを指さした。

「えつと……“古代アフリック文明”の守り神スフィンクス……。」

そこには茶色の石で彫られた動物のような像がガラスケースの中に保管されていた。

「なんだこりゃ？」

「昔の神様だつて。」

『神様ってこんな姿してるのかよ？ラ・ムーといい、神様ってのは妙なのばかりだな。』



「ロック、それと比較するのも問題あると思うけど。」

ウォーロックに苦笑いするスバル。その横でソラはスフィンクスに  
関してのパネルを読んでいた。

- - - - -

スフィンクス

古代アフリック文明は電気と絆によって栄えた文明といわれ、繁栄  
の守り神といわれたのがスフィンクスです。

このスフィンクスは文明最後の王のピラミッドから出土した現物そ  
のもので、大変価値があるものです。

- - - - -

一通り読み終わったソラはスフィンクスの像を眺めた。

スバルもソラの隣で像を眺める。

そして、もう一人……

「……センスあるとは決して言えないね。古代人とやらは。」

そして鉛筆がサラサラと動かされる音が聞こえる。

スバルとソラは声の主の方を見た。

そこには黒の長髪を後ろでくくったスバルと同じ年くらい少年がス  
ケッチブックに先程のスフィンクスの像を写生している姿があった。



## 第十七話 古代アフリック文明（後書き）

この世界での“文明”とは四大文明のことです。

もちろんアフリック文明はエジプトから。

アトランピアとバビロンは分かりにくいかもしれませんが、ギリシヤ文明とメソポタミア文明を想像していただければ問題なしです。

インダス文明は……話の都合上なしで！

さて、ここで気づかれた方いたら凄いですよ！

何をつて？

それは……秘密です！！

なんのことかわかったらこっそりと連絡下さい（笑）

今回は希望に添えてバトルシーンちよつと入れるつもりです。

今後ともよろしく願います！

第十八話 悪魔のカード再び！（前書き）

すみません！

今回はちょっと短いです！

## 第十八話 悪魔のカード再び！

「美しくない。」

そつづつづつ呟きながら鉛筆を走らせる彼にスバルとソラは一步、二歩と横に避けた。

すると彼はスバルたちの気配に気づいたらしく、横をチラッと見た。彼はソラへ、そしてスバルへと視線を向ける。スバルの方を見た彼は心底驚いたような表情を見せた。

「星河スバル……何故ここに？」

「えっと……君は？」

もちろんスバルと彼は初対面である。名前はスバルとして不本意ながら知られてしまっているだろうが。

「甘夏マツリ。あまなつただのしがない絵描きです。」

マツリと名乗った彼はスケッチブックを閉じて、深々とお辞儀した。

「甘夏マツリって……あの有名な!？」

ソラはマツリの名前に酷く反応した。

「二宮部長？彼を知ってるんですか？」

「知ってるも何も半年前に若干十四歳でアメロッパの……何だったかな、ひとまずコンテストで最年少入賞した天才よ!？」

スバルに凄い剣幕で説明したソラは「ですよね!」と勢いよくマツリに確認を求めた。

ソラの勢いに面食らったマツリであるが、「え、ええ。」と肯定する。

「サイン後で下さい!」

「“後で”ですね?」

ソラに気圧されながらもマツリは頼みを承諾した。

『やっぱり女ってやつは……』

「ロック……」

ウォーロックの呟きにスバルも苦笑いせざるを得なかった。

ウォーロックはその“苦手な相手”を、スバルは宇宙談議に入っているソラを目の前に見ている感じであろう。

ちなみにスバルも熱が入ったらさっきのソラの状態になるといふことを本人は気づいていない。

「それよりも星河くん、ここのスフィックスは“絆”を守っていたらしいね?」

「マツリ…さん？」

「マツリでいいよ。“絆”を全て失ったときスフィンクスはどう思っただろう？」

先程までの気圧されていたマツリから何かを決めた真剣な顔つきに変わった。

その目を何度もスバルは見たことがある。

スバルは何かいやな予感を肌で感じ、身構えた。

そう、ツカサの秘密を知ったときのような……

バミューダラビリンスでハーブ・ノートと対峙したときのような……

ストロングを操った人間を聞かされたときのような……

そう、信用してきた人に何かされる、あの感じを……

「スフィンクスの感じた気持ちは経験してこそ気づくものだよ。星河くんにも……それを知ってほしい。」

するとマツリは隣にいたソラに何かを手渡した。

「何？」

「サイン。」

その“もの”をスバルが何か認識したときその嫌な予感は現実とな

る。

「それはノイズドカード！」

『おい！まさか！』

その瞬間カードから文様が現れ、ソラを包み込む。

その形は今までにみたスペードでも、ダイヤでも、ましてやクラブでもない。

“馬”のような形の文様は電磁波を出して巨大化した。

「くっ！！きゃあああ！」

「二宮部長！」

苦悶の表情を見せるソラはやがて無表情となりハンターを高くあげる。

『まさか、ダイヤ・アイスバーンの時と同じ敵か！』

「そうだね。アルとは同士」といったところさ。それに僕のウィザードを見ればどういうことか分かるだろう？」

そういつてマツリが出したウィザードは……

「ピクター！？」

「そう。甘夏マツリ改め、僕がピクター・キャンパスだ。電波変換



！甘夏マツリ オンエア！」

「電波変換、二宮ソラ、オンエア！」

スズカの時と同じくウィザードのコスモが現れ、二人は赤い光に飲み込まれる。

そしてマツリも緑色の光に飲み込まれ、電波変換した。

そしてそこに立っていたのは……

「二宮部長まで……」

「そう、絆を失うことの本当の意味を知るがいい。ロックマン！」

星空を思わせる夜闇にキラキラ光る身体にクルクル回転する二つのリング、そして紅い羽根と尻尾。

そしてドラゴンの頭を象った左腕。

「コスモ・ドラグーンよ！我らの痛みをロックマンに教えてあげたまえ！」

コスモ・ドラグーンは黙ったまま周波数を変化させ、その場から姿を消す。

「二宮部長！」

スバルは大声でソラを呼んだ。しかし彼女にはその声は届かない。

「スバルくん、いったいどうしたの？」

「おい、星河！ソラは、ソラはどこにいるんだ！」

その騒ぎを聞き付けたルナたち四人はスバルのもとへと駆け寄る。

「二宮部長は……」

「彼女なら今頃コダマ展望台だよ。そこなら“流星”が綺麗に見えるからね。それが降るまであと三分つてところかな。健闘を祈るよ、星河くん。」

「待て！ピクター・キャンパス！」

ピクター・キャンパスも周波数を変えて姿を消した。

『あの女とピクターは別の方向に行きやがった。スバル！ピクターのやつを追っぞ！』

「うん！トランス……」

「待ってくれ！星河！」

カードをスキャンしようとするスバルをイツキが止めた。

「秋月先輩？」

「頼む。ソラを……止めてくれ。アイツは俺にとって……」

イツキは弱々しい声でスバルに頭を下げた。スバルは思いなおした

ように真剣な顔になる。

「はい。分かっています。二宮部長は……僕が止めます。」

「スバル！俺も行くぜ！」

ゴンタもカードを取り出す。

「気をつけていきなさいよ！」

「僕たちから暁さんには連絡します！」

「うん！委員長、キザマロ、よろしく！」

スバルとゴンタは電波変換し、コダマ展望台へと向かった。

## 第十八話 悪魔のカード再び！（後書き）

最近更新が遅れぎみで申し訳ありません。

プロットは立ててあるのですが何分執筆時間が授業でとられ……

部活帰りの電車でちまちまと書いております。

さて、今回の初登場、コスモ・ドラグーン。ソラのウィザードを登場させたのはこれを出したかったです。

そしてノイズドカードの模様も描写しました。模様に関しては完璧想像ですが、これは私の“オリジナル”ではありません。

実は元ネタがあります。

カンのいい方は今、分かるかもしれませんが、後でちゃんと発表します。

次はVSコスモ・ドラグーンです。

駄文ではありますが今後ともよろしく願います！

## 第十九話 晴れ時々流星

『おい、スバル！空がなんか変じゃねえか？』

コダマ展望台にもうすぐ到着するという時にウォーロックが言った。ウェーブロードを走るロックマンとオックス・ファイアは空を見上げる。

「何も変わらないけど……」

「そうだけ。ずっとおんなじ晴れじゃねえか。」

そう。さっきからずっと同じ雲一つない快晴である。スバルが家を出発したときから同じ天気であった。

『いや、もつとなんだ……』

ウォーロックは説明しづらそうではあるが何かを二人に伝えようとしていた。

『ブロロロ！別にどうだっていいじゃねえか、ウォーロック！もしかしてビビってんのか？』

その場に現れたゴンタのウィザード、オックスが喧嘩ごしに突っ掛かる。

オックスのその言葉にウォーロックの怒りのボルテージが瞬時に上がっていく。

『んなわけあるかあ！オックス！てめえ俺とやるつってのか？』

『上等だあー！』

ウォーロックとオックスは互いに火花を散らし、今にも飛び掛かるうとしている。

「やめてよ！もうすぐ展望台つくんだから！」

スバルは大声で二人を制した。もう目印の蒸気機関車が見えかけている。

あと到着まで一秒もない。

『……………続きは後だ。』

『ブロロツ……………』

ウォーロックとオックスは休戦協定を結んだらしく、同じタイミングでハンター内に戻る。

二人の優先事項はコスモ・ドラグーンとのバトルらしい。

「スバル、あれじゃねえか？」

オックス・ファイアは機関車の方を指さした。そこには機関車の煙突に器用に立っているコスモ・ドラグーンの姿があった。

彼女は目をつぶり、まるで神の言葉を受ける巫女のようにそこにい

る。彼女の周りで回る二つの巨大なリングがさらにそのオーラを倍増させている。

「二宮部長!」

ロックマンとオックス・ファイアはウェーブロードから地面へと着地した。

「……コスモリング!」

するとコスモ・ドラグーンが纏っていた二つのリングが二人にむけて放たれる。

超スピードで放たれたわっかはオックス・ファイアの方へだけ向かっていく。

「ゴンタ!」

「なんのこれしき!ファイアブレス!」

オックス・ファイアは大きく息を吸い込み、炎の息吹を噴射する。しかしわっかはまるで意識を持つかのようにその攻撃をかわした。

そして……

ガチャ!ガチャ!

「ぬおっ!」

わかっかはいとも簡単にオックス・ファイアの、両手両足を縛りつけていた。

そしてそのままオックス・ファイアはバランスを崩し、顔面を強打して動かなくなった。

……気絶したらしい。

「ゴンタ！今助ける！」

「やめといたほうがいいよ。私を倒さなかったらわかっかは外れない。……その声はスバルね？」

コスモ・ドラグーンは目を開き、二人の方を見た。しかしその目の光は暗黒に濁り、もの哀しさを漂わせている。

「二宮部長、まさか意識あるんですか？」

ロックマンはソラが自我を保っていることに驚いた。同じノイズドカードの影響を受けたスズカとアイスは意識を失い、アルの命令されるがままになっていた。

しかし今回はソラの意識がある。今回ロックマンは本心コスモ・ドラグーンと戦いたくなかった。ソラもロックマンと、スバルと戦いたくないはず。

もしかしたら……戦わずにすむかもしれない、ロックマンは淡い期待をせずにいられなかった。

「うん。意識“は”あるよ。ここについた時からずっと。」



「なら戦う必要なんてないじゃないですか！」

「私だって戦いたくない、けどダメなの。何か私に語りかけてくる、“ロックマンを倒せ”って。私はその声に抗えない。だから……」

コスモ・ドラグーンは一度そこで言葉を切った。そして決意を秘めた目でロックマンを見つめた。

「お願い！私を止めて！じゃないと牛島くんも死んじゃう！」

「えっ？」

『ど、どついうことだ？』

ロックマンとウォーロックが疑問を口にした。

「それは電波を引き裂く刃になるの。あと5分で牛島くんは……真つ二つに。」

「「！」「」

コスモ・ドラグーンは背中の羽根で浮き上がると大きく右手を天にかざした。

『どつやらあーだこーだ言ってるんねえようだな。』

「……うん、それが二宮部長の、秋月先輩の願いなら僕は何としてもあなたを止めてみせる！ウェーブバトル、ライドオン！」

ロックマンは左手のバスターをコスモ・ドラグーンへと向けてエネルギーを充填しだした。

「スバル、遅いよ！リュウセイゲン！」

コスモ・ドラグーンは右手を一気に振り下ろした。すると空がキラリといくつも光る。

『そういうことかよ！スバル、防御を固めろ！』

「うん！スーパーバリア！」

ロックマンの周りに黄色のバリアが張られる。そしてその後空から降ってきたのは……

「まさか隕石！？」

直径数センチの隕石がロックマン目掛けていくつも降ってきたのだった。

数センチだからと言って、スピードある一発が当たれば薄い鉄板は容易に穴はあく。

ロックマンは大きく動き、なるべく当たる数を減らした。どうしても当たるところはスーパーバリアが衝撃を防いでいく。

「スバル、避けて！クリエーションバースト！」

コスモ・ドラグーンの左手の竜から追撃のビームが発せられる。

「ムーテクノロジー！」

ロックマンも古代文明のビームを用いて正面から迎えうった。

二つのエネルギー波は互いにぶつかり合い、大爆発を引き起こす。

「くっ！」

「あっ！」

二人とも爆風に煽られ、体勢を崩した。コスモ・ドラグーンは宙に浮いていたため、ロックマンより爆風の影響をもろに受ける。

「ごめんなさい！二宮部長！ダブル・ステルスレーザー！ファイアバズーカ！」

その際にロックマンは火力の高い遠距離カードを転送する。

ロックマンの横には戦闘機が二機、そして左手は強力な一撃を持つバズーカ砲がコスモ・ドラグーンに火を噴いた。

「いつけえ！」

『やったか？』

爆煙が立ち込めるウェーブロードでウォーロックはそれぞれ眩いた。

ロックマンは倒れているオックス・ファイアの方へ視線を向ける。

コスモ・ドラグーンを倒していたなら、彼を縛るリングは消えてい  
るはずであったからだ。

オックス・ファイアのリングは……

「消えてない！」

「クリエーションバースト！」

爆煙のなかからまた白いビームが発射される。

「ぐっ！」

『スバル！』

ロツクマンの身体をビームは掠め、地平線の彼方へと伸びていた。

「惜しかったね、スバル。私の肉体は宇宙そのもの。……不本意に  
もその程度の攻撃では私を倒すのは無理よ。」

煙のなかからコスモ・ドラグーンが出てくる。

その肉体には傷一つすらついてなかった。

## 第十九話 晴れ時々流星（後書き）

不憫にもゴンタはご退場。

ただでさえ出番少ないですが……残念ながら。

この戦いはどうしてもスバルとソラの対決で戦わせたかったです。

よくよく考えてみればコスモ・ドラグーンのイメージが某カードア  
ニメの主人公の切り札に一部似てることに気づきました。

風と炎の……某ヒーロー。

女性ですからスカートと胸当て、そして頭には一角獣のような角は  
ありますけどね。

さて、今回は短かったです。コスモ・ドラグーン戦決着です。

その後はちょっとのほほんと、年末年始について書いていけたらな  
と思っっています。

ダメな作者ともども、今後ともよろしく願います！

## 第二十話 全てを飲み込む宇宙

「宇宙……」

「そう、私の体は宇宙そのもの。ちっぽけな炎や雷程度では私には届かないわよ。」

コスモ・ドラグーンは身体を的にするように大きく広げ、カモンってい wanna ばかりにちよいちよいと指で招き、ロックマンを挑発した。

「くっ！ガトリング！スノーボール！」

ロックマンは銃弾と巨大な雪玉を一気に浴びせかける。それはコスモ・ドラグーンに全て当たった。

「……………」

が、コスモ・ドラグーンにダメージを与えた様子はなく涼しい顔をしている。

『……………嘘だろ？』

「うん。これは現実。一撃も私には通じない。」

コスモ・ドラグーンは再び左手の竜の口を開ける。そしてまたエネルギーが充填されていた。

「そして……………悪いけどこれで終わりよ！クリエーションバースト！」

「！」

ロックマンめがけて最大級のビームが照射された。

「ジェットアタック！」

ロックマンはバックステップでちよつと距離を取ると、一気に加速して他のウェーブロードに移った。

「我が後輩ながらしぶといね。それなら……もう一度！」

「もう一度！ジェットアタック！」

ロックマンは再び加速し、コスモ・ドラグーンの攻撃をかわす。

そしてだいぶ彼女から距離をとった。

『ちくしょう！攻撃が効かないってどうすりゃいいんだ！』

「そんなことはないよ！コスモ・ドラグーンにだって弱点はあるはず！」

距離をとってビームの応酬から避けつづけるロックマンであるが、刻一刻とタイムリミットは迫っていく。

「“宇宙”……、そうか！」

『……そういつことか！』

ロックマンもウォーロックも同時に閃いたらしい。そして二人は起死回生のカードをプレーションさせた。

「ソードファイター、プレーション！」

ロックマンはコスモ・ドラグーンとの距離を一気に縮める。

そして第一閃をコスモ・ドラグーンに浴びせた。

「ぐっっ！」

コスモ・ドラグーンは苦悶の表情を浮かべる。

「ハアアッ！！」

続いてロックマンは次々と残りの攻撃を決めていく。撫斬りにされたコスモ・ドラグーンは大きく後ろにのけ反った。

『思ったとおりだ。これで決める！』

「うん！！GAギャラクシージャイアントアックス！」

ズバン！

ロックマンは自ら持てる最大の斬撃をコスモ・ドラグーンにお見舞いした。

ジャイアントアックスの一撃を喰らったコスモ・ドラグーンは仰向けでウェーブロードに倒れ込む。

「……負けちゃったか。さすがは我が後輩ね。」

「二宮部長が“アドバイス”してくれたおかげですよ。でなければ



勝てませんでした」

「さすがは天下のロックマン様ね。」

「その呼び方はやめてください。」

ソラは“宇宙”というワードからスバルに自分の倒し方を伝えようとしていた。

そこでロックマンとウォーロックが思い浮かべたのは“ヘルブラック”というブラックホール型のウイルスである。

ヘルブラック種のウイルスはほとんどの攻撃が効かず、唯一の対抗策がソード系の攻撃のみという厄介極まりない性質がある。

もしやと思って仕掛けた一撃であったが正解であったようだ。

「そういえばゴンタの方は……」

ロックマンはオックス・ファイアの方に視線を向けた。

オックス・ファイアを拘束していたリングは光の粒となって消え、再びコスモ・ドラグーンを取り囲む。

ロックマンはホツとしたように一息ついた。

「うん。もう私も動けないみたい。」

「最後までお供します、二宮部長。」

「あはっ！それミソラちゃんへの浮気？」

「ち、違いますよ！」

真っ赤になりながらロックマンはコスモ・ドラグーンとオックス・ファイアの二人を抱えてウェーブアウトした。

所変わって現実世界展望台……

ロツポンドーヒルズにいるルナたちに連絡をいれたスバルはまだ気絶してるゴンタをベンチに寝かせ、別のベンチでソラと向かいあった。

ゴンタは“アイちゃん……”なんて寝言を呟いているので命は大丈夫だろう。

むしろ気絶じゃなくてホントに眠ってるのではないかとスバルは思ったが、そこは触れないようにした。

「ねえ？アイちゃんって？」

「……さ、さあ。」

スバルには滑田アイという一人思い当たる節があった。

おそらく正解ではあるうが、それをソラに言ってしまうとからかわれるスバルの二の舞になりかねない。

スバルは必死で惚けた。

「ふーん。コダマ中学校ナンバーワン美少女、二年C組、かなで奏アイコじゃないのね？」

「（だ、誰それ？）」

恋愛に疎いスバルにはそれが誰だか本気で分からなかった。

かまをかけていたらしいソラはスバルの表情からそれを読み取り、「違う」と判断したらしい。

「ところで二宮部長は僕と戦おうとしたんですか？」

「一つはホントに身体がいうことを聞かなかったから。マツリさんに渡されたこれ、ね。」

ソラはスバルに一枚のカードを手渡す。

「ノイズドカード……」

スバルは手に持つ“それ”は、二年前にディーラーの事件で見かけた“それ”と明らかに酷似していた。

余談ではあるがホントにサインは書いてある。

「ちょっとこれ預かってもいいですか？」

「いいわよ。ちゃんと返してね。」

WAXAに調べてもらうしかないと判断したスバルはカードをズボンのポケットの中に入れる。

「あともう一つはあのロックマンとこんな機会ならホントに戦ってみたかったから、かな。牛島の命がかかっていたつてのはあれ嘘だし。」

「えっ!？」

「ええ。ただあれは拘束するためだけよ。最も外側はホントに切れるけどね。」

ソラは「ゴメンね」と言って、パンと手を合わせた。

しばらく呆れていたスバルであったが「勘弁して下さい。」と言って遂に折れた。

なんだかんだ言ってこの人にも逆らえないのであったスバルである。

「それにしても…すごいのに巻き込まれちゃったね。」

「うん。甘夏マツリは何が目的なのかは分からないけど、また……何か変わりはじめているみたいです。」

「その時は私も力を貸すからさ！頑張りなよ、スバル！」

「はい！」

まだ日は高い展望台の下

次第に変わり始める足音をスバルはミソラに遅れて実感しはじめていた。

## 第二十話 全てを飲み込む宇宙（後書き）

これでコスモ・ドラグーン戦終了です。

実際にあんな電波人間がゲームにいたら相当チート入ってますけどね。

初見でこれの とかと戦えっていったら百パーセント無理ですよ。

まあそんな彼女でしたが、お気にめして頂けましたでしょうか？

次回はイベント盛り沢山、冬休み突入！

もちろん最初は……あれです。

スバルはどうするんでしょうか？

次回もよろしく願います！

第二十一話 待ち合わせ（前書き）

ちよつと……甘酸っぱくなりました。

それでは第二十一話どうぞ！

## 第二十一話 待ち合わせ

「マツリ」、アレの様子はとうだった？」

「一つも動く気配なし。せっかくロックマンがいたからけしかけたのですがね。」

「引き続き頼む。あと“三つ”なんだからな。」

「了解、アル。」

一つ、皆の知らぬ所で計画は進められていく。

緩やかに、着実に、それらは目覚めていく。

.....



「あー！！」

部屋に洋服を散乱させ、スバルは悩みに悩む。

『服なんてテキトーでいいじゃねえか。いつもの黒いのかよ。』

ベッドの上で暇そうにしているウォーロックが指差したのはコダマ  
中学校の学ラン。

「なんで！こんな時にそれはありえないよ！！」

『一緒じゃねえか。“服”なんだからよ。』

ウォーロックの言葉を無視して、スバルは再び服選びに没頭してい  
く。

『（スバルも面倒になったな。小学生の時は“いつもの”で行って  
たじゃねえか。）』

さて、スバルが“今”こんなにオシャレに気をつけているのかと  
いうと理由は二つ。

理由その一、本日の日付が十二月二十四日、早い話がクリスマスイ  
ヴである。コスモ・ドラグーン的事件から一週間ほど経ち、冬休み  
の第一イベントが今日なのである。

もちろんそれだけだったらそこまで気を使う必要はない。

肝心なのは理由その二である。

理由その二、冬休みが始まった昨日の昼頃、スバルに届いたメールは驚愕なものであった。

内容を要約すると以下の通りである。

- - - - -

明日ヒマ？よかったら明日一緒に遊びに行かない？

- - - - -

気軽なお誘いメールである。その相手が絶賛片思い中の相手でなければであるが。

鈍感スバル（ソラ曰く）でも片思いの相手からクリスマススイヴの日に遊びに行こうなんて言われたら色めきたたないはずはない。

そのメールが来た途端、スバルは「×　　！！??」なんて人間の発する言語じゃない奇声をあげてしまい、早々にあかねにはばれてしまった程である。

そのおかげで一つオプションがついたのだが……それはまた後で。

「ロック！今何時？」

鏡を見ながらスバルはウォーロックに質問した。ちなみに本日のスバルの服装のコンセプトは“大人っぽく”

いつもと同じものは流星のペンダントとビジライザーだけである。

『まだ2時だ。ミソラとの待ち合わせは3時だろ？』

「もうそんな時間！？今日はクリスマスイヴだから……絶対に電車とかバス遅れるし……」

鏡を見てあたふたしだしたスバルを見て、ウォーロックはため息をついた。

『……しゃあねえ。電波変換していいぜ。』

「ホントにありがとう！ロック！」

『気にすんな。』

スバルは急いで服を選び終わると、荷物を持って一階へと降りていった。

「母さん、行ってきます！」

「いつてらっしゃい。分かってる？8時に……」

「ミソラちゃんうちに連れてきて、でしょ？大丈夫！」

ボタン！！

急いで出ていったスバルを見送って、あかねは微笑む。

「あの子ももうそんな年頃ね。さて、あの二人のためにも今日は奮発しなくっちゃ！」

あかねはキッチンへと向かっていった。

「トランスコード！シューティングスターロックマン！」

ロックマンとなったスバルはウェーブロードを颯爽と翔ける。

下を見るとやはりウェーブライナーや道路はこの時間でも混雑していた。

そして……

「ウェーブロードも混雑してるね。」

『初めて見たけどな。』

クリスマス時期、非常に多くのデンパくんが飛び交っている。

でも電波世界の方がやはり速い。五分もたたずに目的地、ヤシブタウンが見えてくる。

ヤシブタウンのウェーブステーションに降り立つとロックマンはウエーブアウトした。

「えっと……目的地はバチ公前と。」

スバルは時計をチラッと見た。ただいまの時刻2時23分。予定の30分以上である。

クリスマスイヴなだけあってバチ公前には待ち合わせ中のカップルがたくさんいる。

「……なんか緊張してきた。ねえ、ロック。おかしいところないよね？」

久しぶりの二人つきりでのデート(?)である。早くも緊張してきたスバルであった。

『へんなこと気にすんな。別におかしくも何もないだろ。ミン……』

「ストップ！ストップ！それ以上は絶対アウト！」

国民的人気シンガーの名前をばらされたものならスバルの命はないだろう。

必死でスバルはウォーロックを抑えにかかった。

『まったく、分かったよ。“マルタイ(ターゲット)”ってことにし

とく。』

「……ロック、刑事ドラマの見すぎだよ。」

そう言いながらも若干緊張の解れたスバルであった。

それから15分後……

『それにしてもヒマだな。』

ウォーロックは欠伸混じりにそうぼやいた。

「ロック、これくらい当たり前だよ。」

『そうかよ。なんか事件でも起こってくれや面白いんだけどな。』

「はは……そんなこと都合よく起こるはずないよ。」

ウォーロックはキョロキョロと辺りを見回すが、全くそんな気配などない。

が、迫りよる影は着実にスバルに近づいていく。

スッ……

ふと後ろから何かにスバルの視界が遮られた。視界を感触は柔らかく、そして温かい。

「ふっふっふ、動くな、スバルくん。動くと命はないぞー。」

スバルの視界を遮った主は楽しそうに耳元でそう囁いた。

スバルはその声を聞いて動きを止め、手を降ろした。

「……………」

「さあ、私が誰だか当ててみたまえ！」

「……………誰だか分からないなあ。」

もちろんスバルは分かっているのだが、とぼけてみた。

この儀式はある意味二人の待ち合わせの常套手段と化してきているものである。

「……………しょうがないなあ。こっち向いていいよ。」

聞き慣れたソプラノボイスの声の主によってスバルの視界は開かれる。

ゆっくりとスバルは後ろを向いた。

「ヤッホー、スバルくん！えっと……三週間ぶり？」

そこには白を基調とした服装の少し大人びて見えた響ミソラが立っていた。

「うん、そうだね、ミソラちゃん。それにしても……服、似合ってるよ。」

「えっ？う、うん。ありがとう、スバルくん。」

いきなり二人は顔を赤らめ、しばし沈黙が走る。

『ギャハハ！スバルのやつ、赤くなってやがるし！』

『~~~~っ！アンタというやつは！バトルカード！ハンマーウェポン

『。』

『どああああっっ！』

『ゴーンン……』

『ミニソラ、ちょっとそこまでミニ捨ててくるから後は頑張りなさい。

『



ハープは潰れたウォーロックのようなものを担いでどこかへ飛び去ってしまった。

「……………」

何やらさっきにも増して気まずい空気が流れるバチ公前。

「え、えっと……………今日はどうするっ？」

「う、うん。まずは103デパート……………でいいかな？」

「了解。」

「じゃ、いっしょー！」

何やら気まずい様子にはなったもののスバルとミソラは互いの手をとって歩いていった。

## 第二十一話 待ち合わせ（後書き）

甘々にするつもりがいきなりムード“ぶち壊し”ですね（笑）

他者様の小説も読まさせていたideしておりますが、大概ムードの読めないウォーロックの制裁役はハーブですね。

なので私も皆様に乗っ取りまして正統派で。

ただし私のイメージで制裁するのに何がいいのかと考えましたところ、ハンマーにしてみました。

よってしばらくの間ウォーロックには退場してもらいます。

また……二人の服装は皆様のご想像におまかせします。

作者として譲れないのはスバルのズボンが黒っぽい色であるということと、ミソラの伊達メガネ（ばれないため）と白の帽子、ですね。

文章下手くそなんでもうまく描写できてないです、すみません！

今回は……ちよつとでも甘くできるように善処してみます。

今後ともよろしく願います！

第二十二話 “冬” だからこそのお約束（前書き）

甘々希望の方もたくさんいると思いますが、すみません！  
駄目作者にはこれが手一杯です！！

皆さまにお詫びしながらではありますが、どうぞ！

## 第二十二話 “冬” だからこそのお約束

「あーっ。結構買った。」

ミソラははしゃぎすぎてちょっと疲れたかのように椅子に腰掛けた。

「それにしても今日はよく買ったね。」

スバルの手には既に紙袋が三つ。全部ミソラが購入した洋服・アクセサリーの類いである。

それに対してスバルはまだ何も購入してない。完全な荷物持ちとなっている。

しかしそれでもスバルは長い買い物に呆れた様子もなく、むしろ楽しそうだったのでそれは良しとしよう。

「ねえ、なんかお腹すかない？」

「うーん、そうなんだけど……」

ミソラの問い掛けにスバルは時計を見てみた。現在の時刻は6時15分。ちょうど夕飯時である。

確かにスバルもお腹はすいてきている。しかし家ではあかねが腕によりをかけて夕飯を作っているはずである。

8時に連れていくという約束をまだスバルはミソラに話していない。

スバルは少しばかり悩んだが、やはり食欲には勝てなかった。

「お姉さん！ギャラクシーモワイアイス二つ下さい！」

そうと決めたらミソラは行動が早い。ミソラはスバルの“手を握る”とヤシブタウンの名物の一つをたのんでいた。

ちなみに「冬だからこそアイスがいい」と、ミソラのチョイスである。

一方、手を握られたスバルは頬を赤くして、ミソラに連れていかれている。

残念ながらスバルが“冴えない彼氏像”にだんだんと近づいている気がしないでもなかった。

「はい、お味の方はどうされますか？」

売り子のお姉さんは営業スマイル万全で二人に聞いてくる。

「えっと……私はストロベリーとバニラのダブルで、スバルくんは？」

「え、えっと……僕はチョコレートとミントので。」

二人はアイスを購入（代金はスバルが男の意地で奢り）したあと、

二人はベンチへと座り、一息いれる。

二人はアイスを購入（代金はスバルが男の意地で奢り）したあと、二人はベンチへと座った。

「うん！おいしっ！」

「そうだね、なんていうか……絶妙な味？」

ミソラは満面の笑みを浮かべ、スバルも感想は微妙だが、おいしさにご満悦のようだ。

「スバルくんのもちよつとちようだい！」

「えっ！？ちよつとそれは……あー！！！」

ミソラはスバルの許可をもらう前にチョコレートのアイスを一口もらっていた。

「へへっ。こつちも甘いね。よかったら私のもいる？」

「……！」

巨大すぎる爆弾を投下され、スバルは目の前に出された食べかけのアイスに視線がいく。

アイスだけにひどく甘い誘惑がスバルを誘う。スバルの頭からもはや湯気が出始めていた。

「だ、大丈夫だよ。」

「ふーん、じゃもう一口もらうね。」

このあとスバルが“例の甘酸っぱいアレ”をずっと意識していたの

はいうまでもない。

そんなハプニングはあったが、その後二人はお互いの近況について語りあった。

スバルはこの前のコスモ・ドラグーンの事件について、ミソラは1月の半ばにあるチヨイナでのラストライブについて話した。

-  
-  
-  
-  
-

二人は103デパートから外に出た。空も暗くなってクリスマスよろしく、辺りもライトアップされている。

「綺麗だね。」

「そうだね。」

スバルとミソラの前にはライトアップされた巨大なクリスマスツリーが見える。周りにカップルがいるのはお約束である。

「スバルくん、手……いいかな？」

「うん。」

二人は頬を染めて手を繋いだ。しばらく二人はツリーを眺めていた。

「ね、私たちが初めてブラザー結んだ時のこと覚えてる？」

「もちろん。ミソラちゃんが僕の初めてのブラザーだからね。」

「そうそう。あれからもうすぐ三年かー。私、スバルくんの力になれたかな？」

「うん。ミソラちゃんがいなかったら今の僕はなかった。僕とロックだけじゃなくって、一人で戦ってるんじゃないっていつも感じたんだ。」

ミソラはスバルの方に視線を移す。

「スバルくん、話があるの。」

「ミソラちゃん？」

互いに向かい合い、ミソラは真剣な表情を浮かべる。

「私の引退ライブ絶対に来て！そこで……あなたに伝えたいことがあるから。」



ミソラは手渡しで“一枚だけ”引退ライブのチケットをスバルに渡した。

「……分かった。絶対に行くよ！」

スバルも大きく頷く。それを見てミソラは「絶対ね」と小悪魔な笑みを浮かべた。

『ポロロン。終わった？』

頃合いを見計らったのかハーブが二人の前に現れた。隣には真っ白になったウォーロックが連れられている。

原形は存在していたが燃え尽きたように真っ白であった。

「ハーブ、ロックは……一体どうしたの？」

『ちよつと彼と“お話”していただけよ。それよりもウォーロックから聞いたけど二人とも時間いいの？』

スバルの質問に含みを持たせた回答をみせるハーブ。

ハーブに言われて二人はハンターを見てみると既に時間は7時55分。それと……

「電話が二件？」

スバルは履歴を確認してみると一番最近のはあかねから。

そして残りのは……

「委員長??？」

委員長から3時過ぎくらいに一度きていた。なんで気づかないのか  
スバルは不思議に思ったがサイレントモードになっている。

それよりも……

「スバルくん、スバルくんのお母さん待たせたら悪いよ。いっつ！  
ハープ、お願い！」

「うん。だけどロック……大丈夫かな。」

『大丈夫よ。いきましょう。』

ミソラは先に電波変換してウェーブロードに降り立つ。

スバルもミソラに続いて電波変換したが……

「バスターが真っ白!？」

ロックマンのバスターだけが真っ白になっていた。どうやらウォー  
ロックの色に左右されるらしい。

その後、スバル宅に帰ってきた二人はあかねの作った料理でクリス  
マスを過ごしたという。

あかねが腕によりをかけた料理はプロ以上のおいしさだったとか。

なお、後日スバルが電話をすっぱかしてしまった件について委員長に謝りにいくのは別の話。

おまけではあるが、ウォーロックが完全復活するのに数日かかったらしい。

## 第二十二話 “冬” だからこそのお約束（後書き）

前書きにも書きましたがすみません！  
駄目作者にはこれが手一杯でした。

スバルくん草食系すぎるでしょ！！

なんとか……頑張ってこれです。察してあげてください。

せつかくのクリスマスなのに……

この二人の行方はチヨイナライブ編まで少々お待ちを。

次こそは……スバルに頑張ってもらいます！

季節外れすぎますが、次は正月です。正月といえば……何を思い浮かべますか？

今回の題材は“正月”なのですが、ちょっと変わっています。そして本編に関わってきます。

いつも私の作品にお付き合いいただきありがとうございます。

今後とも精進していきたいと思しますので次回もよろしく願います！

## 第二十三話 幕開け

『……我が主を継ぐものよ。』

「（ここは……？）」

頭に直接響く声でスバルは目覚めた。

そこは真っ白な、見渡す限り何もない空間。スバルはパジャマ姿でハンターもビジライザーも持っていないかった。

「（ロック？）」

『あの青い者はここにはおらん。ここは“私の世界”。許可された者以外は立ち入ること叶わぬ。』

「（じゃあ、この声は……）」

『私が星河スバル、お前に直接語りかけている。何、危害は加えぬ。少し話したいだけだ。』

スバルはこんな情景を一度体験したことを思い出した。

それは二年半前のA M星の三賢者が語りかけてきた時のように。

「（これは……夢？）」

『夢ではある。しかしこれは現実でもある。』

「（どういづことなの？それに君は誰？）」

スバルがそう問い掛けると声の主からしばらく反応がなくなる。

しばしの間、何もない空間に沈黙が流れた。

「（ねえ、応えてよ！）」

『……我が名は“スフィンクス”。我が主を継ぐものよ、どうやら話している時間がさえないようだ。君に“心臓”を託さねばならない。』

そうスフィンクスが言うと、臃げながら黒い大きな影がスバルの目の前に姿を現した。

「（スフィンクス？）」

『受け取れ。我が文明に伝わりし“心臓”を。』

その瞬間、スバルの身体は黄色い光に包まれる。

「（っ！あああああっつ！！）」

スバルは全身が痺れるような感覚を感じ、悲鳴を上げた。

痛みは不思議となかった。しかし何かが自分の中に入ってくる変な感覚がスバルを襲っていたのだった。

やがてスバルを覆っていた黄色い光は消える。スバルは意識を失い、パタリとその場に倒れこんでいた。

『五つの至宝の内の一つ、確かに託したぞ。“あれ”を復活させてはならない。』

スフィングスの影は再び揺らぎ、跡形もなく消え去る。

最も気絶したスバルには最後の言葉は聞き取れていなかった。

- - -

『おい、どうしたスバル!』

「……………ロック?」

視界に入ってきたのは心配そうに覗きこむウォーロックの顔だった。スバルはいつもの自分のベッドで目が覚めた。ただし汗だく。嫌な夢でも見ていたかのように。

『いきなり悲鳴を上げるもんだからびっくりしたぜ。』

「僕悲鳴上げてたの?」

『おう。ついさっきだ。なんだ、変な夢でも見てたのか?』

「うん。実は……………」

スバルはさっきの夢の話ウォーロックに語った。

初めは胡散臭そうにしていたが、話している内にだんだんと何か感じてきたようだった。

『なるほどねえ。スフィングスの力……………か。』



「どう思うっ?」

『信じるしかないだろうが。事実お前の周波数は微妙に変化しているからな。まあ俺との電波変換には支障はねえが。』

「えっ? そうなの?」

『ああ。その影響かは分からねえがな。』

スバルは少し考えて、ウォーロックに言った。

「ロック、後でまたあそこに行ってみない?」

『そうだな。あの変なのに出会ってみるのが一番だ。その前に……大吾とオフクロに言うことあるだろ?』

「あっ! ロック、明けておめでとう! 今年もよろしく!」

『おう! こっちこそよろしくな!』

スバルはウォーロックと握手し、二人で部屋を出ていった。

-  
-  
-  
-

その頃、とある場所で……

「「グアアツ！！」」

数十体にもなる警備ウィザードはたった一人の剣撃によって跡形もなく消却される。

ウィザードたちの断末魔の悲鳴だけがその空間を支配した。

ウィザードたちを葬った侵入者はピンと血を払うかのような動作を見せた後、何も喋らず、ただ目的の場所へ歩を進めていく。

コツコツ……

無人の場所にただただ靴音だけが響き渡る。

そして侵入者はその場所で歩を止めた。先程ウィザードたちを葬った細身の刃とそれが淡い緑色と黄色い光を発している。

その二つはまるで共鳴しているかのように小さく光っていた。

「見つけた、“神の心臓”。」

侵入者はそう呟いて目の前にあるガラスケースを大きく切り裂いた。

ついに“神の至宝”が動き出す。

“足”は蘇った亡霊に

“腕”は古の戦乙女に

“頭脳”はまだ主なく

“魂”は孤高の戦士に

“心”は青い流星に託された。

それぞれは互いに引き合い、導かれていく。

そしてまもなく最終戦争の火蓋が切って落とされる。

## 第二十三話 幕開け（後書き）

分かりにくかったと思いますが、一応舞台は正月です。

スバルの初夢です。

“一富士二鷹三茄子”なんてありますけどスバルにはとんだ初夢です。

さて、この小説の題名にもあります“エンシェントハーツ”の意味を遂に出してしまいました。

持ち主も臆げながら明記しておりますが……二名バレバレですね。

今回は“至宝”の持ち主を対面させます。一人はスバルですが……もう一人は？

お楽しみに！

## 第二十四話 古の戦乙女

「明けましておめでとー。今年もよろしくね。」

「明けましておめでとぅ……ってミソラちゃんなんているの!？」

スバルの新年はツッコミから始まった。

ウォーロックと一緒にリビングへと降りてみれば大吾やあかねと一緒にミソラもテレビを見ていたのだった。

例年は家族でミソラの出演している新年の番組を見ていたのだが、その輪に張本人が紛れているなんて思いもよらなかったのだ。

「あら、おはよう。」

「朝からどうしたんだ？」

大吾とあかねに至っては違和感なしといった形で平然としている。

「おはようって!ミソラちゃんいるって聞いてないよ!」

「私が誘ったのよ。せっかく新年なんだからみんなと一緒に過ごさないよ。一人なんて寂しいじゃない。」

あかねは手際よく料理を進めながらスバルの質問に答える。テーブルには既におせち料理が数品並べられていた。

「いるのはうれしいんだけどさ、僕にもいろいろ準備ってものが…

…」

そう、スバルは着替えてはいるものの、髪はセットしておらず、ちょこつと寝癖もついている。

そんな姿で意中の相手には出会いたくないのであった。

「スバルくん、もしかして私、おじやま……だったかな？」

ミソラは遠慮がちにスバルに聞いた。

「いや！違うよミソラちゃん！僕だって会えて嬉しいし、……えつと、その……」

ミソラの様子を見て、スバルは慌てて弁解する。慌てふためくスバルを見てミソラはちよつと吹き出した。

そして二人とも笑いだす。そんな様子を二人と二体は暖かい目で見守っていた。

「スバル〜。もうすぐご飯にするから手伝って。」

「わかった。」

「スバルくんのお母さん！私も手伝いますー！」

正月の星河家の朝は非常に明るく始まったのである。

-  
-  
-  
-  
-

「やー、お年玉なんて久しぶりにもらったかも。」

ご飯が終わってスバルとミソラはスバルの部屋にいた。二人とも床に座って話し込んでいる。

ミソラは大吾とあかねにもらったお年玉袋をうれしそうに見つめた。

絵柄は昔ながらのロックマン。二百年前に存在したらしい。

初めてではないが久しぶりにもらったお年玉にミソラは心奪われて  
いるようだ。

「ねえ、ミソラちゃん。」

「んー、どうしたの?」

ミソラはお年玉からスバルへと視線を向けた。

「これからちょっと出かけるんだけど、一緒に来る？」

「えっ？これからルナちゃんたちと初詣行くって言ってなかった？それより大事な用事ってこと？」

「うん。これからロッポンドーヒルズに行こうと思ってるんだ。」

スバルはウォーロックの時と同じようにミソラにもさっきの夢の話  
を聞かせた。

ミソラの反応は半信半疑といったようだったが、スバルがミソラに  
対して嘘はつかないことを知っている彼女は信じることにした。

「うーん、じゃあ私も行く。」

「父さんたちに言ってくるね。」

スバルとミソラは両親に行き先を告げて、外へと出ていった。

が、すぐにその後緊急でニュースが報じられる。

《TKタワーに強盗。展示品盗まれる。》



-  
-  
-  
-

「ホントにちょっとなんだけど……周波数違うね。」

「やっぱりそうなんだ。」

電波変換したロックマンとハーブ・ノートはウォーロックも触れた  
“平常時のロックマンの周波数の変化”について話していた。

ロックマンの外見自体には変化は見られないし、電波変換したスバルにも違和感はなかったようだ。

ロックマンは電波変換した際にいろんなことを試してみたが、今のところ周波数以外に変化はない。

『そうねえ……。例えるなら私たちFM星人の波長よりもあの“いけ好かない白髪の子”が電波変換した時の波長に似てるかも。』

ハーブはロックマンの今の周波数をそう評した。

「いけ好かない白髪の子ってブライのこと？」

「あー、言われたらそうかも。なんか孤独とかじゃなくて、もっとなんか……説明難しいんだけど似てるかも。」

ハーブ・ノートもなんとなく分かるらしくハーブの意見に同意した。

そんな感じで議論しているとロッポンドーヒルズが二人の視界に見えてきた。

するとウォーロックが何かを気にするように辺りをキョロキョロと見回し始めた。

『……落ち着かねえ。』

『あら、ウォーロック。ガサツなあなたがそんなこと言うなんて明日は台風かしら？』

『うるせえな、ハーブ。なんかが引き合うような感じがずっと……、いや“感じ”じゃないようだ。』

ロックマンとハーブ・ノートの進路の先には緑色の刃を持つ薙刀を持った何かがいた。

姿形はフードつきのローブのような物をしているため、分からない。

ロックマンとハーブ・ノートは警戒して歩みを止めた。

ウェーブロード上にて双方が対峙する。

「見つけたぞ。“心”を託されし者よ。こちらから行く手間が省けた。」

「君は？」

「私は“戦乙女”のエアリィ。古の“手”を司る者。」

そう言うとエアリィはローブのフードをバサリと脱ぐ。

そこには褐色の肌と黒い髪を持つ女性の顔があった。

「えっ、人間？」

「娘、お前に用はない。あるのはそこにいるロックマンのみ。」

ハープ・ノートには目もくれずにエアリィは薙刀の刃先をロックマンへと向けた。

そして薙刀の刃は緑色にチカチカと点滅しだす。

そして……

「うっ！ー！」

ロックマンは苦しそうに胸をかかえて、ウェーブロードに膝をついた。

「スバルくん？」

「だ、大丈夫。」

ロックマンは胸をおさえて立ち上がった。

ロックマンの胸の辺りは薙刀の光に合わせて同調してるかのように黄色く点滅している。

その姿を見てエアリイは何か哀れむかのように薙刀を天へと掲げる。

「案ずることはない。その“コンバート苦しみ”は私が引き受けるのだから。  
“変換！エアリイ・ストーミオ！！”

エアリイの身体は緑色の光に包まれる。光が晴れたとき、そこには灰色の鎧に薙刀を持った電波人間がそこに立っていた。

## 第二十四話 古の戦乙女（後書き）

少し投稿までに期間が空いてしまい、申し訳ありませんでした。

それでも読んでくださる皆様に感謝を述べてまわりたいと思います。

さて、今回もオリキャラ登場。

相変わらずセンスはないですけどね。

詳しい情報はこの場では省かせていただきますが……この小説の鍵を握る一人です。

それと、自分でも整理しづらくなってきましたのでキャラクター紹介を別に作りたいと考えています。

本編以外の情報ものせていきたいと思ってますのでよろしかったらどうぞ！

## 第二十五話 共鳴する鼓動

「エアリイ・ストーミオ……だつて？」

「そつだ、ロックマン。」

ロックマンとエアリイ・ストーミオ、互いの発光がおさまる。

苦しそうにしていたロックマンも再びエアリイ・ストーミオに対して構えた。

「君は……一体？」

「弱者に語る必要はない。教えて欲しくば実力で語るがよい。」

エアリイ・ストーミオは一枚のカードを取りだし、宙へと投げる。

そしてそこから……

「う、うそでしょ？これって……」

ハープ・ノートの驚きの通り、墓場からはい出てくるがごとくカードから電波体が実体化する。

それはスキーの格好をした雪だるま型の電波体だった。

「我らが神の御名において命ずる。“キャッシュデータ”よ、その者を打ち倒せ！」

エアリイ・ストーミオは出現した電波体に高らかに命じた。

「……ヒュー。スノーボール！」

雪だるま型の電波体は二人に向かって、いくつもの巨大な雪玉を落とすとしてくる。

「くるよー！」

「うんー！」

ロックマンとハープ・ノートは一つずつ雪玉を避けていく。

「スノーローリング！」

今度は前から巨大な雪玉が二つ現れ、ウェーブロード上を転がってきた。

しかも雪玉はさっき落ちてきた雪まで取り込み、だんだんと大きくなっていく。

「ちよつと大きくなりすぎでしょー！！！」

ハープ・ノートがツッコんだ通り、どこにも前にどこにも逃げ場がないくらい雪玉は巨大化していた。

『けっ！そんなビビるもんでもねえよ。やれ、スバル！』

「うん！ムーテクノロジー！」

ロックマンは貫通効果をもつビームを雪玉に向かって発射する。

雪玉は数発もビームを浴びると粉々に砕け散った。

「ヒュールルッ!」

雪だるま型の電波体にもビームは当たったらしく苦しそうに悶えている。

「今よ!マシンガンストリング!」

その隙についてハープ・ノートは弦で電波体を縛り上げ、追い撃ちとばかりに音波攻撃を浴びせかけた。

「ヒュアアーツ!」

雪だるま型の電波体はハープ・ノートの連弾にザザザ……と嫌なノイズ音を残し、消え去っていた。

「やはりこの程度では無理であったか。」

エアリィ・ストーミオは結末が分かっていたかのように電波体の最期を確認した。

「エアリィ・ストーミオ!君の目的はなんだ?」

「私の目的はロックマン、お前の中に眠る神の心臓、“エンシエン トハート”を奪うことだ。」

エアリィ・ストーミオはロックマンの胸の位置を指さした。



「エンシエントハート」？まさか、夢の話の……」

「うそ。ホントにスバルくんが……？」

「左様。私のもつ“神の手”とも共鳴した、それが何よりの証拠。ロックマン、いや星河スバル！お前の“心”は私が貰い受ける！」

エアリィ・ストーミオは雑刀片手に二人に突っ込んできた。

「エアロスラッシュュ！」

「ブレイクサーベル！」

横からの一撃をロックマンはガチリと受け止めたかに見えた。

「………温い！」

が、風を纏った一撃は受け止めたロックマンもろとも全てを吹き飛ばす。

「ぐああっ！」

ロックマンはそのままビルの壁へ叩きつけられていた。

「この！ショックノート！」

「ふん！」

ハーブ・ノートの音波攻撃をエアリィ・ストーミオは煩わしいといわんばかりに一払いで叩きおとした。

「娘、お前は相手にする価値もない。」

エアリイ・ストーミオはハーブ・ノートを一瞥し、ロックマンの方へと向かっていく。

「待ちなさい！マシンガンストリング！」

「二度も言わせるな、娘！スライススイング！」

エアリイ・ストーミオの放った幾つものかまいたちは弦をバラバラに切り裂く。

「きゃああっ！」

そして全てがハーブ・ノートへと直撃した。

「ミソラちゃん！くっ！バトルカード……」

「遅い！！！」

ロックマンがバトルカードを転送する間もなくエアリイ・ストーミオに首を掴まれ、ハーブ・ノートのところへ投げ捨てられた。

「パスカルプレス！」

「ぐああっ！！！」

「きゃああっ！！！」

そして二人は異常なまでの空気圧に全身を締め付けられ、遂に倒れた。

「ぐうっ！」

「……まだまだ！」

あれだけ攻撃を受けても、二人はなんとか立ち上がる。しかしエアリー・ストーミオは薙刀を背中へしよいこんだ。

「「な！」」

「やる気が失せた。お前たちは私が相手するまでもない。」

つまらなそうにエアリー・ストーミオは再びカードを一枚ほうりなげる。

そこから今度は吸血鬼のようなコウモリ型の電波体が二体出現した。

「そつだ、“冥土への”土産に一つ教えてあげよう。こいつらは二百年前、あの“英雄”の時代のナビ。」

「二百年前つてまさか……」

「クロックマンの事件の！」

「そう、お前たちが巻き込まれたあの時より少し後のもの。さて、お喋りはここまで。逝くがよい。」

エアリー・ストーミオの命令に合わせ、コウモリ型の電波体は同時に構える。

「キキツ！クラッシュノイズ！」

「うわああっ！！」

「くっくっくっ！！」

二体の電波体からまとめて放たれた音波にロックマンとハーブ・ノートは耳を塞いだ。

『ミソラ！』

「うっつ……私は負けない！スバルくんのためにも！パルスソング、フォルテツシモ！」

音波を掻き消そうとハーブ・ノートは持てる最大限の力で一番の特技を繰り出す。

「愚かな……」

エアリー・ストーミオの呟いた通り、ハーブ・ノートの力は及ばず、攻撃は届かなかった。

「ミソラちゃん！」

「ゴメン……スバルくん。私、やっぱり……」

ハーブ・ノートは能力柄、非常に音に敏感である。それが逆に今回は仇となってしまった。

ハープ・ノートはバタリと膝をついてしまう。ロックマンはただそれを見ていることしか出来なかった。

ロックマンの方も平衡感覚が崩れてきて足元がふらつきはじめている。自分も余裕がない状態であった。

「苦しみも最後。全てを終わりにしてあげよう。とどめをさせ！キヤッシュユデータたちよ！」

二体の電波体は鋭い爪を剥き出しに今にも倒れ込みそうな二人に飛び掛かった。

.....

「（僕が……弱いからまたミソラちゃんを……）」

「（ゴメンね、スバルくん……また足手まといになっちゃったかも……）」

二人は薄れゆく意識の中、互いの事を心配しあっていた。

自分の無力さを後悔し、そして願った。

「（守るための力がほしい！）」

- - - - -

そして……

ドクン！！

“スバル”とハーブ・ノート的心が強く鳴り響く。そしてロックマンが黄色く輝き始めた。

「何？」

「僕は守ってみせる！大事な人を！絆を！」

そしてその光はやがて一つの形を成した。光溢れる流星の弦へと。

「シンクロウェポン” バージョンハーブ！！」

ロックマンの手にはハーブ・ノートと同じ、星型のギターが握られていた。

## 第二十五話 共鳴する鼓動（後書き）

懲りもせずにもまたエグゼシリーズのナビ登場。

今回の登場は5のダーククロイド、ブリザードマンとシェードマン。

そして今回は何故この時代に出てくるのかまで記載してみました。

アニメ版の最後の方に、もしくは“FON”やったことのある方ならご存知の“キャッシュデータ”です。

いろいろと考えましたがコラボするにはこれかなー、と。

まだまだナビたちは出していくつもりですが、作者自体がエグゼの知識が薄いので……

よろしければご協力していただけるとありがたいです。

そして、新しい力“シンクロウエポン”こちらはまだ説明しないこととしておきます。

次回で暴れさせるつもりなのでお楽しみに!!

## 第二十六話 二重奏

「同調する意志」シンクロウエイボーン。なんとこころも早く覚醒するとは……。」

エアリー・ストーミオはロックマンからでてきた星型のギターを見て、驚きを隠しきれない様子で呟いた。

それはまるで流れゆく星々のように光り輝き……

それはまるでかの英雄たちのように共鳴しあい……

それはまるでかの王のような畏怖を見せつけ……

そして、エアリーの……

エアリー・ストーミオはロックマンの姿にある人物を刹那に見ていた。



「絶対に守ってみせる！リフレクトウェーブ！」

ロックマンがギターの弦を掻き鳴らすと星型の電波障壁が現れる。

それは二体の音波攻撃を反射し、互いに攻撃を打ち消しあつた。

『スバル！これは一体なんなんだ？すげえ力が溢れてきやがる！』

「僕にもわからない。体が勝手に動くんだ。けど……これならける！ロック、リカバリーのカードをちょうだい！」

『おっしゃあ、任せとけ！！』

ウォーロックから投げられたカードをロックマンはキャッチする。

「プレデーション、リカバリー300！ヒーリングシャワー！」

リカバリー300のカードをギターへと読み込ませたロックマンは再びギターを掻き鳴らした。

キューーン！

ロックマンが作りあげた音符は空へと舞い上がり、花火のように弾ける。

そしてキラキラとした光がロックマンと倒れているハーブ・ノートに降り注いだ。

二人の傷はやさしい光を浴びて、だんだんと消えていく。

ロックマンはハープ・ノートの傷が塞がってきているのを見て、安心したように頬を緩めた。

『スバル、ミソラのことよりあいつら先に片付けたほうがいいんじゃないねえか?』

ウォーロックに言われて見てみると、既に星型の防御壁にはヒビが入ってきている。

「うん!いくよ、ロック!」

『任せときな!』

「プレデーション、エレキ!パラライズノート!」

ロックマンは二体の電波体に向けて、音符を幾つも高速で打ち出した。

「キギツ!」

ロックマンは二体の電波体に音符の雨を浴びせかける。しかもそれには麻痺属性の効果が付加され、身体を自由を奪っていた。

浮遊していた翼は痺れによってもがれ、ウェーブロードに突っ伏す。

が、一体は別のウェーブロードへと逃げ、すぐさまその鋭い爪をロックマンに向けてきた。

「こっちは任せて！」

その声と共にハーブ・ノートは自らのギターで攻撃を受け止めてみた。

「ミソラちゃん！」

ロックマンは攻撃を続けながらもハーブ・ノートの方へ注意を向けた。

明らかに彼女の顔色はまだ優れてない。無理をしているのはロックマンもすぐにわかった。

「大丈夫！スバルくんと一緒なら私はいつだって戦える！見てて、マシンガンストリング！」

ハーブ・ノートは受け止めていた攻撃をパンと右側へと払い、そのまま弦を巻き付けた。

決死の覚悟が伝わったのか、ロックマンも心配することをやめた。

「わかった。いくよ！ミソラちゃん！」

「オツケー！スバルくん！」

二人はそろってジャンプし、空中で背中合わせに構える。

そして息を合わせ、最後の一撃を繰り出した。

「とどめだ（よ）！シンクロフォースビッグバンSFBハートフルゴスペル・デュオ！！」

ロックマンとハーブ・ノートのギターから放たれた音符たちが宙へと舞い上がる。そしてそれは聖なる光と共に辺り一面に降り注いだ。

「キギイイ！！」

光と音による聖なる祝福を受けた二体の電波体の体は砂となり……

日光を浴びた吸血鬼の最後のように体は風化していった。

『へん！おとといきやがれってんだ！』

「はあはあ……やった。」

平気そうなウォーロックを尻目にロックマンは肩で息をしながら勝利の余韻に浸った。

ロックマンの抱えていたギターは戦闘が終わったと同時に黄色い光となって消え去っていた。

「ロックマン、大丈夫？」

「なんとかね。でもまだ……エアリィ・ストーミオがいる。」

二人は再びエアリィ・ストーミオの方へ向き合った。

「なるほど、スフィングスの奴が何故お前を選んだのか……少し分かった気がするな。」

そういうとエアリイ・ストーミオは自ら武装を解いた。

「覚醒したとなると、今ここでお前を倒してしまうのは実に惜しい。  
“星河スバル”よ、強くなれ。私はお前の本気と戦いたい。次会った時に期待するでしょう。」

その言葉を残すと、エアリイ・ストーミオは周波数変換し、二人の前から姿を消した。

「待つて！私たちはまだ……」

『ダメよ、反応はもう消えているわ。それに……スバルくんの方がもたないわ。』

ハープに言われてロックマンの方へ急いで意識を向ける。

ロックマンは既に電波変換を解いていて、スバルはベンチでグッタリと寝転んでいた。

-  
-  
-  
-

「エアリイ・ストーミオ……」

「うん、私たち全然敵わなかったね。」

電波変換を解除した二人はTKタワーのベンチにいた。

スバルはミソラの膝に頭をのせている。もちろんミソラが率先して

膝を貸したのだ。

本来なら赤面して絶対断るはずのスバルであるが体が動かないのか、ミソラのなすがままになっている。

二人がついた頃には既に何かあつたらしく、サテラポリスがタワー回りをせわしなく動きまわっていた。

が、そんなことなどは気にもせず、スバルもミソラも先程の戦闘を思いだしていた。

さっきのエアリィ・ストーミオの……圧倒的な強さと力。そしてあの失望の眼差し。

お前たちなど戦う価値もない、そう言われたかのような表情が脳裏に焼き付く。二人は悔しさに満ちていた。

「（またスバルくんを守られちゃった。もっともっと、背中を預けてもらえるように強くならないと！）」

「（……このままじゃ誰も守れない。力を、もっと力をつけないと！）」

二人は今日の経験を忘れることはないよう、心に誓った。

が、ここで誓ったことは皮肉にも道は違えることとなってしまふ。

強すぎる力がもたらすのは何か……

この時二人はしるよしもなかった。

## 第二十六話 二重奏（後書き）

ついに全貌を明らかにしました“シンクロウエポン”。

内容はエグゼシ리즈のソウルユニゾンの改定版です。

ただし全て姿が変わるといわけではないです。

ハーブ・ノートの場合は通常のロックマンが星型のギターを持っただけです。

シンクロウエポン バージョンハーブ

《能力説明》

基本はハーブ・ノートのように音波を使用した攻撃。

固有能力は反射効果を持つ“リフレクトウエーブ”

ギターにカードを読み込ませることでその属性を使用可能。

必殺技は“ハートフルゴスペル”

以上です。また新しいのが出てきたらあとがきにのせていきます。

今後ともこの作品をよろしく願います。



## 閑話 子供たちの会議（前書き）

今回はスバルたちは登場せず、また本編には入りません。

ですが以降の話にかなりからんできます。

## 閑話 子供たちの会議

とある時間、とある場所、

明かりがささない暗い部屋にメンバーが集まり始める。全員の姿は確認できない。

彼らは既にいた二人に引き続き、自分の席に座っていった。

「スフィックスは消却したが……心臓は星河スバルに継承ハートされています。」

「ああ。しかも星河スバルは既に能力を使役している。まだまだ……可能性は未知数。幾らでも脅威となりえる。」

「そうか。……それにしても楽しそうだな、“戦乙女”。面白い玩具を見つけたか？」

「ふん！人のことが言えるのか？貴様もそれは一緒だろう、アル？先に来ていた二人、エアリとアルは広い机を挟んで向かいあっている。二人は互いに不敵な笑みを浮かべて座っていた。

「アル、笑い声、キモい、変態。」

「……どうしたら変態になるのか教えてくれ。」

さっきまで腹の探り合いのようなやり取りだったのが一転、エアリの右隣りに座った少女によってアルは精神的に撃沈されることと

なつた。

アルの身体が既に机の上に崩れ落ちている。こうかはばつぐんだ。

「ハルに同感です。アル、あなたは昔から不気味に笑いすぎなのです。もつと強き者は芸術的に、美しく……」

「マツリ、長い。うるさい。キモい。」

「……ハル、君は齒に衣を着せることを覚えた方が……。」

「キモい」

ハルの言葉によってさらに犠牲者が一人追加された。マツリもアルと同様、机の上に身体が崩れ落ちていた。

そんな様子をエアリイは無表情で見つめる。

そしてまたある一人は南無とばかりに口撃の犠牲者二人に対して合掌し、そして残り二人の笑い声とその場にこだました。

「リーダー形無しじゃん！ハルがリーダーやった方がいいんじゃないの？」

一人は甲高い声でキャハハと笑い、場をさらに冷やかす。その笑い声はヴアルゴによく似ていた。

「うるさいよ、“歌姫”。私はあなたの笑い声も下品だと思っけど？」

もう一人も同じくクスクスと押し殺した笑いをみせながらも手に持った扇子で口元を覆っている。

だがその言葉には“歌姫”を挑発することを忘れていなかった。

「はいはい、悪かったわよ“アキ”。でも下品なのはどちらかしら？西洋かぶれのお嬢様？」

「比べてみる？」

アキと呼ばれた高校生くらいの少女は“歌姫”の言葉が気に障ったようでゆっくりと立ち上がった。

それに対して“歌姫”の方は来るなら来なさいといった様子で椅子の上で足を組んでいる。

議場にピシッと張り詰めた空気が流れた。

「ストップ。アキ、まだ君の力はパーフェクトじゃないし、親父殿ゆかりのこの場だ。今、“余裕”にやれたとしてもやめて貰おうか。」

「ごめんなさい。」

それを今度は1番後ろにいた少年がアキを制止する。アキは不服そうであったが少年の指示に従って席についた。

「へえ？私がアキに余裕で負けるってこと、“ハク”。」

今度は“歌姫”が苛立って立ち上がる番だった。

彼女のこめかみには青筋が浮かび、怒りの色がありありと出ている。堪忍袋が切れる一歩手前である。

それに対し、ハクは気にした様子も恐れた様子もなく、座ったまま爆弾をさらに投げつける。

「そうは言っていない。君の実力ではアキどころかこの俺にも……」

「黙りな！このガキが！電波変換！！」

あまりにも早く堪忍袋の尾が切れた“歌姫”は自らのハンターを出して交戦の構えを取った。

ハクは座ったまま自分のハンターを取り出す。それを見ていたアキもハンターを取り出し、それを止めようとした。

Bannon！！

一発の銃弾は“歌姫”のハンターをその手から叩き落とし、弾痕を壁に残した。

“歌姫”の手から赤い血が静かに流れ落ちる。

「いい加減にしてもらおうか？三人とも。」

ハルの口撃から立ち直ったらしいアルは黒く光るリボルバーを三人に向けていた。

その銃口からはまだ煙が立ち上る。そして先程までよりさらに乱暴

に言い放った。

歌姫はギリつと唇を噛み締めたが、渋々と席に座った。

それを確認してアルは銃を引つ込めた。

「それで？呼び出した理由は？」

「確かにそれを僕も聞きたい。一人遅れるようですが、わざわざ“フォース・チルドレン四季の子供達”を7人全員呼び出したのですからね。」

ハルとマツリはアルへそう質問した。

この場にいるのはアル、エアリイ、マツリ、ハル、アキ、“歌姫”、ハクの七人。

エアリイだけは“四季の子供達”に入らないのであと一つ、席に空白があった。

「ああ。“彼”なら子供達の世話があるから今日は無理だ。」

それをアルが言うのだんまりのエアリイを除き、全員が納得した表情を見せた。

「一つ目の議題はは次の獲物“ブレイン頭脳”についてだ。場所はチヨイナ。そこには先行部隊として“歌姫”と“戦乙女”、それからハルとマツリに行ってもらおう。」

「四人行かせるとは……アルにしては用心深い。何か問題でもあったか？」

ハクは腑に落ちないといった様子だった。四季の子供達は任務時、アルとエアリィを除き、基本二人一組で行動する。

ちなみにマツリがコスモ・ドラグーンを暴走させたのは任務外である。

そんな方針をとっていたアルがわざわざ二組を派遣するということはそれなりの要因があるのだろう。

するとハルが一つの小型データをハクに投げ渡した。

「これがその理由だ。」

ハクはそれを手元で映像化する。

「なるほど。それは確かに四人必要だ。」

ハクはニヤリとしてそれをアキと“歌姫”にも見せる。二人は席を立ててそれを覗き込んだ。

「確かに。」

「……ちっ！」

“歌姫”は腹立たしいという風に舌打ちし、どっかと席に座る。

「アキとハクは今まで通り“脚”の開発。」

「大丈夫。そろそろ完成間近みたいだし。」

「あと一週間あれば実用化可能だ。そうすれば……何もかもが楽になる。」

アキとハクは二人揃って自信満々にアルに親指を立てた。

「そして次の議題、これが全員をこの場に集めた理由だ。」

アルはそう言って一つの映像を巨大モニターに映し出した。

彼らの目的まであと三つ……

次に狙われるは………神の頭脳

子供達はミーティングを終えると、電波化して一様に姿をくらし  
た。

“ワールドミュージックフェスティバル インチヨイナ”

そしてハルが見せたデータ、そこには響ミソラの姿がでかかと写  
っていた。



## 閑話 子供たちの会議（後書き）

遂に敵側組織判明です。

名を“四季の子供達”（フォース・チルドレン）

そして新メンバーをさらに追加。

“アキ”と“ハク”

実名はのちのち。組織全体としては合計八名で全員電波変換可能です。

次回は本編戻ります。

**第二十七話 “神” 降臨（前書き）**

お待たせしました！！

ついにお約束の“アレ”やります！！

## 第二十七話 “神” 降臨

冬休みも終わり、スバルたちにも新しくやってくる三学期。

始業式もつつなく終わり、待っていたのは悪魔のごとき実力テストとやら。

いつものごとく、数学担当のクインティア先生の中学一年生からみれば鬼がかわいく見えるようなレベルの問題を出され……

「……な、なにこれ。」

翌日の朝のホームルームでテストをつくった張本人から返された点数を見たスバルは絶句した。

間違っても親には言えない点数である。

驚愕の数字を見てしまったスバルはそれを誰にも見られないうちにかばんの中にパッとしまった。

辺りを見回すとクラスメートの表情は予想通りのものしか見られない。

クラス総合トップのあのジャックでさえ頭を抱えて悶絶している。

「（一体どんな点数とったんだ……）」

すごく気になるスバルだったが自分の点数が点数であったため、聞けなかった。

聞けば聞かれる。

自分の点数の方が他へ漏れてはならない。  
スバル

両親ならまだよい。……委員長だけには知られたら一環の終わりだ。

スバルの頭はそこまで高速回転してそう結論を出したのである。

「……みんな静かに。今回は平均点は17点。……冬休みももっと勉強しなさい。」

クインティアは珍しくため息をつきながら平均点と最高点を黒板に書いていた。

最高は43点。もちろん100点満点である。

「（助かった。平均より10点以上上だ。）」

スバルは最高ではなかったものの平均と比較しての自分の点数にホツと胸を撫で下ろした。

が、クインティアからさらにクラスへ追撃の一言が浴びせられる。

「……このクラスが平均では一番成績悪かったから今日から一週間放課後補習いれるわ。希望者は参加しなさい。あと10点未満だった人は強制参加。」

それにはクラスからブーイングが巻き起こる。だけどクインティアは動じることなく平然としていた。

ちなみにクインティアはスバルたちのクラスの副担任である。担任は正月に大怪我したらしく入院中だとか。

「……忘れていたわ。ジャック、あなたも参加しなさい。」

「ねーちゃん！そりゃねえだろ！俺10点未満じゃねーから！採点したからわかってんだろ？」

ジャックはガタンと音をたてて猛烈な抗議をいれた。だがクインティアは相変わらずの鉄仮面にも近い無表情で気にした様子はない。

「そうね。でもあなたの点数は平均点未満の13点よ。私の弟がそれでもいいと思うの？」

「ってねーちゃん！さりげなく俺の点数ばらすなよ！！」

ジャックの様子からクインティアの言葉は凶星らしい。

思わず繰り広げられた姉弟漫才にどつと笑いが起こる。

「……………ふふつ。」

笑い声は廊下からも聞こえたのがスバルは気になったが、隣のクラスに聞こえたのだろうと思って特に触れないことにした。

そつやってる間にも姉弟喧嘩はまだまだ続いている。

「俺はぜってー行かねーからな！」

ジャックは強情にもストライキを貫くことにしたらしい。

てこでも動かないくらいに守りを固めるジャックにクインティアの攻撃。

「……………そう。なら“家”に帰って……………」

「受けます！やらせていただきます、お姉様！！」

「「動いた！！」「」

そう、あっさりと動いた。クインティアにの呼び方まで変えて、ジャックは職権乱用ともいえる強制イベントに参加することにしたのだった。

「（……………ますます気になる。）」

ジャックはWAXA社宅に三人暮らし。兄と姉と弟と三人暮らし。

しかしその内部事情は深い闇に包まれている。

その事情を知るものは……………じくじくわずかである。

- - - - -

「……じゃあ次。ちょっと時期外れだけど転校生が一人、このクラスに入るわ。」

クインティアが次の発表した予想外すぎる話題に1年B組全体がざわめきだった。

「クインティア先生、転校生って男ですか？女ですか？」

“転校生がきた際にまず聞くことナンバーワン”を男子生徒が聞いた。

「……女子よ。みんなも“よく知ってる子”よ。」

クインティアがくれたヒントに教室内は更にざわめきたつ。そんな中、スバルの前に座っているツカサがクスクスと忍び笑いを始めた。

「ツカサくん、もしかして誰か分かった？」

スバルはこっそりとツカサに聞いてみた。

「んー、多分。正確に言えば僕がというよりもジェミニが気配がするっていうから……そこから考えてね。」

「ジェミニが？ロック、誰かの気配する？」

ウィザードが誰か分かったらしいというヒントから、スバルはハンター内のウォーロックに聞いてみた。

『ああ。“あいつ”の周波数が近くから感じられるぜ。』

「あいつって……まさか……」

スバルも薄々感づきはじめてらしい。それと同時に心臓がバクバクと大きくビートを刻みはじめる。

「(まさか!?)」

スバルの緊張がどんどんと高まる。そしてスバルの顔に熱がこもりはじめた。

冬だというのにスバルの回りだけはどんどんと温度があがっているのは冗談ではない。

「……じゃあ、入ってきて。」

クラス全体のざわめきが収まらない状態であるが、クインティアは廊下にいる転校生に合図した。

ガーンと開く自動ドアに全員の視線が注目する。

ゴクッ……



一瞬の静寂を経て……、1年B組は……

「「「ウオオツツ!!」「」」

「「「キヤアアツツ!!」「」」

「「「キターー!!」「」」

まるで目の前に神が降臨したような驚愕と歓喜の悲鳴で覆い尽くされていた。

もはや教室内は超無政府状態<sup>アナーキー</sup>

民衆（生徒）が暴徒化してプラカードやうちわやメガホンなんかを

持って踊りだしても失神したりしてもおかしくはない。

転校生はそんな様子の教室を馴れたように観客に応えながら手を振って歩く。

そして自己紹介。

「私立<sup>ナギハマ</sup>凧浜中学校からきました響ミソラですっ！皆さんよろしくお願ひします！」

一礼したミソラにクラスはさらに沸き立った。

「ミ・ソ・ラ！ミ・ソ・ラ！」

コンサート会場がごとくミソラコールが響き渡る。そして廊下の方もだんだんとうるさくなってきた。

もうすぐ授業にも関わらず、野次馬が殺到しているらしい。

「ありがとう！」

ミソラは手慣れたように全員に手を振ってみせた。

「……授業が始まるから彼女への質問は後にすること。分かった？」

ヒートアップしたままの群集（1年B組一同）をしつかりと宥めるクインティア。

クラス全員（スバル、ジャック、ツカサ除く）質問したくてうずうずとしていたがそこは自重することにしたらしい。

落ち着いてきたらしい一同にクインティアは話を続ける。

「席は……」

クインティアの言葉に今度は男子一同（ジャック、ツカサ除く）息を飲んだ。

この後起こった聖戦<sup>ジハード</sup>はコダマ中学校の伝説となったのはいうまでもない。

のちにツカサはスバルにこう言ったという。

「スバルくん、いろんな意味で……頑張っ  
て!!」

この日を境にスバルの平穏な学校生活は消え去ったのだった。

## 第二十七話 “神” 降臨（後書き）

他者様の小説でもありますお約束!!

ついにやっちゃいました!!

やるのが遅い？

それならフラグ立てろ？

全く気にしません!!

予想外こそが面白さです!!

ヒーハー!!!

（注：この駄目作者、本日むちゃくちゃ壊れてます。テンションおかしいです。）

「すみません。作者バグってますのでオリキャラ一番乗りの私、二宮ソラが最後締めます。次回も学校生活編です。今コダマ中学校大変なことになってます。それではまた見てくださいね、ジャンケン……ポン！」

『キュイツ!!』

（コスモがパーのかかれているボードを出す）

「しっふふふふふ〜（サ エちゃん風に）」

……後悔はしてません（ソラ談）

第二十八話 友として、ブラザーとして（前書き）

ほぼ二週間ぶりです！更新遅れて申し訳ありませんでした。

言い訳は後書きにて……

それでは28話どうぞ！

## 第二十八話 友として、ブラザーとして

とある平穏な昼下がり……

天候は晴れ、冬にしては珍しく暖かいこの日。

「「「待てええ！！スバルうう！！」」」

「むり！無理！！無理っつ！！！！」

どこの小学生だと突っ込みたくなるような鬼ごっこがコダマ中学校  
校内で開催された。

逃げる人は星河スバル。そして鬼は校内中の響ミソラファンクラブ  
の皆さん、学校の生徒の約三割である。

そして鬼の皆さんの目はやけに血走っている。そして表情も本気だ。<sup>マン</sup>

つまり……捕まったら命はない。本能的にスバルはそう悟っていた。

「こっちだ！はさみうちにしろ！！」

「いつ！？」

廊下を曲がろうとしていたスバルは不意に聞こえてきた声に急遽進  
路を上に変えた。

なぜこのようなことになったのか。それは給食の時間に全てが始ま  
ったのである。

-  
-  
-  
-  
-

「私立凧浜中学校から来ました響ミソラですっ！」

コダマ中学校にあの超国民的芸能人が転校してきた。

天地がひっくり返してもありえないようなこのニュースが校内へ駆け巡るのは、光が地球を一周するより速かった。

授業にも関わらず、野次馬が廊下を埋め尽くし、先生が警備ウィザードを動員してまで騒ぎを収拾にかかった。

そして休み時間になればそれ以上の騒ぎに発展しかねないというところで、ウィザードを1年B組に配置し、関係者以外を全てシャットアウトするという事態にまでになった。

それでも野次馬根性悔ることなかれ。さながらライブの出待ちのように、今か今かと教室から例の人物がでてくるのをいつも待っている状態であった。



さて、そんな中その教室では……

ガヤガヤ……

ミソラの席にはやっぱりクラスメイト全員（一部を除く）がどどつと押しかけてた。

そして少し離れたところでスバルとツカサはその様子を見つめていた。（ジャックは姉にパシらされて不在）

「わかってたけど響さんすごい人気だね。」

「……そうだね。」

「……スバルくん、まだ響さんと話してなかったから機嫌悪いの？」

「べ、別にそんなわけじゃないけど……」

スバルはそろつとツカサから視線を反らした。機嫌が悪いとまではいれないが話せなくて残念と思っているスバルである。

ちよこつと……好きだから独占していたと思ったこともあったが、流石にそれは無理だろうと半ば諦めていた。

「それよりも……みんな給食の準備しないのかな？」

「スバルくん、それ本気で言ってる？」

そう、只今給食の時間なのである。ごく数人の担当がミソラと話したそうに恨めしげな表情のまま、せっせと配膳し、ツカサとスバル

はそれを手伝っている。

そしてそれ以外のメンバーは……男女関係なくミソラの側に固まっていた。

転校生との関係構築といえやはり初日が一番肝心である。

ましてややってきたのは超国民的芸能人。お近づきになりたいのはクラスメート共通の認識のようだ。

そのため給食の手伝いなんか後回しなのである。

「（……ミソラちゃんちょっと顔引き攣ってない？）」

配膳中にふとスバルが見たミソラは笑顔んだけど疲れているようなそんな顔だった。

そんなこんなで準備が終わったところでツカサが全員に声をかける。

もちろんみんな考えることは一緒であり、席を……

ズルズル……

ズルズル……

「……なんの包囲網??」

ツカサがツッコミをいれたくもなるような、ミソラの机を中心とした完全なるバリケードが形成されかけていた。

クラスメートの中には“ミソラちゃんはみんなのもの”なんていう意識が非常に強いらしい。

あくまで今はでしゃばらず、少しずつ歩みよるようだ。

「（……ミソラちゃんは見世物じゃない!!）」

スバルはそんなクラスメートたちの腫れ物に触るかのような様子を見て、ついに立ち上がった。

「ミソラちゃん！一緒に食べない？」

スバルの暗黙の了解を破った一言にバリケードの住人たちが一斉に振り向く。

「（スバルのやつ、やりやがった!!）」

「（星河くん！私たちのアイドルにタメ口!?!）」

「（ミソラちゃんを独り占めする気か!）」

視線が物語っているのは大方こんなところだろう。

「スバルくん！ツカサくん！一緒にいいの？」

ミソラもクラスメートの対応にはいい加減悲しくなってきたらしい。

スバルからの言葉をうけ、一気にミソラの笑顔が花咲き、それに飛びついた。

「ん、響さんがいいなら僕はいいよ。」

「へへっ！じゃあスバルくんのお言葉に甘えますー！」

ミソラは自分の給食ののったトレーだけを持ってスバルとツカサの方へ移動した。

三人の様子に周りは口をあけ、呆然としている。

スバルがミソラとただの知り合いでないということは何となく察し  
たらしい。

そしてツカサもそのことを知っていたようだった。

「……（スバルちゃんとミソラちゃんって……もしかして。）……」

女子はその並々ならぬ親しさから現在の二人の關係に気がついたようである。ヒソヒソと噂しはじめたり、自分の席に戻りだしていた。しかし、ミソラの男友達という枠に一步以上先を越された男たちはその事実を受け止めきれない。

「……いただきます。」

そして三人揃って先に食べるはじめたのを見て、何かが切れたようだった。

「……まてーいつ！星河あつー！」

男子の一人がドンと机を叩き、スバルを指差した。

「……………何？」

スバルは不機嫌さMAXな声と顔をしてその男子の方へ振り向く。

「“何”って冷めた顔しやがって！いいか！ミソラちゃんは“みんなのミソラちゃん”なんだ！それを君は一人独占していいと思っっているのかあ！！」

そつだ！そつだ！と沸き上がる男子一同。一部の女子から「空気読みなさいよ」と冷たい目で見られているがお構いなし。

「で、それがどうしたの？」

それに対してスバルの反応は非常に冷ややかだった。

「す、スバルくん？」

ミソラとツカサは普段と違う冷ややかな口調のスバルに畏れを感じる。

「な！？どうでもいいようなことだと……………」だってそつでしょ？？」

スバルは怯みながらも反論を返そつとする男子Aに二の句を言わせなかった。

「ミソラちゃんはミソラちゃん。だけど彼女は“物”じゃない。ミ

ソラちゃんは本気で君たちと友達になりたかったはず。だけど君たちは彼女の意思を無視し続けてマスコット扱いだった。」

そこで女子たちは自分のやったことに負い目を感じたのか気まずそうな顔を見せる。そしてスバルはさらに言葉を続けた。

「そして彼女の顔は明らかに悲鳴をあげていた！なら僕はミソラちゃんを“親友”として、“ブラザー”として助ける義務がある！君たちにもうミソラちゃんは泣かせない！！」

女子たちからは黄色い歓声上がり、男子たちからはプツリと何か切れた音がした。

「言わせておけば……！しかも、ミソラちゃんとブラザー……だとお！野郎ども！！星河スバルを血祭りに上げる！」

「……おお！！」「……」

男子Aの突撃を合図にクラスの男子たちはスバルに一齐に襲い掛かった。

「いつ！？」

幾多の危機と戦ってきたスバルもこれにはさすがに生命の危険を感じ、ドアを開けて教室から逃走した。

「……待てやコラア！！！！」「……」

そして男子一同スバルを追いかけてる。教室にいるのは女子とツカサだけだった。

「……………」

あまりの展開についていなかった一同。  
ただ一つみんなが思っていたのは……

「（スバルくん、がんばれ）」

ちゃんと応援はしていた。

その後、スバルの言ったことに刺激されたのか女の子たちはミソラに謝った。

そしてミソラもそれを受け入れ、友達として女子たちの会話へと入っていった。

スバルの犠牲は決して無駄にはならなかった。

そんな中、ツカサは一人で黙々とご飯を食べている。目の前にはスバルのかわりにジエミニがいた。

「ツカサ。」

「うん。スバルくんを助けに行くけど……ちょっと待って。」

「……………そうか。」

ツカサは一通り片付けまで済ませて、誰にも“気付かれず”教室を後にした。

この日スバルが得たもの

男子生徒大部分からの妬み

女子からの好感度

食べ損ねた給食280Z

走って失った時間30分

ミソラの笑顔 プライスレス。お金で買えない価値がある。



## 第二十八話 友として、ブラザーとして（後書き）

お久しぶりです。

正直にいいますと……携帯を打つ手を骨折していました！！

ギプスです。現在進行形です。

なんとか……逆の手でやってたんですがやっぱり遅くて、執筆遅れました！

すみません！

もう少しのあいだ更新遅れます！

なんか言い訳な後書きですが、これからも更新はしていきます！

こんな私でも見捨てないという皆様には本当に感謝しております！

今後ともよろしく願います！！

## 第二十九話 復活の魔術師（前書き）

やっとギブス外れました。まだ完治ではないですが更新できました。

ジークさん、Kouさん、温かいご声援ありがとうございました！  
この場を借りてお礼申し上げます。

## 第二十九話 復活の魔術師

「……………大丈夫？」

『おう。問題ねえ。』

ウォーロックの指示に従ってスバルは3階の階段の下にある掃除道具入れから顔を出した。

捕まったら命がなさそうなりアル鬼ごっこが始まって30分。そろそろ給食の時間も終わる頃合いで鬼もほとんどが教室に戻っている。

ここまでなんとか逃げおおせていたスバルであるが、だいぶホコリまみれでボロボロであった。

カツコイイことを言っただけさつきと違って、今は誰にも見せられる姿とはいえない。

『スバル、これからどうするよ？』

「うー、教室には戻れないからなあ。部室行く？」

『カギを先公に借りなきゃいけないだろ？』

「なら屋上は…………無理だね。」

屋上はまだ人がおそらくいる。もちろんそれが“鬼”である可能性も否定できない。

同様の理由で保健室もアウトだ。つまり……行き場所はない。

『……おとなしくあきらめな。』

「それしかないのね。」

ウォーロックに諭されてスバルはトボトボと一人教室に歩みを進めた。

「（……結局お昼食べ損ねた。）」

スバルの腹の虫が悲鳴を上げはじめる。育ち盛りのこの時期、一食抜くのはゴンタでなくとも辛かった。

『ん、スバル。ツカサのやつからメールきてるぜ。』

「ツカサくんから?」

スバルはハンターへと送られてきたメールに目を通した。

「今すぐ屋上の“電波”にきてくれって。」

『屋上??.』

「うん。なんで“電波”なんだろう?」

『さあな。人に聞かれたくない話でもあるんじゃないか?』

スバルはメールを閉じてウォーロックと顔を見合わせた。

「ひとまず行ってみよう。」

『……スバル。さっき逃げてた時も電波変換したら問題解決だったんじゃないかねえか？』

「……………」

ふと気づいたウォーロックの言葉にスバルは黙ってしまった。

極度に発達したこの世界でさえ、電波変換できる人間、いや電波世界を認識している人は極々僅かである。

もちろんそこに逃げ込めば……

「うん。そうだね。」

スバルは何だか小さな敗北感に陥っていた。

-  
-  
-  
-  
-

二人は電波変換して学校屋上の電波へとやってきた。

下にはバスケットのコートや花壇はあるが、人は誰もいない。

先程チャイムがなっていたため授業に行ったのだろう。そんな中サボリ確定なスバルにはあえて突っ込まないでおこう。

「ツカサくんどこだろ？」

『そのあたりにいるだろ。“二人”いるから探せばすぐ見つかる。』

ウォーロツクの言う通り、“ツカサたち”の電波変換した姿、ジェミニ・スパークは白と黒の二人に別れている。

白の方はツカサが、黒の方は裏の人格である“ヒカル”が操作している。

二人の人格について昔にいろいろあったようであるが、今は和解できてなんと仲良くやっている。

最もその二人とそのウィザード“ジェミニ”、スバルとウォーロツクとの関係も昔いろいろあったようであるが、ここではちょっと説明を省くことにする。

ロツクマンがジェミニ・スパークを探していると体育館側から大きな光と雷鳴が轟く。

「今のは……！」

『ああ。ジェミニ・スパークが戦っていやがる。相手は……七人だ』

と！？しかも五体はあの“キャッシュデータ”とやらだ。』

ウォーロックは電波の流れからそこにいる人数を感じとった。

ジェミニ・スパークは電波人間の中では非常に強い実力をもつ電波体ではあるが、さすがに一对七では勝ち目はなさすぎる。

「敵が来たみたいだね！ロック、行くよ！」

『おう！』

ロックマンはすぐに体育館の方へ飛び移っていった。

-  
-  
-  
-  
-

「ジェミニ・スパーク！大丈夫？」

「……………スバルくん？」

「……………おせえよ、ロックマン。俺らがほとんど倒しちゃったぜ。だが……………あいつだけは骨が折れる。」

ロックマンが飛んだ先にはもう電波体はほとんどいなかった。

その場に居るのはロックマンともう戦い疲れてボロボロなジェミニ・スパーク。そして残り二人。

どうやらキャッシュデータはジェミニ・スパークが全て倒したらしい。ここの反応は消えてしまつてるとウォーロックがロックマンに教えた。

「ほう？ただの“実験”がこのような副産物までもたらしてくれるとは……神は本当にいるものだな、ロックマンよ。」

「お前は……アル！」

一人はTKタワーでダイヤ・アイスバーンを暴走させた張本人、アルだった。

生身の身体でウェーブロードに立ち、大袈裟にも神に感謝するようなそぶりを見せる。

しかしその目は変わらずに感情の見られない、濁った目をしていた。

そしてもう一人は……

「えっ？なんで……」に居るの？」

「……………」

青緑を基調としたぶかっとした魔術師のような服に身を包み、その口元は布で覆い隠している。



その外見に見合う通りにロックマンの問いに彼は一言も語らない。  
いや、そこにいるはずがないのだ。

なぜなら彼は二年以上前に空中に浮かぶ大陸の上で消えさっているのだから。

「……サンダーバズーカ!!」

「ぐああっ!!」

彼はロックマンの問いに言葉でなく攻撃で答えた。

彼が放った黒い雷はロックマンを貫き、その身体を遠く離れた給水タンクへと叩きつける。

ロックマンはタンクにたたき付けられ、その型を鮮明に残してしまっていた。

「スバルくん!」

「……大丈夫!ちょっと飛ばされただけだから。」

ロックマンは素早く攻撃を放った相手へと飛び込んでいく。既に左手はロングソードへと変換されていた。

「はあああっ!!」

勢いよく振り下ろした一閃はバチバチと回りに渦巻く電流によって

弾かれる。

そして相手はロックマンへと右手を向けた。

「マジックサンダー!!」

「インビジブル!」

ロックマンは上からの雷撃を間一髪かわし、一度距離をとる。雷が落ちた地点はどす黒いパネルへと変貌していた。

『まさか、また“やつ”と戦うとはな。』

「うん。」

二人は目の前に立ちただかる魔術師を睨みつけた。ムー大陸復活に暗躍したドクターオリヒメの懐刀、エンプティが再び牙を向いたのであった。

## 第二十九話 復活の魔術師（後書き）

やっぱり少し時間かかりましたが、何とか更新できました。

今回登場は流星の“2”で散々苦しめられてきたあの魔術師を登場させてみました。

もちろん一発家にするつもりはありません。ちやーんと考えて登場させてます。

……

へっ？そいつは出るのにあのムー人はまだか？

……

もう少々お待ちを！！（土下座）

最近更新が遅くなっておりますが、それでも読んでくださる皆さまにお礼申し上げます。

これからもどうぞよろしく願います。

## オリキャラ紹介パート1（前書き）

ちよつと息抜きで今まで出てきた“重要”オリキャラを紹介します。

本編には出てきてない情報もちよつとアリ！！

ネタバレはないつもりです。よろしければどうぞ。

## オリキャラ紹介パート1

二宮ソラ にのみや

所属 コダマ中学校3年C組

肩書 天文部前部長

生徒会前副会長

ウィザード コスモ

スバルのお姉さんの存在で初登場。  
性格は面倒見が良く姐御肌らしい。

スバルと同じく宇宙オタクでスバルにひけをとることはないが、他の科目は苦手らしい。

好物はフルーツオレ

前生徒会長 秋月イツキあきづきの幼なじみで彼に好意を持っている。

スバルの恋路を楽しく(?)見守る一人。

ウィザードのコスモはクリムゾンドラゴンを小さくしてかわいらしくした感じ。

子供のようでよく眠っていることが多い。  
一度暴走させられており電波変換の経験あり。電波変換したときの名前はコスモ・ドラグーン。

ソード系の攻撃以外は全くもって通用しない性質を持つ。

必殺技はクリエーションバースト

R<sup>アル</sup>  
R

所属 四季の子供達

肩書 四季の子供達のリーダー

ウィザード ????

スバルの前に現れた最初の敵。右頬に十字架型の傷痕がある男性（16歳）。

生身の体でウェーブロードに立てる、無理矢理電波変換させるカードを使用するなどまだまだ謎は多い。

シドウやジャックたちとは面識あるらしい。

二百年前のインターネット時代のナビ（キャッシュデータ）を操る能力を持つのは彼。どこからそのデータを手に入れたのかは……四季の子供達しか知らない。

あまなつ  
甘夏マツリ

所属 四季の子供達

肩書 天才画家

ウィザード ピクター（画架座のFM星人）

WAXA日本支部を襲撃した張本人。長い黒髪を後ろでまとめた姿の男性（15歳）。

スケッチブックを肌身離さず持っており、暇あらば絵を描いている根っからの絵かき。

基本は丁寧口調で美意識に対しては人一倍うるさい。

ウィザードはFM星人のピクターで電波変換し、ピクター・キャンパスとなる。

基本攻撃は絵の具による属性攻撃。

キャッシュデータを操れるが、詳細は不明。

スーラ・スプリングス（ハル）

所属 四季の子供達

肩書 陸上選手

ウィザード リンクス（山猫座のFM星人）

マツリとともにWAXAを襲撃した張本人。行動はマツリと一緒にことが多い。

必要単語しか話さない口数の少ない女性。（13歳）ただし非常に毒舌。

チヨイナ系のアメロツパ人であるが、会話は日本語。将来有望の陸上選手として注目されつつある。

ウィザードのリンクスと電波変換し、リンクス・アマゾネスとなる。基本攻撃はウルフ・フォレストと同じく爪での攻撃。一撃は軽めだが、スピードは遙か数倍勝っている。あまりに早過ぎるため、姿は消えて見える。

エアリイ

所属 四季の子供達 ？？

肩書 戦乙女

ウィザード ？？

古代の秘室の一つ“神の手”を持つ褐色の肌の謎の女性。四季の子供達と手を組んでいるようだが詳細は不明。

“クロックプログラム”をなぜか狙っている。

生身でウェーブロードに立てるようだが、電波変換は可能。

電波変換後の名前はエアリイ・ストーミオ。薙刀のような武器を持ち、風の力で圧倒する。



### 第三十話 天駆ける雷撃（前書き）

夏休み前で課題が鬼の様に出てきました。

「メ〜」と泣きたいのを堪えながら投稿します！

### 第三十話 天駆ける雷撃

「マジックサンダー!!!」

エンプティによって絶え間無く降り注がれる雷がロックマンとジェミニ・スパークを襲う。

三人は雷自体はなんなく回避するのだが、それがあまり好ましくないことをロックマンは分かっていた。

エンプティの真の恐ろしさは雷ではない。際限なく“しもべ”、つまり使役している電波ウィルスを自在に召喚できることだ。

雷が落ちた後はその場合はしもべたちの召喚パネルと変化していく。時間が経てば経つほど……エンプティが有利になっていくのだ。

「ちいっ!!!コイツら弱いくせに目障りなんだよ!!!」

ジェミニ・スパークBブラックが自分の後ろに現れたサワニガーをエレキソードで縦に一刀両断する。

「確かに……雷を避けながらこれは邪魔だね。」

ジェミニ・スパークWホワイトもアイズの目玉を貫きながらそう答えた。

「二年前より断然パワーアップしてる。エンプティのウィルスを操る量が違いすぎる。」

ロックマンは“ウィンディアタック”のカードを読み込ませ、目の

前に現れたウイルス達をまとめて吹き飛ばした。

風に吹き飛ばされたウイルス達は霧散していくが、また新しくウイルスは足元から出てくる。

しかも召喚しているエンプティ本人は自分の立つ魔法陣の上から一歩も動いていなかった。

状況はロックマン達が不利なのは目に見えて明らかだった。

「ククク……まさか“偶然”きたコイツがそんなに強いとはね。キヤッシュデータ三体を一度に葬ったから期待していたが……これほどとは。」

アルはダイヤ・アイスバーンの時のように高見の見物を決め込む。

別のウエーブロードへ移り、座り込んで戦いを見物していた。

『おい！その“傷十字”！すかした顔しやがって、降りてこい！俺が相手してやらあ！！』

ウォーロックはアルの態度が気に入らないらしく大きく怒鳴り散らした。

が、アルはそれを気にした様子もない。

「おいおい、星河スバル。そのキャンキャン吠える“弱い犬”の躰ぐらいしっかりしておけ。」

『んだとコラ！！！！』

「ロック！今はこっちが先！！」

口喧嘩をしている間にエンプティは雷を落とす数を減らし、片手で電気を大きな剣へと象っていく。

放電現象さえ見せず、電気は静かに収束していた。

「ツカサ！」

「了解、ヒカル！」

本能的にあれがマズいと判断したジェミニ・スパークも二人が手を合わせ、自身の持つ最大の技の構えをとった。

エンプティは雷の剣を大きく振りかぶる。それに合わせてジェミニ・スパークも技を発射した。

「サンダーボルトブレイド！！」

「ジェミニサンダー！！」

互いの強力な雷がぶつかり合う。一度に解放されたエネルギーがぶつかり合い、大きく爆発した。

「くっ！！！！」

ジェミニ・スパークはモロに爆発に巻き込まれ、大きく身体を吹き飛ばされた。

一方、煙の中から姿を見せたエンプティは電磁障壁に守られ、あまり堪えた様子を見せなかった。

「くっ……あれでもダメとはなあ。」

「さすがに……強いね。」

ジエミニ・スパークBもWも立ち上がるが自身の最大の技を破られたシヨックは大きく絶望の色が節々に見えてきてしまっていた。

さらに疲れも相重なって、技のキレも悪くなる。今やウイルス達を相手にするのが手一杯になっていた。

「おやおや、ロックマン。お仲間がここまで苦しんでいるのにいいのですか？次の一撃で決まりますよ。」

アルは笑ってエンプティの方を指差した。エンプティはもう一度、あの雷の剣を作り出すために己の左手に雷を収束させている。

『スバル！！エンプティのヤローの技は“サンダーベルセルク”の必殺技だ。さすがに二度は防げねえ。これが来る前にさっさと決めるぞー！』

「分かってる！バトルカード……??？」

咄嗟に手に入ってきたバトルカードにロックマンは動きを止め、そのカードをじっと見つめた。

ロックマンが手にしたカードは黄色いハートの絵柄だけが書かれていたカードだった。

「…………そのカードは??」

ウォーロックも、そしてスバルでさえ、そんなカードをフォルダに入れた覚えも見た覚えもなかった。

だが…………スバルにはそれが何を意味するのか感じとれたのだ。

「…………そうだよ。僕は負けられないんだ!」

ロックマンは決意に満ちた表情でそのカードを読み込ませた。

「バトルカード!シンクロウエポン!」

ロックマンと、そして隣で戦っていたジェミニ・スパークの鼓動が大きく鳴り響き、三人の身体が黄色い光で包まれた。

「…………これは、スバルくん?」

ジェミニ・スパークは突如現れた光に戸惑った。

「ツカサ、ロックマンのやつが俺達の力を欲しがってんだよ。釈だけど…………貸してやるっじゃねえか。」

「うん。負けないで、スバルくん。僕たちがついてるから！」

シンクロウエポン バージョンジェミニ  
スバルのハンターにそう表記されていた。

やがて黄色い光はハープ・ノートの時と同じ様に形を成してロックマンへと装備される。

ロックマンには金色に輝くジェミニ・スパークの拳と黒と白のトゲの肩当てが両手、両肩に装着されていた。

「マグネットスパーク“マイナス”!!!」

そしてロックマンは右手から黒い電磁球を幾つも発射した。

「むっ！」

エンプティはそれを払い落とそうとするが、その球は衝撃をつけた瞬間に黒く放電したのだった。

しかしその球自体にダメージと麻痺効果はない。たやすくエンプティには黒い電磁波が染み付いた。

それを見るとロックマンは逆に左手を前に出した。

「マグネットスパーク“プラス”!!」  
左手から白い電磁波が発せられる。プラスとマイナス、二つの電磁波は互いに吸い寄せあう性質を備えていた。  
「むううっ!!」

マイナスの電磁波を帯びたエンプティの身体は抵抗虚しくロックマンの方へ吸い寄せていった。

「ロケットナックル!!」

吸い寄せられるエンプティにロックマンは黄金の右手を打ち出した。

「……ガッ。」

電磁バリアも意味を成さない程の右ストレートはエンプティの腹部をえぐり、そのまま……

「……こっちか!!」

退屈そうに寝転んでいたアルの方へと向かっていった。

アルは起き上がり、瞬時に左へと身体を反らす。そしてそのまま回し蹴りを手へと叩き込み、エンプティをその場に落とした。

落とされた右手はロックマンの方へとそのまま返っていく。

「これで決める! シンクロフォースビッグバン SFBデュアルサンダー!!」

ロックマンは両手を重ね、エネルギーの充填なく一人でジェミニサンダーを打ち出した。



「ちい！！やむを得ないか！ゲート開門！！」

アルは自らのハンターを前へと出したが、もはやそれは遅すぎた。

アルとエンプティに向けられた雷撃はそのまま天へと突き抜けていった。

そしてウエーブロードから少々焦げたエンプティともう一つ、ノイスドカードが焼け焦げながら下へと落ちていく。

ジェミニ・スパークが落ちていくエンプティをそのまま拾い上げた。この勝負が決した瞬間だった。

### 第三十話 天駆ける雷撃（後書き）

早くもこの作品も三十話突破しました。いろいろとありましたがまだ頑張つていきます！

先に補足事項、エンプティの能力ですが若干変更されています。

雷の落ちた場所が召喚パネルになる点、そして召喚するウィルス、最後にサンダーボルトブレイド（笑）

最後のやつは作者のノリです。気にしないで下さい。

そしてもう一つ、シンクロウェポン二つ目解禁です。

能力はほぼジェミニ・スパークの能力。プラマイの磁石能力は“1”のアレをちよつといじつただけです。

……はい、オリジナルないです。考える頭とアイデアが欲しいです。

次は誰にしましょうか……ウェポンの数はエグゼシリーズにあわせて五つか六つほどに絞ろうと思っております。

今回も読んでいただきありがとうございます。今後ともよろしくお願ひします。



### 第三十一話“扉”（前書き）

オジさん、感想ありがとうございます。この場を借りてお礼申し上げます。

それでは第三十一話どうぞ！

### 第三十一話 “扉”

「……………ロックマンよ。すまない。」

ジェミニ・スパークに両脇から抱えられたエンプティは苦しそうに謝罪の言葉を口にした。

「エンプティ。一体何故君がここにいるのか教えてほしい。」

ロックマンはこの場で感じていた最大の疑問を口にした。

ジェミニ・スパークがいるのは分かる。アルは恨みのあるロックマンを襲撃にきたといったら……………まあ納得できるだろう。ならエンプティがここにいる理由は何か。

アルはここにエンプティがいたのは偶然と言っていた。問題は敵のいうことを信じるのだが、アルがここで嘘をつくメリット・デメリットはなさそうだ。

多分ホントだろう。なら単独犯であるということだ。  
理由は……………

ムーを潰されたから？

ドクターオリヒメが捕まったことに対する復讐？

理由が思いつかないわけじゃないが、どうもじっくりこない。そしてロックマンに謝った“理由”も。

「ああ。」

エンプティの口からその理由が話されようとした。

が、まだ戦いは終わりではなかった。

「クイックドロウ!!」

先程の雷撃で煙にまかれていたアルの方から二発の銃撃音が発せられる。

「っ!!」

三人が反応した時にはもう銃弾は転がっていた。

一発はエンプティの電磁バリアに寄って阻まれ、もう一発はロックマンの右足を掠めてウェーブロードに着弾した。

当たり所が悪ければ彼らの未来は決まっていた。

「やってくれたね……ロックマン!!」

煙から出てきたのはススマミレでボロボロのアルと彼の両側に“浮かんでいる”二挺のピストルだった。

アルの表情は先程までと違い、怒りに満ちていた。

「バカな!なんで“生身”でアレを喰らって無事なんだ!!」

ジェミニ・スパークBは驚きの声を上げた。それはジェミニ・スパークWも、ロックマンも同じだった。

先程の攻撃はジェミニサンダーそのものだった。強力な電波人間でさえ、ただではすまないのに服が焦げているだけというのは非常におかしいのだ。

「それをこれから“旅立つ”君たちが知る必要はあるか？」

アルは鋭く冷たい怒りに満ちた瞳で四人を睨んだ。そしてアルは自らの漆黒に染められたハンターを取り出す。

「この俺の服をこんなにしてくれたんだ。この償いは死を持って償え！」

アルの戦闘体勢からロックマンとジェミニ・スパークは再び構えた。

しかし既にシンクロウェポンは解除されており、連戦とシンクロウェポンの副作用で三人の肉体はもうボロボロだった。

「（まずい。これ以上は……）」

そんなロックマンの焦りに反して、アルは自らのハンターを天へと掲げた。

「電波変換！ダブルアール……」

アルは電波変換するために合言葉を紡ぎ出す。しかし……

その言葉は完結することはなかった。

「フォトンバインド。」

「アル、遊びすぎ、リーダー、失格。」

どこからか現れた二体の電波人間によってアルは青い何かで縛りあげられていた。

「リンクス・アマゾネス！」

一人はWAXA襲撃実行犯、リンクス・アマゾネス。

そしてもう一人は銀を基調としたスーツに、両手首、両方の踵に何か排出構のような筒状のパーツの着いた青いバイザーの女性電波体だった。

まるで近未来的にいそうな、或いは使徒と戦う少年少女の服装のよ  
うな、そんな格好をしていた。

「……………ロックマン。」



「へえ？彼が親父を倒した星河スバルね。どれくらいのものかちょっと味見しようかな？」

近未来少女の電波体の方がロックマンに興味を見せた。

「……ダメ。任務ある。帰宅、先。」

「はいはい。プログラム始動。ゲート103開門。」

アルを抱えたリンクス・アマゾネスは縛ったアルに一言も言わせず、いや、言葉を発する前に……目の前に不意に出てきた“木目の扉”へと入っていった。

『なっ！？逃げるのか？』

「逃げるだなんてやだ、あなたたち“今の状態”で私に勝てると思うの？」

近未来少女の電波体は「冗談でしょ？」と言わんばかりの顔をしてウォーロックの方を見た。

その言葉には“命を握ってるのは誰か考えて”というニュアンスが入っている。

それを感じたロックマンはウォーロックに比べたら冷静だった。そして本能的にも分かっている。

彼女もかなりの実力者であるということ。

「ロック……今はダメだよ。」

『ちいっ!』

ウォーロックは舌打ちしてハンターの中へ戻っていった。

「うんうん。星河スバルは賢いみたいだね。そうだ!お土産に私の名前を覚えておくよ!私はオータム・サイバー。人間の時は“アキ”。以後よろしくっ!」

そう名乗ったオータム・サイバーはリンクス・アマゾネスと同じく扉の中へと消えていった。

ボタンと閉じられた扉はノイズ音をたてて直ぐさま消えていった。

「……スバルくん。先にウェーブアウトしようか。」

「分かったよ。」

勝利の余韻に浸れることは出来ず、ロックマンとジェミニ・スパークはエンプティを連れて、中学校屋上へとウェーブアウトした。

- - - - -

「むっ……改めて礼をいう。星河スバルと……」

「双葉ツカサ。よろしく、エンプティさん。」

「よろしく。」

なんだかんだ言って初対面なツカサとエンプティは自己紹介の握手を交わした。

「で、エンプティは何故あそこにいたの？」

「ああ。我が主“オリヒメ様”からだ。「星河スバルに話したいことがあるから来て欲しい。」との伝令だ。」

「ドクター……オリヒメが？」

スバルはエンプティの言葉に警戒の意を見せた。スバルが聞いた話ではドクターオリヒメはムーの事件後、捕まって収監中とのことである。

捕まった時からもう危険な様子ではなかったが、彼女が一体何の用事なのか気になった。

「ああ。オリヒメ様は今回の案件のため、現在WAXAに特別に所属している。暁シドウもこの行動は知っているからな。」

「暁さんまで!？」

「……ってことは相当重要な事件ってことだね？」

「双葉ツカサ、その通りだ。暁シドウからも伝言を預かっている。」

エンプティはスバルとツカサのハンターに直接電波を送った。

二人はハンターに送られてきた伝言を一緒に見た。

が、その前に画面上ではウォーロックとジェミニが何かと格闘していた。

「ロック、どうしたの？」

『暁のヤロー、ウイルス添付しやがった。』

『……迷惑極まりない。』

アハハハ…とスバルとツカサは顔を見合わせて苦笑いした。

“この伝言を見たらエンプティについてすぐに指定の場所に向かってくれ。なおこの伝言は見たらすぐ消すように。”

「（だからウイルス添付したのか。）」「

要するに見られるなということである。

「……良いか？学校には後で伝えておくとのことだ。ついてこい。」

エンプティはリカバリーのカードを何枚か使い、すぐさまウェーブロードへとのった。

それにツカサが電波変換して続く。

『暁のヤロー覚えてとけ……スバル！行くぞ。』

「あつ！まだ先生にもミソラちゃんにも何も言っていないけど……」

『エンプティのヤツが言っていたら？後で伝えるってな。今は……  
急いだ方がいいぜ。』

スバルがビジライザーをかけて見てみると既に三人はウェーブロード上を進みだしていた。

「そうだね。トランスコード003！シューティングスターロック  
マンー！」

スバルとウォーロックも三人の後をおっかけて走り出した。

第三十一話“扉”（後書き）

あー……暑いですね。

昨日の昼間、母から衝撃の一言を言われました。

「今節電だから日中エアコン禁止ね。」

……

……

…

（・・）（えっ・・？）

数秒フリーズ。あまりの地獄の宣告に死を覚悟しました。いえ、これは死刑宣告です。

そんな理由から一日だけ学校の部室で執筆してきました。（更新は夜ですけど）

いや、学校までは15分あればいけるんですけど……ね。

はい、いろいろとあるんです。いろいろと。

隣で後輩（男）が自分で持ってきたらしい』とある魔術の 書目録』  
を読んでいる中、執筆してました。漫画は私の学校は持ち込み禁止な  
はずなんですけどね。

なお、私の正体はばれておりません。ばれたら間違いなく遺書をか  
いております。

はい。

そんなどうでもいい作者の一幕でした。  
今後ともよろしく願います。

第三十二話 最重要機密施設（前書き）

台風のおかげで部活潰れてしまったので思ったより早くかけました。

オジさん、度重なる感想ありがとうございました。

それではどうぞ！



## 第三十二話 最重要機密施設

ロックマン、ジェミニ・スパーク、エンプティの三人はコスモウエーブを通って“とある場所”へと向かっていた。

WAXAを通り越し、三人が向かっていたのは……

「ここは……シーサーアイランド？」

スバルたちも行ったことのある常夏の楽園、シーサーアイランドだった。

電波世界からも見回せる青い海と珊瑚礁、そして観光客に屋台と人の賑わいもすごい。

そんな様子を見回したら言ってしまうのが……この名言。

『……見る！人がゴミのようだ！！』

「「「……ジェミニ??」「」」

『ふっ……』

いつの間にかユーモアプログラムを組み込んでいたらしいジェミニにロックマンとジェミニ・スパークは呆然としていた。

「……ツカサくん。」

「……何とかしとくね。」

すぐさまジェミニ・スパークWはハンターを動かし始めた。

「ロックマン、ジェミニ・スパーク、我々の行き先はこっちだ。」

エンプティは特に気にした様子もなく、三人をシーサー城へと誘こざなつた。

シーサー城の中もやはり観光客で溢れている。二年前のように緊急のWAXA本部となっていることはない。

「……ここだ。」

エンプティの目の前にあるのは……シーサーアイランドの環境システム。

「環境システム？」

『これが一体なんだってんだ？』

「すぐに分かる。」

エンプティはシステムの前に立つと“何かのアクセスキー”を取り出した。

「アクセスコード認証……プリズンロード、オープン。WAXA・AA001。」

エンプティがその場でアクセスコードを入力すると、システムへの入口とは別にノイズウェーブのような入口が現れた。

「!」

「すぐに入ってくれ。」

エンプティに言われてロックマンとジェミニ・スパークはその入口へと足を踏み入れた。

二人が中に入ると真つ暗の中に光の道が一本走っているのが見える。音もなく、まるでここが地獄へ向かう一本道かのような不気味さをももじだしていた。

一番最後にエンプティが入口を通ると、すぐさま入口は封鎖された。

「エンプティ、ここはどこに繋がってるんだ？」

「この道は“世界”最重要機密の場所、バミューダ・プリズンへと繋がっている。」

『バミューダ・プリズンだと?』

「左様。バミューダラビリンスの中にある世界で一番脱獄不可能に近い刑務所だ。そこに我が主、オリヒメ様がいる。ひとまず進むぞ。話は歩きながらだ。」

エンプティを先頭にロックマン、そしてジェミニ・スパークと続いた。

「バミューダラビリンスってムー大陸のあった電波異常の強い危険地域……だったね。」

「ツカサとスカイウエーブを通った時に封鎖されてた場所だな？」

「そうだ。沈んでいたムーの影響で磁場がかなり入り組んでいた。ラ・ムーが破壊された今もその影響は強い。だから電波体であれ、侵入は非常に困難を極める。」

バミューダラビリンスが影響をもたらすのは電波体だけではない。飛行機や船、入ってきた乗り物の機械を狂わす。

ハープ・ノートのように何らかの対応が出来なければ目的の場所にたどり着くことはできないのだ。

電波を狂わせる、つまりは電波連絡も不可能で、行き来も不可能。

『情報を秘匿すれば完全に隔離された……場所となるわけか。』

「さすがは雷神ジエミニ。その通りだ。ここへの行き来は世界で認められた数名しか出来ない。今回は特例だ。このアクセスコードもオリヒメ様の部屋に“直接”続いている。」

特例とはいえど、その他の秘密はやはり教えられないらしい。

そんなことを話していると光の一本道に出口が見え始めていた。

「エンプティ。」

「出口だ。この部屋にいるのはオリヒメ様と客人が二名。通信機器は繋がらないからそのつもりで頼む。」

ロックマンとジェミニ・スパークは三人互いに頷いて、光差し込む出口に足を踏み入れた。

-  
-  
-  
-  
-

彼ら三人がトンネルを抜けると見えてきたのは……

「……………刑務所だよね？」

「……………のはずだよ？」

「……………はずだぜ」

『エンプティはそう言っていたな。』

見渡す限り、難しそうな本がびっしりと詰め込まれた本棚がおかれた部屋だった。

広さも数十畳のレベルではない。ホントに小さな図書館ぐらいの広さはある。

ロックマンが隣にある本の背表紙を眺めてみると、そこには“審判

の樹運用における考察”、“ムー大陸文化論”と書かれていた。

「ここはオリヒメ様の資料室。あの方はここにいらっしやるが電波研究と考古学研究の権威。研究は“ある程度”許されている。」

エンプティはアクセスキーを閉じ、三人に電波変換を解除するように言った。

言われた通り、スバルとツカサは電波変換を解除した。

「ここからはウィザードは私以外は存在できない。決して忘れぬよう。それでは参ろう。」

書庫を後にし、スバルとツカサはエンプティに連れられてドクターオリヒメの待つ部屋へと向かった。

長い石造りの廊下を三人は歩く。

明かりはロウソクに見える電灯であるが、ちよつとした無機質感は否めない。

「ねえ、やっぱり刑務所には見えないよね？」

「うん。でも中世アメリッパの貴族を幽閉した塔なんてこんな感じじゃない？」

「ごめん、僕には分からないよ。」

スバルは典型的理系だった。

スバルとツカサがそんな会話をしつれとエンプティが一つの扉の前で立ち止まる。

そしてエンプティがノックをすると女性の声で「入ってよい」と返事がした。

「失礼します。」

「「こんにちは。」」

「久しぶりかしら、星河スバル、とそちらは双葉ツカサであったな。ようこそ、バミューダブリズンへ。」

そこには腰掛けて眼鏡に白衣のドクターオリヒメがいた。

そして部屋の中には彼女以外にも……

「おう！来たかスバル！ツカサ！」

「こんにちは。」

暁シドウとスズカがいたのであった。

「暁さんにスズカちゃん！？」

「彼女って確か女優のスズカさん？」

二人はシドウはともかく、スズカがこの場にいるのに非常に驚いたようだった。

スバルにとって、スズカと会うは約一ヶ月ぶり（ファントム・ブラックの事件）以来である。

が、まさか“こんな場所”で会うだなんて夢にも思わなかっただろう。

「はい。ちょっと私も暁さんに呼ばれて……」

スズカも呼ばれた理由が分からないらしい。

「（……この人選一体何だろ??）」

スバルはいろんなことがありすぎて（プラス疲れで）頭が回らなくなっていた。

「まあ、立ち話もなんでしょうから二人とも座って下さいな。エンプティ！二人にお茶をいれて差し上げて。」

エンプティは「はい。」と言って備え付けの台所へと向かった。

『（……似合わねえ。）』

エンプティの執事っぷりにウォーロックはこら思ったという。



## 第三十二話 最重要機密施設（後書き）

今回はただ移動と説明だけ。  
次回もそうなりますね。

さて、この話から“2”の黒幕、ドクターオリヒメの登場です。

服装はゲームではなく、アニメの大学教授としての服をイメージしていただければいいかと。

エンプティは彼女のウィザードとして再構築された設定です。

刑に服して監獄にいますが、もっとも彼女は脱獄する気はないです。

スバルの思う通り、今回、非常にバラエティー豊かな面子を集めてみました。

……なんでこのメンバーにしちゃったのだろうか。

委員長とか全然できてきてないのに（笑）

なんかわりとノリでやってしまいました。後悔はしてません。

今後ともこの作品をよろしく願います。

### 第三十三話 神を超える“神”

スッ……

エンプティが入れてたお茶（緑茶）は大変美味であった様子。しかし出された器は……

「（……アキンドシティ。）」

「（……エンドシティ。）」

日本各地の都市のお土産物の湯呑みだった。ちなみにアキンドシティには有名なお笑い芸人が、エンドシティにはシャチホコが刻まれている。

「うーむ、中々のお点前で。」

「恐縮です。暁シドウ。」

器を一回転半させてお茶をのんでいた（ちょっとズレてる）シドウの器にはシーサーが描かれていた。

「（どこからツッコむべきだろうか……）」

なんかいろいろと変なところが多過ぎて、スバルはどこから手をつけるべきか迷っていた。

「ドクターオリヒメ、僕たちをここに呼んだ理由を教えてくださいませんか？」

結局スバルはツッコむのを諦めて、進める気のなさそうなシドウを放置して話を切り出した。

「そうね、あなたたちをここに呼んだ理由はまず“私の研究”が今回の事件に関わるから、かしらね。」

そうやってオリヒメは一冊の分厚い本の表紙をスバルたち三人（話を聞いてないシドウ除く）に見せた。

「“ムーの子孫とその技術”ですか？」

「そうよ、スズカさん。私は以前ムーを復活させるためにあらゆる遺跡を調べていたわ。その結果、私はムー人は現在に繋がる文明の始祖ではないかと仮定したの。」

「要するに僕たちの遠い祖先はムー人にあたると、そういうことですね。」

「ええ。ここからは全部説明すると難しい話になるから要点だけ説明するわね。スバルくんは……これを覚えてるわね？」

オリヒメはスバルに一枚の写真を見せた。

「これは……ラ・ムーですよね？」

そこに写っていたのはロックマンが二年半前に戦ったラ・ムーの写真だった。

“ムーの電波体を無限に生産する”という神に相応しい能力とコア

である三つのオーパーツから放たれる強力なエネルギーを併せ持った、ムーの切り札であった。

スバルは今度はその写真をツカサとスズカに見せる。二人とも反応は微妙だった。

「なんか……カッコ悪いね。もっと神様っていったら白髭のおじいちゃんとか若くてカッコイイとか。」

「そうだね。なんか……仏像に近い、かな？」

スズカのコメントに全員が苦笑いした。

「で、これはまだ発表してないんだけどまた別のムーの遺跡にはこんな壁画もあったの。」

オリヒメはラ・ムーの写真の隣にもう一枚写真をおいた。

「えっと……そのラ・ムー??」

「いや、顔は似てるけど身体が違ってないかな？」

ツカサが二枚目の写真の幾つかのポイントを上げていった。

「ホントだ。手とか胸とか全然違う。」

「でも……これは一体何なんです？」

「そうね。私はさらに上位の……何か。もしかしたら“ラ・ムーがまだ未完成の兵器”で“ラ・ムーをも上回る兵器”ではないかって

考えているわ。」

オリヒメの告白に全員が息を飲んだ。ラ・ムーを上回る神。そんなのが実際に存在したらその被害は計り知れない。

「でもあくまで“仮定”」「いや、そうとも限らないぜ。」「

スバルの話をシドウが遮った。

「スズカやソラが暴走した時のノイズドカードに“超古代に存在し、現在に存在しない”成分が見つかったんだ。それでドクターオリヒメに調べてもらったら案の定だ。」

「まさか、アルはこれを……」

「ああ。アルだけじゃない。“マツリ”や“ハル”、俺やジャックと同じ“キングに育てられた子供たち”は恐らくコイツを復活させようと企んでる。」

「なっ!」

未だ実現していない神の創造。それが彼らの目的であった。

「アイツらの最終目的はそれを使って世界征服……といった所だ。理解できたか?」

シドウは真剣な顔をして全員に向き合った。三人も事の深刻さが理解できたらしく真面目な顔つきになる。

「で、でもこんな誰も造ったことのないものをどうやって造るんで

すか？」

「スズカさん、確かにムー人はできなかったわ。しかしそれが各地の子孫によって造られていたとしたら……どう？」

ムーが滅びた後、生き残りは各地へ散らばった。滅びたとはいえムー人。それなりの技術はある。技術は新しい文明を作り出した。

そしてその文明を強大にするには……やはり力。その証こそ“血”に伝わる。

歴史は意図せずとも繰り返されるのだ。

スバルはその一言にハツとして胸を押さえた。夢の中でスフィンクスが言っていた“心臓”とは……この“兵器の一つ”ではないのかと思っただからである。

そしてそう思っただのもスバルだけではなかった。

「スバルの持つ“神の心臓”も……奴らの狙っているそれではないかと俺は考えてる。」

シドウもスバルに言葉にして告げた。その瞬間、全員の視線がスバルへと突き刺さる。

ミソラやWAXAのメンバーにはそれを伝えてあったが、それ以外の人は誰も知らなかった。皆、衝撃のカミングアウトに驚くばかりであった。

「私も暁シドウの考えに同意……ですな。本日戦った星河スバルの

能力には二年半前にロックマンがオーパーツを取り込んだ時のような力を感じた。」

エンプティもシドウに続いてコメントする。

そんな視線が向けられる中、スバルはミソラに、ハーブに言われたある一言を思い出していた。

“今のスバルさんの周波数はソロに似ている”

思い当たる節は有りすぎた。スバルの疑惑が確信へと変わった。

「僕も多分そうだと思います。ドクターオリヒメ、その“パーツ”らしいのは幾つあるんですか？」

スバルがもう既に肌で感じた強大過ぎる力、これを敵へ渡してはならないと理解していた。

「そうね……恐らくは五つ。確実に判明しているだけだったら二つかしら。一つ目はスバルさんの持っている“心臓”<sup>ハート</sup>、二つ目はラ・ムーにあったオーパーツ。仮に名付けると言ったら“魂ね”<sup>スピリット</sup>。そして……」

オリヒメは写真にある設計図の“手”と“足”、そして“頭”を指さす。

「仮定に過ぎないけどスバルさんの持つ力は元々は“古代アフリック”のもの。ならそれに近い文明を探して行けば見つかるかも知れないわ。」

「そして、これが君たちを召集した理由にもなる。本来はWAXAで正式にやるべきなんだが……略式でな。」

「暁、さん？」

「星河スバル！」

「は、はい!!」

シドウは席を立って、スバル・ツカサ・スズカの名前を順に読み上げた。

それに合わせてビシッと立ち上がる三人。

「今ここにサテラポリス遊撃隊の復活を宣言する！まだメンバーはいるが、君たちに俺たちWAXAと一緒に戦ってほしい!!」

暁シドウが宣言したのは伝説の遊撃隊の復活、そして“キングの子供たち”との戦いの始まりだった。



### 第三十三話 神を超える“神”（後書き）

本日のあとがきは“かなーり”どうでもいい私的な話なので聞き流しても大丈夫です。

私がこれを執筆する際に聞くのが歴代流星・エグゼシリーズの音楽です。

他のも聞きますけど半分以上はこれです。

個人的には“3”のロケットの電腦が好みですね。

が、本日……

イヤホンが壊れました（今年三本目）

理由は単純です。

線が切れました。耳元で凄い嫌な音がしました。

部屋で大音量で聞くと確実に苦情がくるのでイヤホンは必須なので、す。

そんな話はさておき、今回はラスボス（？）の姿をちょっと出してみました。

そして“子供たち”。私が“3”をやってて一番疑問に思ったので私なりに考えて形にしました。

これで“親父”が誰か分かったはずです。

ですがまだまだ謎は散りばめてあります。次回も説明になりそうです。

さて、作者はフラグを回収できるのか？

……はい、がんばります。一先ず明日朝一でイヤホン買いに行きます。

違う???

気にしないで下さいまし。

### 第三十四話 遊撃隊再結成と“二つ目”

「遊撃隊の……再結成!？」

「ああ。どう見てもWAXAの力だけじゃこの相手には勝てない。巻き込んで悪いんだが頼みたいんだ。」

現状を冷静に分析した上での決断だった。シドウは三人に「頼む」と頭を下げた。

「あ、暁さん!頭を上げて下さい!」

「そ、そうですよ!“師匠”!」

慌てた三人によってシドウも頭を上げた。

そしてそのあと、スズカが発した一言にツカサが質問した。

「スズカさん。暁さんが……“師匠”？」

その問いにスズカはギクツと身体を震わせ、目を泳がせ、バレたのだと非常にわかりやすい表情は見せた。

何やら隠し通すか悩んだ様子を見せたが、スズカは諦めたようにシドウを師匠と呼んだ理由を説明した。

実はスズカは自分が無理矢理電波変換させられてから、自らのウィザードのアイスに電波変換の機能がついてしまったらしい。

しかし制御することは難しく、うまくいかなかったので、仕事で忙

しい合間を縫って、シドウに電波変換について教えてもらっていたのだ。

今ではかなりの実力がついたと評するのはシドウ談。

「私はスバルくんやミソラを見てきて、今まで自分に何が出来るか  
つてずっと考えてきたの。で、やっぱり私は応援してくれるみんな  
を幸せにしたい。そのためにこの力を活かしたいの。」

スズカははつきりとした口調で決意を述べた。スバルとツカサは静かに聞いていた。

「うん、すごいよスズカちゃん。」

「へへっ、ありがとスバルくん。」

「僕も……スズカさんと一緒に昔と違う。絆っていう宝物がある。  
僕も遊撃隊に参加しますよ、暁さん。」

そしてスズカに続いてツカサも遊撃隊参加の意志を明確に表わした。  
そしてスバルも……

「僕も二人と同じです。僕も大切な人たちを守りたいです。暁さん、  
こちらこそ僕も参加させて下さい！」

三人の返答にシドウは「ありがとう」と、そして「これからよろしく」と言って一人一人と握手を交わした。

オリヒメとエンプティはこの微笑ましい光景を温かく見守っていた。

「暁さん、他にも遊撃隊には誰が参加するんですか？」

「そうだな、今のところ声をかけたのはジャックとティアだけ。旧遊撃隊のメンバーにも声をかけるつもりだ。後は……まだ未定だ。だが今回の任務は緊急なものだ。メンバーが集まるのを待つことは出来ないんだ。」

シドウは自らのハンターを取り出し、一枚の地図を四人に見せた。

「ここは……チヨイナの有名な遺跡ですよね。」

「ああ。ここは古代チヨイナの“龍帝陵墓”ここに……“兵器復活のパーツ”が眠る可能性がある。」

シドウの説明にオリヒメが付け加えて説明をいれた。

「古代チヨイナ文明は昔、電波文明とは異なる独自の技術が発達した文明よ。だけど唯一この中に“電脳”らしき場所が近年見つかったの。」

スバルたちの使う歴史の教科書には“古代チヨイナ文明は水の力を利用した精霊信仰の文明”と書かれている。

間違ってもコンピューターのような物があるはずないのだ。

それなら当然何か“秘密”があるのだろう、と。WAXAの研究者たちは考えたのだった。

「しかもそれは発表されているから周知の事実。敵が知っていても……」

「「「おかしくない、ですね?」「」」

三人は事情が飲み込めた様で、声を揃えて確認した。そして、シドウとオリヒメも首を縦に振った。

「そこで遊撃隊初の任務はチヨイナの遺跡でのデータの探索及び保護だ。出発は明日!!」

「待って下さい!明日は金曜日ですって!」

「僕たち学校ありますけど……」

「問題ない!WAXA権限で休みにしてもらおう。」

シドウは親指を立てて任せとけと意思表示を見せる。が、やってることは悪い大人の見本だった。

「……………」

スバルたちはちゃんと先生たちと両親に謝って行くこと、そう誓った。

- - -

「それではドクターオリヒメ、今日はありがとうございました。」

「いえ、久しぶりに私もいろんな人たちと話が出来て楽しかったわ。エンプティ、暁さんたちを送って差し上げて。」

オリヒメに別れを告げてスバルたちは電波変換し、バミューダプリズンを後にした。

行きと同じく、エンプティが書庫の壁にアクセスコードを入力し、入り口を作る。

「今度の出口はオクダマスタジオへと繋がっている。私はここまでしか送れないがオリヒメ様も私も任務の成功を祈っている。」

「ありがとう、エンプティ。」

「御武運を。」

アシッド・エースとエンプティは握手して、それから一人ずつ通路へと入っていった。

そして最後のロックマンも入口へ入ろうとした時……

「星河スバル。最後に……オリヒメ様から渡すものがある。少々“荒い”が勘弁してほしい。」

エンプティはそう告げると、確認する間もなく微弱な電流をロックマンの心臓へと浴びせ掛けた。

するとロックマンの身体は共鳴したかのように黄色く光りだす。

「うっう！エンプティ、一体何をしたの？」

僅か数秒で発光は止まったが、ロックマンは苦しげに胸を抑えていた。

「ハートの制御プログラムだ。まだ完全に定着するまで時間がかかるため、倦怠感は隠せぬだろう。それに加え……暁シドウからの贈り物を加えておいた。」

そしてエンプティはもう一つ、データをハンター内に転送した。

「詳しくはそちらを読むがいい。ロックマンよ、君の無事を祈る。」

「ありがとう、エンプティ。」

ロックマンが入っていった瞬間、ゲートは封鎖され、辺りに静寂が漂っていた。



「スバルくん。ちょっと説明して欲しいかな。」

「……はい。」

オクダマスタジオから自分の家に帰ってきたスバル。家に入った彼のまん前にいたのは私服にエプロン姿のミソラだった。

「なんで僕の家にいるの!?」なんて質問は一蹴され、スバルはミソラに問答無用で玄関に正座させられていた。

「全くどれだけみんなが心配したか！荷物おいていつの間にかいなくなっちゃうんだもん！せっかく……デート（ボソツ）しようかなって思ってたのに。」

「はい。返す言葉もありません。」

スバルは“せっかく”以下の言葉を聞き取れなかったようだが、激しく怒るミソラにただただ身体を小さくしていくだけだった。

「ロツクくんも！スバルくん勝手に連れだしたらダメでしょ！」

『いや、それは暁のヤツに……』

「わかった？」

「はい。すみませんでした!」

スバルとウォーロックは仲良く土下座していた。さすがは息ピツタリである。

仲良く土下座をかます二人にミソラは……怒った顔でなく、小悪魔な笑みを浮かべていた。

「いつも心配かけるんだから……そんなスバルくんにはお仕置きが必要だよね。」

「な、なんですと?」

驚きのフレーズに顔を上げたスバルにミソラはさらにいたずらな笑みを見せた。

「明後日は私の引退ライブなの覚えてるよね?」

「も、もちろん。」

スバルはミソラからクリスマスイヴの日に直接チケット(特等席)をもらっている。もちろんスバルはその日を楽しみにしていた。

「で、転校して早々なんだけど明日チヨイナに行かなきゃいけないの。だから……」

ミソラはその日最大の笑みを浮かべた。

「明日はスバルくんも私と“ずっと”一緒に行動ねっ。これは“ふたつめ”のお願いだから……」

「はい。ミソラちゃんの言う通りです。明日お供します。」  
スバルに拒否権は皆無だった。

「よろしいっ！じゃあ冷める前にご飯いっ！」

ミソラはスバルの手を引いてリビングへと連れていった。既に時刻は6時を回っており、ちょうどいい時間である。

二人仲良くリビングへと現れたのを見て、大吾とあかねは席に座りながらニヤニヤしていたという。

もちろんその後ろでウィザードたちも微笑ましい光景にニヤついていたとか。

その日の夕食、ずっとスバルは顔の赤みがひくことはなかった。

「（……）とりあえず暁さんに明日は遅れますとだけメールしておく」  
「（う）」

さらにシドウにもからかわれないか心配になるスバルだった。

-  
-  
-  
-  
-

「あつ！今日スバルくん家泊まるからよろしくっ！」

「っ！！……ゲホッ、ゲホッ」

本日スバルに安息の時間は存在しなかった。

### 第三十四話 遊撃隊再結成と“二つ目”（後書き）

今日は部活の試合がありました……暑い中おもいきり“逝って”きました。

ちなみに“いく”の漢字が違うのは誤字ではありません。暑いです。地獄でした。

そんなことはさておき、今回のタイトルの通り“二つ目”がついに出てきました。

“一つ目”を覚えてない方々は十話に飛んでみてください。

暑いのにさらに……はい、すみません。公害一歩手前レベルです。損害報告は受け付けております。

今回はさらに酷くなるかもしれません。

さて、次回からチヨイナ編に入ります。“3”でいうとシーサーア  
イランド辺りです。

スバルたちと“四季の子供”の戦いも激しさを増していきます。そして“二つ目”の行方は！

非常に駄文な作者ではございますが、これからもどうぞよろしくお願いたします。

### 第三十五話 遊撃隊 イン チョイナ（前書き）

若干ゲームと違う設定を登場させています。詳しくは後書きにて。  
それでは三十五話どうぞ！

### 第三十五話 遊撃隊 イン チョイナ

「おー、ついにとうちゃーくー！ミソラ・イン・チョイナ〜！」

空港から外に出たミソラはうーんと背伸びした。現在ミソラはカモフラージュのために眼鏡と茶髪のウィッグをつけている。

それでも周りにいた人の何割かはミソラの可愛さに視線を奪われていた。

「ミソラちゃん、忘れ物！」

それに遅れること数秒、今度はスバルが走って空港の出口から出てきた。

スバルの手にはミソラのポーチが握られていた。ちなみにシーサーアイランドで盗まれたものとは別物である。

「ゴメンゴメン。ついはいじゃいじゃって……。」

「まったく、観光に来たんじゃないのよ。ほら、スケジュール分かってるの？」

ハープはミソラに釘をさすようにスケジュールを尋ねた。

「うっ……。確か十一時から打ち合わせで、えっと……。」

「一時半からリハーサル。その後確認を終えてからもう一回打ち合わせ、だよな？ハープ。」

『ええ。ちゃんと覚えなさいよ、ミソラ。スバルくん任せっぱなしじゃダメよ。』

「……はい。」

ハープのお説教にミソラは口を尖らせてふて腐れていた。

「そういえば僕ってリハーサルとかいたらまずいと思うんだけど…

…」

スバルは今気づいたようでハープに聞いてみた。ミソラとの“二つ目”の約束は“一日ずっと一緒にいること”である。

でもあくまでスバルはミソラのマナージャーでもプロデューサーでも何でもない。ただのファンである。

『そうねえ、浦方さんとか顔見知りの方なら大丈夫だと思うけど…

…』

「大丈夫！いざとなったら“主人”ですって言えばなんとかなるって。」

「『いや、さすがにそれは無理がある（わ）。』」

スバルとハープの予想をはるか斜めをいったミソラの方法に二人合わせてつつこんだ。その時スバルは微かに頬を朱くしていたという。



- - -  
所変わってライブ会場裏口

「終わったら電話するから！可愛い女の子についてっちゃダメだよ  
！」

「う、うん。大丈夫だから。」

空港からタクシーで二人で会場に向かい、そこでスバルはミソラと別れた。結局スバルの同伴は認められなかったのだ。

今生の別れかと言わんばかりにスバルの肩を掴んでなかなか離れないミソラ。

しかし実際は小さい子に注意して聞かせるような会話になっている。

結局ハーブと先に現地入りしていた日本のスタッフたち（女性）が三人がかりで引きはがすまですつとそのままだった。

『ほら！行くわよ、ミソラ！』

「えっと、スバルくん、それから……」

「響ミソラさん入りまーす。」

スバルに向かって手を伸ばすミソラがスタッフたちと一緒にドアの中へと吸い込まれていく。スバルの気分はドナドナを歌っている感じだった。

「ミソラちゃんってあんなキャラだったっけ？」

スバルはハンター内のウォーロックにそう呟いた。

『……知らねえよ。それより、暁たちとの約束までもうすぐだぜ。』

「うん。ミソラちゃんには“そのうち暁さんから呼び出される”とは言ったからいいよね。」

スバルは帰ってきた夜、両親とミソラに遊撃隊再結成の話だけ話していた。

ミソラは参加の意を表明し、大吾とあかねは予め聞いていたようでした。さほど驚いてはいなかった。

二人は非常に複雑な表情をしてスバルの参加に賛成も反対もなかった。

その後夕食を食べ終わったスバルはミソラに“また暁さんから連絡があるから”と伝えておいたのだ。

寝る前、スバルはウォーロックに嘘をついた理由を聞かれたが、理

由は「引退ライブに集中してほしいから」と答えた。

「ファンとしてではなく、友人として、自分の最愛の人として華や  
いで欲しかったのだった。」

スバルは人のいないところに行き、いつものように電波変換してシ  
ドウたちとの集合場所に向かった。

「……………こちら“歌姫”。星河スバルがやはり来ていたわ。……………ええ。  
プラン で確定ね。」

すぐ近くの黒塗りの高級車から一人の女性がスバルに視線を向けて  
いたことなど知らずに……………

-----

「来たか、スバル。」

「おはよう、スバルくん。」

「おはよー。」

既に待ち合わせ場所、龍帝陵墓（要するにデカイ古墳）のある公園の入口前にシドウ、ツカサ、スズカの三人が来ていた。

「遅れてすみません！」

「いや、大丈夫だ。今日は下見だけだからな。」

「下見……ですか？」

シドウの発言にスバルは聞き返した。

「そつだ。まあ実際見ながら説明するから、三人とも俺についてこい。」

スバルたちはシドウから公園の特別許可証を貰い、公園内へと入っていった。

公園内は近所のチョイナ人や観光客で賑わっている。

もともとこの場所は文化遺産に登録されてはいるためチョイナでも有数の観光スポットだ。

そんな場所に兵器のパーツがあるのだとスバルたちはとても信じられなかった。

「うわあ…、大きいですね。」

「ただの小さな山にしか見えないな。」

『『同感だ。』』

そしてその場所にあるそのお墓も……ただの小高い山にしか見えなかった。

ウィザードたちにも山にしか見えならしい。そんな中、アシッドだけは違つようであった。

『龍帝陵墓は紀元前4000年前に作られた皇帝のお墓です。当時の権力者は……』

「あー、アシッド。頭痛くなるからそついつのなして。」

『それは失礼。』

アシッドの無駄に長くなりそうな雑学講座は僅か数秒でシドウに止められた。

『ドンブラー湖のオーパーツのように妙な電波は感じねえぜ。』

『電波の流れも至つて正常。入口も見当たらん。暁、これのどくに電脳など存在するのだ？』

ウォーロックとジェミニは電波の流れを確認した上で質問した。

「そう、それが問題なんだよね。」

『シドウのいう通り、電腦の存在ははっきりしているのですが、その入口が見当たらないのです。』

アシッドはこの任務の一番の問題を隠すことなく明かした。

「入口が……ない？」

「それじゃ入れねえじゃねえか！」

「師匠？それただの無駄足と言っくんじゃありませんか？」

スバル、ツカサ、スズカの三人はシドウに詰め寄った。ツカサに至っては何か切れたのか、ヒカルの人格へと変貌していた。

「いや、だからその入口を探すのが……最初の任務だ。」

慌てて体裁を繕うシドウに三人と三体の視線はジトーっとした目線だった。あまりに見切り発車過ぎて呆れ返ってるらしい。

アシッドもシドウにフォローは入れていなかった。気持ちはスバルたちと同じのようだ。

が、その雰囲気はある人の一言で一気に変わったのだった。

「……入口はある。」

「えっ？君は……」

スバルとウォーロックはその人物の出現に驚くと共に身構えた。

それも無理はない。ロックマンと彼は幾度となく死闘を演じてきたのだから。

電波体としての実力は一、二を争い、その暗い瞳に孤高を宿す。

そして……ムー唯一の生き残り。

「まさかここで会おうとはな、星河スバル。」

「……ソロ。」

ロックマンを光とするなら彼は闇、対極の存在であるブライ、改めソロが姿を見せたのだった。

### 第三十五話 遊撃隊 イン チョイナ（後書き）

前書きの予告通りにオーパーツの設定について補足！

各バージョンについて一つのオーパーツでしたのでアニメの設定と混同させました。

博物館展示にはベルセルク、ドンブラー湖にダイナソー、そしてナスカにシノビのオーパーツが存在していたとします。

ちなみに戦いには全て勝利するも、バミューダラビリスにて原作通り奪われたとしました。

……（ミソラの）キャラも設定も原作崩壊です。すみません。

こんな小説と作者でよろしければ、今後ともよろしくお願いします。



## 第三十六話 四方の守り神

「フン。まさかWAXAの狗いぬどもがここにいるとはな。」

ソロは相変わらずの見下した視線で四人を睨んだ。

態度が気に入らないのか、スズカがムツと顔をしかめて一步前に出ようとしたが、シドウはそれを止めて逆に聞き返した。

「そついう君こそここに何のようだい？君も……“兵器”が狙いか？」

「下らん。そんなもの俺には関係ない。……“奴ら”へお礼をしにきただけだ。」

「奴らってまさか“子供たち（チルドレン）”！？」

「ああ。正確に言えば“四季の子供たち（フォース・チルドレン）”だ。奴らがムーの技術を悪用しようとしたのと……ある奴に借りがある。」

スバルの質問にソロは顔をしかめながら答えた。

どうやら独自のルートでソロはここへきたらしい。

「奴らの狙いはここにある“頭脳”だ。今は非常に大きな力でブロツクされているが、それを解くには四つの守り神を統べる以外に方法はない。」

『なるほど。チヨイナに伝わる四方を守る守護神、青龍・朱雀・白虎・玄武ですね?』

アシッドの言葉に鼻を鳴らし、ソロは肯定した。

「どこにあるかまでは知らん。せいぜい頑張ることだな。」

ソロはそれだけを告げ、四人の真ん中を横切って出口へと向かっていった。

「ソロ!」

スバルは彼を大声で呼び止めた。ソロは足を止めるが、決して振り返ることなくスバルに答えた。

「……星河スバル。何回言わせる気だ?俺は誰とも関わらない。そしてお前も倒すべき敵に変わりはない。これ以上お前の下らない絆ごっこに巻き込むな。ヘドが出る。」

スバルの思いをソロはしっかりとわかっていた上で拒絶し、歩き去った。

『スバル……』

「分かってるよ、ロック。」

スバルは自分の言葉がソロに届くはずがないことは分かっていた。

二年以上答えは同じ、そして恐らくこれからも。だが……スバルは諦めたくなかったのだ。

ウォーロックは黙ったまま、スバルから視線を外さなかった。

「何よっ！あの人！」

「失礼にもほどがあるね。」

スズカとツカサはソロの態度にイライラを隠さずに出していた。

「まあ、アイツはそうだからな。」

シドウもこうなることは分かっていたみたいで諦めていたかのように頭をかいた。

「ですが、彼のおかげで入口への手がかりが見つかりました。おおよそのポイントは分かりましたよ。」

アシッドはそう言って、マテリアルウェーブでチヨイナ首都の地図を広げた。

四人と三体は目の前に展開された地図を覗き込む。

「今映し出されているのはこの公園を中心に十キロ圏内の地図です。先ほどソロが口にしてた四つの場所は古代チヨイナ時代の城門の場所ではないかと私は推測しました。」

「も、も、門？そんなことあるの？」

「左様。現在はありますが古代には存在したのです。」

古代よりチヨイナの都市は常に城壁で囲われ、通り抜けるには東西南北の城門をくぐるしか方法はなかったという。

またいろいろと長く説明しだしそうなアシッドを予想してか、一足速く理解したシドウが説明を始めた。

「簡単に言っと公園の東西南北のどこかに一つずつ鍵があるってことだ。アシッド！データ入力頼む！」

『はい』

アシッドが地図の中に新しいデータを入れていくと、疑わしいポイントが四ヶ所、マップ上に赤い点となって現れた。

その中の一つ、東側のポイントは……

「ここ、ミソラちゃんのライブ会場だ。」

スバルの指摘した通り、明日行われるミソラの引退ライブ会場だった。

「後は……よく地図だけだとよく分からないね。」

「うん、北の方にあるのなんか住宅街っぽいし……観光地じゃないよね。」

ツカサとスズカの言う通り地図の表示だけではよく分からなかった。

「ここじゃ言ってもしょうがないか。うっし！じゃあ今から一つずつポイントを探索していくか。全員ついてこい。」

「了解っ！」「」

シドウたち遊撃隊は電波変換して一つずつ推測上のポイントに向かうことにした。

「……兄さんたちは予想通り鍵を取りにいったね。」

「……普通、入るの無理。私たち“だけ”可能。」

「そうだね。今のうちに僕たちも……」

「仕事。」

「うん。それにしても……ここもスフィックスと同じで美しくない。」

スケッチブックを持った彼と口数の少ない彼女は二人、入場料を払って公園内へと入っていった。

その頃のミソラ……

「はい！tWins<sup>ツインズ</sup>さんオツケーです。リンさん次お願いしまーす。

中国人のアーティスト、リンが舞台のリハーサルへと向かっていくのを舞台裏でミソラは見ていた。

「ねえハープ？私リンさんと会ったことあった？」

『私の覚えてる限りそのリンって子と会ったことはないわ。それにしてもどうしたのミソラ？』

「うん、さつき目があった時彼女に睨まれたんのような気がしたんだ。

芸能界においてミソラの人気はかなりのものである。その可愛さから歌声、そして表裏ない純粹なまでの明るい性格から裏方でも非常に人気がある。

しかし残念ながら決してきれいな世界ではなく、同じ業界人の軽蔑や嫉妬の目線にもさらされてきたこともあった。

しかし今回ミソラが感じた視線はそんなものではなかった。

その視線にミソラはリンの存在に言い知れぬ不安を感じていた。

『……ねっミソラ、緊張してるんでしょ？』

「ハープ？ひよ、ひよっと（ちよっと）！」

『うりうり』

ハーブはミソラの頬を軽くつねってみよ〜んと横に引っ張ったのだ。幸いにしてミソラが話をする前に舞台裏の隅へと移動したため誰にもその顔は見られていなかった。

「ちょっとハーブ！何すんのよ！」

『ごめんなさい。でもアナタ気張りすぎよ。ミソラらしくないわ。』

「ハーブ……」

ハーブは無駄な力を抜いてもらうためにおちゃらけてみせたのだった。ハーブはミソラにとってウィザードでもあり、かけがえのないパートナーである。

こんなときミソラが何を考えているかなんてハーブには容易に分かるのだった。

『変に緊張するからそんな風に感じちゃうのかもしれないのよ。その子はその子、ミソラはミソラでしょ？それとも、明日スバルくん……』

「あー！それはダメ〜！〜！」  
が、少しやり過ぎである。

いきなり大声を出したミソラは何事かと振り向いたスタッフたちに

謝り倒していた。

「もうっ！ハープったら！」

さっきちょっとした事故でミソラは若干むくれていた。だが、緊張がほぐれていつものミソラらしい表情にも戻っていた。

そして離れたところにいるハープはミソラにむかってブイサインを送ってた。

ミソラも「がんばってくる！」とばかりにブイサインを返す。

「（……あとでロックくんをけしかけるんだから。そしてスバルくんにも付き合ってもらおう。）」

ミソラはハープに感謝しつつも後でちょっとした復讐をどうするか考えていた。そしてスバルのとばかりは免れそうにない。

「次は響ミソラさんお願いしま〜す！」

「はいっ！」

ミソラはマイクを握り、大きく深呼吸してから光指すステージにむかって走り出した。

まだりハーサルなので客席には誰もいない。しかし明日にはいろんな人がやってくる。



ファンにクラスメート、親友に愛しの人まで。

ミソラはやってくる人たちに全てを伝えたかった。そしてそのためにも……今できることをやろうと決心していた。

「一曲目いきます！まずはこの曲、Shooting Star！」

### 第三十六話 四方の守り神（後書き）

「あっ！何でジャックとクインティア先生は任務に参加しないんですか？」

「ティア曰く“愚弟を叩き直す”そつだ。」

「（クインティア先生、ジャックの点数許せなかったんだ）」「スバルとツカサは顔を見合わせ、遠い空の向こうの親友に祈りを捧げた。」

北の方へ向かう電波体たちの会話でした。

今回は本編外の会話を収録してみましたがいかがでしょうか？

そして次回は遂にライブ開幕します！

暗躍する子供たちに遊撃隊はいかに立ち向かう？

そしてスバルとミソラの関係に進展はあるのか？

その他見所たくさんある……と思います。

よろしければ今後もお付き合いのほどよろしくお願い申し上げます。

### 第三十七話 ブラザーバンド

次の日の朝、ミソラの引退ライブ当日。

只今の時間は七時。冬なのでやっと日が昇り始めたくらいである。そんな中、一つのベッドで一人が目が覚ました。

「……………んう。」

スバルは目をこすって枕元のハンターをとろうと右手を伸ばした。

が、その時スバルは自らの左半身に何やら違和感を感じた。左側だけ身体が重いのだ。

正確に言えば左腕に何か絡まっている感じである。そしてその触感は何やら柔らかい。

「……………んう?」

スバルはまだ半分寝ぼけてながら自分の左側に視線を向けた。その布団は不自然に盛り上がった。

そして不審に思いながらスバルが布団を捲った瞬間……

「× ……!!!???」

スバルは我を忘れて、地球外言語を用いて叫んでいた。

後にスバルは語る。

「あの日は天国と地獄をいっぺんに味わった日」だと。

ちなみにその叫びが目覚ましとなり、その部屋にいる全ての者は覚醒せざるをえなかったという。

そしてライブ会場……

『おい、スバルまた鼻血だすんじゃないぞ。委員長に見つかったらエライことになるぜ?』

「変なこと言わないでよ！僕だって……忘れようとしているんだから。」

そういうスバルの言葉はだんだんと尻すばみに小さくなっていった。

そして何かを思い出してしまったのか、スバルの顔はだんだんと真っ赤になっていき、鼻をつい押さえてしまった。

幸いにしてほとばしる赤い鮮血は流れていなかった。

ウォーロックはそんなスバルを見てゲラゲラ腹を抱えて爆笑していた。

そんなウォーロックをスバルは恨めしげに睨んだ。

『もうすぐ委員長たち来るぜ？シャンとしとけよ。』

まだ笑いを堪えているウォーロックにスバルは言い返せないのが悔しかったらしく、不機嫌なまま誰かのブロンズ像に背をもたれた。

現在スバルはライブ会場前の広場で当日来るはずのルナ、ゴンタ、キザマロと待ち合わせ中である。

遊撃隊任務とミソラの二つ目のお願いにより、スバルは今日のライブを前日入りしている。

本来はルナたちと一緒に行く予定だったのだ。そんなことで昨日のスバルはルナたちと別行動することにしたのだが、ドタキャンした時のルナの顔をスバルは忘れていたりする。（朝の衝撃のため）

要するに修羅、ないしは般若である。理由は推してはかるべし。

そんなに命に関わりそうなポイントを忘れているスバルはやってくる三人の姿をみつけて歩き出した。

「委員長！ゴンタ！キザマロ！」

「おっす！スバル！」

「おっい、スバルくん！」

ゴンタとキザマロはスバルを見つけると二人して駆け出した。

ルナは何も言わずにツカツカと、そしてゆっくりと歩いてくる。その姿には何かオーラを放っているようだった。

再会して話を始めてからしまった三人はそのオーラに気づくことはない。そして……

「スバルくん？」

ルナのただスバルの名前を呼ぶ一言だけでピシッと三人の動きが止まった。

「は、はい……」

壊れた操り人形のようにスバルの首がギギギギ……とルナの方へと向いていく。

スバルはやつと思いついたらしい。その顔は恐怖の色に染まっていた。そしてルナの顔も怒りの色を隠してさえない。

「スバルくん、何か私に言うこと、あるわよね？」

「それは……その……」

「あ　る　わ　よ　ね？」

「じゅめんなさい！」

スバルは光の速さで土下座をかましていた。天下の往来にも関わら

ずその動きは速かった。それはスバルに刻まれた本能としか言い様がない。

「ちょ、ちょっと何してるのよ！……ゴンタ！スバルくんを抱えなさい！ひとまずっ……ここから逃げるわよ！」

「は、はいっ！」

スバルのとつた行動に驚きながら、そして通行人に奇異の目で見られ始めたのに気づき、ルナたちはその場からダッシュで逃げ去った。

ちなみにスバルはゴンタに荷物担ぎされていた。

さて、改めて人通りの少ない所にルナたちは場所を移した。

そこからまず三人へ先ほどの土下座に関してありがたいお説教が五分ほど行われ、そして本題へと移った。

「さて、スバルくん！私に黙っていたことあるわよね？」

「うっ！それは……」

スバルはとっさに口をつぐんだ。

「（昨日のことなんて……言えるはずがない！）」

ちなみに“昨日”の二人は中学生にあるまじき行為はされていない。買い物に付き合わされ、二人で食事をとり、話とゲームで盛り上がった後、“別々”の部屋で眠りについたはずである。

スバルも自信をもって言えるが、その相手がミソラである以上、下手をしなくても言った時点でアウト確定なのだ。

黙ったままのスバルに業を煮やしたのかルナは腰に手を当てて次の切り札を切ってきた。

「黙ってても無駄よ。ツカサくんから聞いてるんだからね！」

「なっ！（なんでツカサくん知ってるの！？）」

スバルの心中は揺れに揺れた。確かにツカサとは昨日任務関係で一緒にいた。だけど任務終了後別れたのである。それ以降は会っていない。

そしてツカサは秘密をむやみやたらにバラすような非常識な人間でないことはスバルもよく知っていた。

「観念するんだ！スバル！」

「そうですね！何で僕たちにも話してくれなかったんですか！」

既にゴンタとキザマロにも知れ渡っている。右、左と見てみてもスバルに味方も逃げ場は存在しなかった。

万事休すっ……



スバルは覚悟を決めて目をつぶった。

「なんで遊撃隊のこと言ってくれなかったの！」

「はいつ？」

思わぬ話題にスバルはすつとんきょうな声を上げてしまった。

「ツカサくんから聞いたわよ！昨日から遊撃隊の任務だったこと。何で言ってくれなかったの！私たちブラザーでしょ！」

「そうです！スバルくんはまた一人で抱え込んで戦ってるじゃないですか！」

「俺たちじゃ大した力になれないかもしれねーけどよ、なんでも協力できるダチじゃねえのかよ！」

ルナ、ゴンタ、キザマロはそれぞれの思いのうちをスバルに叫んだ。

三人は、いやミソラたちもだが肝心なところでスバルとウォーロツクの力になれないことを悔しがっているのだ。

もちろんスバルはそう思っていない。むしろ絆があるからこそ立ち向かっていけるのだ。

しかしそれを見届けるだけしかできない人は無力感に襲われ、ただ祈ることしかできない。彼女たちはそんなことを何度も経験していた。

だからこそ……力になりたいのだ。

「心配するだけは嫌なの！ 私たちもあなたと戦うわ！ それがブラザーでしょ？」

ルナは呆気にとられてるスバルに自らのハンターを見せた。ゴンタとキザマロもルナに続いてハンターを見せる。

三人の画面には共通のレゾン、“遊撃隊の任務成功”の文字がテカテカと記されていた。

「みんなゴメン！」

スバルは今度は土下座せずには頭を下げた。それにはスバルの中にあるいろんな意味が込められていた。

「分かればいいの。さっ！ ミソラちゃんのライブ観に行くわよ！」

納得したルナはライブ会場へと向かい始めた。四人の席は特別関係者席、VIP中のVIPである。

「うん！」

「おう！」

「はいです！」

三人もルナに従ってついていく。四人の絆はさらに強くなっていた。

そして……波乱のライブは幕を開けたのだった。

### 第三十七話 プラザーバンド（後書き）

Aハーツのちょっとした舞台裏

「侵入」

深夜……

「お邪魔します」

規則正しく寝息を立てるスバルのベッドの隣にはハープ・ノートが立っていた。

「……スバルくんの寝顔可愛いかも」

電波変換を解除したミソラはじっくりスバルの寝顔を見つめる。幸せそうな寝顔にミソラも微笑んだ。

「（ハープ、よろしくっ！）」

『（任せなさいっ！）』

スバルのハンターにはハープが口封じのために入っていた。

ちなみにサイレントモード（ハープ設定）ウォーロックの悲鳴は聞こえない。

やがてミソラはスバルを起こさないようにそっとベッドの中に入っ  
ていき、左腕をギュッと掴んだ。

「明日はスバルくんのために頑張るから……覚悟してねっ」

そして彼女も目を閉じたのだった。

朝の事の裏話です。実際こんなことがありました。

いろいろと書きたくても書けないのであとがきで書いていくことに  
します。

「もっとこれが見たい」という感想あればあとがきで再現するかも  
しれません。なんとか……がんばります。



”(コンタ)と“53150”(キザマロ)。

会員ナンバー“120874”(スバル)などまだまだファンクラブ新米に過ぎないのだ。

さらにコンタとキザマロはまだまだ新米なスバルにミソラファンクラブ心得を教え込もうと熱弁を奮い出した。

スバルは聞いてはいるものの顔は引きつっている。

「(ダメだ!このテンションについていけない!)」

スバルはミソラのコンサートにも何度も行っているが、基本会場のボルテージにノリすぎないタイプ。静かに聞いているほうが多いのだ。

そんなスバルはライブ前にして若干グロッキーになっていた。

「アナタたち、少しは落ち着きなさい。仮にも私のブラザーなんだからはしたない真似しないでよね。」

凜っ!とした顔で三人を注意したルナ。しかし三人の表情は……

「……(じとー)……」

「な、何よ!もうすぐ始まるんだから前向きなさい!」

三人のじと目をくらったルナは注意をやめて、慌てて舞台の方へと目をそらした。

ルナの今の衣装は両手にゴンタたちの持つてるうちわ、ピンク色のミソラファンクラブ会員のはっぴ、鉢巻き装備である。

ぶっちゃけここにいる四人の中で一番気合いが入っていた。

そんなことがあったが、スバルが舞台の方を見ると既に舞台の転換が終わっていた。

マテリアルウェーブで造られた会場はオクダマスタジオの時と同じくミソラらしいピンク色を基調としている。

だが、二年前よりもどこか大人っぽさを感じさせるそんなデザインだった。

そして三枚の巨大スクリーンにはミソラをモチーフにしたキャラクターが映し出されていた。

もうすぐライブが始まるとわかり始めたのか、会場がガヤガヤと再び騒ぎ始める。

「うつつ！俺緊張してきたぜ……」

「僕もです。委員長……」

「そ、そうね。けど私たちは招待されてるんだからどっしりと構えていればいいのよ？」

「う、うん。」

ルナの言っていることはどこか一歩ずれていた。そして四人とも霧



困気に完全にのまれていた。

何回も行っていてもやはりコンサート前は緊張するものである。

四人がガチガチのまま今か今かと待っていると、スクリーンのキャラクターに動きが出始めた。

『今日はみんな来てくれてありがとう！さあ、もうすぐミソラのライブが始まるヨ。みんな、用意はいい？ワタシと一緒にコール、ヨロシクうー！』

そう言うとマイクを持ったキャラクターがウィンクをして、右手で“五”の指をたてた。

『うー』

『よんー！』

会場の観客たちがスクリーンに合わせて全員で一つずつ数字を紡いでいく。

スバルたちもそれに合わせて一つずつ数字を数え上げていった。

『やんー！』

『に……!』

『いち……!』

カウントダウンが進むにつれてだんだんと会場の声が大きくなる。

そして……

『ぜろ……!』

その時、舞台では白いスモークが吹き出し、ミュージックが流れた。

）

一曲目の音楽は二年前に大ヒットしたミソラの大事な友達を歌った一曲、『Shooting Star』だった。

煙の中から歌声が聞こえてくる。歌声が聞こえ始めると会場のボルテージは一気にヒートアップした。

歓声はなりやまない。しかしミソラの声はしっかりと会場の全員へと届いていた。

煙が晴れるとそこからミソラがマイクだけ持って歌っていた。

二年前とは異なり、ミソラはダンスを交えて『Shooting star』を歌っていく。

スバルたちは一緒になって歌いながらミソラのステージを見届けていた。

やがて、曲が終わると会場からは盛大な拍手が拳がっていた。

「みんな!!!今日は来てくれてありがとうー!!!」

ミソラの呼びかけに会場からは拍手とミソラコールがあがる。

「今日は三十分の短いステージだけど最後までみんなと一緒に盛り上がっていききたいと思います!」

スバルたちも会場に合わせて拍手とミソラコールを入れていた。

ミソラは舞台横から出てきたハーブからギターを受け取る。

ミソラはギターを一度掻き鳴らすとマイクに向かって話しかけた。

「それでは次の二曲目、三曲目と続いていきます!!!アーユーレディー?」

『イエス!』という答えが返ってきたと同時に次の曲が始まった。

二曲目は『ハートウェーブ』、三曲目は『グッナイ ママ』と二曲

続いた。

両曲ともミソラが電波変換を初めて行なったときに造られた曲である。

リズムや感じは異なる二曲だが、ファンにとっては根強い二曲が続いた。

その後、ミソラの近況報告などのトークから四曲目、五曲目と続き、会場を終始沸かせた。

スバルたちも会場の雰囲気と同調し、おのおの非常に楽しんでいた。

が、着々と舞台の幕開けは近づいていく。

「……もうすぐ“舞台”の幕開けね。響ミソラ、そして星河スバル。

「ここがあなたたちのホントのラストステージよ。」

『最高の舞台にしなくっちゃね！リン、準備は完璧？』

「もちろん。私、“ライラ・コンダクター”が指揮する以上……ミスは許されないわ。一音足りともね！」

### 第三十八話 ライブ開幕！（後書き）

Aハーツのちょっとした裏話

“曲選び”

ライブ開催三ヶ月前……

『ミソラ、今回のライブの曲、ホントにこれでいくの？』

「迷ったけどこれでいく！もう私も今のままだと嫌みたいなの。だから……」

『はいはい。だけどこのラインナップ相当ストレートね。まあ“知ってる人”しか分からないでしょうけど。』

「……気づいてくれるか不安だよお」

ミソラはソファのクッションに顔を埋めた。よく見ればミソラの選んだ曲はある人との“思い出の曲”のみなのだ。

ただし相手はかなり鈍感。気づいてもらえるか疑わしい。

だけど恋する少女は届いてと願って思いを載せて歌う。その一曲目は……『Shooting star』

今回は非常に悩みました。それは歌詞を載つけるか否か。

結構注意されてるので最終的にはやめましたけど……（泣）

あっ！ミソラの服装は家庭教師のトイのCMに出ていったA B  
48のライブの服装を思い浮かべていただければ大丈夫です！

そして最後に曲の説明を。

『Shooting star』

言わずとした流星のロックマン3のオープニング、作中に歌詞も登場しました。

『ハートウエーブ』

アニメでのオープニング、この小説ではミソラが電波変換可能になつてから思いついたということになりました。

『グッナイ ママ』

流星のロックマンでのミソラの初登場の音楽。スバルとの出会いの曲です。

次話はライブ後半戦！これからもよろしくお願いします！

### 第三十九話 大好き！

『ミソラ！ミソラ！ミソラ！』

七曲目の『絆ウェーブ』を歌い終わり、ミソラは会場のコールに応じて会場に大きく手を降った。

チラッとスバルの方“だけ”を見てウィンクしていたのはかなり前の方の人間しか分からない。

「ちょっとゴンタくん！ミソラちゃん今僕たちの方向いてウィンクしてましたよ！」

「うおっ！マジか！キザマロ！」

「はい！僕のくもりなきメガネに間違いはありません！」

と観客席ではゴンタとキザマロが残念ながら間違っ興奮しているなか……

「……さすがミソラちゃん、やるわね」

「い、委員長、何だかどす黒いものを感じるんだけど？」

女のカンでミソラの行動の意味に気付いたルナが先手をうたれたことに嫉妬の炎を向け始め、その隣でスバルは震えていた。

ルナとミソラはもちろん友達であり、そしてルナはミソラのファンでもあるのだが、“この争い”に関してだけは別のようであった。



そのままミソラのライブもフィナーレを迎え、次が最後の曲となった。

ミソラは一度ギターを構えるのをやめ、マイクを両手で持ち直した。その様子を見て、会場はミソラの言葉を聞き漏らすまいと静かになった。

「みんな、今日はここまで付き合ってくれてありがとうございます！こんなファンを持って、私はとっても幸せ者です！これで二回目になってしまっただけど……この曲を最後に私はまた活動を休止します！」

会場からは「ミソラちゃん辞めないで！」などいろんな言葉が飛び交う。

ミソラはファンの心からの言葉を一つ一つ真摯に受け止め、そして覚悟を決めて口を開いた。

「私はお母さんや友達、ファンのみんなやスタッフさん。いろんな人たちに支えられて今ここに立っています。もちろんみんな大好きです！！」

会場だけでなく舞台裏のスタッフたちもミソラの言葉に涙するものがいた。

「そして……この場を借りてしまつて申し訳ありませんけどどうしても“ある人”に一言を言わせてください！」

ミソラはしっかりとほつきりと、しかし心のうちを叫ぶように言葉を続けた。

「一人は私をいつもどんなときも支えてくれて、一緒に戦ってくれる姉のような私のウィザードです。ハープ！ハープがいなかったら私はずっとひとりぼっちだった！今絶対ここにいなかった！いつもは素直に言えないけどありがとっ！大好きっ！」

舞台裏にいたハープにカメラが回され、スクリーンに彼女の姿が映る。

ハープは溢れる涙を拭いながら大きくうなづいていた。

『ミソラ！私も大、大、大好きよ！』

ハープの告白にミソラも思わず涙を拭った。スクリーンに映し出されたハープもミソラも、形容できないほどキレイだった。

ハープの映し出されたスクリーンは元に戻り、ミソラは再び会場の方に向き直った。

「あともう一人、伝えさせて下さい！その人は私にとってヒーローそのものです。どんなことがあっても私のことを助けてくれた“愛しい人”です！」

ミソラのカミングアウトに会場は物音ひとつたたなくなつた。

衝撃の告白を誰もが耳をすまして一言一句聞き逃さないようにしている。

会場から聞こえるのはミソラの声と見守るファンの息をのむ音だけだった。

それはスバルたちも過言でなかった。

「ま、まさかミソラちゃん！」

「（ミソラちゃん今ここで告白しちゃうの!?!）」

「（……ミソラちゃん、好きな人いたのか、……ダメだ！彼女を応援しないと!）」

それぞれの思いを抱えてミソラの発言に聞きいつていた。

「今この場でその人の名前は出せませんが、私の精一杯の告白聞いて下さい！」

ミソラは顔を赤くして、大きく息を吸って、精一杯の気持ちを声を出した。

「……………が……………きで……………も……………いつ！」

ミソラの言葉は途切れ途切れにしか聞こえなかった。ミソラの声が小さかったわけではない。“マイク”に音が入らず、音が流れなかったのだ。

「ミソラちゃん何て言ったの？」

「聞こえなかったぜ？」

次第に騒然となる会場。そして舞台裏も……

「おい！どうした！」

「ダメです！電機機器へのアクセスが遮断されて操作不能です！」

『！…！』

やがてプツンという嫌な音を立ててスクリーンの電源が切れる。そしてステージを照らしていた照明までもが次々と消えていったのだ。

「な、なに？何が起こってるの？」

照明が消えて真っ暗闇の中、悲鳴と混乱の景色だけが会場を支配していた。

「一体何があったんだ？」

「電機機器のトラブルでしょうか？」

「もう！気分最悪じゃないの！」

ルナたちは騒ぎを気にしてはいるが、他のファンと同じく機材トラブルだと思っている。

が、ウォーロックだけは違っていた。

『スバル！防御用のバトルカードをすぐ入れろ！』

「えっ？」

『いいから早くしろ！』

「う、うん！バトルカード、スーパーバリア！」

スバルがウォーロックに言われるがまま防御壁を展開させると同時に声が響き渡った。

「まずは邪魔者たちに退場してもらおうわ！へブンコーラス！」

突如天井から讚美歌のような調が聞こえてきた。

幾重にも重なる歌声は反響して会場内全てに響き渡った。

それを聞いた者は疑問の声すら上げることができず……

バタツ！バタツ！

その場に倒れ伏した。

「委員長！キザマロ！ゴンタ！」

歌声が止むとバリアは解除され、スバルは三人の元に駆け寄った。

『大丈夫だ！委員長たちは生きてる。“アイツ”の歌声では人間を倒すことなどできない』

ウォーロックはスバルが生死を確かめる前にそう言った。

「アイツ……って何が起こってるのかロック分かるの？」

『……ああ。“顔馴染み”がおいでなすったからな！』

『そのとおり。久しぶりね、ロックちゃん』

スバルとウォーロックは声の主のした方に振り返った。ライブ会場のセンターには灰色のスーツに手には指揮棒を持った、茶色いお団子頭の電波体と銅像が二対（四体）そこにいた。

銅像は楽譜のような物を持ち、聖歌隊のような格好をしている。

そして電波人間の隣には大きなハープ（楽器）を持ったオレンジ色の女性の電波生命体があった。

『ライラ、まさかテーマが加担してるとはな……』

『あら、私のポリシーは“悲劇と感動にこそ真の芸術は成る”よ。こんな舞台参加しない方が失礼よ』

『そつだ。お前はそういうヤツだったな』

ウォーロックとライラと呼ばれた電波体は会話を交わしながらもにらみ合った。

「スバルくん！」

スバルが振り向くとステージ衣装のままのミソラとハーブがこっちに急いできていた。

「ミソラちゃん？無事だったんだね？」

「うん！なんとかか！それよりもアンタ！みんなに何してるのよ！それと私たちのライブぶち壊しにして！」

ミソラは目の前にいる電波人間にビシッと指をさした。

「そんな些細なことどうだっていいわ。せつかく復讐が成るのにエキストラは必要ないもの。」

「なんですって！！」

「ちょっと、脇役の癖にうるさいわよ、響ミソラ！」

電波人間はそう言うと指揮棒をクイツと上に上げた。

「っ！！トランスコード！」

嫌な予感を感じたスバルは瞬時に電波変換してミソラを庇った。

ロックマンはビリッとした衝撃と突き抜けるような風を感じつつも

その場に踏みとどまった。

「やっと出てきたわねロックマン！……なんかあの狂ったド変態みたいと言うのは嫌なんだけど……まあ良いわ！これより“四季の子供”の、ライラ・コンダクター演出の舞台の開幕よ！」

ライラ・コンダクターと名乗った電波人間は某三流脚本家のような狂った笑みを浮かべて声高にそう宣言した。



### 第三十九話 大好き！（後書き）

Aハーツのちょっとした裏話

“ド変態”

「……じゃあ取引は成立だ。君を同志として歓迎しよう」

頬に十字傷のある男と黒マントシルクハットの男はガッチリと握手を交わした。

「ソフフフ……これで私にも力が手に入る！早速脚本を組み立てねば！」

シルクハットの男は「ソフウフハハハアア！」などと気味の悪い笑い声をあげながら部屋を出ていった。

そしてそれを見ていた子供たちは……

「歌姫」、アイツどう思う？」

「キモイ！それだけの一言で十分じゃね？」

「確かに。顔や思想も美しくないと思ったがここまでとはね。……どうした？「ハル」」

「……マツリ、ド変態」

「……まさかランクを一つ上げらるとは！」

マツリも涙の後を残しながら部屋を後にした。それ以来子供たちの間でアイツのアダ名は“ド変態”で確定したという。

えー、今回は謝るしかできません。（既に土下座）

皆さまにお待ちかねな一番いいシーンを潰してしまいました。

ミソラファンの皆さま大変申し訳ありません！

今なら銃弾でも手榴弾でもハルマゲドンでも甘んじて……やっぱり死にたくないです。

この埋め合わせはちゃんとするはずですので見捨てないで下さい。

今回登場の電波人間に関しては次回しつかりと説明します。

感想、意見、キャラへの批判などなどはどうぞお待ちしております。ただし作者への闇討ちは勘弁して下さい（いやほんと）

## 第四十話 琴座

戦いはライブ会場の外の電波に移した。

「シヨックノート!」

「ヘブンズコーラス!」

ハープ・ノートのギターとライラ・コンダクターの指揮を合図にピンク色のアンプと銅像の歌声からの音符の弾丸が放たれる。

互いに放たれた弾丸はぶつかり合い、小さく爆発していった。

『ライラのやつは接近戦が苦手だ!一気に畳み掛けるスバル!』

「了解っ!バトルカード!ソードファイター!」

その隙についてロックマンはライラ・コンダクターの懐へと入り込み、乱れ斬りを浴びせかけようとす。

「っ!やってくれるわね!」

『リン!“目的”を忘れちゃだめよ!』

「分かってるわよ!」

ライラ・コンダクターは手に持った指揮棒でなんとかロックマンの斬撃を一つずつさばいていった。

「マシンガンストリング！」

「サモンギャラリー！」

ハープ・ノートの弦は新しく召喚された銅像に巻きつく。ハープ・ノートは絡まった弦を即座に切り離し、距離を取った。

「バトルカード！ドリルアーム！！」

「くっつ！？」

ロックマンの攻撃が乱れ斬りから威力のある一撃に変えられる。

ライラ・コンダクターはその変化に反応することが出来ず、押し出され大きく身体を後退させた。

しかし、彼女の表情を見る限り平気な顔をしている。決定打には至っておらず、巧く一撃は交わしたようだ。

『チィッ！さすがに昔のようにはいかないか』

『甘いわよ、ロックちゃん。そんなこと私が放置するわけないでしょ？』

『だからその呼び方はやめろってんだ！！』

ウォーロックは軽口を叩くライラに向かっていつになく吠えた。

「ねえ、ロック？あのライラってのと知り合い？」

『ヤツは琴座の“AM星人”知り合いも何も同郷の顔馴染みだ』

「なるほどー！」

「こんな状況の中、よく喋る余裕あるわね、ロックマン！サモンギヤラリーー！！」

情勢をひっくり返そうとライラ・コンダクターは一気に歌い手の数を十体に増やした。どうやら勝負を決めにくるらしい。

「シンクロウエポン！」

ロックマンも自身の切り札、シンクロウエポンのカードを読み込ませた。

ロックマンの身体だけ黄色く輝き、星形のギターが現れた。

「ヘブンズコーラス・タイトル題名煉獄！」

炎をまとった音符の弾丸がロックマンとハーブ・ノートを襲う。

「いくよー！ミソラちゃん！」

「任せて！スバルくん！」

二人は息を合わせて同時にギターをかき鳴らした。

「シンクロフォースビッグバンSFB！ハートフルゴスペルデュオ！！」

二人から放たれた音符は収束していき、光の帯となって炎の音符を飲み込んでいく。

「ちょっと！これ予想以上に強いじゃないのよ！」  
ライラ・コンダクターは銅像たちを指揮するのを止めて周波数変換してその場を離脱した。

光の帯は銅像を飲み込み、やがて爆発もなく、そして跡形もなく全てを消し去った。

「どこへ行った？」

「スバルくん！後ろ！」

後ろに回り込んだライラ・コンダクターは二体の銅像を召喚し、再び音符攻撃を浴びせかけてくる。

「リフレクトウェーブ！」

ハーブ・ノートの指示に従ってロックマンは星形の電波障壁を作り出した。

打ち出す音符は反射し、攻撃を打ち消していく。ロックマンとハーブ・ノートは電波障壁に隠れ、一時防御に徹した。

『……………妙だ。』

「ロックク？」

ウォーロックは腑に落ちないようすで何か考えていた。

『……………ライラのヤツは何でチャチな攻撃しか仕掛けてこないかってことだ』

「まさか、本気を出してないの？」

『ああ。その証拠にヤツは攻撃技を一つしか使ってねえんだよ。』

「ちょっと！それまさか……私たち嘗められてるわけ？」

ハープ・ノートが手加減されて苛立つ中、ロックマンは別に何かを考えていた。

「（考えるんだ。何のために手加減なんかする必要がある？）」

ロックマンは今まで持っている情報を整理した。

彼女は“四季の子供”の一人。

今、狙われているのはチヨイナの古代兵器。

それを解くには四ヶ所の鍵が必要。

そしてここライブ会場には……

「っー！」

全ての状況を整理した時に考えられるのはそれしかなかった。

「まさか、時間稼ぎ!？」

ロックマンは焦りを隠せなかった。

ライラ・コンダクターが何故あんな派手な場面で登場したのか。そ

して攻撃が単調な理由。

そして全員に秘密にしていたがスバルはこの鍵の探求を任されている。

他の三人も別の行動をしていたのだ。そして他にも仲間がここに侵入していたとしたら……

時間稼ぎの理由にも想像がつく。

「時間稼ぎ？ 一体何のこと？」

任務を聞かされていないハープ・ノートは訳がわからないようだ。しかしロックマンには時間がない。

「ゴメン！ 後で説明するから今はライラ・コンダクターを早く倒そう！」

「う、うん！」

出し抜かれたとわかって尋常じゃない様子のロックマンにハープ・ノートは頷いた。

「シンクロウェポン！ バージョンジェミニ！」

ロックマンは星形のギターを再び黄色い光子へと変換し、今度は黄金の両手と肩当てを装備した。

オリヒメとエンプティから贈られた制御プログラムのおかげでパワーは低くなるも、副作用なく自在にウェポンを出せるようにいたの



だ。

「ミソラちゃん、僕が先に行くから後をよろしく」

「ラジャーっ！」

ハーブのシンクロウエボンが解けたことで電波障壁は崩れ去る。

が、その瞬間を狙ってロックマンは正面からライラ・コンダクターの方へと走り出していた。

「ハアアッ！エレキソード！」

「何度も同じ手は通じないわ！サモンギャラリー！」

再び現れる銅像をロックマンは走りながら一つずつなで斬りにしていく。

結局ライラ・コンダクターは指揮棒でロックマンの一撃を受け止めたのだった。

しかし力は同じでビクともしない。ライラ・コンダクターはニヤリと笑った。

「何度やっても同じだと……」

「それはどうかしら？」

ハーブ・ノートは組み合っている二人の真後ろに立っていた。そして彼女の隣には既にピンク色のアンプが置かれている。

「まさかロックマンが囿!?!」

「そういうこと! ショックノート・フォルテシモ!」

かき鳴らされた最大級の音符はライラ・コンダクターの背中に直撃した。

「アアツツ!」

ライラ・コンダクターは悲鳴をあげながらウェーブロードにつつぶせで倒れた。

「やりいつ!」

ハープ・ノートはガッツポーズで勝利の余韻に浸る。しかしロックマンにそんな余裕はなかった。

ロックマンは倒れているライラ・コンダクターを強引に起こして詰問した。

「ライラ・コンダクター! まさかもうこの鍵を奪ったのか?」

ライラ・コンダクターはその質問に素直に、ニヤリと勝ち誇った顔で答えた。

「鍵? そんなのは必要ないわ。私が今求めるのは……ほんの僅かな時間だけでいいの。そして……それはもう終わったみたいね」

「っ!?! それは一体何の……」

「スバルくん！後ろ！！」

ハーブ・ノートに言われて振り返ったロックマンの視線の先には重々しい造りの今度は白い石のような扉がウエーブロード場に出現していたのだった。

## 第四十話 琴座（後書き）

今回はオリジナル電波人間の紹介のみです。

ライラ・コンダクター

琴座のAM星人ライラと“歌姫”こと、リンの電波変換。

指揮者の風貌で聖歌隊のような像を最大十体まで召喚し、操る。基本ライラ・コンダクター自体は攻撃せず、指揮するだけ。

銅像は歌うだけでなく楽器も演奏可能。

他にも攻撃技があるらしいが詳細は不明。

ちなみにライラとは琴座の英語表記（つづりは作者名と同じ）

作者はわざと読み方変えています。

## 第四十一話 トロイノモクバ

「あの扉は……もしかして！」

「そう。私たちのうちの“誰か”がやってくるの。」

ロックマンは形は違うものの既に扉を一度見ている。そのため、次起こることはなんとなく想像できていた。

ウェーブロード上に突如として現れる扉。その姿は荘厳にして重々しい威厳を放っていた。

中にある電波人間の強さも扉ごしにピリピリと伝わってくる。

『おい！あの扉の向こう側、ヤバい電波が二ついるぜ！』

「うん。僕も分かる。胸がギュツと締め付けられる感覚がつよいんだ。」

ロックマンは胸の疼きに耐えるように手を胸に持ってきた。その強さは既に一度、経験済みだった。

「ミソラちゃん」

「ス、スバルくん？」

ロックマンは倒れているライラ・コンダクターに聞こえないように小さな声で話しかけた。

「扉の向こうのいる相手は間違いなく僕の方だけでは勝てない。チヨイナに暁さんが来ているから……助けを呼んでほしいんだ。」

「えっ？それじゃあスバルくんは……」

「大丈夫。僕はやられないから。ミソラちゃんを置いていなくなったりしないから」

ロックマンはハーブ・ノートを安心させるようにフツと笑顔を見せた。

「……約束だよ！スバルくん！！」

ハーブ・ノートは後ろ髪を引かれながらも、周波数変換でその場から増援を呼びに立ち去った。

『まったく、ムチャクチャな約束しやがって、戦うのは俺もだぜ？』

「……ゴメン、ロック。つい……」

『……バーカ！謝んなよ。俺たちは二人で一つだろ？ムチャクチャだろうと成功させりゃ文句は言われんだろ！』

「うんー！」

決意を固めたロックマンは扉の前で身構えた。そしてゴゴゴゴと音を立ててゆつくりと扉がひとりで開かれた。

「……あのときの借りを返しに来たぜ、ロックマン！」

「彼が“心臓”の持ち主。確かにそれ相応の力は感じる。それこそ研究のしがいがあるというもの！」

扉から現れたのは二人。一人はアル。前回苦渋をなめさせられていた彼の表情は喜びにうちふるえていた。

そしてもう一人は黒い犬の頭を持った電波人間だった。彼の上半身はポロボロの包帯で巻かれ、右手には黄金の錫杖を携えている。

その姿はまるで古代文明の壁画に出てきそうな神官の姿だった。

二人が出てくると役目を果たした扉は粒子となって消えていく。

そして三人は面と向かって対峙した。これぞ三つ巴。

ロックマンからは“心臓”から発せられる黄色いオーラが、アルからは紫色のオーラが。

そしてもう一人の電波人間からは青いオーラがそれぞれ発せられていた。しばらく三人は動かすにらみ合う。

そんな緊張の中、一番最初に動いたのはアルだった。アルは倒れているライラ・コンダクターの方へと歩いていった。

「ご苦労さまでした。“歌姫”」

「成功したみたいね。てつきり私は“戦乙女”のやつが来るかと思っていたけど？」

「野暮用が入ったみたいだね。彼女はロックマンと戦いたがってたけど、まあ俺でも十分だろう。ゆっくり休んでくれ」

「了解。あとは任せだよ」

アルはもう一人の電波人間に目配せすると彼は頷いて何かを呟いた。

「座標軸、座標値セット。トロイプログラム起動」

電波人間がカン！と手に持った錫杖でウェーブロードを突く。

すると、ライラ・コンダクターの周りに光子が漂ってくる。そしてその光子は……金色に装飾された真つ赤な棺に変わった。

「はっ？」

ライラ・コンダクターはすっとんきょうな声を上げる。次の句を述べる前にパタンと棺のふたが閉まった。

「“歌姫” ゆっくり休むがよい」

「こら！ “ハク” テメー私はまだ倒されて……」

ライラ・コンダクター強制退場。赤い棺は扉と同じく、ひとりでに消え去った。

「……………」

南無とばかりに手をあわせるハクと呼ばれた電波人間にロックマンとアルは呆然としていた。二人の胸の内を一言でいうと「縁起でも



ない」で間違いはないだろう。

が、それよりも驚くべきポイントはあつたはずである。

『今どうやってライラのヤツを消し去つたんだ！？』

「“神の脚”通称“トロイプログラム”のおかげだ。これさえあれば“どんなところ”でも侵入可能さ」

「星河スバルの持つ“心臓”と同じ、古代の兵器だ。さらについて一つ、今手もとにはもう一つ、“神の頭脳”も我々の手の中だ！」

そう言つてアルは紫色の不気味なオーラを持つハンターを、ハクは青く輝く巻物のような石を取り出した。

「そんな！もう奪われてるなんて！四つの鍵は……」

そこまで言つてロツクマンは気付いた。“四季の子供”に最初から鍵など必要ないのだ。

だからこそ囷のライラ・コンダクターに鍵を狙わせる素振りをさせ、その間にトロイプログラムを使ってまんまと入り込む。

スバルたちは最初から踊らされていたのだ。

「やっと気づいたみたいですね、星河スバル」

バカにした顔でハクは嘲りを入れる。

「だけど僕が君たちから取り返す！勝負だ！」

ロックマンはバスターを二人めがけて連射した。が、二人の目の前にまた小さな扉が現れ、攻撃を飲み込んでいく。

「ちっ！わざわざ真っ向勝負なんて真似しなくてもいいんだが、こ  
ういう思い上がったバカは一回叩き潰す必要があるな！ハク！お前  
は手出すなよ！」

「はいはい。仰せのままに、リーダー」

アルは一人で出てくるとハンターを掲げた。

「星河スバル！今回はノイズドカードやキャッシュデータなんてち  
やちな物は使わねえ。正真正銘俺の力で叩き潰してやる！電波変換  
！ダブルアル！オンエア！」

電波変換の掛け声とともにアルの身体はハンターの紫色のオーラに  
飲み込まれていく。そしてアルのウィザードと一緒に姿を現した。

「ギャハハハハ！コイツが二百年後のロックマンか！姿は違うがロ  
ックマンなら誰だっていい！あの時の怨みを込めて蜂の巣にしてや  
んよ！」

「復讐劇第二幕の始まりだ！俺たちの、子供たちの怨みを受け取り  
な！ロックマン！」

ウィザードは紫色の馬型の電液体。どこか安定してないのか、ノイ  
ズに触れたように輪郭が歪んでいる。

そしてアルの電波変換した姿はウィザードが巨大化し、二足歩行で

立った姿だった。

実はWAXAの古い犯罪者データで記録が僅かながら残っている。

二百年前、インターネットをジャックし、様々なデータを盗み出したさらに数千年前の古のナビ。

それは青いナビとそのオペレーターの伝説の二人によってデリートされている……ということになっていたはずであった。

古代アトランピア文明、最終兵器“トロイノモクバ”が化身、“リバーズ”。

さらに二百年の時を越え、“リバーズ・ライダー”として再びロックマンの前に立ち塞がったのだった。

## 第四十一話 トロイノモクバ（後書き）

Aハーツちよつとした裏話

「転送先」

「ハクのヤツ、覚えときなさいよ！恨みは十倍にして返してやっかんね！」

『全く！ロツクちゃんの前でなんてことしてくれたのかしら！』

リンとライラはバカヤローと水平線に向かって叫んだ。

しかし広がるのは氷だけ。僅かにペンギンが数羽、二人の叫びを聞いていただけだった。

げに恐ろしいトロイプログラム。北極まで送るのは造作もない。

遂に出しました！

LON（ロツクマンエグゼ、レジェンドオブネットワーク）より“

リバース”の登場です！

分からない方は一度携帯のゲームでやってみて下さい。

彼がいたからキャッシュデータ（エグゼシリーズのナビ）が可能なわけです。ところどころ伏線は張りましたが、気づいた方いましたか？

ちなみにゲームの時間軸はネビュラ事件終了後ですので“エグゼ6”は出せません。

## 第四十二話 走れ！ハープ・ノート

「ハープ！まだ暁さん見つからないの？」

『ちょっと急かしすぎよ！幾つも電波人間の反応があつて確認するのも大変なんだから！』

チヨイナの電波を走り回るハープ・ノート。その表情には焦りしか見えなかった。

その理由はただ一つ、ロックマンを早く助けにいきたいからである。

ミソラ自体、自分の強さはよく分かっているつもりである。そしていつもロックマンに任せてばかりであることに負い目を感じていた。

また……なの？

ハープ・ノートはさらに走るスピードを上げた。もっと速く……

「（早くスバルくんのもとへ……）」

『（……おかしいわ。ニヶ所で戦闘が起こってるなんて。一体何が起こってるの？』

二人は互いに違うイヤな予感を感じていた。遠い空には季節外れのどす黒い雷雲が見えている。

天気と同じでチヨイナの電波世界は荒れようとしていた。

『……ミソラ、分かったわ！北西に三キロ！アシッド・エースの反応よ！』

「りょうかいつ！！」

ハーブ・ノートは急いで方向転換し、走り出そうとした。が、足が動かなかった。

「っ！！」

ウェーブロードから現れた何かの手に右足を掴まれている。その技の持ち主はたった一人しかいない。

「悪いがこれ以上進ませるわけにはいかないのだよ！小娘！」

「あなたはファントム・ブラック！」

ハーブ・ノートの目の前に通称“ド変態”が立ち塞がった。

「何でこんな間の悪い時に！」

思いがけない敵の出現にハーブ・ノートは舌打ちした。

『さっさと倒すしかないわね！やるわよ、ミソラ！』

「分かってるよ！マシンガンストリング！」

ギターから幾つもの弦がファントム・ブラックに向かって伸びる。弦はファントム・ブラックの左腕を絡めとった。

「嘗めるな！小娘！“キャッシュメモリー”ローズアロー！」  
ファントム・ブラックの右手からバラの花がいくつも投げつけられる。

「きゃっ！？」

一撃一撃はさして重くないが鋭いバラの矢はハープ・ノートに突き刺さっていく。

そのひるんだ隙を取られてファントム・ブラックは弦から脱出していた。

「遅いわ！ステッキソード！」

「バトルカード！リュウエンザン！」

ガキン！

ハープ・ノートはギターを炎の剣に変えてファントム・ブラックの一撃を正面から受け止めた。

「そこをどきなさい！」

「そんなことを言って、“はい、どうぞ”と言う愚か者がどこにいるのかね？彼らに協力している以上は仕事は果たすのだよ！」

ハープ・ノートはつばぜり合いから力でステッキを一気に弾いて、再び斬りかかった。



ファントム・ブラックは少しずつ後退してはいるものの顔色一つ変えずに受けていく。

ハープ・ノートの斬りかかるスピードはかなり速い。

が、実はハープ・ノートの体重はゼロ。言い返せば体重がないぶん一撃が軽すぎる。近距離戦闘向きではない。

ファントム・ブラックも体重は存在しない（計測不能）のだが、“ゼロ”なわけではない。

要するに、ロックマンやファントム・ブラックとハープ・ノートの近接での一撃の重みはかなり違うものなのだ。

「うつつうっしい！ステッキソード！！」

「きゃあっ！！」

遂にハープ・ノートはリュウエンザンを弾かれ、仰向きに倒れた。

「雑魚はこれ以上うごめくな。

うるちよろされても邪魔なだけなのだよ！」

ビシッ！

「うっ！」

「それともか弱いヒロインよろしく、ロックマンにまた助けを求めるか？ンフフ……そっちこそまだ望みはあるかもな！」

ビシッ！！

「くっつ！」

ファントム・ブラックは起きあがってこようとするハーブ・ノートに何度もステッキを撃ち据えた。

「ここで私が倒れるわけにいかないの……」

「フフフフハハアア！すばらしく無駄な努力だ、小娘！さあ！もっと、もっと足掻くがいい！！」

ビシッ！！！

「ああっ！！」

そんなハーブ・ノートはファントム・ブラックは狂ったように嘲笑い、ステッキで更に一撃を入れた。

右手、左腕、右足、左足……

なぶられるように一撃一撃を加えられ、だんだんとハーブ・ノートの身体がいうことを聞かなくなってくる。

それでも彼女は立ち上がろうと力を入れた。

『ミソラ……』

「わかってる。私が、諦めたらスバルくんが……」

「諦めたら“ロックマンに助っ人がこない”だろう？」

「っ!」

ファントム・ブラックが口走った非常な宣告にハープ・ノートは顔を青くした。

もう知られていた……

「何を驚く必要がある？お前たちの求める“鍵”の四ヶ所は既に把握している。そしてその場に来ることもな。戦力をそこに派遣しておけば“時間稼ぎ”くらい造作もあるまい。」

ファントム・ブラックは倒れているハープ・ノートの首にステッキを突きつけた。次で息の根を止める、そんなつもりなのは明白だった。

「……鍵？時間稼ぎ？」

「おや？小娘は今回ただの他人であつたか？ンフフ……それも悲劇的でいい。何も知らず巻き込まれるヒロイン。だが、それも……時間が無い。恨むのだったらロックマンを恨むのだな！」

困惑しかけているハープ・ノートの頭に容赦なくステッキを振りかぶる。

絶体絶命。ハープ・ノートは何とか身体を動かそうとするけど言うことを聞かない。

『ミソラ!』

相棒の声も届かない。もうミソラは絶望に駆られていた。

「さらばだ！小娘！」

ファントム・ブラックはステッキを降り下ろした。

いろいろと言いたいこと、聞きたいこと、やりたいこともたくさんあったらう。

だがミソラが思い浮かべたのは……

「（スバルくんごめんね……）」

ハーブ・ノートは諦めて目をつぶった。

『……ここ……な……ころで……ちゃんを死なせ……から。私たちの……を……って……』

『この声は？』

ハーブはどこからか聞こえてくる声に耳をすます。途切れ途切れの声であったがその声は……誰かに似ていた。

「っ！！何だこれは！！！」

降り下ろされたファントム・ブラックのステッキはハーブ・ノート  
の頭を砕かなかった。

それどころか届いてもいない。寸前で小さな紫色の光によって阻ま  
れていた。

『……守るから！君を！』

大きさは僅かに十数センチしかない紫色の光はファントム・ブラッ  
クにそのまま体当たりする。

「グハアア！！！」

鳩尾にモロに体当たりを食らったファントム・ブラックは数メートル  
ル身体を吹き飛ばされた。

「1」の声……」

『……ゴメンね。ミソラちゃん』

紫色の光は蝶々の形を象り、ヒラヒラとやってくる。そして蝶々は彼女の頭の上へととまった。その声はまるで……

『お願い。“僕”をもう一人にしないで。“兄”を見つけて!』

紫色の蝶々はそう言うとハーブ・ノートの姿を包み込んだ。

「おのれえ!殺す!殺してやる、小娘え!」

ファントム・ブラックは怨みの呪詛を吐きながら起き上がった。

倒れているハーブ・ノートに一撃いければ決着はつくはず、ファントム・ブラックはそう思っていた。

が、そこにいたのは倒れていたハーブ・ノートではない。彼女はウエーブロードから宙へと浮かんでいる。あれほど受けた傷は一つもない。

うす紫色の綺麗な蝶の羽を羽ばたかせ、愛用のギターを構える。そして蝶の羽根と見合う透き通った羽飾りがバイザーの両耳元につい

ていた。

「私はスバルくんに認められたい！肩を並べて戦えるパートナーでありたい！そのためにも私はあなたに負けない！！」

“ハーブ・アイリスキュア”

ミソラの正体不明の新しい力の名前はハンターにこのように現れていた。

「ふざけるな小娘！何を得たのかは知らないが私の脚本は変わらない！完膚なきまでに叩き潰してやるわ！」

ハーブ・ノート改めハーブ・アイリスキュアとファントム・ブラックは再びぶつかりあった。

## 第四十三話 ヒロイン見参

「スコールノート!」

「ファントムスラッシュ!」

空中から放たれるハーブ・アイリスキュアの音符はスコールのよう  
にファントム・ブラックに向かって降り注ぐ。

それに対し、ファントム・ブラックは風圧で音符を押し返した。

「くっ…くたばりぞこないが私の脚本にケチをつけるかあ!!」

ファントム・ブラックはウェーブロード上から、そして自らの身体  
からファントムクローを幾つも伸ばす。

地獄に引きずりこもうとする幾つもの亡霊の手がハーブ・アイリス  
キュアに迫った。

『くるわよ、ミソラ!』

「任せなさい!」

ハーブ・アイリスキュアは羽を羽ばたかせ、猛スピードで手の合間  
を掻い潜っていく。

「すごい!すごいよ!ハーブ!」

ハーブ・アイリスキュア自身が自分の力に驚き、そして歓喜の声を



上げた。

ハープ・ノート時のスピードの比ではない。飛行能力に加え、格段の速さを二人は得ていた。

しかもそれだけでない。先ほどまでの傷は全て消え失せ、完全な状態にある。

さらに傷を負っても時間をかけてであるが回復していくのだ。

飛行能力とオートリカバリ、今までの課題であった近接戦闘での欠点を大きくカバーしていた。

『ミソラ！今は目の前の敵に集中しなさい！』

力に浮かれていたミソラを諫める。目の前にはまだ敵がいる。

「おのれえ…！おのれええ！！小娘ごときにい！」

二人と違い、覆えされた状況と優越感に怒りを抑えきれず、激昂するファントム・ブラック。

その表情に冷静さなど皆無。我を失いかけていた。そして彼の身体が緑色に光はじめる。

怒りから遂に四季の子供から得た“力”の全てを解放したのだった。

「我、神の名のもとに命じる！古の魂よ！我が力となりてその魂を昇華せよ！ダウンロード！」

合言葉を合図にファントム・ブラックのステッキから三つの光が現

れ、それぞれが本人の中へ入っていく。

「グオオオオ…これが、力……」

光を取り込んだファントム・ブラックは痛みを耐えるような苦悶の表情を浮かべていた。

『なんてバカなことを……』

「どうしたのハープ？ 一体あの変態、何をしたの？」

『……自らの電波体の上に“無理矢理”電波体を上書きしたのよ。』

ハープはファントム・ブラックが今何をしたのかを説明した。

もともと電波生命体は独自の周波数を持っている。ある程度変化はするが、その中で電波体は“個人”として成り立っている。

そこに無理矢理他の周波数を組み込めばどうなるか。

一番分かりやすいのはオーパーツを手にしたロックマン、あるいはファイナライズしたときのアシッド・エース（イリーガル）だろう。

確かに各オーパーツはロックマンに強大な力を与えた。しかしその前に力にのまれかけ、暴走していたのを覚えているだろうか？

その力は電波兵エランドを一掃するもそのまま委員長を攻撃しかけた。

アシッド・エースも自分を見失い破壊衝動のままに攻撃したことも

あった。

オーパーツもしくは流星サーバーから発せられるような強烈な周波数にのまれれば、一時的に強い力は得られる。

しかしその反面、力に負けて自分を失う、或いは存在自体が消えてしまう、そんな危険性を持っているのだ。

つまり力を飲み込むか、逆に吸収されてしまうかの二択なのだ。

「ってことは……」

『ええ。……どちらに転んでも力は強くなるわよ』

そう言っている間にいつの間にか苦痛のBGMは無くなっていった。ファントム・ブラックはウェーブロード上で膝立ちで下を向いているのみ。表情は読み取れない。

だが、ハープ・アイリスキュアにはその気配が分かった。

「（……くる！）バトルカード！ダブルストーン！」

咄嗟に岩を出現させて間合いを取ろうとしたハープ・アイリスキュア。作戦として間違っではないが、それも無駄だった。

ガキン！ガキン！

すさまじいスピードで岩を破壊し、ハープ・アイリスキュアに迫る。

咄嗟に彼女は飛びあがって懐へ入る一撃を防いだ。

「コオオオオオ……」

某暗黒卿のような不気味な呼吸音をあげ、ファントム・ブラックは顔を上げる。

目は虚ろで焦点はあっておらず、口はダランと開ききっている。

「な、なによあれ……」

『……………』

ファントム・ブラックの表情にミソラは恐怖で顔を歪め、ハープは目をそらす。

ここまできたらもう二人には分かった。そう“のまれた”のだ。

のまれた電波体の末路は決まっている。破壊衝動に身を任せ、自分の全てを喰われるか。あるいは全てを喰われる前に電波体を倒してしまうか。

いずれにしても“消滅”しか先はない。

「グオオオオオツ!!」

うなり声を上げて飛びかかってくるファントム・ブラック。

だが、その単調で動物的な攻撃は空を飛んでいるハープ・アイリスキュアには一切届かなかった。

そのうちファントム・ブラックは興味を失ったのか、周波数変換し、地上へと移動した。

『ミソラ！今のうちにアシッド・エースを呼びにいくわよ！』

ハーブはミソラにこの場を離れるよう提言した。時は一刻を争う、バカの相手をしてるヒマなど二人にはない。

「……………いや。ちゃんと決着をつけるわ。」

『なんで！？もう必要ないわ！スバルくんに言われたこと……………分か  
つてるの？』

「分かってるわよ！だけど……………」

二人のいる電波世界の下（地上）は昔ながら商店街でこの時間帯も人通りはもちろん多い。

「な、何ヨ、アレ？」

「バ、バケモノ？」

突如降り立ったバケモノに市場はどよめきたった。

そして獲物を見つけた獣は予想通り……………

「ンフウフフウウ……………」

ファントム・ブラックが醜悪な笑みを見せ、ステッキを構えた。こ

ちらも一刻を争う。

ミソラの頭に浮かんだのはあるヒーローの姿。彼ならこんな時……どうするだろうか？

(もう……もう僕の前で誰もいなくなつてほしくないんだ！)

「(そうだよ、スバルくんもそうするよね！)」

ハープ・アイリスキュアは覚悟を決めた。

「このままほつておいたら他の人に危険が及ぶわ！そんなの……私  
は見過ごすなんて出来ないっ！」

ハープ・アイリスキュアもウェーブロードから飛び降り、周波数変  
換して地上に降り立った。

『……ホント、バカなんだから』

ハープはミソラに聞こえないようにボソツと呟いた。

石造りの家がいとも簡単にガラガラと崩れる音に悲鳴が上がるチヨイナの商店街。

「ショックノート!!」

その中にキュイーンとギター音が響き渡った。そこにはピンクのギターを持った少女が一人。

「私もみんなを守ってみせる! きなさい! ファントム・ブラック!」

この日、チヨイナに音楽の天使が舞い降りたと……後の世に伝わっていたという。

## 第四十三話 ヒロイン見参（後書き）

これでひとまずチヨイナでのミソラの活躍の場は終わりです。独自設定など、この話は非常に難産でした。

もしかしたら書き直すかもしれませんが。

さて、ここでハープ・ノートに発芽した力の説明を。

ハープ・アイリスキュア

スピード以外基本能力は大きく変わらないが、オートリカバリー・飛行能力と新しくなった。

実はあと一つ能力があるらしいけど登場はまだまだ先。

モデルはエグゼ6のアイリス。もちろん力もアイリスのものが原型。なぜハープ・ノートに力が宿ったのかは後になればわかります。

カードはうす紫色の蝶々の模様。シンクロウエボンと同様、全てを解放すればかなりの負荷がかかる。

次回はまたスバルの戦いに舞台を移すつもりです。よろしければ今後とも拙作をよろしくお願いします。



## 第四十四話 それぞれの戦い（前書き）

今回は場面展開がコロコロ変わります。

読みやすいよう区切ってはいますがご理解のほどよろしくお願ひします。

## 第四十四話 それぞれの戦い

所変わってまた他の場所の電波……

「オラオラオラオラア！」

「……。ステルスダツシユ。」

ジェミニ・スパークBが放つ力任せの乱斬りをリンクス・アマゾネスは全て爪で合わせていく。

苛立ったジェミニ・スパークBはだんだんと大振りになっていく。その一撃の合間にその彼女は走り去った。

「……そこ」

「くうっ！」

ジェミニ・スパークBの背後から差し迫った爪はジェミニ・スパークWが受ける。

「ロケットナツクル！」

「……」

再びリンクス・アマゾネスは目にも止まらぬスピードで姿を消した。ジェミニ・スパークの放った拳は虚しくも空を切る。

「ちくしょう！鍵を速くとらなきゃならねーのによー！」

「どうもあのスピードは厄介だね。」

ジエミニ・スパークの持ち味のコンビネーションは今日も悪くない。しかしリンクス・アマゾネスのスピードの前に攻撃のタイミングを外されていた。

「……」

一方優勢なはずのリンクス・アマゾネスからは目立った大きい攻撃を仕掛けてくる気配はない。

先ほどから攻撃しては離れ、攻撃しては離れとスピード主体のヒットアンドアウェイ戦法を続けていた。

「ツカサ！さつきからどうも嫌な予感しかしねえ。あの化け猫さつさと倒して暁んとこ行こうぜ！」

「オツケー！それじゃあアレいくよ！」

「任せときな！」

ジエミニ・スパーク二人は手を合わせ、エネルギーを充填した。

また場所は変わり……

「ダイヤモンドダスト！」

猛烈な吹雪が上空を吹きつける。ウェーブロードを、さらに大気までも凍結させるダイヤ・アイスバーンの吹雪は敵を全て飲み込んだ。

「やった、かしら？」

『……まだみたい、スズカ』

吹雪が明けた中にはそこには砕けた氷の塊と……

「さ、さむい……」

水晶の壁で自分の周り全てをキューブ状に覆い、その中で寒さに震えているオータム・サイバーの姿があった。

「ブレイクアイスハンマー！」

ダイヤ・アイスバーンは敵の姿を確認すると即座に氷のハンマーを作り出した。

「とおりやーっ!!」

掛け声と共に大きくハンマーを勢いよく振り上げたダイヤ・アイスバーンはオータム・サイバーの真上に向けられる。

壁はバリーン！という音を立てて砕けたが……

「寒い」

「……！」

ハンマーはオータム・サイバーに鼻歌混じりに受け止められていた。ダイヤ・アイスバーンのハンマーとオータム・サイバーの間には再びキューブが間に入っている。

二人の間にキューブが入ることで衝撃を全て受け止めていたのだ。

「フォトンブレード！」

「バトルカード！スイリユウザン！」

攻撃後、距離をとった二人はそれぞれ剣を取り出す。

オータム・サイバーの手には某宇宙戦争の映画のようなビームサーベルが握られている。

使徒と戦う少女のような姿にビームサーベル。その姿はどこかの近未来戦争にいそうな雰囲気を感じさせた。

「……」

「……くしゅん」

一言も発さず剣を構えるダイヤ・アイスバーンとは対称的にどこか

抜けた様子を見せるオータム・サイバー。

『…………何なの！このオンナ！』

「（アイス…………）」

真剣に見えないオータム・サイバーに苛立ちを募らせていくアイスに呆れるスズカ。

真剣に構えているダイヤ・アイスバーンもオータム・サイバーにあてられてどこか抜けはじめていた。

「ステルスレーザー！」

ブラスターから発射されるレーザーに当たった敵はそこからデータが崩壊し、消えていく。

「兄さん、次行きますよっ！」

ピクター・キャンパスを守護する四枚の壁画からは一体がやられるたびに一体ずつキャットシュデータが送り込まれる。

新しく出てきたガスバーナーのようなナビは地面から火柱を突き上げさせた。

「……ロックオンソード！」

アシッド・エースは素早く火柱をかくぐり、そのナビの懐へ入り込む。そして上段・中段の二段斬りで相手を葬った。

「マツリ！こんな茶番いつまで続ける気だ？」

「無論兄さんが倒れてくれるまでですけど」

「何言ってるんですか？」と言わんばかりのキョトンとした顔でピクター・キャンパスは答えた。

そう言っている間にまたキャッシュデータが一体現れる。今度は水色の防寒着を着た小さな子供のナビだった。

アシッド・エースの周りには四体のナビが取り囲む。一体がやられるごとに追加されていくキャッシュデータ。

かれこれアシッド・エースは二十体ものデータを葬っていた。

『シドウ、彼は“私たちのリミット”について言っているのでは？』

「なるほどね。そのための時間稼ぎか。」

アシッド・エースの電波変換はとてつもない負荷がかかる。二年間の間にかなり改善はされたがそれでも長期間の電波変換は危険を伴

うのだ。

シドウの身体はまだまだ戦闘に耐えうる。が、相手は無限大にナビのキャットシュデータを召喚している。

いつまで戦いが伸ばされるかも分からないのだ。

「……………なら、“アレ”で決めますか？」

『……………ダメと私が言ってもやるのでしょうか？』

「“もち”の“ろん”だ!!」

アシッド・エースは一枚のカードを取り出す。そのカードは黒に赤、いつぞやの空に浮かんだ赤い流星だった。

「……………仕掛けてきますね？兄さん」

今まで傍観していたピクチャー・キャンパスも自身の身長大の筆を取り構えた。

「おう！バトルカード、流星サーバー！ファイナライズ！アシッド・イリーガル!!」

アシッド・エースの肉体は白銀から黒に近い灰色へ、そしてあの流星の色が如く、紅の力を身に纏っていた。



ライブ会場上空の電波……

「シャーツハーツ!!」

リバース・ライダーの回し飛び蹴りがロックマンの頭目掛けて勢いよく振り抜かれる。

「バトルカード!フラッシュスピア!」

ロックマンはバックステップで蹴りを避け、相手の蹴りが振り抜かれたと同時に前に出て突きを放った。

「俺が隙なんか作るかよ!クイツクドロ!」

ニヤリと笑うリバース・ライダー。彼の隣には拳銃が二丁浮遊している。

ドゥン!!

二発の弾丸は間髪入れずにロックマンの方へと向かっていった。

ガガガガガ……

銃弾は突きに押されて弾かれる。が、ロックマンの放ったフラッシュ

ユスピアもリバース・ライダーには届かなかった。

「遅いぜえ、ロックマン！ロデオラッシュュー！！」

リバース・ライダーは今度は隙のない連続蹴りを放ってくる。

上段、中段、下段。ジャンプキックや回し蹴りに踵落としなど狙う場所も種類も関係なく、ただ隙のない蹴りのラッシュがロックマンに襲いかかった。

最初にアルと出会った時の嫌らしさなどどこにもない。その姿は戦闘狂、バーサーカーと言ってもいい。

ただ抑えていたものを爆発させたようにリバース・ライダーはロックマンに攻撃を仕掛けていった。

「ぐああっ！」

ロックマンも初めは避けたり、防御したりできていたが次第にリバース・ライダーの攻撃の速さについてこれなくなる。

ロックマンは正面から蹴りを胸に受け、大きく吹き飛ばされ仰向けに倒れた。

「オイオイ、ロックマン！テメーはその程度か！親父殿を殺ってくれた実力もたいしたことねえんだな！」

リバース・ライダーはギャハハハと笑いながら挑発をかける。

ロックマンはよろめきながらも身体を起こした。

「……まだまだっ！」

ロックマンは一枚のカードを取り出す。そのカードはエンプティから渡されたものだった。

『スバル！もうシンクロウェポンは二つ使ってたんだ！これ以上使ったらお前の身体が……』

ウォーロックはそのカードを見てスバルを激しく止めた。そのカードは新しいシンクロウェポンの起動カード。

シンクロウェポンはその力と引き換えに“スバル”の体力と精神力を著しく消費する。

オリヒメから制御プログラムをもらったとはいえ、ライラ・コンダクターとの連戦でハープ・ジェミニのシンクロウェポンは使ってしまった。

その反動が、今のロックマンの動きは鋭くない。大丈夫なように見えるが肩で息をしている。

もうロックマンの体力は限界だった。その時に新しく力を使えば……結果は目に見えていた。

「うん。分かってる。だけど……ロック、ゴメン!!」

『スバル!!』

ロックマンは制止を振り切り、そのカードを転送した。

スバルの心臓から今度は赤い光が発せられる。強力な光と鼓動はスバルを、ロックマンを包み込む。

「…うああああーっ！！」

その波動を最後にスバルの意識は闇に包まれた。

「ギャハハハ、やってくれるじゃねえか…：：：星河スバル！おもしれえよ、最高じゃねえか！」

リバース・ライダーは歓喜にうちふるえ、大きく吠えた。

「これは…なんという因果か、ますます研究対象として欲しくなってきたよ」

傍観に徹していたもう一人も興味が溢れ、欲求を何とか抑えていた。

ロックマンがシンクロウエポンで変化したのは懐かしの英雄の姿。

黒いボディに大きく開いた翼、そして溢れる力と威圧感をもたらす赤いオーラ。二年前よりさらに力は強大になっていた。

その力の主は静かに宙を浮く。これこそが嵐の前の静けさと言ってもよいだろう。

二年前、彼らの親父殿ことミスターキングの野望を打ち砕いた漆黒の翼、ブラックエースがここちヨイナの上空に再び降臨した。



## 第四十四話 それぞれの戦い（後書き）

ついにシンクロウエポン三つ目登場！

流星3よりブラックエースです。

能力自体は全く一緒ですが流星サーバーがないのでサーバーからのバトルカードの転送は不可能です。

アシッド・エースに関しても疑似的に作り出したリミット解除のカードと考えて下さい。

ですが、若干不穏な雰囲気を隠せません。チヨイナの死闘はまだまだ続きます。

今後とも拙作「Aハーツ」をよろしくお願いします！

第四十五話 黒翼無双 そして……

「……………」

ロックマン（ブラックエース）の漆黒と深紅の翼が不気味に、鮮やかに輝く。

もとはノイズの塊、クリムゾンの莫大な力を取り込んだその力。その爆発力は二年前に嫌というほど分かっていった。

それはもちろんロックマンと対峙する二人もである。

が、リバーズ・ライダーは顔を狂気ともいえる笑顔に歪ませ、待ちきれないようにウズウズしていた。

「おいハク！絶対に手出すんじゃないぞ！コイツは俺の獲物だ！」

「アル、この姿相手だ。展開次第では……って聞いてないね、まったく」

呆れたようにハクはため息を一つついた。ハクが全て言い終える前にリバーズ・ライダーはロックマンに飛びかかっていったのだ。

「ロデオラッシュュ！」

先ほどと同じくリバーズ・ライダーはスピードある蹴りのラッシュュをロックマン目掛けてお見舞い“しろう”とした。

「……………」

それは一切ロックマンは届かない。リバース・ライダーの放った蹴りはガシッとロックマンの左手によって握られていたのだ。

「なっ!？」

リバース・ライダーもそれは予想外だった面食らっていた。すぐに体勢を立て直そうと彼が掴まれた足を振りほどこうともがいてみせる。

しかしそれも全く無駄だった。どんなにもがいてもロックマンの手はギリギリとリバース・ライダーの足を握っていた。

「クイツクドロー!」

振りほどくのがダメならとリバース・ライダーは立て続けに銃弾を何発も連射した。

チュン!チュン!

銃弾の当たる金属音が幾つも響く。確かに放った銃弾はロックマンに当たった、がロックマンは動く気配すらない。

ロックマンは何も表情を浮かべることなく、一歩も動くことなく、ダメージすら受けた様子なく、ただリバース・ライダーの足の裏をそのまま握っていた。

その様子に戦闘狂とかがしていたリバース・ライダーにも焦りの色を見せ始める。



「ハク！手伝え！」

あれほどロックマンとの一騎討ちに固執していたリバース・ライダーだったが、遂に折れて傍らにいたハクに助けを求めた。

その瞬間、何をしてもロックマンが動きを見せる。ロックマンは無造作にリバース・ライダーを隣のウェーブロードへと放り投げたのだった。

投げられたリバース・ライダーは上手く受け身を取る。そして再びロックマンへと突っ込んでいった。

「ロデオチェーン！」

リバース・ライダーはカウボーイの様にヒュンヒュンと鎖を回し出す。そしてチェーンをロックマンに向けて投げ放った。

ロックマンは避ける素振りさえ見せない。投げ放たれた鎖は意思を持つように無抵抗のロックマンへと絡みついていった。

手、足、翼、全てががんにがらめに固められる。これでは身動き一つ出来ない。

「……へっ！」

「いいのかい？僕は手伝わなくても」

ロックマンを捕らえたことで勝利を確信し、どや顔を見せるリバース・ライダーにハクは淡々と聞いた。

「あん？すまなかつたな。もう構わねえぜ」

「そうかい？なら帰らせてもらつよ？あくまで僕はサブで来ていただけだしね」

「おう！迷惑かけたな！」

ハクは目の前に扉を出し、帰ろうとした瞬間……

パリン……

小さくひび割れた音が二人に聞こえた。冷や汗が二人の額を濡らす。

例えるならば体力ギリギリのところでも最も出会いたくないダンジョンのボスに見つかってしまったような……

もっと簡単に、そして率直に言えば……

目の前にあつた自信のある封印がピシピシと崩壊していく。その音が次第に大きくなっていった。

「ハク！」

「御意！」

二人は一度ロックマンから距離を取ってそれぞれ別のウェーブロードに移る。そしてそれと同時に……

バキン！

ロックマンを縛っていた呪縛があえなく崩れ去っていた。

「正直、ここまで骨が折れるとは思いませんでしたね。アキも連れてくるべきでしたか？」

「違いねえ。歌姫を送り込んだことが逆に“暴走”させることになるとはな、読み違えたぜ」

リバーズ・ライダーとハクは苦々しげにロックマンの方を睨んだ。

ロックマンは言葉をはっきりした言葉を発さなければ、考えている様子もない。

そう今のロックマンには“自我”がない。度重なるシンクロウエポ使用の結果、力にのまれてしまった。

よって今の彼はヒーローでもなんでもない。本能のままに行動する破壊臣である。

「……が、目的を達するには容易にはなりましたね」

ハクはリバーズ・ライダーにも聞かれぬようにそう呟いた。

ロックマンはリバーズ・ライダーの方へとスピードを上げて飛び上がった。

「ハク！フォローは任せた！」

「了解です！」

二人はそれぞれの武器を取り出す。

「……………」

ロックマンに対して二人の攻撃準備動作はあまりにも遅すぎた。

ギューーン……

リバース・ライダーを中心に漆黒の重力波が渦巻く。それは小さなブラックホール。物体も電波をも関係なく全てを巻き込む。

「…………っ！」

リバース・ライダーが反応した時には遅かった。その頃には既に渦の中心に巻き込まれている。

「ぬうっ!?!」

ハクはブラックホールから遠かったため、急いで遠ざかり巻き込まれることはなかった。

ロックマンはブラックホールへ刃を繰り出す。

ズバン!

切り裂かれたブラックホールは大爆発を起こし、跡形もなく消し飛んだ。

『ブラックエンドギャラクシー』

爆発が明けたそこにはリバース・ライダーだけでなくウェーブロー

ドから周りにあつた雲まで全てが消え去っていた。

ブラックエース最強の技は文字通り全てを無に消し去ったのだった。

「……アルは戦線離脱ですか。まあ彼のことですのでくれたばっつては  
いないでしょう。それに良い仕事はしてくれました」

ハクはその威力を目の当たりにしても慌てずに、寧ろニヤリとしながら彼はロックマンの方を見た。

ロックマンは相変わらず黙ったまま、そして不気味なほどに動かず浮遊したままである。

「……肉体を告示するシンクロウエポン三度の使用に大技の連続。  
これならこのアヌビス・ルーラーの“能力”に抵抗はできないでしょう」

ハク、いやアヌビス・ルーラーは錫杖をスツとロックマンに向けた。

「意識のないアナタに言っても無駄でしょうが、アナタは“これから何を失う”のでしょうか？楽しみですよ、絶望に歪むアナタの顔を見るのはね……」

ライラ・コンダクター、リバーズ・ライダーの二人を退けたロックマン。

そして今度はアヌビス・ルーラーとの三戦目が繰り広げられようとしていた。

第四十五話 黒翼無双 そして……（後書き）

まず初めに更新が大幅に遅れてしまい申し訳ありませんでした。

今年で部活引退の年な私ですが最後の舞台（大会）がもうすぐあるのです。

その練習が遅くまで続きまして、あまり時間をとることができなかつたのと、疲れのため筆が思うように進みませんでした。

誠に勝手に申し訳ありません。なるべく早くするつもりですが次話も更新日は未定とさせていただきます。

ちなみにあと二、三話でチヨイナ篇は終わるつもりです。

えっ？入試はいいのか？

……ノーコメントですっ！！

## 第四十六話 英雄墜ちる

「……ハアハア、や、やったわ」

ハーブ・ノートは膝をついて息を整えた。彼女の前に横たわるのはハイド。電波変換は解け、ワイザードのファントムもとも地に伏している。

チヨイナ商店街中心で起こった戦いは更に場所を変え、郊外の山林地帯で決着した。

この戦いの凄まじさを物語るように数本の木はねじきれ、地面はえぐれている。

ハーブ・ノートの体力も底を尽きかけていたのか、彼女の電波変換は強制的に解除される。

ミソラはそばにあった木にもたれかかった。

「……ハアハア、早くスバルくんと……合流しないと……くうっ！」

『ミソラ、無理しすぎよ！あなた電波変換に耐えられる体力がもうないのよ！』

「分かってる……分かってるけどどうしてもやらなきゃだめなの！」

ミソラは身体の痛みに堪えながらも何とか立ち上がろうとする。その心中にあるのはたった一つの思い、ただそれだけ。

ハープはそんなミソラを見ていられなかった。なんとしても止めようとしたがミソラは止まらない。動かない身体にムチを打ち、一歩進んでいった。

「（……ゴメン、スバルくん！もうすぐ行くから！）」

再びミソラは再び電波変換し、ハープ・ノートとなった。

雲は黒から灰色に変わり、ポツポツと雨が降り始めていた。

空模様と同じ、涙を流しているのは誰か……この時、物事は既に決まっていた。

「……………どういうことだ？」

アシッド・エースは突如キャッシュデータを削除しだした。ピクチャー・キャンパスに怪訝な顔を見せた。

ピクチャー・キャンパスはパンパンと二回手を叩くとトロイの転送ドアが彼の後ろに現れる。



「もはや兄さんと戦う必要はなくなっちゃったということです。我々の望みはあと一つで叶います。そうすれば如何に兄さんだったとしてももう止めることはできませんよ！」

ピクター・キャンパスはドアを開けて帰る様子を見せた。

「待てマツリ！お前の、いやお前たちの望みってなんなんだ！」

「……それは同じ“子供たち”だったとしても兄さんや姉さん、ジヤックには到底分かるはずのないものですよ。“あの後”起こった地獄を知らないのですからね」

「待て、マツリ！」

アシッド・エースの呼び掛けに応えることなくピクター・キャンパスはその扉の中へと消え去っていた。

扉は閉じられると同時に霧散して消え去った。出口だけでなく痕跡も残さない。

ディーラーの操ったノイズウェーブより遙かに強力な移動手段なのは明らかだった。

「……くそっ！」

ピクター・キャンパスを取り逃がし、悔しさを滲ませるアシッド・エース。

『シドウ！おそらくまだ終わっていません。彼はもう私たちと戦う必要がなくなっただけと言っていました。ならば別の目的があるのかと』

……」

シドウはここで一度自分を落ち着かせるために深呼吸した。アシッドの言う通り、ピクチャー・キャンパスのセリフには気になる点が“いくつも”ある。

「（……考える、あいつらの目的は何だ？）」

もともとシドウたちがチヨイナに来た目的はあるかもしれない兵器プログラムの確保。そのために四つの鍵を手にいれようとした。

しかしピクチャー・キャンパスはその鍵を欲していなかった。ならば、今時間稼ぎをしてまで狙えるものは……

「っー!!」

アシッド・エースはその方向に向けて全速力で走り出した。

『シドウ?』

「アシッド!今スバルはどこにいる!!」

『星河スバルならライブ会場上空の電波に……、なるほどそういうことですか。』

わざわざ電波人間たちを投入し、時間稼ぎまでしてアシッド・エースたちを遠ざけた理由。

「ああ!アイツらの狙いはスバルの“ハートプログラム”だ!」

ピクター・キャンパスはもう時間稼ぎは必要ないと言っていた。そこから読み取れるのはもうスバルは……

最悪の光景が頭の中をよぎる。

「（間に合え！間に合ってくれ！）」

アシッド・エースはウェーブロードを駆け抜けた。

ライブ会場上空の電波……

「暁兄さんお久しぶりですね」

アシッド・エースがロックマンのいるだろう場所に急いで行ったところ、その場所には一人だけ電波人間が立っていた。

「その声は……ハクか？」

「ええ。しかしこの姿の時はアヌビス・ルーラーと呼んでほしいものです」

「……そうか。お前もアイツらの仲間か。アヌビス・ルーラー、ロックマンはどこにいる？」

アシッド・エースが見渡してもロックマンの姿は見えない。そしてウォーロックの電波反応ですら見当たらない。

最悪のパターンか、そう考えつつもアシッド・エースはそう切り出した。

「ロックマンですか？残念ながら知りませんね。彼も……待ちくたびれたのだと思いますよ。この場には“彼”しかいませんよ？」

そう言つてアヌビス・ルーラーはその場に直径二メートルくらいの球体状の電波を出現させた。

その中にいたのは……

「スバル！」

最悪の予感も当たった。当たってほしくはなかった。球体の中には手足を十字に拘束され、磔にされている星河スバルの姿があった。

意識を失っているのか、スバルの頭はガクンと垂れている。そして彼の腕にはハンターがついていなかった。

「……ハク、貴様っ！！！」

アシッド・エースはアヌビス・ルーラーにロックオンし、斬りかかった。

が、アシッド・エースの身体はピクリとも動かない。何かの力で身体に金縛りをかけられていた。

「……………なっ!」

『くっ!私のプログラムが言うことを聞かない!?!』

「そういきり立たないで下さい、暁兄さん。ハートプログラムを持つウォーロックもハンターごと私の手の中にあるのですよ?」

アヌビス・ルーラーはそう言って奪ったスバルのハンターを掲げてみせた。

偽物でない、間違いなくスバルのものである。

「ハク、お前はそれをどうする気だ?」

「持ち帰ってハートを抜き出すだけですよ?ああ、中のウイザードは実験用のモルモットとしても使えるかもしれませぬね」

「……………なら何でこの場にわざわざ残ったんだ?奪い終わったならさっさと帰るはずだろう?」

「そうですね。強いていうなら誰かに実験に付き合ってもらいたかったから、ですかね?」

アヌビス・ルーラーがそう言うと球体状の電波の真下にトロイの扉が出現した。

人間一人が通過できるくらいの正方形大の大きさで、扉としては歪

な形をしていた。

「トロイの扉は場所の座標軸さえセツトすればどこへでも通過できる魔法の扉でしてね。さて、暁兄さん。この扉はその座標軸をセツトしていません。そんな中で“人がここを通ろう”としたなら一体どこに続くと思います?」

そう言つてアヌビス・ルーラーは不気味な笑みを浮かべた。

「やめる!」

アシッド・エースはそれをやめさせようとするが身体が動かない。もがくことすら出来ない。ただ虚しく声を張り上げるだけだった。

「……ええ。あと一人お客様がくるみたいなので少し待ちましょうか。そちらの方がおもしろいですしね」

アヌビス・ルーラーは錫杖をゴンと大きくウェーブロードに一回ついた。

すると離れた場所で悲鳴があがる。そしてスバルの囚われているものと同じ球体の電波が一人の電波人間を捕らえていた。

「……………!」

何か叫んでいるみたいだが二人には何も聞こえない。どうやらジャミングによって音を遮断しているらしい。

が、二人には姿は容易に見ることができた。



## 第四十六話 英雄墜ちる（後書き）

ついにいろんな意味でやってしまいました。

スバル行方不明、そしてウォーロックとの別離。

申し訳ないですけどちょっとご退場……

やめてくださいっ！ミニグレネードもヒートボールもなげないで下さいっ！

ハアハア、取り乱しました。

あと一話ありましてその次の章は想像できるかもしれませんが『スバル搜索篇』です。

ちなみにスバルの行き先は本人が行ったことのある“あの場所”です。果たしてスバルの行方は？

分かって后感想に書くことは勘弁してくださいませ。心に留め置るか直接私までどうぞ。

直接リーダーミサイルもやめてくださいね、意味ないのです。





っていった。

「スバル！」

「もう無駄ですよ、彼は永遠へと旅立ちました。行き先は日本か南極か、過去か未来か、はたまた出口がないのか。僕たちも知らないのですからね」

全てをのみ込んだ扉は粒子となって姿を消した。これでスバルへと続く手がかりは全て消えた。

アシッド・エースはそれをただ見ているだけしかできなかった。怒り、無力感、失望、あらゆる負の感情が彼にのしかかる。

されどその身体は動くことすらできなかった。

「さて、ハートを回収した以上後は帰るのみ。さらばです」

「ハク！お前！！」

アヌビス・ルーラーは身体を翻し、また扉を出現させた。そして扉は開いていく。

スバルに引き続き、ウォーロックまでが連れ去られようとしていた。

「ジエミニサンダー！」

「ダイヤモンドダスト！」

「むっ！」

扉とアヌビス・ルーラーに向かって落雷と吹雪が襲いかかる。

アヌビス・ルーラーはそれを左へと跳んで間髪避けた。双撃にさらされた扉は粉々に砕け散り、粒子と化して消えていく。

「何奴？」

突然現れた来訪者たちにアヌビス・ルーラーは問いかけた。

「「ジエミニ・スパーク！」」

「私はダイヤ・アイスバーン！スバルくんのハンターを置いていきなさい！ローリングアイス！」

ダイヤ・アイスバーンの二つの放った氷塊はアヌビス・ルーラー目掛けて滑っていく。

「面倒な！バトルカード、デイバイドライン！」

アヌビス・ルーラーが錫杖でウェーブロードを一突きすると大きく道が崩壊する。

氷塊は進む道をなくしてダイヤ・アイスバーンの方へと戻っていく。だがアヌビス・ルーラーを逃がすまいと氷塊の影から白と黒の二人が飛び出した。

「逃がすものか！バトルカード、ブレイクサーベル！」

「バトルカード、マミーハンド！」

「おのれっ！」

息もつかせぬ追撃にアヌビス・ルーラーは体勢を立て直す。が、ジエミニ・スパークBの放った死者の腕に右足を捕られていた。

「っ！！」

「もらった！」

「調子にのるなあ！！」

ガキイン！！

ジェミニ・スパークWのブレイクサーベルとアヌビス・ルーラーの錫杖が交差する。

互いに力で押すが拮抗していて二人はその場でにらみ合った。

「おのれっ！味な真似を！お前も直にこの僕の能力に……」

「大丈夫。君の能力は知らないけど百パーセントそれはないから」

「何をふざけたことを……」

「それなら後ろ見てごらん！」

そういうジェミニ・スパークWの顔は勝利を確信した顔だった。

「もらった！」

「調子にのるなあ……」

ガキーン！！

ジェミニ・スパークWのブレイクサーベルとアヌビス・ルーラーの錫杖が交差する。

互いに力で押すが拮抗していて二人はその場でにらみ合った。

「おのれっ！味な真似を！お前も直にこの僕の能力に……」

「大丈夫。君の能力は知らないけど百パーセントそれはないから」

「何をふざけたことを……」

「それなら後ろ見てごらん！」

そういうジェミニ・スパークWの顔は勝利を確信した顔だった。

アシッド・エースは囚われたまま、ジェミニ・スパークの二人は動きが止まっている。

そしてダイヤ・アイスバーンは……

「ラストオ！！ブレイクアイスハンマー！！！」

全てに気付いた時はもう遅い。アヌビス・ルーラーの後ろから氷のハンマーが叩きつけられる。

全て動きを封じられていたアヌビス・ルーラーの身体は頭からウェープロードにめり込んだ。

そして……

「スバルくんのハンターは返してもらおうよ」

アヌビス・ルーラーの手からこぼれ落ちたスバルのハンターはジェミニ・スパークWの手にあった。

彼の言葉は意識を飛ばしていたアヌビス・ルーラーに届くことはなかった。

「すまなかつたな、ツカサ、スズカ」

アヌビス・ルーラーの呪縛から解放されたアシッド・エースは意識がなく、電波変換が解けてしまったミソラをそつと地面に降ろした。

そして三人も電波変換を解除する。アヌビス・ルーラーを倒しても三人の表情は当たり前だが沈んだままだった。

「……覚悟はしていますが暁さん、スバルくんは……」

「……残念ながらまさかだ。しかも行方知れず。幸いなのは現状を見ていたウォーロックを救出できたことだけだ」

親しき友をいきなり失ったことにショックを隠しきれない二人。

シドウの言葉にツカサはギョツと唇を噛み、スズカは涙を光らせながら眼を背けた。

「何で……何でスバルくんがそんな目にあわなきゃいけないの？彼何も悪いことなんかしてないでしょ？」

「……スズカさん」

感情をありのままに出して涙を流すスズカをツカサはそっと抱き締めた。

堪えきれなかったスズカは彼の胸でそのまま泣き出した。

『シドウ、星河スバルの探索終わりました。やはり……ゼロです』

「……分かった。ひとまずWAXAに戻る。あっちの設備の方がいいからな」

『ええ。それにしても……手がかりがこつも失われるとは』

ウィザードオンしたアシッドの言う通り、倒したはずのアヌビス・ルーラーの身体は粒子化して消え失せた。

そして破壊したトロイの扉の残留データも取れず。つまりまともな手がかりを得ることができなかった。

しかも身分証明ならびに個人の位置を調べられるハンターまでが取り外されている。

つまりスバルを探すのはとてつもなく難しいのだ。

そしてもう一人……ミソラももしかしたらショックで立ち直れない可能性がある。

任務一回目なのに遊撃隊が失ったものは大きすぎた。



『これからはどうするのです?』

「んあの決まってるだろ!まずはスバルの救出、そして“アレ”の保護だ!」

状況は厳しいがシドウはまだ諦める気はなかった。今まで諦めなかった彼に救われた人は数多すぎる。

諦めない彼は幾重も奇跡を起こしてきた。今度はシドウたちが彼を救う番だった。

「待ってるよ、スバル!必ず見つけてやるからな!」

遊撃隊隊長として、そして一人の男としてシドウはチヨイナの空にそう誓った。

空は真っ黒な雲が広がり、雨がポツポツと……降りだしていた。

## 第四十七話 失ったものは大きく……（後書き）

はい、この話でチヨイナライブ編終了です。何か非常に暗い話になってしまいました。

この話で“四季の子供”は神の腕、脚、頭脳の三つを手に入れたこととなります。

そして残るは魂と心臓<sup>スピリット&ハート</sup>、これからどう転んでいくのでしょうか。

さて、一話閑話を挟みまして次からはスバル救出編に入ります。

スバルの行方は？

そしてシドウの口走った“アレ”とは？

いろいろと謎が多いですが物語ももうすぐ半分です。これからも拙作をよろしくお願いします！

## 閑話 騎士の誓い

「エアリィ、このわたくしの騎士である以上、決してわたくしより先には逝ってはなりません。最後まで私の側にいてくださいまし」

広い広間にたった二人、玉座に座る女性とその前で片膝をつく騎士。

玉座に座る女性はまだ少女のあどけなさを残している。年の頃はまだ普通なら高校生といったところだろう。

しかし年齢に不相応なまでに彼女は凜とした風格と高貴なるオーラを身に纏っていた。

女性はその騎士に緑色に輝く宝剣を渡した後、彼女にそう命じた。

「仰せのままに。この命尽きるまでお供致します、姫様」

はっきりとこの主についていく。彼女は、騎士エアリィはこの場で確かに誓いをたてた。終世に渡ってその身を捧げる覚悟だった。

「……またあの時の夢か」

エアリイはそう呟いてベッドから身体を起こした。

額には冷や汗。この誓いともに彼女の嫌な記憶までもが蘇る。

眼をつぶれば今もはっきりと浮かぶこの光景。忘れもしない、彼女の主の顔。

しかしその誓いは叶うことなかった。その夢を見る度にエアリイは自責の念にかられるのだった。

彼女は流れ出る額の汗を拭った。

「（全てはあの日から……あの時私が不覚をとらねば。あの者に連れ去られねばこのようなことにはならなかった。）」

彼女にとって悪夢の始まりである、“彼女の全てを失った”あの日から既に一年以上経っていた。

それなのに悪夢は何度もエアリイを襲い、そしてそのたびに彼女は後悔した。

己は無力であると嘆いた。

そんな時、ふとした偶然であったがエアリィは四季の子供と出会ったのだった。

そして新しく誓ったのである。命に変えても主との誓いを果たすために……

エアリィは彼らと手を組むことを決めたのだ。

そして何ヶ月か経った今、三つのパーツが揃った。後は魂と心臓スピリットハートのみ。

彼女の願いが達成するまであとわずかである。

そしてアルとハクがオリジナルのパーツを携えて今ハートの奪還に臨んでいる。あの二人なら可能だろう。

エアリィはそう読んでいた。

「（ロックマンは私が戦いたかったのだがな）」

喜ばしい反面、未練も残してつつエアリィは回復しきっていない自分の身体を見た。

右目から頬にわたってついた大きな切傷、そしてもう一つ、彼女の利き腕である右手が肘からスッパリとなくなっていた。

さすがにこれでは戦えない。

実は傷は“三日あれば治る”のだがそれでも準備期間は要してしま

うのだ。

エアリィは思わぬ形で戦うことになってしまった何もかもを拒絶する眼をしたあの少年を思い浮かべた。

流れるような体さばきに電波障壁、そして二刀流の剣舞。

任務後で体力を消費していたといえ、力を全て解放したのに手傷を負ってしまった。

無論彼女はそれを言い訳にするつもりはない。恥ずべき過去として戒めとしてその身に傷を残して、新しく決意した。

そしてハートの持ち主であるロックマンと自らに傷をつけたプライは必ず自分が倒すとエアリィは誓っている。

しかし……それはあくまで二の次。

「（姫様、あと少しです。あと少しで私も参ります）」

第一はやはり主の元へ馳せ参じることだった。

エアリィが物思いにふけているとガーッと扉が開く。

そこにいたのは服がヨレヨレの若干傷ついているアルの姿だった。

ポロポロのアルの様子を見てエアリィは察した。

「……まさか貴様が敗北するとはな」

「つい楽しすぎてリバーズと二人で遊んじまった。まさかブラック  
エースを持ち出されるとは思わなかったな。だけど次は……必ず勝  
つてみせる」

アルの表情は遊び相手を見つけた悪ガキのような笑みである。間違  
つても“ロックマンへの復讐”を持ち出す人間には見えなかった。  
そしてそのウィザードも……

『まあ、アルについてきたかいはあつたな！今世のロックマンは前  
のいけすかない青ガキよりか十分マシだぜ。こりゃ次が楽しみだ！』  
二人揃ってバトルジャンキー、似た者同士である。二人は大声をあ  
げてギヤハハと笑った。

「アイツは私の獲物だが？」

「おう、それなら早い者勝ちだ！負けても文句なしな！」

「わかった。それにしても……」

性格変わりすぎだろう。エアリィは心の中でちゃんとそうツッコミ  
を入れていた。

アルはまだバトルの興奮覚めやらぬらしい。彼は「感覚忘れん内に  
トレーニング行ってくる」と部屋から出ていった。

「アル！」

「あん？」

「……お前はこの戦いに、何を望む？」

エアリーの質問にアルはピタリと足を止めた。ドアはガーッと音を立てて開いていつている。

それでもアルはエアリーに背中を向けて動かなかった。

「なんだろうな、昔の動機だったら親父を奪ったロックマンとWA  
XAへの復讐なんだけど……」

「……けど、何だ」

「今はアレだ。マツリやハル、アキやハク、“仲間たち全員”に願いを叶えてほしい……かな？」

アルは考えて少しずつ言葉を紡ぎながらエアリーに、そう答えた。

「“願い”だと？」

「おう。あれでも“四季の子供”のメンバーの願いは全員違うんだ。だけど叶えるにはこの“力”が必要になる。だから……俺はアレを創りあげたいんだ」

「……そうか、願いか」

「ああ！“戦乙女”バルキユリア お前も“仲間”なんだ、お前の願いも叶えたい！全員で願いを叶えてこそ四季の子供だからな」

『このバカはカッコつけすぎだけどな！』



アルとそしてリバーズまでも二ヒツとエアリィに笑顔で答えを返した。

そしてエアリィも……

「アルよ、我が“真名”はエアリィ、エアリィ・エンリル！我が主とこの真名に従い、お前に私の肩を預けてやろう！」

コードネームでもなく、名前だけでなく、全てを捧げることにした。

「おう！よろしくな、エアリィ！」

アルはそう言って彼女の部屋から立ち去った。

今のエアリィの顔は何か憑き物が落ちたかのようにすっきりしていた。

「ロックマン、私は早くお前と戦いたい。失ったものを取り戻すためにも決して負けはせぬからな！」

エアリィはそう決意を新たにした。

その日の夜、エアリイ・エンリルは傷の塞がらぬまま行方不明となった。

彼女の部屋は特に騒いだ形跡も血痕もない。

彼女の失踪について人為的なおかしい場所はほぼなかった。

ただ一つ、彼女の所有する“神の腕”こと彼女の薙刀がベッドの上になaturallyに突き刺さっている以外は……

## 第四十八話“記憶”

暗闇の中、彼女は一人で立っていた。周りは真っ暗で何も見えない。いつもいるはずの相手の声さえ聞こえない。彼女は恐怖にかられた。誰かいないのか？

彼女は声を張り上げて何度も、何度も呼んでみた。

友の名前を、仲間の名前を、愛しい人の名前を。ありとあらゆる人の名前を読んでみた。

しかし聞こえるのは空間に木霊する自分の声だけ。静寂だけがそこにはあった。

不安はやがて恐怖に変わる。また置いてかれたのかと。

彼女は走った。方向も行き先も分からず、ただ闇雲に走った。

どれだけ走ったのかは分からない。どれだけ時間が過ぎたのか分からない。

だけど彼女は走り続けた。そして一つだけ……彼だけを見つけた。

彼を見つけたところで彼女は手を伸ばした。

「……やめて!! スバルくん!!」

ミソラは叫んで飛び起きた。ハアハアと息は荒く、全身汗をかいている。

彼女は息を整えながらまず周りを見回した。白い壁紙にベッドに机とテレビが一つずつ。

そして自分は病院服を着ていて、点滴が繋がっていた。

清潔なこの場所に彼女は見覚えがあつた。操られたダイヤ・アイスバーンと戦ったスバルが運びこまれたWAXAの病室だ。

「……夢？」

やっと現状把握が出来たらしい。

『ポロロン、やっと目を覚ましたわね。あなた五日間も眠ってたのよ、ミソラ』

「ハープ？」

ベッドの側に置いてあった自分のハンターからハープはウイザードオンスした。

ハープは心配した表情でミソラの元に近寄った。

「…………え、あ、うん。心配かけてゴメンね、ハープ。でも私何でここにいるの？引退ライブ…………やってたよね？」

ミソラの言葉にハープはハツとしてそれから悲しげな表情に変わった。

どうやら“あの出来事”はミソラの記憶から抜け落ちてしまっているらしい。

『ミソラ、やっぱりあなたあの時のこと…………』

「…………ハープ？」

『なんでもないわ。それよりお医者さん呼んでくるわね』

「ねえ？スバルくんは…………今どこにいるの？」

慌てて話題を変えようとするハーブにミソラは“今一番気になること”を尋ねた。

出ていこうとしたハーブの身体は止まり、背中はワナワナと震えている。

聞いちゃだめ!!

そんなハーブの様子から警鐘が頭の中で鳴り響きつつもミソラは聞かすにはいられなかった。

さっきまで見ていたあの夢の事、ミソラに“覚えはない”のだけどリアルに感じすぎた戦いの数々。

そして何故か頭にひっかかる薄紫色の蝶々。

そしてもつと現実だと信じたくない……

「……………スバルくん、いなくなっちゃったの？」

驚きのあまりカツと見開いたハーブの目を見た時点で答えは一目瞭然だった。

記憶が飛んでいるはずなのに何で知っているのか。ハーブは驚きを

隠しきれなかった。

「……そっか。現実だったんだ」

『ミソラ、あのね……』

「たぶん私が全部ホントの事だって認めたくなかっただけ。だから……記憶がないみたい。だけど、しっかりと私の心の中まで刻まれちゃってるみたいなの」

ミソラはハープに一つずつゆっくりと……自分の中で気持ちを整理しながら語った。

さっきまで夢を見ていたこと。

ライブをしてたと思ったらいきなり戦いになった。

ロックマンがまた守ってくれた。

ハープ・ノートをかばったロックマンが渦にのまれて姿を消してしまった。

それをまた見てるだけしか出来なかった。

何故かそれはミソラがハープ・ノートを見ていてまるで映画を見ているような感じだったらしい。

ミソラが語った夢の内容は異なることはあるにせよ、チヨイナでの事件そのもののあらずじだった。

『……………』

ハーブはミソラの話をただ聞き続けた。頷いたり相づちは入れつつも口出しはしなかった。

そして語るミソラの目からも涙が溢れてくる。

スバルを目の前で失う画は彼女にとってあまりにショックが大きすぎた。

だから彼女は自分を守るため無意識に記憶を消したのかもしれない。ただ……

「忘れてたくても……忘れられないの！スバルくんが目の前で消えちゃう画がどうしても頭から離れないの！！」

なぜかそれだけは忘れることができなかったのだ。

咎としてミソラを縛りつける呪いのように、或いは真逆に誰かがスバルを救うために残した欠片ピースのように。

「ねえ、ハーブ！私はどうしたらいいの？もうどうしたらいいか……分からないよ」

今回の一件で無力であることを思い知り、そして心の支えまでも失った。今彼女の光はハーブだけなのである。



ミソラは全てをハーブに吐露した後、遂に顔を手で押さえて泣き出した。

『ミソラ、昔もこんなことあったの覚えてない？』

「む、昔？」

ハーブは優しく諭すようにミソラに告げた。記憶を頼りになんとか思い出そうとする。

そしてわりと時間もかからずに見つけた。

「カミカクシの……時」

二年前、ムー大陸出現の事件だ。カミカクシとはムーの遺産の一つであり、物質転送装置のことである。

転送するのに数分かかるという弱点を除けばトロイの扉にも劣らないシステムだ。

あの時はブライの放ったカミカクシによってスバルは目の前でミソラを含めた四人も失いかけている。

「その時スバルくんは……」

一時全てを諦めていたのだが、再び立ち上がり、情報がない中全員を見つけたのだ。

ロックマンはどんな苦しい状況でも奇跡を起こしてきた。

それは彼が諦めなかったから……、そして絆の力があつたからだ。

そう、彼ならそうするはずだと。

「私が……スバルくんを探せばいいの？」

『ポロン、やっと道が見つかったみたいね』

「だけど私の力じゃ何もできないよ。スバルくんみたいにヒーローじゃないし……」

『だから、アナタは一人じゃないでしょ？私もいるし、友達だつているじゃない！』

『ねっ』と言ってハープはミソラのハンターに記憶してある写真を見せた。

そこにはスバルや委員長たちと写ったコダマ小学校卒業式の写真がある。

過去に闇があつても振り切つて、みんな満面の笑みで写っていた。

ミソラはその写真を眺めた。しかし表情はまだ……浮かないままである。

ミソラの目は写真に写るスバルの笑顔だけを捕らえていた。

「……うん、分かつてる。どうすればいいか分かつてるんだけど、まだ私の中で整理がつかないの。」

『……ミソラ』

「ゴメン、ハーブ。悪いけどちょっと一人にして」

これからWAXAの会議が始まる。もちろん議題は四季フォースチルドレンの子供とスバルの話題について。

だが彼女は出席できる状況ではない。ハーブはミソラの意味を組んで部屋を出ていった。

「……スバルくん、ゴメンね、ゴメンね！」

ミソラは布団に顔をうずめ、何度も何度も泣きながら謝り続けた。

しかしそこにスバルはいない。汚れなき白の部屋に虚しく響くだけだった。

ミソラに道は示されてはいる。だが立ち直り、進み出すにはまだ時はかかるようだ。

「まさか戦乙女バルキュリアが行方をくらすとは……」

「これは著しく美しくない事態だ。さすがに裏切ったとは考えにくい……」

ハクとマツリは部屋に残された薙刀を見ながら言葉を交わした。

エアリーの行方不明。これは四季の子供にとっても手痛い損害だった。

証拠がほとんどなくどこに行ったのかも不明。この状況では調べようもない。

「アルには話したのかい？」

「もちろん。彼も結構必死になっていたよ。彼女がオリジナルの腕の所有者なのだから。だがまさか……置いていくとは」

「偽物の可能性も捨てきれない。一応調べておくよ」

「……分かった。僕からアルに伝えておく」

ハクはエアリーの薙刀をベッドから抜き取ると自らのハンターに転送した。

「じゃあ僕はアルに報告に行くよ。分析は早く頼むよ」

マツリはそう言って現場を後にした。

マツリが完全に出ていくとハクは苦虫を噛み潰した顔を見せ、そばにあったベッドを蹴った。

「まさか電波体ではなく人間の“星河スバル”がハートの持ち主とは……判断を誤ったか。これでは戦力が足りないではないか」

ハクは今までの先例上、電波体がプログラムを持っているのだと思っていたのだ。

だから一番厄介な敵であるスバルとウォーロックを分離し、どうでもよいはずのスバルを次元のかなたへと送った。

しかし蓋を開けてみればこれである。オリジナルのハートもこれで行方知れずとなってしまうのだ。

ハクには計算外の上なかった。

「……今できるのは“記憶”の回収を進めておくことか。今に見ている。必ずハートは回収して見せるからな！」

ハクもイライラしながら現場から立ち去った。

“彼”は気づかなかつたのだが、この現場はやけに電波の乱れがひどかつたという。

## 第四十八話“記憶”（後書き）

今回はかなりシリアスな話でした。

流星のロックマン三作全て、スバルの大切な人がいなくなるという場面が出てきます。

そして私も先例に従い、スバルを……。

ミソラの視点へと変えましたが書いていて非常に辛く、そして重い話題でした。

スバル（もちろん生きてますよ！！）の再登場までは少しお待ち下さいませ。

次話は再び会議となります。

スバルの失った穴をどう埋めるのか？そしてウォーロックはどうなったのか？

今後とも拙作『Aハーツ』をよろしくお願いします！

## 第四十九話 星屑（前書き）

注意

今回の話はかなり腹黒い、ないしは読んでいて不快に感じるかもしれない話題を含みます。

流星のロックマンらしく絆をメインの話としていますが、話の都合上入れざるを得ませんでした。

軽度ではありますが、苦手な方は即座にこの話はとばして下さい。

それでも大丈夫な方は次へお進み下さいませ。

この話についての批判は感想ではなく直接のメールにてお願いします。

## 第四十九話 星屑

「おねえさん……誰？」

彼女が見つけた彼は無垢な目をしてそう聞いてきた。

「……んなっ！我を覚えておらぬとな？」

「うん？だって僕たち初対面のはずだよ？」

彼はそう言っているが彼女にとってはそうではない。一度ウェーブロードで出会っているはずである。

かといって彼女の目には彼が嘘を言っているようには思えなかった。彼の見つめる目はまっすぐ、正直そうであるもどことなく影をはらんでいた。それに彼の目にはあの時感じだった力強さなど微塵も感じない。

目だけではない。口元も表情も、歴戦の戦士特有の強さが何も見えない。

逆に無垢な子供とさえ見えてくる。そこから彼女は一つの考えに行き着いた。

「まさか記憶を失っておるのか？」

「えっ？それはないよ。だって僕は僕だよ？」

そう言って彼は彼女に自己紹介を始めた。



名前、年齢、住所、家族構成、趣味まで。

確かにほとんど間違いはない。否、“ある意味”では全てあっているのだ。

だが、今彼女の前に座っている“彼”は彼女の知っている“彼”とは決定的に異なっていた。

「いや、この場でそれを言ってもしょうがない。それ以外にも聞きたいことがある。」

「……何ですか？」

彼女が他にも質問しようとした瞬間……

ビー！！ビー！！

『シンニユウシャハッケン！シンニユウシャハッケン！“カーネルプログラム”キドウ！』

けたたましいサイレンと赤いランプが幾つも起動した。

WAXA日本支部……

会議の始まる前からその会場は実に物々しい空気に包まれていた。

日本側からの出席は遊撃隊隊長、暁シドウとクインティア、そして他のサテラポリス隊員やWAXA支部員たち数名だった。

円卓にそれぞれが座り、前にある電光掲示板や資料を見ている。

あの真面目なのかふざけてるのか分からないようなシドウでさえ一言も喋らなかった。

画面の幾つにはリアルタイムで人が映っており、同じように資料を読んでいた。

その中の一人にはあのオリヒメもいた。そばにはエンプティが控えているのも画面の隅に見える。

そして残りの画面には肌の色も髪の色も違う人たちが映っている。そしてそれぞれ違う言語で話していた。

彼らはアメリッパ、シャーロ、チヨイナといった各地方のWAXA支部長やそれに劣らぬ程の重要人物。そして……

中央画面にはWAXA司令長官、そしてWAXA最高研究顧問、ヨイリー博士の姿もあった。

『それでは定刻となりましたのでWAXA緊急会議を始めさせて頂

きます。私、会議司会進行をつとめさせていただきますシャー口支部のユーリと申します』

本モニターとは別の画面にユーリの姿が映し出された。

なお、会議に出席しているメンバーはイヤホンとインカムを付けている。

そこから通訳された言葉が聞こえてくるのだ。

『まずは先日のチヨイナ襲撃事件について報告をお願いします』

ユーリの言葉に従い、チヨイナ支部の担当者が報告結果を述べ始めた。

WAXA側のいらんだ通り、四季の子供がチヨイナに姿を現したため、サテラポリスの精鋭を派遣したこと。

各地で戦闘となり、結果“神の頭脳”を奪われたこと。

敵側の一人であると考えられるファントム・ブラックを拘束することには成功したこと。

被害として逆にロックマンこと星河スバルが敵の手に落ち、行方不明であること。

『……以上です。ファントム・ブラックは“某監獄”に拘置しておりますので、今後彼から情報を引き出してみます』

チヨイナ支部の報告には“ブレイン頭脳”を奪われたこととロックマンを失

ったことはあった。

しかし四季の子供相手に手玉にとられたことなど、いろいろ都合に悪いことは隠されていた。

『むう、ロックマンという優秀な“駒”を失ったか。これで我々の戦力は大幅に減退したな』

『急いで“戦力たる”電波人間を確保しなければなりませんね』

『そもそもなぜロックマンをチヨイナに派遣したのですか？心臓の所有者をむざむざ渡すとはなんたる失態か』

画面では本部や支部の人間が好き勝手見解を述べていた。

今まで電波人間というこの時代における重要戦力を最大数保有してきた各支部の日本支部への批判。

そしてこれを機に電波人間を“兵士”として徴用しようとする一部のWAXA官僚。

それぞれの汚い本音が言葉の端々に見え隠れしてくる。

まだ報告だけをすませただけなのに会議はだんだんと収拾がつかなくなっていた。

司令官やヨイリー博士、オリヒメなどスバルをよく知っている人間はそういつた発言を聞いて、露骨には出さないが不快感をわずかながら見せていた。

『……そもそも星河スバルを“使用する”と言い出したのは司令官官でしょう？今回の責任はどつとるおつもりですか？』

たつぷり黒い口ひげを蓄えた男はニヤニヤしながらそう司令長官に切り出した。

『ラバルナ支部長、申し訳ありませんがそう言った発言はお控えくださいますよう』

『シャーロの若造<sup>ガキ</sup>は黙ってる！これは今後を決める上で非常に重要な事柄であるぞ！』

司会者のユーリが止めるよう指示したにも関わらず、ラバルナ“WAXAアジーナ支部長”は逆ギレして怒鳴った。

ラバルナの発言をきっかけに今度の話題は司令官への責任問題となつていった。

“会議は踊る。されど進まず”

大昔の言葉であるがこの言葉が今の状況を正確に表していた。

そんな中、シドウは……

「……………」

「落ち着きなさい、シドウ。あなた日本支部の代表なのよ」

「……………」  
「分かってる」

机の下で床をカツカツと蹴っていたのをクインティアに諫められていた。

開始始まって早々あまりに無意味すぎる討論に苛立ちを募らせていた。

いや、もう討論と呼ぶにもふさわしくない状態である。

ラバルナ支部長を筆頭に今までの本部や日本支部の失態を槍玉にあげ糾弾しているだけ。

時間ばかり使ってしかも中身は無駄。

具体策どころか進まない話し合いにシドウの苛立ちはだんだんと増していった。

カツカツ……

『ロックマンが“兵器”として有用な……』

カツカツ……

『と言いますがね、オタクただ……』

カツ！カツ！

『第一に司令官が……』

バンツ！！

その時日本支部の机は大きく音を立てた。

数分後……

「……やっぱりやったわね、シドウ」

「ったりめーだ。タヌキ共のあんな馬鹿話付き合ってるほど俺たちに時間はないんだ！」

「……博士にまた怒られるわよ」

「臨むところだ、といたたいが勘弁してほしい」

だんだん怒りの熱も醒めてきて“ やっちまった感” たつぷりのシドウ、その後ろからクインティア以下、会議出席メンバーが全員続いた。

隊員たちの顔は晴れやかであり、クインティアも咎める言葉と違って顔は笑っていた。

結論だけ言つとシドウたち日本支部のメンバーは会議を途中退場したのだ。

「……それにしても大口を切ったわね」

クインティアは怒りのあまりシドウが怒鳴った一言を一句違わず復唱した。

シドウは勘弁してくれと言わんばかりに恥ずかしそうに頭をかく。

後ろにいる隊員たちからは「尊敬します！」や「暁、カッコよかったです」やら「さすがは隊長！」など先輩後輩関わらず大評価をシドウは受けていた。

そして彼らはサテラポリスへと戻っていく。

指令室に入るとシドウは各班に一つずつ指令を出していった。

「最後にティア、ジャックたち遊撃隊員をできるだけ集めてくれ」

「わかったわ」



指示を出し終えたシドウは指令台に登る。そしてマイクを使わずに大声で話し出した。

「あの“ヒゲダルマ”にも言ったが俺たちは駒でも兵器でもない！ 誇りあるサテラポリスの、WAXA日本支部のメンバーだ。俺たちは人々を、仲間を、全てを守る責務がある！ 決して権力だけの存在じゃない！！」

シドウの叫びにその場にいた全員が「そうだ！」と応えた。

「俺たちは仲間を見捨てない！ 作戦名“スターダスト”！！ 星屑を見つめるようなわずかな可能性でも俺たちはスバルを見つけだす！！」

シドウたちが出ていったその後も会議は中身のないまま続いていた。

ヨイリー博士やオリヒメなどの有識者や何故かシャーロ支部から批判はあったが強硬に採決はなされてしまった。

ひとつ、現WAXA司令長官を解任、代行が決まるまで支部長が協議の上、決定すること。

ひとつ、現段階をもって非常事態とし、全ての電波人間を完全に本部の統治下におくこと。

つまり、この瞬間から民間人を含めた全ての電波人間が……戦争に参加する義務を負っていたのだった。

## 第五十話 導きの蝶々

「……………こうなるとまずいわね」

会議終了後、ヨイリー博士は自身の研究室で頭を抱えていた。

彼女の目の前にあるのは行方不明のスバルのハンターである。

アヌビス・ルーラーからスバルのハンターを回収したツカサ。

その時スバルのハンターは故障寸前であり、ハンターと連動しているウォーロックも意識がなく消去デリートされかけていた。

そのためツカサはシドウの薦めもあり、ハンターの修理とウォーロックの検査のために博士に預けていたのだ。

あの事件から数日、修理されてハンター自体は機能も申し分なく使える。

だが持ち主が行方不明以外にもこのハンターにはウォーロックが意識を取り戻していないという問題があった。

普通ウィザードは全てのデータが存在して修復された場合、修理完了と共に意識を取り戻す。

しかし記憶・感情といったものは例えウィザードだったとしても修復は難しいものがある。

わずかな髪の毛分のデータが欠けていたとしても、それが記憶を司

る中枢の可能性もあるのだ。

ヨイリー博士がウォーロックを検査したときデータ回収率は99.99%だった。

ボロボロだったが奇跡的にウォーロックの身体は何も問題なく修復できるはずだったのだ。

……が、現実にはその0.01%が大きすぎた。

今ウォーロックは静かに眠り続けている。まるで戦友の帰りを待つように……

そしてもう一つ、ヨイリー博士が頭を抱える問題は先ほど終わった会議である。

二年前からスバルの理解者であった本部司令長官の解任と電波人間の強制徴用。

特に大きな問題は後者であった。スバルのいない今、ウォーロックの身柄取り扱いはWAXA本部にある。

だが今、ウォーロックを本部に渡してしまえば……結果は目に見えている。

「（あの子ならやりかねないわ）」

本部司令長官権限を使用し、博士自身から強制的にウォーロックを奪うこともやりかねない。

だからこそ急ぐ必要があった。まだ本部司令長官が決定してない今のうちにウォーロックを誰かの手で保護してもらったために。

かつての弟子を思いながらヨイリー博士は……結論を出した。

その後WAXA日本支部……

「……暁さん、スバルくんはまだ見つからないんですか？」

ルナはシドウに電話でまたスバルの安否を問いただした。

スバルが消息を絶つてから二週間。WAXA日本支部は全力でスバルの捜索に臨んでいた。

さらにツカサやジャック、スズカと同じようにコスモ・ドラグーンとして電波変換可能となったソラは、それぞれの時間の合間を縫って各地を飛びまわってスバルをさがしていた。もちろん彼らはだけではない。

ルナもキザマロもゴンタも、そして女優の活動が忙しいスズカも、

時間を見つけては各地の情報収集にあたっていた。

しかしスバルへ繋がる情報は一向にない。そのためWAXAには毎日誰かから情報は入ってないかと連絡があった。

もう一月も終わり、二月に入ってしまった。

「……ゴメンな。まだスバルの手がかりはこっちもないんだ」

「……分かりました。ありがとうございます」

ルナは非常に落ち込んだ様子でシドウにお礼を言って電話を切った。

通話を終えたシドウはまた無力感に苛まれ、ギリツと唇をかんだ。

毎日毎日誰かからか連絡は来るのだが決まって答えは同じなのだ。

WAXAの先端技術を使ってもスバルの行方はつかめていない。

それにスバルの搜索が困難を極める理由も幾つかある。

一つ、スバルが身分証明であるハンターを持っておらず、信号を探知できない。

二つ、トロイのモクバのプログラムは元々電腦の不正侵入プログラムらしい。なので、もしかしたら現実世界に存在しない可能性もある。

そして三つ、ついに本部から……星河スバルの探索を中止するように命令が入った。

仮の本部司令長官にアジーナ支部長、ラバルナ・アーカナイトが就任。

彼は例えロククマンが強力な力を持っていたとしても、今の非常事態に不確定な戦力の救出は不要と考えたのだ。

それに心臓ハートが行方不明ならば四季フォースチルドレンの子供の目的達成もできなくなる。

つまりは五つの神の兵器が揃う前に戦力を集中させ、一気に叩き潰すという徹底的殲滅戦を狙うのだった。

もちろんシドウたちは納得できないが、武官の作戦としては筋の通るところもある。

だから各支部からもこの作戦は承認された。よってシドウたちは表だって行動することもできなくなっていたのだ。

「（あのヒゲダルマのことだ。また難癖つけてくるに決まってる。その前にスバルを見つけないと……だがどうするか）」

シドウが面倒になった本部への対応について考えているとドアが開いた。

「曉さんっ!!」

部屋に入ってきたのは急いできたのか、息を切らしているミソラだった。

ミソラは体調はもう大丈夫なのだが、スバルを失った精神的なダメージがまだ尾を引いている。

日中は大丈夫なのだが夜一人になると何度も悪夢に悩まされたり、パニック寸前に陥るらしい。そのためまだWAXAの内に入院しているのだった。

今はスバルの母、あかねがミソラに付き添っているからだいぶ良くなってきたらしいが……

「ミソラか。もう体調は大丈夫なのか？」

「はい。大丈夫です」

ミソラは笑顔を見せるものの、やはり顔は青白く、精神的な疲労が見え隠れしていた。

そしてシドウはミソラもやはりスバルの安否について聞きにきたのだろうと考えていた。

「暁さん。スバルくんの……」

「ゴメンな。すぐに見つけてやるからな」

「違うんです！スバルくんの手がかり、私が持つてるかもしれないんですっ……！」

「そうか、スバルの手がかり……ってミソラ！それはどういふことだ！？」



ミソラから告げられた予想外の一言にシドウはクルツと彼女の方に向き直った。

今までWAXAの総力をあげても一つも見つからなかったスバルの手がかり。

シドウはまさか意外なところからと驚く一方、ミソラの情報に藁をも掴む気持ちになった。

「分かりました！えっと私についてきてほしいんです！」

ミソラはシドウと、それから途中で出会ったクインティアを自分の病室に案内した。

「これです！」

ミソラはハンターのバトルカード内に入っていた薄紫色の蝶々の絵柄のはいったカードをシドウに手渡した。

「これは……カードか？」

『ポロロン、ミソラがファントム・ブラックと戦った時にいつの間にか入ってたカードよ。』

ハーブはミソラの代わりにファントム・ブラックの戦いについて報告している。

これを使ったハーブ・ノートは薄紫色の蝶々の羽根などいろんな能力を得た。

しかしこの力の反動としてかなりの体力を消費するという。

そしてこの力の出どころは不明。ミソラが目覚め次第調査……といふことになっていた。

「でもどうしてこれを？」

このカードを得た時など確かに有用な証拠にはなるかもしれないが、あくまで“かもしれない”の段階なのだ。

ミソラがなぜカードが手がかかりになると思ったのか、それをシドウたちは疑問に思った。

「実はスバルくんのお母さんと話をしていた時なんですけど、こんなメールが……」

ミソラは自らのハンターに届いたメールを二人に見せた。

そのメールに題名はなし。そして差出人もUNKNOWN（正体不明）

だが……

「っ！そんなことが……まさか!？」

そのメールを見たシドウたちは驚きを隠せなかった。

心臓ハートのカケラを持つものよ。

星河スバルは私が預かっている。

彼に会いたくばカケラを持ってもう一度同じ時空の扉を開けるべし。

さすれば導かれ再び姿を現さん。

導くは“始まりの場所”

さすれば導かれ再び姿を現さん。

「これは一体誰からの……」

「ティア、この話は誰にも言つな。WAXAの誰にもだ」

「……シドウ？」

何かのまずいものを見てしまった時のリアクションを取るシドウにクインティアはおずおずと顔色を伺った。

シドウの顔色は青くなり、何かを気にするよつに言葉を紡いだ。

シドウはミソラが自分の病室で話してくれて心底助かったと思っていた。

今のこの状況、ヨイリー博士にも連絡は受けていたが決して安全な状況ではない。

いつ、何時、電波人間は兵器として利用されるかもわからないのだ。

そして……“あの男”が権力の座にある以上、問題はそれだけではない。

「（誰からのメールかは知らないが、要するにミソラがそのカード持って再びトロイの扉を開けよつてことか）」

つまりはミソラが持っているカードはスバルを導く鍵。そして飛ばされたのは違う次元。

四季の子供と接触しなければスバルを取り戻すことはできないのだ。  
フォーステルドレン

スバルの安否が二の次な今、そんなことを本部が許すはずがない。だからこそ秘密なのだ。

「（だが送り主は何でそのことを知っている？ 始まりの場所とは一体……）」

始まりの場所という文字を見ていてシドウの頭にふと浮かんだのはマツリの一言。

“あの後起こった地獄を知らないのですからね”

「まさか、“あの事件”のことが！くそっ！なんでもっと早く気づかなかったんだ！」

この時シドウは全てを悟った。今回の騒動の発端を、そして今、向かうべき場所を。

“あの事件”

それは二年前に起こった事件。ホントはあってはならないはずの地獄。そしてそれはWAXAの引き起こした最悪の不祥事。

そしてそれが……全ての引きがねとなったのだった。

## 第五十話 導きの蝶々（後書き）

次回ついにこの騒動の発端が判明します。

“あの事件”とは一体なんなのか？

ウォーロックの行き先は？

そしてメールの送り主……は分かりますよね？スバルの帰還はどうなる？

頑張って伏線一つ回収していきます。

次の回は一番重い話でしょうが、一番核心に迫る話になります。どうか今後ともよろしくお願いします！

## 第五十一話 王様の困い児

「ここが“始まりの場所”？」

『何よこれ。廃墟じゃない』

ミソラとハーブは目の前の光景に我が目を疑った。

シドウとクインティアに連れられて来た場所、目の前にあるのは少しばかり大きな元児童福祉施設。ただし今は使われていないみたいで草木が生い茂り、夢の跡と化している。

そこまではただの廃墟としてすませられるからまだいい。

園内のいたるところに銃痕に刀傷。焼け焦げた看板。

そして錆び付いた遊具のある元広場には誰かが作ったのだろうか、形の揃わぬ手製の墓が幾つも建っていた。

まるで戦場跡。二人は日本にこんな場所があると信じられなかったのだ。

日本のエンドシティから北東に数時間車で走ったとある山。ウェーブライナーさえ通らぬほどの田舎にそれはあった。

「……ここは玉石園<sup>ぎよくせえん</sup>。かつてミスターキングによって集められた孤児たちの育てられた施設の一つよ」

クインティアの言う通り、入り口の看板には嘗ての名前がうっすら

とだが見てとれた。

ディーラーのボス、ミスターキングはキング財団のオーナーという名前を使い、莫大な寄付から子供たちの喜ぶ施設の建設、そして孤児の保護といったことを成してきた。

だがあくまでそれは隠れ蓑にしか過ぎず、真の目的は有用な部下<sup>コメ</sup>の確保だった。

シドウやクインティア、ジャックもそのメンバーだという。

こういったキング財団に保護された子供たちを“<sup>キングス</sup>王様の困い児<sup>チルドレン</sup>”、通称チルドレンと呼んだのだった。

と、ここまでならミソラも知っていた。が、それ以外のことは全く知らされていないのである。

「……………でもこの“この状態”は異常過ぎじゃないですか？」

「……………そう。ここ“だけ”が異常すぎたんだよ」

シドウはそう言って説明を始めた。

ロックマンが地球に帰還後、ディーラーことキング財団は崩壊。

悪の手から平和は守られたかに見えたが、実は世間には知られていない“裏側”が存在した。

それが……………



「ディーラーにまだ加担していなかった“チルドレン”の迫害だ」

「えっ？迫害……って」

「……そのままの意味よ。戦術を持たなかった子供たちを“チルドレン”だからという理由で隔離、弾圧、そして……。とにかく不当すぎる扱いを受けたのよ」

シドウとクインティアは思い出すのも辛そうな顔だった。

あの事件の後……各地にあったキング財団の福祉施設はほぼ全て閉鎖に追い込まれた。

理由としてはキングの財産の没収による資金の枯渇、そして平行するようにキング財団への援助者がいなくなった。

そして……こういった庇護を失った子供たちに何も救済策を取らなかった政府とWAXA。

ヨイリー博士、シドウ、ラバルナアジーナ支部長などごく一部の人間は私財を出してでも保護をなそうとした。

だがそれでも全てを保護するには足りなかった。結果……大量の子供たちが路頭に迷い、犠牲となったのだ。

その悲惨さは言葉にするのさえはばかれる。だからこそマツリは言ったのだ。「地獄を経験してないものには分からない」と。

世間では今も“キング”イコール悪人というイメージで通っている。それは否定しようもない。

しかし例えミスターキングが悪人だったとしても、子供たちのことを駒と思っていたとしても……何も知らぬ“チルドレン”にとってミスターキングとは庇護者だったのだ。

しかし“キングは悪ならその子供たちも悪”、そんな偏見と噂が飛び交った。

間違った情報が行き交った結果……悲劇は幾つも起こってしまった。全てはスバルが、そしてWAXAが彼らの居場所を奪ってしまった。だからこそ彼らは立ち上がった。

ミソラとハーブはあまりの衝撃に言葉を失った。悲劇、悲惨、言葉で表すには簡単だがそれでも声にはならなかった。

「そしてここがチルドレンに対し、最も酷い迫害が行われた……“とある事件”の起こった場所だ」

「シドウさんの言う通り。ここは“とある事件”の起こった場所。そして四季の子供にとつて始まりの場所」  
フォースチルドレン

シドウの言葉に続いて不意に聞こえた言葉に四人は身体を向けた。

「シドウさん、クインティアさん、お久しぶりです。そしてもう一人は……響ミソラか」

廃墟の壁の影から二人の人物が三人の元へ歩いてきた。

シドウたち三人が“ 始まりの場所 ” で出迎えたのは高校生くらいの男女だった。

三人に声をかけたのは男の方。白に近い銀髪に言葉遣いとは裏腹にダルそうな目付き。そしてコダマ中学校指定の学ランを第二ボタンまであけて着崩していた。

そして女子の方は同じ銀髪のツインテール、そしてラフな格好に保育士を思わせるようなエプロン姿だった。

「……ミズホとイツキ。秋月姉弟ね。久しぶり」

「ホントに久しぶりだよ、お姉さま!“ あ的事件 ” 以来だからちよつと二年ぶり？」

「……そうね」

感情があまり見られないクインティアに比べ、ハイテンションなミズホ。

“ 始まりの場所 ” の背景にこの二人の再会の挨拶はあまりにも似合わなかった。

「ここにいてってことはお前たちも四季の子供のメンバフォーस्टエルドレンーなわけだな？」

「そうだね。兄さんたちには恨みもないし、感謝はしてる。だけど俺たちは“ WAXA ” に用があるんだ。だから悪いけど……」

「もちろん。それは覚悟の上だ」

シドウとイツキは二人静かに向き合った。

そして一方、ミソラの視線はイツキの方へと向かっていた。

「あ、あれって私たちの通ってるコダマ中学校の……」

「ん？ああ、俺は三年だし、アンタに興味ないし……そりゃ会わんだろ。星河とは顔見知りだけだな」

イツキはそう言っでぐしゃぐしゃとめんどくさそうに頭を書いた。

『ミソラ、彼は去年の生徒会長らしいわ』

「そんなことは良いの！あなたまさかスバルくんのことをハメたの！？」

ミソラはイツキにピツと指を指した。スバルの身内が敵だったと知ってミソラの怒りのボルテージが上がっていく。

「いや。確かに星河と敵対する“組織”の一員だが俺個人は争う気もハメる気もない」

「四季の子供フォースチルドレンにいるならスバルくんたちの敵じゃない！どう違うのよー！」

「んまあそう言われてもなあ。今は星河はいないわけだし敵でもないだろ。確かにハクも強引すぎたが……まあ平たく言えば星河は運がなかった。“神様”に見放された、それだけだ」

プツン……

悪気のないイツキの言葉にミソラの堪忍袋は遂に切れた。

「神様に見放されたですって？あなたにスバルくんの何が分かるの！」

ミソラは今までスバルの戦いを一番近くで見してきた。

優しさから敵と戦うのに心を痛めたり、仲間を失ったりする身を切られるような辛さと何度も戦ってきたことまでも知っている。

だからこそ、それを何も知らない人間が神様に見放された、そんな一言でスバルを片付けたこと、ミソラはそれが許せなかった。

『ミソラのいうとおりね。ちょっと私も頭きてるわ』

「……あなただけは許せない！すぐにその言葉を取り消させる！」

ミソラは自らのハンターを取り出した。

「やれやれ。ダルいが……やらなきゃダメだな。響が“WAXAの人間”として戦うならば俺にも戦う理由がある」

イツキもハンターを掲げた。

二人の一触即発な空気に止めに入ろうとするシドウ。

「ちょっと！イツキ！」

「待て！ミソラ！」

シドウだけではなくミズホの声までも二人に届くことはなかった。

「トランスコード004！ハーブ・ノート！」

「電波変換！秋月イツキ オンエア！」

二人は電波変換し、ウェーブロードへと登っていった。

「もうっ！イツキったらケンカっぱやいんだから！」

呆れた表情でミズホは空に上がっていったイツキを“見つめた”。

「……………ミズホはいいのか？」

「えっ？私は今戦うの嫌だし。……ねえ、もうちょっとお喋りしてよ」

ミズホの提案にシドウとクインティアは顔を見合わせた。そして二人とも小さく頷いた。

「そうだな。こっちとしても聞きたいことあるからな」

「さっすが暁さん！話が分かるう！」

ミズホはニタリと笑ってみせ、机とイスをマテリアライズ、それにお茶づけのお菓子などを準備しはじめた。

一方ぎよくせきえん玉石園上空のウェーブロード……

ハープ・ノートともう一人、イツキの電波変換した電波人間が相対していた。

相手の姿は水色の炎のように姿が揺らいでいた。

形は人型。しかし今までの電波人間のように明確な実体は持っていない。

そして彼の周りには四つの茶色の壺が置かれていた。どうでもいいが見た目は高級そうである。

「これがあなたの電波変換ね」

「ん。名前はフォール・シャオロン。まあ名前なんてどうでもいいけどな」

秋月イツキ改めフォール・シャオロンは電波変換しても変わらない。紹介するのも面倒くさそうにあくびをした。

「私は関係あるの。スバルくんをバカにしたんだから後悔させる相手の名前くらい知っておきたいの」

ハープ・ノートはしっかりとそう宣言した。

「おー、星河“嫁”怖いねえ。星河は愛されてるわ」

「なっ!?!嫁って私は……（そうなりたいけど）」

カウンター気味にジヤブを入れられてハープ・ノートは顔を赤くした。

『ミソラ、のせられてるわよ』

ちゃんとハープが正気に戻すが遅い。フォール・シャオロンからは温かい目で見られていた。

ハープ・ノートはさらに顔を真っ赤にする。

「とっ!とにかく、絶対に許さないんだからあ!」

「ハイハイ。WAXA相手なら遠慮はなしでいくからな!星河嫁!」

どうやらイツキの中でミソラの呼び方は決まっただらしい。二人は同時に一撃目を繰り出した。



## 第五十一話 王様の困い児（後書き）

星河“嫁”への道へはまだまだ遠いみたいです。

まずはミソラには慣れてもらいましょう。

さてこの話で四季の子供全員登場フォーステルドレンしました。

アルと歌姫ことリンを除き全員名前に季節名がちゃんと入ってます。

英語で秋は二つあったので二人分にしました。作者の英語の成績は  
かなり悪いですのでツッコミあればよろしく願います。

名前の出ていないハクは“冬”の予定。ここまでくればミズホの電  
波変換は分かりますよね？

ちなみにイツキはコスモ・ドラグーンの時に少しばかり出てます。

よろしければ次回もよろしく願います！

## 第五十二話 戦う理由

「お茶をどうぞ。あっ、砂糖とミルクはそこにありますのでご自由にとってください」

コポコポ……

ミズホはテーブルに置かれたカップに自分とシドウとクインティア、三人分の紅茶をそれぞれ注いでいった。

敵から飲み物を受け取って飲むか否かを迷う二人だった。

だが先にミズホが砂糖とミルクを入れて飲んだのを見て、まず先にクインティアが口をつけた。

「……………」

なぜかミズホの視線は紅茶を飲むクインティアにじっと注がれていた。

そしてシドウも何があるか分からないのでこちらもじっとクインティアの方を見つめていた

「……………」

コトッ……

クインティアのカップがゆっくりと置かれる。そして……

「……ミズホ、これじゃ落第ね。赤点よ」

不合格をつけた。

「な、なんですか？ちゃんと茶葉はアジーナの最高級ダーズリンで一杯数千円のもですよ？」

「そうだけ。結構美味しいと思うけどな？」

納得がいかないのかミズホはその理由を問いただそうとした。シドウも口をつけて味を確かめてからそう言った。

だがクインティアはそれを気にせずスツ……とポットの方を指さした。

「一つめ、ポットが温まりきってないから味が全て出てない。冬はちゃんと温めないとおいしくならない」

ミズホは指摘されたポイントに心当たりがあるらしく、はっとした表情を見せた。

「一つめ、葉を蒸らす時間が短すぎるわ。見てたけど一分半くらいね。その倍の時間はいるわよ」

クインティアの続く攻撃にうっと胸を打たれたみたいに抑えるミズホ。

「……そして最後に“心”が足りないわ。動作一つ一つに作る人の心が表れるの。あなたはただ作るだけ。それが一番欠けてるわ」

クインティアはピツと人差し指を立ててトドメを指摘した。

「はづうう……」

最後のポイントを聞いてミズホはパタンと机にうなだれた。

「修行して出直してきなさい」

「はい、お姉さま」

そのやりとりを聞いてシドウは「姑か」と思ったが、あえて突っ込まないようにした。

シドウが横やりを入れたらクインティアの攻撃対象がシドウへ移ることが分かりきっていたからである。

もっともこの最大のポイントが今の彼女にとって最大の難関であることはシドウも分かっていたのだが。

「クインティアはそういうけど美味しいからな」

「いいんです。どうせ“心のない”私には無理なんですよ」

シドウの励ましにミズホは地に手をつけてどよーんと落ち込んだ様子を見せた。

「それも演技か？」

シドウはついに切り出した。

「あれっ？なんでわかったんですか？」

「さっきから全部口元が笑ってるぞ」

そう。さっきの紅茶の件くたひからミズホの顔は大きなくくりであるが全て“笑顔”である。

クインティアを見つめる時も、反省の時も、そして落ち込む時も。

つまりやっている態度と表情、感情が一致していないのだ。

「あっちゃあ、まだダメなのかあ。だからイツキに心配かけるのか」

そういうミズホの顔はまだ……笑っていた。

「まあいいや。で、兄さん何が聞きたかったわけ？ロックマンの居場所なら私たちも知らないよ？」

ミズホはニコツと笑って遂に本題へと踏み出した。敵との、四季のフォーステイルドレン子供との会談は始まるうとしていた。

玉石園上空のウェーブロード……

「パルスソング！」

「ソウルエコー！」

ハーブ・ノートはギターから、フォール・シャオロンは重ね合わせた両手からそれぞれの音撃を放つ。

しかし互いの攻撃は相殺しあい、届かなかった。初手から音撃の相殺が続き、事態は均衡を保ったままである。

『彼も音の使い手みたいね！あの壺が気になるけど………』

「うん、本体を倒しちゃえば問題ないっ！バトルカード！ガトリング！」

ハーブのアドバイスに従ってハーブ・ノートは銃口を構えた。

電波人間の音波攻撃は一撃が軽く、様々な効果を及ぼすことが多い。ハーブ・ノートとてそれはしかり。

しかし攻撃速度はとてつもなく速いのだ。だからこそ負けず劣らずの速さのある攻撃を彼女は選択した。

「ハアアアッ！」

掛け声とともにバババツと連続して弾が放たれる。しかしフォル・シャオロンに到達する前に……

ばくん!!

「!」

銃弾は突如現れた黄色い竜に食べられてしまった。

そしてその竜の身体はフォル・シャオロンの目の前に置かれた壺の一つと繋がっている。

「食べちゃった……」

『絶対においしくないわよ』

ハーブの予想通り、銃弾を食べた黄色い竜は不味そうにペッ!ペッ!と吐き出す動作をしていた。

「『(やっぱりね)』」

当たり前である。

「星河“嫁”。こいつは“古代チヨイナ”のプログラムから作られたもの。ガトリングたった一枚で終わるはずないだろう?」

「わ、分かってたわよ!」

フォル・シャオロンに巻きつくように空を絡み、ハーブ・ノートを睨む竜。そしてまだあと残る壺は二つ。

『(あと三体竜を呼び出せるってことかしらね？それよりも……)』  
ハーブは先ほどフォール・シャオロンの口走ったある一言に疑問を  
もった。

“古代チヨイナ”のプログラムとは一体何か。

だがハーブがそんなことを気にする余裕もなくなった。

「まあ手の内も分かったし、長引くと姉貴がうるさいからさっさと  
いくぞ、星河嫁!!! シップウジンライ!!!」

竜はブオオオオ!という雄叫びをあげ、身体に電気を纏わせる。そ  
してそのままハーブ・ノートに襲いかかった。

「速いっ!!!」

『ミソラ、避けるのよ!!!』

「うん!!!」

ハーブ・ノートは周波数変換して竜の体当たりをかわす。

そして周りのウェーブロードを移動し、フォール・シャオロンの後  
ろへと姿を現した。

「マシンガンストリング!!!」



「現れよ！神の使徒たちよ！」

キウン！と飛び出す弦。弦は突如壺から現れた二匹の竜に絡み付く。二匹の竜は弦に縛り上げられたがフォール・シャオロンに攻撃は届かなかった。

「あー、やっぱり一筋縄じゃいかないか」

「当たり前でしょ、ナメてもらっちゃ困るわ」

「あー、その言葉はそっくりそのまま返すわ。シンバツ!!」

彼の合図に従って縛り上げられた竜がバチバチと放電する。

「キヤアアアアア!!」

『ウウウッ!!』

動きを封じていたつもりだったハーブ・ノートは弦から伝わってきた電気をまともにくらった。

「倒れてるとエライめ見るけどいいのか？」

フォール・シャオロンの忠告どおり、ハーブ・ノートの後ろから続けて一匹めの竜が再び体当たりを試みようとする。迫りくる。

ハーブ・ノートは電撃をくらいまだ怯んだまま動けない。

『バトルカード！インビジブル!!』

先に回復したハーブが自らバトルカードを転送することで何とか直撃を回避した。

「なかなか詰まないな。いい加減楽になるか諦めてくれ。怒りに任せてもお前の実力では相手は勤まらん」

「イヤ！絶対に諦めない！」

電撃をくらい、ボロボロになりながらもハーブ・ノートの意志は動かなかつた。

曲がらぬ強い意志を持った彼女。いつもスバルを見てきた彼女は決して仲間を見捨てたくはないのだ。

ましてそれが愛しい人ならば尚更。もう大切な人を失いたくない、その一心だけでハーブ・ノートは戦っていた。

「……なんでお前はWAXAなんか協力する？」

「えっ？」

突如攻撃の手を止め、そう切り出したフォール・シャオロンにハーブ・ノートはきよとんとした声を上げた。

「何故お前はWAXAなんか協力するんだと聞いてるんだ。星河のためか？」

今、何のために戦うのか、ハーブ・ノートの答えは一つしかない。

「スバルくんを取り戻すため！私の大切な人を見つけ出したいの！」

「！」

しっかりとほつきりとハーブ・ノートはそう答えた。

「“今”はだろ。質問を変えよう。なら何で“WAXAの一員”として戦う必要がある？しかも芸能人の地位を捨ててまで」

「……っ！」

その言葉にハーブ・ノートは言葉をつまらせた。ミソラはそんなことを考えたこともなかったのだ。

二年前は世界の滅亡を、自分の歌を聞いてくれる全ての人を守りたいという思いがあった。

だが今は四季の子供フォースチルドレンと何のために戦う？私の戦う理由ミソラは……

『ならあなたにはあるの？四季の子供フォースチルドレンとして戦う理由が』

ハーブはフォール・シャオロンに逆に問いかけた。

「ある」

フォール・シャオロンはしっかりと言い切った。

「姉貴を待たすことになるけど話しておくか。俺の願いを、四季の子供フォースチルドレンの痛みを！」

そう言ってフォール・シャオロンは語り始めた。

「……俺は姉貴を、“秋月ミズホ”を一度失っているんだ」

## 第五十二話 戦う理由（後書き）

今回はイツキの過去話がほとんどです。

流星のロックマンってスバルだけじゃなくて敵役の心理描写も十分とっていいほどなされてますよね。

ミソラしかり、委員長しかり、ソロしかり……

ただスバルの前に立ち塞がるだけじゃなくて、特異的なキャラだけじゃなくて、何か自分らしさを出す。

そんなところが私は流星のロックマンシリーズを好きになった最大の理由です。

そして原作をリスペクトして拙作でもしっかりと表現していきたいと思います。

非常に身勝手な解釈かもしれませんが、どうか次回もよろしく願います。

感想、アドバイスもお待ちしております。よりよい小説にするためにご協力お願いします。

## 第五十三話 玉石園の悪夢（前書き）

### 注意

この話は非人道的な内容を含みます。

内容など好ましくないとと思われる部分は削除するか、直接的な表現をせずに書いておりますが、不快に感じる方もいらっしゃるかもしれません。

苦手な方は不快に思われる前に即座にお戻りください。

そして大丈夫だと思う方は次へお進みください。

なお、この話の批判は感想にではなく、直接メールして頂きますようお願いいたします。

## 第五十三話 玉石園の悪夢

二年前の夏……

ムー大陸が、オリヒメの野望が青いヒーローによって崩された直後のこと。

「イツキ！何やってんの！学校遅れるよ！」

「姉貴みたいに怒鳴るなよ。朝からガキどもの面倒みてて疲れて眠いつてのに……」

「ミズホさんからも言われてるの！イツキの面倒よろしくって！」

「……だからクソ姉貴と一緒に口うるさくなるのか。めんどくせえな」

コダマ中学の制服を着た男女が通学路を走っていた。

フアア〜とあくびをしながら走っているふりをしている銀髪の男子とそれをせかす黒髪のポブカットの女子。

秋月イツキと二宮ソラ。

幼なじみの二人はいつものように一緒に学校へ来ていた。

イツキと二つ年上の姉、ミズホの両親は既に亡く、二人は近所のキング財団の経営する児童福祉施設に住んでいた。

しかし小学生の頃からずっと同じクラスになったイツキとソラはミズホを交えて遊ぶことが多かった。

施設内で秋月姉弟が最年長クラスであり、子供たちの面倒を見ることが増えたため現在遊ぶこと自体は減った。

しかし三人の交流はしっかりと続いている。さしずめソラはしっかりとものの姉、イツキは面倒くさがりやの弟といったところだった。

だが周りの反応は……

「おっ！また夫婦そろって登校ですか。お熱いなー！」

「ヒューヒュー！」

とイツキの男友達からは嘸し立てられ……

「ソラちゃん結婚はいつなの？」

「イツキくんって彼氏がいてうらやましいわ」

などとソラの女友達からは羨ましがられており、見事なまでに夫婦



としての扱いだった。

イツキもソラもあんな感じではあるが校内では遺憾なくリーダーシップを発揮しているため人気は非常に高い。

近々あるコダマ中学校役員選挙にも出馬するのではないかと噂されていた。

ちなみに当の本人たちは……

「面倒」

「天文部の活動があるからどうしよう?」

とのこと。

ちなみに「夫婦」に関してのコメントは……

「姉貴と同じなような女だけは勘弁!」

「な、な、何言ってるの!? べ、別に私はイツキのことただの幼なじみとしか思っていないんだから! 勘違いしないでよね!」

としつかり“言葉では”否定していた。

これが二年前までの三人の姿。そうこれまでがそれなり幸せだった二人の日常。

ディーラーの壊滅、ミスターキングは宇宙に消えた。

そしてキング財団の崩壊。児童福祉施設の閉鎖に伴い、イツキたちチルドレンは路頭に迷ってしまった。

虚しくも閉ざされた園の門の前に全員がたたずむ。

「イツキ兄ちゃん、僕たちこれからどうなっちゃうの？」

小さなリュック一つだけを背負った男の子がイツキの手を握って不安そうな目でそう聞いてきた。

不安そうなのは彼だけではない。同じく泣き出しそうな子供たちもいっぱいいる。

ミズホとイツキを含め合計二十人の子供たちの帰る場所を失ったのだ。不安なはずはない。

イツキはミズホの方をちらっと見た。ミズホは既に子供たちをなだめている。

「大丈夫だ！俺と姉貴がお前たちを守ってやるからな！」

イツキはそう強く宣言した。リーダーとして子供たちを守っていくために。

その後いろいろとあったが、イツキたち、施設の子供たちは全員、二宮ソラの父の力を借りて新しい住まいを確保。

シドウたちの援助もあって貧しいながらも生活を送ることが出来た。

だが、イツキの大切な人は唐突に、何の前触れもなく奪われてしまった。

「イツキ、ちょっと私WAXAに呼ばれたの。ちょっと長期になるけど三日くらいで帰ってくるから」

ミズホはそんな書き置きだけを残して施設から姿を消した。

それから三日たっても、一週間たっても、ミズホは帰ってこなかった。

無論イツキはWAXAに出向き、事の次第を問いただした。

だがWAXAも知らぬ存ぜぬの一点張り。手がかりがまるでなかった。

結局一ヶ月たってもミズホは戻ってこなかった。

手がかりも助けてくれる人すらなく途方に暮れるイツキ。そんなある日、彼は遂に出会った。良くも悪くもイツキの運命を変える人物に……

「秋月イツキか？」

頬に十字の傷跡をつけた男ともう一人、スケッチブックを片手に持った男の子がコダマ中学校の校門の近くに立っていた。

「……誰？」

姉を失い、憔悴しきっていたイツキの目は虚ろだった。

「俺はアル。で、隣の坊主はマツリ。お前と同じでWAXAに奪われた“とある人間”を捜している」

その言葉にイツキの目は再び光を宿した。

「あんたまさか俺の姉貴の場所を知ってるのか？」

「正確に言えば“候補”を幾つか知っている。どこにいるかは分からないからしらみ潰した」

イツキはアルの元に駆け寄った。絶望しきっていたイツキにとって一筋の希望となるかもしれなかった。

「頼む！！教えてくれ！姉貴はどこにいるんだ！」

藁にもすがる気持ちだった。そしてイツキはアルの手を取ったのだ。つた。

「そして姉貴と、マツリの妹分だったハルの見つかった場所はここ、

玉石園ぎよくせきえんだったのさ」

フォール・シャオロンは苦々しく下に広がる廃墟を見据えた。

犯人はWAXAアメリopp支部研究者。マッドサイエンティストとして悪名を轟かせた研究者だった。

WAXAの研究者としての地位を着て、独断で元“王様の困い児”（キングスチルドレン）たちを誘拐、実験材料としていたのだ。

チルドレンたちはほとんどが普通の子だ。

だが中にはシドウやクインティア、ジャックのように電波変換可能な者、そうでなくとも何らかの優れた才能を持つ者がたくさんいたのだ。

「酷い……っ」

「そうさ。その時唯一電波変換できたアルが突入した時は目を覆いたくなるほど悲惨だったらしい。そんな中、生きていたのは姉貴とハル、そしてもう一人リンだけだった。だが……」

助けられた彼女たちも後遺症は大きかったのだ。

リンはまだトラウマだけだったらしいが、ハルは記憶と感情を失った。

そして……

「姉貴は感情を失い、半電波人間化していたんだ！」

「……っ！」

『なんてことを……』

人体実験の結果、ソロのような電波化能力と電波を見渡せるムー人のような力を身につけた。

つまりはイツキの知ってるミズホじゃなくなっていたのだ。

男勝りで面倒見のよかった姉もイツキにとって唯一の肉親であった姉ももういない。

“ミズホ”という器が帰ってきただけ。

イツキは改めて絶望してしまったのだ。

その後調べていくうちにイツキにも希望ができた。

もし“神”を復活できたら……電波人間を元に戻すことができるかもしれないと。

「分かるか！いきなり唯一の肉親を失った俺の気持ちか！同じ目にあったマツリや子供たちの気持ちがお前たちWAXAの人間に分かるか……！」

ハープ・ノートは衝撃の告白に黙りこんでしまった。

「分かるはずないよな？お前たちWAXAに壊された俺たちの痛みが……！」

フォー・ル・シャオロンは全ての感情を吐き出した。

WAXAに対する恨みを、姉を元に戻したいという望みを。これ以上ない願いを。

「だからこそ俺たちはWAXAを潰す！もう誰も苦しめないためにな！」

それこそがイツキの願い。そして戦う理由。

ハーブ・ノートは何も喋らなかった。下を向いて表情を伺うこともできなかった。

「別にWAXAの人間に分かってもらおうとは……」

「……るよ」

「うん？」

「私だつて分かる！一人ぼっちになる怖さも絆を取り戻したい気持ちも！」

ミソラも両親を失って天涯孤独の身。母親との唯一の絆になってしまった自分の音楽を汚されるのを恐れ、人を傷つけたこともあった。

そんなミソラを救ってくれたのは同じ孤独を味わったスバルだった。彼の言葉にミソラは救われた。

だから同じ孤独にあるイツキを友人として救いたい。スバルならそ



う言っかもしれない。

しかしミソラとイツキは初対面である。見ず知らずの人の願いを叶えようなんてお人好しすぎるはずはない。

だけど姉を取り戻したいというイツキの願いは他の人間を傷つけかねない。

だから……

「あなたの願いは“今のままだと”他の人たちを不幸にする！だから私はあなたを止めてみせる！」

WAXAの人間としてではなく、一人の人間として。スバルを助け出すためにイツキを倒してみせる。

ハープ・ノートはそう宣言したのだった。

「……虫酸の走るチャチな使命感ではない。何か背負うものがある目だ。」

フオール・シャオロンもハープ・ノートの気迫に何かを感じ取ったのか、再び戦闘の構えを見せた。

「バトルカード！アイリスハート！」

ハープ・ノートは再び薄紫色のカードを読み込ませた。全力の思いに応えるには全力を出すしかない。

ハープ・ノートの身体から薄紫色の蝶の羽が現れた。

「それなら降伏はすすめない。かかってこい、響ミソラ！お前を乗り越えて俺は願いを叶えてみせる！」

フォール・シャオロンも全ての壺から四匹の竜を呼び出した。

「ウエーブバトル、ライドオン！！」

## 第五十三話 玉石園の悪夢（後書き）

この話は非常に難産でした。

だいぶ強引な考え方と展開でありついていけなかったかもしれないので簡単な説明を。

四季の子供が結成した理由は、“始まりの場所”玉石園で起こった四季の子供が結成した理由は、フォースチルドレン“始まりの場所”玉石園で起こったWAXAの人体実験の事件から。

前々からあったチルドレンへの弾圧にこの事件が元でアルが遂に蜂起したということです。

その対象はWAXAとミスターキングを倒したロックマンへ。

ということです。完璧スバルへは逆恨みでしかないです。

そのため実は四季の子供のロックマンへの感情は“倒したい”という思いだけです。

“殺したい”とは思っていません。そこはファントム・ブラックと大きく違ってます。

ご理解頂けましたでしょうか？

次の話でミソラvsイツキも終わりとなる予定です。そしてもうすぐ“彼”が帰ってくる予定です。

次回もよろしくお願いします。

## 第五十四話 お人好し

また玉石園から離れたとある場所にて……

「非常に遺憾なことではあるが、ターゲットは予測通り接触した。残念ながら上巻うへまきからの命を遂行せねばならない」

リーダーらしき男の言葉に残りのメンバーは困惑の色さえ見せなかつた。

ピシッと整列している八名は前に立っているリーダーの言葉だけを淡々と聞き入れる。

「最優先はターゲットの拘束、あわよくば……残りの対象もだ。消デリ却トすることのないよう、以上！」

「……はっ！」「」「」

リーダーの指令にメンバーはピシッ揃った動きで敬礼した。

全員の上着の胸ポケットにはWAXAの刺繍が成されていた。

そして玉石園上空……

ハーブ・ノートはアイリスの力を解放し、フォール・シャオロンとぶつかりあう。

二人の戦いも終盤へと近づいていた。

「ドラゴンブレス！」

「リフレクトウェーブ！」

四匹の竜から一斉に発せられた息吹をハーブ・アイリスキュアはハート型の電波障壁を作りだし、受け止めた。

ロックマンのシンクロウエポンの技をそのまま真似て習得したこの技はロックマンのそれと劣らぬ力を持っていた。

「バトルカード！オロロンハット！」

ハーブ・アイリスキュアは障壁の影からブーメランのようにお化けの帽子を投げつけた。

帽子だからといってバトルカード。それなりの威力は持っている。

「キャッチ！」

フォール・シャオロンの合図に従って一匹の竜がフリスビーの要領で帽子をくわえ込んだ。

「こんなバトルカードじゃ囿にもならんぞ、何を考えている？」

「……………」

フオール・シャオロンへの答えはまた帽子だった。二枚のお化けの帽子が左右両側から弧をえがいて飛んできた。

フオール・シャオロンはつまらなさそうにまた竜たちに指示をだす。帽子はやはりパクツと竜たちによってキャッチされたのだった。

「曲芸やってるんじゃないぞ、響！シップウジンライ！」  
そして残った一匹が雷を纏い、電波障壁向かって体当たりをかました。

体当たりによって電波障壁はバリバリと碎かれる。そしてその先にいたハーブ・アイリスキュアは……

「いない!?!」

碎けた壁の先にハーブ・アイリスキュアはいなかった。竜の体当たりは空をきっていたのだ。

「自分でいったじゃない！囿だって！」

「……………っ！上か！」

ハープ・アイリスキュアの声に反応してフォール・シャオロンは空を見上げた。

そこには蝶の羽をつかって宙を舞う彼女の姿があった。そして彼女の手にはもうすでに銃口が構えられていた。

「いつちやえええっ！」

掛け声とともにハープ・アイリスキュアは三発の黒い弾を発射した。

フォール・シャオロンの使役する四体の竜の三匹の口は帽子によってふさがり、一匹は体当たりのため身体を伸ばしきっている。

重力加速のついた弾丸は本来ならブレスなど遠距離攻撃で防ぐべきなのだがそれは不可能となっていた。

「確かによく考えられている、が、俺も負けられねえんだよ！投げかえしてやりな！」

帽子を加えていた三匹の竜はハープ・アイリスキュアにそれを投げかえした。

黒い弾丸と帽子がそれぞれ当たり、ポフィン！という爆発音を上げて攻撃は相殺された。

『かかったわね！』

ミソラもハープも、ニヤリと笑った。



爆散した弾丸は辺り一面に煙となって舞い上がったのだ。

「ブラックインクか！」

「大正解っ！」

煙で視界を塞がれたフォール・シャオロンは苦々しく呟いた。

バトルカード「ブラックインク」

威力はさほどないが、当たれば相手の視界を奪えるブラインドの効果を持つ。

しかしそれ以上に厄介なのは当たると攻撃範囲が拡散する効果の方だ。

うかつにも三発のブラックインクに攻撃を当ててしまったのだ。その効果範囲は推してはかるべし。

「目眩ましとはっ！こんなもの！」

フォール・シャオロンの周りの四匹の竜はその場でぐるぐると回転しはじめた。

古代チヨイナの竜神は嵐を巻き起こす神様として知られている。一説には古代チヨイナ文明の滅びた理由として竜神の怒りを買ったからというものであるくらいだからその力は分かるだろう。

雷を呼び、風を操る神様。比喩しなくてもそれは竜巻。伝説の力は

再びイツキの手によって再現された。

「全てをなぎ払え！シップウジンライ！！」

ゴオオオオ！！

荒れ狂う四つの竜巻は煙どころかウェーブロードさえもえぐりとなった。

巻き込まれたものは全て灰塵と化していく。僅か数秒で竜巻はおさまったが、フォール・シャオロンの周りには物体もウェーブロードも何もかもなくなっていた。

無論ハープ・アイリスキュアの姿も確認できない。

「…………俺の勝ちだ！」

勝利を確信したフォール・シャオロンは小さくガッツポーズを決めた。

「誰が勝ちなの？」

フォール・シャオロンはハツとして声のする方へと振り向いた。

そこには左右に自前のスピーカーの準備を終えていたハープ・アイリスキュアの姿があった。

「これで終わりよ！バラエティーノート！！」

ハーブ・アイリスキュアはギターをキューイン！と三回かき鳴らした。

「音波攻撃は効かないと言ったはずだろう？ソウルエコー！」

事実先程までショックノートもパルスソングもこの技一つで封じていたのだ。

フォール・シャオロンもまた音を相殺しようとして音波攻撃で迎え撃った。

が……

「何故だっ！なんで打ち消せない！」

そう。全ての音符を消し去ることはできなかったのだ。これは完全な誤算だった。そして……

「うわああー！！！」

音符の連弾をまともに浴び、爆発したのだった。

「戦うアーティストに本職おんかくで挑むなんて百年早いのっ！出直してきなさい！」

ハーブ・アイリスキュアは羽を引っ込め、ピシッとキメポーズを取った。

『(……それ前のドラマの使い回しよね?)』

ハーブがいろいろとツッコミたかったのは内緒である。

「教えてくれ。何で俺の音で響の攻撃は消せなかったんだ？」

フォール・シャオロンはウェーブロードに仰向けに倒れたままハーブ・ノートに質問した。

「音波攻撃を消すには二つの手段があるの」

一つは同じ周波数をもって相殺すること。

そしてもう一つは大きな衝撃で音の波自体を消すこと。

「あなたの攻撃は周波数で相殺する方だった。なら私は全ての音の周波数を変えたの」

同じように見えても一発一発の音の効果と周波数は異なる。故に多様な音符

バラエティーノート

音を極めたミソラとハープだからこそなせる技であった。

そして雷や竜巻など音を乱しかねない環境を避けて、相手の土台に立たないように戦っていたのだ。

スバルを追いかけているがちゃんとミソラも成長していたのだ。

「なるほど、実戦の経験差か。“初めて”電波変換した俺では叶う相手ではなかったか」

諦めたようにガツクリとフォール・シャオロンは頭を地につけた。

「ちょっと待って！あなた初めての戦いだったの？」

ハープ・ノートは驚きのあまり声が裏返っていた。

「ああ。先日出来たばかりの“能力”だからな。つたく、幸先悪いぜ。で、逃げも隠れもしないがこれから俺をどうするんだ？」

既に竜を呼ぶ壺は消し去られており、彼には抵抗する意志は感じられない。

捕虜としての扱いだから彼が気にするのは当然だろう。

「それは暁さんが決めることだから私には何も言えないけど……、ただどあなたのお姉さんは私も助けたいと思ってる」

「……俺たちの力だけじゃ無理なんだよ。だから俺たちは四季の子フォースチルドレンチルドレン供に入ってるんだ」

「それってWAXAがやってくれないからでしょ？ だけど曉さんなら、ヨイリー博士なら何とかしてくれるかもしれないし……」

ミソラはルナがWAXAの力と絆の奇跡によってデータから肉体を再生させた現実を見ている。

もしかして今回のイツキの願いを叶えられるかも思っていた。

「あの人たち“だけ”じゃ無理なんだよ。WAXAは組織なんだからな」

二年前のルナ再生ミッションの時は日本支部しかまともに稼働していなかった。

そのため彼らだけで動かせたということもある。

そしてさらに一部の人間はロックマンに恩を売り、WAXAのために働いてもらおうという腹黒な思惑まであった。

要するにあの時とは事情が違いすぎるのだ。そして今、WAXAはフォーステルドレン四季の子供の根絶に向けて大きく動いている。

シドウやヨイリー博士たちだけでどうにかできる事態を当の昔に越えていた。

「……お前の気持ちは嬉しいが響一人が動いても“世界”って大きすぎる相手は動かないんだ。だから……」

「諦めたらそこで終わりなの！ 負けた人は私の指示に従いなさいっ  
っ！」

業を煮やしたのか、ハーブ・ノートはイツキを怒鳴り付けた。キョトンとして言葉もでなくなる。

「あなたが諦めたらお姉さんはそのままなんでしょ？信じる者が一人でもいるなら戦うの！」

ハーブ・ノートは「もっともスバルくんの受け売りだけどね」と最後に付け加えた。

「……つたく、どんなけお人好しなんだよ星河夫妻は」

イツキは怒られながらも何か懐かしい気分を感じていた。

何もかも失うまでの姉と、昔に比べて心が疎遠になってしまったソラの言葉によく似ていた。

イツキの表情は負けたのに憑き物が落ちたように晴れやかだった。

## 第五十四話 お人好し（後書き）

これにてフォール・シャオロン戦終幕です。ミソラにはしっかりと活躍してもらいました。

ですがまだまだスバル救出編は続きます。そして不穏な動きまでが……

そろそろスバルくんが懐かしい頃かもしれないませんが、次回かその次の予定です。

ですが……あつと！これ以上は何も言えません！

よろしければ次回もよろしくお願いします。



## 第五十五話 WAXAの新兵器

「ハートがいなくなったからアルも血眼になって探してるよ。彼のウィザードには何も反応が見られなかったのにね、ハクは何やってるんだろ？」

ホントにスバルの行方を知らないのかという話題にミズホはとるに足らないように答えを口にした。

取り乱した様子も心配した様子も見せず、彼女はお茶を片手に笑顔であった。

会談もここにいた理由、明かされていなかった“玉石園での被害”の実態についての話題だけ聴取していただけ。

全ての話題においてミズホはしっかりと質問に答えてくれていた。

そして遂にスバルの話題へとシドウが踏み込んだのである。

「……ミズホ、それ喋っていいの？」

クインティアはそれを聞いてミズホに問いかけた。

「大丈夫ですよ。ホントのことですし、私もいろいろと“この目で見てますから”

ミズホはおもむろに自分の左目を指さした。電波の見えるミズホならアルからスバルの探索任務を受けたとしてもおかしくはない。

そしてミズホの表情も至って普通。

「（イツキの言う通りならミズホは嘘をつけない……か）」

シドウはミズホの言葉を信じることにした。だがそこで生じるのは  
“あのメール”についてだ。

これはWAXAも、そして四季の子供でさえ知らない極秘事項だ。  
フォーステルドレン

そして想定通り彼らもスバルを狙っている。迂闊に切るべき手札ではない。

そしてアシッドから報告を受けた通り……

「どっした……ものかな？」

「……やはり兄さんたちも“つけられてた”のに気づいたみたいですね」

ミズホのその言葉を引き金に全てが動き出した。

「トランスコード！」

シドウとクインティアは瞬時に電波変換しようとハンターを掲げた。

それに従いアシッドとヴァルゴがそれぞれ姿を現し、二人を包み込

む。

も……

『ちよつとティア！電波変換できないわよ』

「なっ！？」

『シドウ、WAXAコードがロックされています！』

「まさか！もう手をうたれていたか！」シドウとクインティアの姿は人間のままだった。二人が電波変換することはできなかったのだ。

「申し訳ありません。ミスター・シドウ、ミス・クインティア、半径十キロ圏内のWAXAコード、並びに電波変換認識をロックさせて頂きました」

「その声は誰だ！」

シドウの言葉にこたえ、声の主は瞬時に三人の前に姿を現した。

その姿は白いを基調とした法衣服に上高の黒い帽子。手には分厚い本を携えていた。

その姿を例えるなら西洋の僧侶ないしは裁判官。そして胸のエンブレムは……

「WAXAだと!?!」

アシッド・エースと同じWAXAのエンブレムが掲げられていた。

「左様。私はサテラポリス“アメロツパ支部”のブライト・トパーシア。以後お見知りおきを」

ブライトは執事のように胸に手を当て、綺麗に一礼した。

「ブライト・トパーシアって……」

「ああ。ミッション成功率ほぼ百パーセント、その堅実さから“番人”の異名をとるサテラポリスのエースクラスさ」

「これはこれは、私の事をご存知とは恐悦至極」

ブライトの姿を見てシドウは内心焦っていた。

現在の任務規定に違反しているから少なからず追っ手はくるだろうと思っていたが、せいぜい日本支部の隊員が駆り出されるだろうと踏んでいた。

それならシドウに賛同してくれるメンバーばかりであるし、上をなんとかごまかせる。

だが目の前にいるのは堅物で有名なアメロツパ支部のエース。

そして二人の電波変換を封じる手筈まで整える用意周到さ。

間違いなくシドウたちの動きは上に読まれ、徹底的に排除しにきていた。

そして何よりも決定的なのは……

「まさか“Xシステム”<sup>イクス</sup>をここで持ち出すとはな。それほどまでに俺たちを動かしたくないか」

「左様。総司令官よりあなた方、元チルドレンは四季の子供に接触する可能性がある以上決して行動を監視せよとのことでした」

「そして私たちが誰かチルドレンに接触した以上は……」

「ご想像の通りかと」

ブライトはそう言って左手をあげた。その合図に合わせてブライトの後ろに瞬時に四人のWAXA隊員が現れた。

その隊員たちの姿は微妙に細部は異なるものの、一様にボディの色が白銀となったロックマンそのものだった。

「申し訳ありませんがお二方、大人しくしていただきますよう」

「嫌だ、と言っただら？」

「不本意ではありますが捕縛させて頂きます」

ブライトの言葉とともに一人の隊員がシドウに向かって駆け出した。

『シドウ、離れていてください！ギルティスラッシュ！』

向かってくる隊員にアシッドが攻撃を仕掛ける。

WAXAのウィザード、そして低レベルの電波人間であるジャミンガーでもやすやすとは耐えられない威力ある一撃。

「バトルカード、ソードX！」

ガキン！という鈍い音が響いた。WAXA仕様の特別なカードによってアシッドの一撃は正面から受け止められていた。

『ぬづう………』

アシッドと隊員の力はほぼ互角、いや隊員の方が強かった。

一撃を受け止めたかと思えば左側へすぐに払い、逆側から回し蹴りを放つ。

そしてヒートアップ、ワイドウェーブなどと繋げてくるのだ。

その流れるようなバトルカードの連携にアシッドは防戦一方に追いこまれていた。

「アシッド！」

「無駄ですよ、ミスター・シドウ。あなたもご存知のはずですよう？ 対電波人間用の決戦兵器、Xシステムイクスの力を」

暴走ウィザードや電波人間の事件から新たに作られたアシッドの後継機たち、それらを総称しXシステムイクス。

その“末端”であるイクス・ポーンはロックマンをモデルに作られた。

現在これらは導入されて間もないため全世界で僅か十数体しか存在しない。だが末端とはいえ電波人間。その力はウィザードの何倍も勝る。

そして……

「バトルカード、エクスプレッド！マヒプラス！」

「アシッド……！」

アシッドは動きを封じられ、捕縛されてしまった。

「ミスター・シドウ、あなたも無駄な抵抗はやめていただきたい。さもなければ彼女の安全は保証できません」

シドウはブライトから告げられた言葉を耳にし、クインティアとヴアルコの方へ振り向いた。

「……………！」

『……………！』

二人は何かを叫びながら見えない何かを叩いている。

一番近いのはアヌビス・ルーラーの造った言葉も動きも遮る檻だろう。気づかないうちにシドウはクインティアを人質にとられていた。

「ティア！」

「私たちはあなたを傷つけたくはありません。どうか……お願いします」

ブライトはシドウに向かって頭を下げた。言葉では“お願い”だが、ちゃんと脅迫と命令を兼ね備えていた。

「……っ！」

電波変換もできずに、アシッドやクインティアまでも人質にとられた。

シドウに電波人間と戦う術は残されていなかった。

悔しさに顔をにじませながらシドウはハンターを地面に置いて両手をあげた。

「ありがとうございます」

二人の隊員がハンターを回収し、シドウの身柄を確保した。手枷をはめているのは一時だけだと思われる。

が、まだ彼らの任務は終わっていない。

「ミス・ミズホ、あなたも神妙にお縄にしていただけとありがたい」

「……それはお願いじゃなくて命令ですよね？」



「無論」

ブライトの後ろの隊員は既にガトリングを構えていた。

ミズホはため息をついてマテリアライズされていたお茶セットを片付けた。

「争いは嫌いなんですけど、私のために戦ってくれているイツキもいるし、何よりWAXAは嫌いですので……電波変換!!」

ブライトたちWAXA隊員はウィザードもなしに電波変換するミズホに虚をつかれた。

そして隊員たちが気づいた時には……

「私ことオータム・サイバーは徹底的に戦わせていただきます!」

「手だすことが早すぎませんか?」

オータム・サイバーの作り出したビームサーベルがブライトの持つ本によって受け止められていた。

そして上空……

「ひとまずウエーブアウトして降りるわよ。それからあなたに聞きたいこともあるからおとなしくしててね」

「りょーかい」

イツキは既に電波変換は解け、ハープ・ノートに肩を担がれていた。

実はこの二人、下で新たな交戦が行われていることを知らない。

電波変換認識のロックは結界式であり、電波世界からのデータファイルの認識は全て遮断されているのだ。電波人間であってもそれは同じ。

何が起こったいるかも分からず、二人はウエーブアウトした。それが新たな火種をもたらすとも知らずに……

第五十六話 最速（前書き）

お待たせいたしました！

何をか？

それは読んでからのお楽しみです！！

## 第五十六話 最速

「バトルカード！レーダーミサイルX！」

四人のイクス・ポーン（WAXA隊員）から放たれたミサイルはオータム・サイバーに向けて一直線に進んでいく。

爆音が響き、黒煙が舞い上がり、墓が、遊具が、廃墟が壊れていく。どこの紛争地域かと思うが紛れもない日本だ。

ミサイルの嵐をあっさりとかわしてみせたオータム・サイバーはキラツと光る鏡のようなものを頭の上に掲げた。

「WAXAのみなさん遅いよっ！プロミネンスレーザー！」

「総員退避！」

「ハッ！！！」

ブライトの命令に従い、イクス・ポーンたちは周波数変換し、その場から消えてみせる。

消えた直後、鏡から光線がほとばしり、地面を大きくえぐった。

「バトルカード！コガラシ！」

「バトルカード！アングァーファイア！」

今度は四方からオータム・サイバーに向けて竜巻と火の玉が向けら

れる。

「フォトンボール！」

オータム・サイバーは自分の周りにキラリと光る膜を作り出す。

全ての攻撃はオータム・サイバーに当たることなく光のように包むボールに阻まれた。

「打ち方やめ！！」

ブライトはイクス・ポーンたちに指示を出し、自ら前に立った。

「あれ、隊長さんもうギブアップですか？やっぱり情けないですね WAXAって」

攻撃が止められたにせよ未だ四人の電波人間に囲まれているオータム・サイバー。

だが彼女は状況を状況だと思っていないようでブライトに向けて挑発をかけた。

その挑発にイラツときたのかイクス・ポーンの一人が再びアンガーファイアの発射口を向けたが、ブライトが無言でそれを制した。

「いや、あの事件を逃れたあなたですからね。あの副産物がどれだけ力を持つのか、それを確かめたく。」

「あー。そういえばあなたあの研究者たちと同じアメロツパ支部でしたね？で、お気に召す結果は得られました？」

「無論。彼のやったことは許されることではない。だが“私個人として”偉大な進歩の前に多大な犠牲はつきものだと思いますよ」

顔色を変えずに言つてのけたブライトにシドウとクインティアは驚きを隠せず、そしてすぐに怒りを露にした。

今の二人は後衛部隊である隊員に“保護”されている。新しく作られた結界内であらゆる武装を放棄させられ、この戦いを見守つていた。

「そんなバカな話があるか！人の命をもてあそんでいいはずがないだろ！」

シドウは身を乗り出してブライトに向かってそう叫んだ。

「……そのとおりよ。WAXAにそんな権限などはない。あの事件の忌むべき負の遺産としてここは残しているのではなかったの？」

クインティアもシドウに続いた。WAXAも無駄にここの跡地を残しているのではない。

科学が生んでしまった負の遺産、二度と同じ過ちをWAXAが犯さないために意図的に残しているのだ。

「そんなことは分かっています。だから私個人としての意見ではありませんか」

「そんなことを言ってるんじゃない！今の言葉はWAXAの人間としてあってはならない！謝るんだ！」

シドウの必死の訴えにブライトの表情は変わった。

それは「煩わしい」や「邪魔をするな」といった憎いと見える表情。間違っても反省の様子を見せたものではない。そしてブライトは自らバトルカード、ヘビーキャノンに手をかけた。

「バトルカード オーラ！マヒプラス！」

「グアツ！」

「くっつ！」

ブライトが行動を起こす前に結界内でシドウとクインティアは意識を飛ばした。

弱い攻撃を全て無力化するオーラのカードにマヒの効果を加えたもの。オーラに守られながら二人は倒れていたのだ。

ただしこれを行なったのはブライトでも隊員たちでもない。ましてやオータム・サイバーでもない。

いきなり意識を失った二人に全員が目丸くしていたのだった。

「一体誰が……」

何が起こったのか理解できない中、ブライトも驚きのあまり混乱している。その隙についてオータム・サイバーが動き出した。

「フォトンブレード！」

不意をつかれたブライイトはオータム・サイバーの一閃をその身に刻んだ。

苦悶の表情を浮かべ、ブライイトは片膝を地につける。

「それがWAXAの本音。WAXAを殲滅対象認定、予定通り“0214”を持って殲滅開始……」

何かをブツブツと呟くオータム・サイバーの目は憎しみに滲んだ目でもシドウたちを倒されて悲しんだ目でもない。

どこか虚空を掴む……焦点の定まらない視線。要するに何を考えているか分からない機械のような目だった。

「「構えっ！」」

再びイクス・ポーンたちが銃口をオータム・サイバーに向ける。

隊長がいらないなりにも統率の取れた一団は一斉にプラスキャノンを発射した。

「……………無駄なこと」

オータム・サイバーは周波数変換を行い、その場から消えてみせる。そして僅か一秒もたたないうちに四方の囲みから抜けてみせたのだ。



「バカな……このエリアでは周波数変換など不可能なはずでは!？」

「いえ、奴ら四季の子供はまだWAXAに登録されてない電波人間フォースチルドレン。この結界はデータに残らないものに制限はかけられないはずよ」

「だがこの速さは異常すぎる!そんなの俺たちが……」

イクス・ポーンに選ばれた隊員たちも電波人間としての訓練は積んできている。

だがそれまでのデータ内だけのこと。

彼らが知る限りスピード、周波数変換において最速の力を持つのはブライ、或いはファイナライズしたロックマンである。

通常時のスピードこそおいつかないもの、オータム・サイバーの周波数変換の速さは完全に二人をも上回っていた。

未知なる最速との戦い、それはホントの電波人間の戦いを知らない彼らにとってメテオGに挑むも同義の無謀さだった。

「おのれっ!たかが社会の塵程度クズに負けてなるものか!」

その身に受けた傷と戦いの威圧感に怯みつつもブライトはキャノンキャノンをオータム・サイバーに向けて発射した。

それはオータム・サイバーを取り巻くベールに軽々と阻まれたが、彼女が意識を向けるには十分だった。

「それがやはり本音。いくら外面を取り繕ってもその力と同じメッキでしかないわ」

「クズ程度が調子にのるな！私のこの力は“ポーン”の上をいく“ビシヨップ”！！WAXAの中でも選ばれた人間！下等種とは訳が違うんだよ！」

最初の慇懃無礼なまでのブライトの姿はどこにもない。あるのはメツキのはがれ、権力主義に凝り固まった凶暴なまでの本性だった。

無論オータム・サイバーはそんなことに付き合う気はない。

「……開門」

オータム・サイバーはトロイの扉を呼び出し、帰還するつもりだった。

「逃げるのか？」

「……あなたと話し合っても無駄。いずれ審判は訪れる。その時を楽しみにしてなさい」

銃口を向けるイクス・ポーンと“イクス・ビシヨップ”ことブライトに背中を向けたままオータム・サイバーは言葉を預けた。

圧倒的な力を前に彼らは引き金を弾くことができない。あくまで虚勢をはっているだけである。

それをオータム・サイバーも隊員たちも分かっていた。無意味でしかないということ……

「いいのか？それなら“弟”たちはホントにゴミと化すがな！」

ブライトの言葉と“二つの気配”に気づいてオータム・サイバーは意識を扉から離れた。

何で今になって降りてくるのか、非常に間が悪い。

結界によって現実世界が電波世界から見えないとはいえ最悪すぎた。

「姉さん？」

「な、なに？」

戦いを終え、ミソラに肩を担がれたイツキが戦いのすぐ側にウエーブアウトしてしまっていたのだった。

二人は生身のまま、そして……状況を理解できていない。

「死ね！クズども！！」

ブライトはミソラがいるのも気にせず、好機とばかりにヘビーキヤノンに二人に打ち込んだ。

「……………っ！間に合え！」

「隊長！何故あの響ミソラまでも、味方までも撃つのです!？」

隊員たちは目の前に起こった出来事が信じられず、ブライトに詰め寄った。

彼らに与えられた任務は暁シドウらの強制帰還。四季の子供と戦うフォースチルドレンのは任務ではあるが、あくまで二の次。

彼らを無事で連れ帰れ、それがラバルナ司令長官から与えられた最優先任務だったはずなのだ。

「何をためらう必要があった。あの娘の担いでいた男は四季の子供。フォースチルドレンそれを見た時点で敵であることは一目瞭然だろう?」

「ですが!」

「誰に向かって物を言うか？このイクス・ビショップこそがこの責任者。ポーンごときが偉そうに説教するでないわ！」

ブライトは抗議の意を唱えた隊員の腹を蹴り飛ばした。

隊員は吹き飛ばされ、イクス・ポーンの電波変換も解けた。

「……それにまだ終わってないわ。働け、下等種<sup>カス</sup>どもよ！」

ブライトの言う通り、トロイの扉は現れたまま、そして煙の晴れた先には……

「姉さん！姉さん！！」

「しっかりとしてください！」

二人をかばって凶弾に倒れた秋月ミズホの姿だった。電波変換は解けて意識はない。

二人は状況はつかめなかったが目の前で倒れたミズホの蘇生を試みていた。

そしてミソラのハンターは気づかないうちに……

「四季<sup>フォースチルドレン</sup>の子供倒すなら今！」

ブライトの狂気は止まらない。ソードを携えたブライトは無抵抗の三人へと走りだしていた。

「早く！蘇生を……」

『ミソラ！逃げてえ！！！！』

いち早く気付いたハーブが叫ぶが遅い。すでに人間が逃れられるはずなどなかった。

「あっ……………」

懸命だったミソラの視線に見えたのは刃物を向けて走ってくる男ただ一人。

悲鳴をあげること、走馬灯も彼女には見ることもできなかった。

死とはこんなにあっけないものだ……………感じる暇もなかった。

ガキン！！

刃物が交差する。ブライトのソードは新しくきた侵入者に受け止められていた。

「何奴！」

「……………」

侵入者は答えない。薙刀を使って攻撃を遮るのみ。

ミソラは……………まだその姿に現実だとは思えていなかった。ヒーローは遅れて現れる、シドウの言葉はつくづく当たるのが信じられない。

今までどこにいったのか、何で連絡してくれなかったのか、いろいろと聞きたいことも山ほどミソラにはあった。

やんわりと羽織られた半透明な羽衣に覆われ、姿はしっかりと見えない。

だけどミソラには後ろ姿だけで誰か分かった。いつも隣にいたあの人のだから。

「……………スバルくん？」

「名を名乗れ！」

「……………ロスト・プレアデス」

『失われた流星』  
『そう彼は名乗った。』



第五十六話 最速（後書き）

ついに！

祝！スバルくん帰還！！

長かった！ホントに長かったです。まだ名前だしてないのにいいのか？

いいんです！！

主人公がやっと戻ってきたのでテンションアップです。汚いWAX A（大人）の世界なんてどうでもよいのです！

と、作者はつちやけてますが、ただでは終わりません。

どうでもいい話、部活の同期・後輩曰く……私は“鬼畜”らしいです。

ちゃんとその後も用意してありますので暫しお待ちください。

いつも拙作『Aハーツ』をお読みいただきありがとうございます。

よろしければ意見、感想のほどよろしくお願いいたします。

## 第五十七話 消失した絆

ミソラの頬には自然と涙がたつた。

WAXAが誇る最高設備をもつても見つけれなかった。

大勢の電波人間が地球上全てをくまなく飛び回っても見つけれなかった。

その彼が今、自分の前にいるのだと。

「おかえりなさい」「どこ行ってたの?」「心配したんだから」「無事でよかった」

スバルに言いたいいろんな言葉が頭の中に浮かんでくる。

ただ言葉にならなかった。いろんな思いがこみあげてきて言葉にできなかった。

「……スバルくん?」

彼女が唯一言葉にできたのは本人の名前だけだった。

ただ彼は……ミソラの、自分を呼ぶ声に伝えてくれることはなかった。

二人の刃と刃が混じり合い、耳を塞ぎたくなるような甲高い金属音が響く。

その間にもイクス・ビショップはWAXAのデータベースから該当するデータがないかと検索をかけていた。

「エアロスラッシュ！」

「っ！！」

ロスト・プレアデスの薙刀に風が纏われ、先程とは比べものにならないくらい降り下るされる速さが増した。

瞬時にソードで受け止めるイクス・ビショップだったが、その風圧は強い。

ブン！と大きく振り抜かれる薙刀にイクス・ビショップの身体は吹き飛ばされていた。

なんとか力を入れることで少し飛ばされただけですんだが、解析をかけたまま目の前の敵と戦うには無理だと判断したらしい。

「お前ら！援護しろ！」

「……………」

イクス・ビショップが命令をかけるが、先程のやりとりもあってか動き出す者はいない。

隊員たちは電波変換を解除し、ロスト・プレアデスの解析と倒れたシドウとクインティアの保護にむかっていた。

そして……隊員の口から解析結果が発表された。

「その生態反応……まさか星河スバルか!？」

その結果に隊員たちにどよめきが走った。そしてロスト・プレアデスの反応は……

「……だったらどうだっというの？君たちに関係あるの？」

ロスト・プレアデスはスバルと同一人物とは思えない無機質な声でそう呟いた。

「関係あるとも！星河スバルはロックマンとして我々WAXAに登録されている。電波人間はWAXAのために奉仕しなくてはならないのだ！」

イクス・ビショップは声高にそう叫んだ。

「やめて！スバルくんにそんなこと言わないで！」

「黙っている響ミソラ！彼にはそれ“しか”取り柄がないだろう？」

悲鳴にも近いミソラの叫び声にイクス・ビショップは怒鳴りつけてその声を征した。

その手にはキャノンが向けられており、その矛先はミソラにあった。

「違う！スバルくんはそんな人じゃない！」

ミソラは銃口を向けられてもひるんだりせず、もっと大声を張り上げた。

ミソラはスバルのいいところを幾つも知ってる。

誰にでもやさしくできるところ。自分の弱さを知っているからこそ戦える強さ。他にももっとも……

いつも隣にいたからこそその言葉は許せなかった。ミソラだけではない。シドウも、ルナも、スバルを知ってる人間なら絶対に許せるはずがない。

ミソラの魂の叫び、それは武力を向けられても曲げることはできなかった。

「口の減らない娘だ。なら……」

イクス・ビショップのキャノンの銃口にエネルギーが充填されていく。向けられたミソラは目をつぶった。

「……もういいよ、言わなくて」

いつまでたつてもとんでこない銃弾におそろおそろミソラは目を開けた。

そして目を見開いた。驚きの様子を見せていたのはミソラだけではなくその場に残っていた隊員たちも同じだった。

「ガフツ……………」

イクス・ビシヨップ、いやもう電波変換は解けていたブライトはロスト・プレアデスに首を掴まれ口から血を吐いていた。

その時間わずかコンマ数秒。そのわずかな時間の中に彼は電波人間を一人打ち崩していたのだ。

「一体何が……………あつたというのだ？」

戦闘はあっけなく決着していた。すでにブライトの意識はない。

「……………」

ロスト・プレアデスは邪魔だと言わんばかりにブライトを隊員たちの方へと投げつけた。

ドサツというありきたりな音を立てブライトは地面に転がったが、誰も回収する者はいなかった。

誰もが気にとめなかったその光景をしっかりと見ていたのはたった一人だけ。

「めんどくさいが……これは報告しなくちゃならんな」

その姿に、そしてその強さにイツキは恐怖を覚えた。そして気絶している姉を抱えて電波変換し、その場から立ち去った。

「スバルくん!」

そんなイツキたちは気にも留めずミソラは彼のもとへ走り出した。

受け止めてと言わんばかりに手を広げ、少し嬉し涙がこぼれながら。

恋愛小説ならば一番盛り上がる感動の再会……である。が、神様とやらがいるなら非情すぎた。

「……………」

ロスト・プレアデスは無表情の冷たい目のまま周波数変換し、姿を消す。

抱きしめようとしたミソラの手は虚しくも空を切った。

そしてメートルと離れていない場所にロスト・プレアデスは再び姿を現した。

「……………スバルくん?」



ミソラはその目に、その行動に嫌な予感を覚えた。

「……………そういえばさ、君たち何者？」

電波変換を解除せずにロスト・プレアデスはミソラをドン底へと叩き落とす一言を告げた。

「えっ！？す、スバルくん……………だよな？」

「そつだよ、僕は星河スバルだ。だけど“相棒”が言うには僕は『記憶喪失』とやらにあっているらしい。だから君たちのことを思いだそうとも思いだせないんだ」

スバルの記憶はチヨイナの一件の何か衝撃によって失われたらしい。それだけならまだ思い出す術がないわけじゃない。

『ちよつと待つて！スバルくん、あなたの相棒つてウォーロックじゃないの？』

「……………ウォーロック？」

ハープの言葉にロスト・プレアデスは何か引つかかりを覚えたみたいで考える様子を見せた。

「スバルくん、覚えている？」

「……………少なくとも“君の名前”と同じで懐かしい感じはする。が、所詮はその程度なのだろう」

ロスト・プレアデスは薙刀を電波化し、解除してミソラとハーブに背を向けた。

「待って！まだ話は……」

「終わってない……か？君はそうだとしても僕は君に用はない」

「何で、何でそんなこと言うの？私たち……ブラザーじゃなかったの？」

ミソラの声はだんだんと泣き声になっていく。前までのスバルだったらオロオロとうるたえていただろうが、今のスバルは……違った。

「ブラザー？冗談でしょ？僕が絆ブラザーなんて持つはずがない。絆なんてすぐ壊れて傷つくんだ。予め傷つくなそんなものなくていいのに……」

そう告げて……ロスト・プレアデスは周波数変換して消え去った。

「スバルくん……」

ミソラの言葉はもう彼には届かない。ミソラの伸ばした手は何もつかんではいなかった。

『……ミソラ』

「……どうして？どうしてなの？スバルくんっ……」

ミソラはその場で泣き崩れた。ハーブでも溢れ出る彼女の涙は止め

られなかった。

星河スバルの帰還は叶ったが彼の失っていたものは大きかった。  
“ロスト”の名前が如く……彼は記憶と絆を失っていた。  
“

## 第五十七話 消失した絆（後書き）

今さらながらだいが『やってしまった感』たっぷりです。

スバルのロックマン以外の電波変換もそうですし、キャラ崩れ過ぎてますし……

ミソラにはかわいそうな役目ばかりだし……

ちなみに私もスバミソ派ですが……これはやり過ぎですかね。

これで玉石園での戦いは終了になりますが、次の相手はもちろんロスト・プレアデス（スバル）になります。

今の状況ですとスバル無双になりますが……ちゃんとがんばります。

皆さま、今後とも響ミソラに愛の手をよろしくお願いします。

（違う？いや違うない！！）

第五十八話 自分とは……（前書き）

予定より更新遅れて申し訳ありません。

それでは五十八話どうぞ！

## 第五十八話 自分とは……

誰もいない展望台、ミソラは一人で展示されている機関車に座っていた。

皮肉にも冬の空は澄みわたっていていろんな星がキラキラと光る。

見上げる度にそれらは宇宙が大好きな彼を思い出させた。

“ミソラちゃん、あれがアンドロメダ座っていつてさ……”

小学校に卒業間近にスバルが同じこの場で語ってくれたことをミソラは思い出した。

AM星を滅ぼした最悪クラスの電波兵器と同じ名前だと笑って話したスバルにハーブは苦笑いしていた。

ウォーロックは『まああれも今となっては可愛いものだったな!』と大口を叩き、ハーブと喧嘩しているのをスバルと二人笑ってみていた。

ミソラが「スバルくんは怖かったの?」なんて意地悪なことを言ったらスバルはバツが悪そうに「うん」と認めていた。

だけどその後には言った彼のセリフはもっと印象に残っている。

「だけど母さんやミソラちゃん、委員長たちの、みんなのいるこの

場所がなくなることの方がもつと怖かった。僕はみんなのおかげでアンドロメダにも勝つことが出来たんだ」

偽らざる本心だった。

ヒーローなんてみんなは言いつけどもホントは決して強くはない普通の男の子。

だからミソラは彼を側で支えてあげたかった。大切な人と言ってくれた彼を……願うことならずと……このまま。

だが今はその彼は隣にいない。決別の言葉を残して目の前から消えてしまった。

「スバルくん、私……」

今にも折れそうな心を奮いたたせ、ミソラはギターを手に持ち、歌い始めた。

母に送るように大事な人へ届けと願いながら……

「スバルくんのこと……記憶がないってこと？ミソラちゃん、それ……ホントなの？」

全てを聞き終わったルナはミソラに改めて聞き返した。ミソラは何も言わずに一度頷いた。

スバルと再会した翌日、ミソラはルナ、ゴンタ、キザマロ、ツカサにジャックのいつもの五人にさらにソラとスズカをあわせた七人をコダマ展望台に集めていた。

理由は言うまでもない。スバルと出会ったことの一事件である。

ミソラは玉石園であった出来事を順をおって話した。

差出人不明のメール。

前会長、秋月イツキが敵であったこと。（ソラが「あんにやるー！」と怒りのオーラをにじませ、ツカサとスズカの二人がかりで止めていた）

なんとかイツキを倒したこと（ソラが「よくやった！」と言ってミソラを抱きしめて、ツカサとスズカが（略））

その後WAXAの襲撃、そして……スバルとの再会。

スバルが見つかったと告げた時にはみんな驚きと喜びに満ちあふれ



ていたが、すぐに本人がいないこととミソラが泣きそうな顔をしているのに気づいた。

そして察する。スバルに何かあったのだと。

ミソラは涙がこぼれ落ちそうなのをこらえ、誰かが先に言う前に切り出した。

「……スバルくんね、私やウォーロックくんのことまで全て忘れちゃってたの」

それを言葉にするだけで涙がこぼれて、昨日の決意が揺らいでくるのだ。

ロスト・プレアデスことスバルの決別。記憶がなかったという理由があったとしても仲間たちにとってはショックは甚大だった。

今この場にいるメンバーは仲のよい友達であると同時にスバルによって救われたメンバーでもある。

言い換えれば全てとはいえないがスバルが絆の中心となって、そして希望となって固くまとまっていたともいえるのだ。

希望の崩壊、それはどんなに堅い組織だったとしても時には全てを崩れさせる要因ともなりかねない。

だが……そんなことで崩れるほどのメンバーはヤワではなかった。

「記憶がないなら……私たちの手で取り戻すしかないわね！」

ルナは高らかに宣言した。

「ルナちゃん……」

「ミソラちゃんはスバルくんに向かってそう言われたから辛いのは分かるけど……記憶がないんでしょ？ならそれがスバルくんの“本心”であるはずがないじゃない！」

いつ、何時も絆を信じて戦うロックマンの姿は全員の目に焼き付いているほどよく知っていた。

例え記憶を失っていたとしても、それさえ取り戻せたら元のスバルへと戻ってくれる。ルナはそう信じていた。

「そうですよ、ミソラちゃん！」

「スバルが俺たちを邪魔だと思ってるはずなんてないだろ！首根っこ引っ付かんでも戻してやるんだ！」

「スバルくんほど絆が大事だと知ってる人がそんなこと思うはずがないしね」

ルナだけではない。キザマロもゴンタもツカサも彼女の言葉に同調して声をあげた。

ジャック、スズカ、ソラも言葉に出さないが力強く頷く。全員の気持ちは同じだった。

「みんな……」

それはミソラとて例外なし。こんなにも味方がいることはとても心強かった。

「それじゃスバルさんの記憶を取り戻そう大作戦、名付けて“ロックマンさま戻ってきて！” 始動よ！」

「「「……………」」」

「……………な、なによ？」

今更ながらルナのネーミングセンスは最悪であった。

結局シドウが使っていた作戦、“スターダスト”からとって作戦名は“星に願いを”（ツカサ案）に決まった。

「だけど……………さ、スバルって今どこにいるんだろ？」

「「「……………」」」

作戦名で盛り上がっているところだったが、ソラの言葉でその場に沈黙が走った。

唯一目撃しているミソラに一同が視線を向けるが、彼女も首を振った。つまるところ誰も知らないのだ。

「スバルのことだ。記憶を求めて近いうちに誰かに接触するはず。」

それが電波人間ならWAXAが感知できる」

「……ですけど今WAXAは一切それで動いてくれるはずはないですよ？」

ジャックが出した案にキザマロは至極まともな疑問を返した。

Xプログラムというかくし球まで使ってシドウたちの動きを阻止しようとしたのなら今回もどうなるかは見えている。

「あつ！WAXAがダメでもあの人なら……」

ミソラが助けに来てくれそうな人を一人、思い出した。

「あの人？」

「ほら！研究所持ってて私たちもよく知ってる……」

「『『天地さん！！』』」

ルナたちは確かにと納得した。彼ならばWAXA所属ではないし、研究所のスペックも悪くない。

そしてスバルのことをよく知り、何度も助けてくれた人物だ。

「なら善は急げよ！みんな、行くわよ！」

ルナを先頭にみんなは天地研究所へと向かい始めた。

「ここがドンブラー湖……」

『どうだ、何か思い出したか？星河スバルよ』

「何も心当たりがない」

『……そうか』

ロスト・プレアデスと“もう一人”はウェーブロード上から広がる湖を眺めた。

かつてここはオーパーツ“ダイナソーヘッド”が眠っていた場所。無論ここでも戦いを繰り広げたことがある。

だが彼の記憶の手がかりになるようなものは全くなかった。各地を巡ってはいるがどこもハズレだった。

『両親に会いにいった方がよいのではないか？』と彼女はロスト・プレアデスに告げたが、彼は首を横に振った。

「父さんと母さんに会いに行きたいけど……今の僕では“どんな顔をしたらいいか分からないんだ。それに……”

ロスト・プレアデスはみずからの持つ古代の兵器“ハート”を取り出した。

今のそれは何故か半分に分けている。半分しかないハートを収め、ロスト・プレアデスは言葉を続けた。

「ハートのカケラを集めなければ僕はおそらくこのまま……記憶がないままだと思う。それに僕が一体何者なのか……それを何より先に知りたいんだ」

『自分は何者か……か』

「君もそうでしょ？」

『否定はせぬ。私も……ここにはならぬ者だからな』

ロスト・プレアデスと“彼女”は夕焼けが水平線に落ちる様をただただ……眺めていた。

自分とは何者か……

二人は同じ疑問を持つ者として……一緒にいるのだった。

第五十八話 自分とは……（後書き）

えー、まず初めにお詫びから。

この話を投稿する三日前より高熱と吐き気に襲われてベッドでずっとミノムシ状態でした。

ご飯はもっぱらポ リスエットとお粥です。あー、肉……

現在も体調は回復しきっていませんがベッド内で携帯片手になんとかこの話は書き終えました。

たぶん母にバレたら殺されます。皆さま内密にお願いします。

もしかしたら後日修正いれるかもしれませんがよろしくお願いしますます。

次回の更新こそは……遅れないよう頑張ります。

## 第五十九話 懐かしい思い出

「スバルくんが見つかったというのはホントなのですね？」

オリヒメはエンプティを伴ってその客人と会話を交わしていた。

話題は帰還したらしいスバルについて。一時は彼女もスバルの敵だったとはいえ、今は彼の身を案じているようだ。

「ミソラの話と隊員たちが見てますからね、ホントですよ。ただ…記憶がないとか」

「もしかして…… “ハートにのまれた” のかしら？」

「かもしれないですね」

三人は会話しながらバミューダプリズンを下へ下へと降りていく。

バミューダプリズンは海の真上に建てられた絶海の孤島。暗い暗い海の中に監獄はそびえている。

下のフロアにいけばいくほど凶悪な電波犯罪者が幽閉されているこの監獄はまるで地獄へと下っていくようだった。

バミューダプリズンには驚くことに看守は人間もウィザードも誰一人として存在しない。

何故ならウィザードすら瞬時に破壊し、電波人間でさえ動きを封じる強力な干渉電波が駆け回り、その上全てを司る“人工知能”が存



在するからだった。

二百年前から存在したとされる“審判の木”。それが時を経て改良され、この監獄の全てを握っていた。

何か不都合なことを行えば審判の木の判断によりその場で死なない程度に電気ショックが与えられ、その範囲は監獄全域に及ぶ。

オリヒメはこの監獄の最下層の住人ではあるが、模範囚であり脱走の恐れがないため、審判の木の監視のもとで自由が許されている。

歴史研究もしくり、エンプティを側におくことしかり、監獄を自由に歩き回れることしかり……

看守がいない中、この監獄内において彼女ほど熟知している者はいなかった。

そのため彼を迎えるには彼女が動くしかないのだ。

そう。ここの警護任務にやってきた暁シドウを迎えるために。

「それで……スバルくんは元に戻りそうなんですか？」

「できることなら俺も助けてやりたいですけど……命令ですからね」

シドウは悔しさを言葉ににじませながら小さく首を振った。

シドウに課せられた任務には独断で四季フォースチルドレンの子供に接触したという謹慎の罰則の意味も兼ねている。

無論従わなければWAXAのウィザードであるアシッドの没収も通達されていた。

シドウは納得しかなかったが、力がなければ生き残ることも戦うこともできないと知っている。

そしてこの任務にもしつかりとした目的があった。

だからシドウはこの任務を受け入れざるをえなかったのだ。

「だが……アイツらの絆ならキチツとやってくれるだろう。俺はその奇跡を一度見ているからな」

「そうですね。 “ムーの選別” に耐えるほどの絆を持った彼らならきつと……」

そう言ってる間に三人は今回の警護対象である最下層エリア、審判の木までやってきた。

この監獄全てを牛耳る暴君は監獄の中心を貫くようにそびえ立つ。

その根元に動力源として存在するのは妖しげに赤く光るオーパーツ “ダイナソーヘッド”

そして対になるように緑色に光るのはオーパーツ “フウマシュリケン”

二つのオーパーツ、 “精神” (スピリット) が置かれていた。

『ここにも何も……見当たらぬか』

「ごめん。……何も思い出せないんだ」

『構わぬ。私も一度全てを失った身。星河スバルの気持ちはよく分かる。それなら次行くまでよ』

弱気になるスバルを彼女は慰めていた。

ロスト・プレアデスと“彼女”はスバルの記憶を取り戻す旅を続けていた。

今二人がいるのはナンスカという小さな国の上空。かつてオーパーツ“フウマシユリケン”が封じられていた場所である。

ロククマンが色んな意味で激しい戦いを繰り広げた場所であるが……やはりスバルは思い出せなかった。

「あれは何だろ？」

『むっ？』

ロスト・プレアデスの指差した先には何かの祭壇がある。そしてその上にはどこかの誰かに似た石像が置かれていた。

『なになに……「ナンスカを平和へと導いた小さな英雄、ゴンターガ様をここに祀る」とな？』

あまりに不恰好な像に説明文を呼んだ“彼女”は苦笑いしていた。どこぞの牛丼好きな少年は神の祭り上げられていた。

「……なんか誰かに似てるような気がする」

それは当たり前前なのだが、ロスト・プレアデスの呟きに彼女はしっかりと反応した。

『何か思い出したのか？』

彼女は期待を込めてロスト・プレアデスに近づいた。

「……いや。思い出せないけど懐かしいんだ。あの少女やウォーロツクって名前を聞いたときみたいに」

ロスト・プレアデスの目から陰りが消え、僅かながらその目には嘗てのスバルの面影が見えはじめていた。

口元は白い布で覆われているからその表情を伺い知ることはできないが、おそろく……

「ただ僕が誰かと絆を作ったはずはないんだ。人はすぐに裏切つて、消えてしまうもの。そんな者たちと僕は……」

『……………』

「ごめん。それじゃあ……次、行こうか？」

ロスト・プレアデスはゴンターガの像に背を向け、歩を進め出した。

『（彼はまだ己を受け入れようとはしない。なら私も傷つけるわけにはいかないのだ）』

無理に矯正させればスバルのココロはすぐに壊れてしまう。それは明白だった。

だから彼女は知りながらもゆっくりと……立ち直らせることを決めたのだ。そのために自らの力を貸すことを決めた。

彼女はロスト・プレアデスの後ろへつき、一緒にスカイウェーブへと上がっていかうとした。

が、背後から迫り来る気配に彼女は殺気を向けた。

「プラズマボム！」

『エアロスラッシュ！』

突如空気が爆発し、バチバチと電気がほとばしる。

彼女は風圧で直撃は避けさせたものの全てを退けるには“この体”

では力不足だった。

「大丈夫!？」

『問題ない!だがここで……アヤツが来たか!』

内心このタイミングで襲撃されるとは予想外だった彼女。舌打ちして目の前の敵を見据えた。

彼女はスバルの記憶をゆっくり取り戻そうとしていたがそれも遅かったようだ。

「やっと見つけましたよ、“エアリイ”!そして星河スバル!」

そこに立っていたのはロックマンがチョイナで戦った相手である四季の子供の一人、アヌビス・ルーラーだった。  
フォースチルドレン

既にアヌビス・ルーラーの周りには同じくバチバチと放電しながら発光するプラズマ球体が幾つも浮遊していた。

「彼は……」

『ヤツはアヌビス・ルーラー。私を罠にハマて四季の子供から追い出した張本人だ』  
フォースチルドレン

「君が言っていたのは……彼のことなんだね?」

ロスト・プレアデスはそう聞くと薙刀を構え、アヌビス・ルーラーに対峙した。

その様子にアヌビス・ルーラーは不思議な顔をしてみせた。

「星河スバル、あなたは記憶がないはず。それでもなぜ私と戦う必要があるのです?」

「簡単なこと。僕とエアリイは“ある取引”をした。僕は君を知らないけど君は彼女の敵だ。だからそれは僕の敵でもあるんだ!」

「なるほど、敵の敵は味方……というわけですね? いいです、なら弱った二人をまとめて倒してあげましょう!」

アヌビス・ルーラーはキャッシュデータを幾つかさらに召喚してみた。

ロスト・プレアデスとエアリイの方も雑刀を構え、刃先をアヌビス・ルーラーへと向ける。

『いいですか星河スバル。気を抜いてはなりませんよ?』

「……何かその言葉も懐かしいな」

『ごちゃごちゃ言ってるんじゃない……早く戦いなさい』

「りょーかい! 相棒!」

ロスト・プレアデスは雑刀を振り回し、単身キャッシュデータの中へ突っ込んでいった。

## 第五十九話 懐かしい思い出（後書き）

スバルの性格変わってる……

あんなにバトルとか嫌がってたのに、なぜこんなことになったのか

……

さて、今回は天地研究所ではなくスバルとシドウの話でした。

そしてスバルに付き従っていた相棒は四季の子供のエアリィフォーステルドレンです。

……何となく技とか一緒だったんですけど気づきました？

その理由などは結構重要な話題ですのでまた後ほど。

今回はスバルは後回しにして天地研究所へと視点を移す予定です。  
次回もよろしくお願いします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7867r/>

---

流星のロックマン エンシェントハーツ

2011年12月1日00時55分発行